松山市文化財調査報告書 72

乃万の裏遺跡

2次調査地

1999

松山市教育委員会

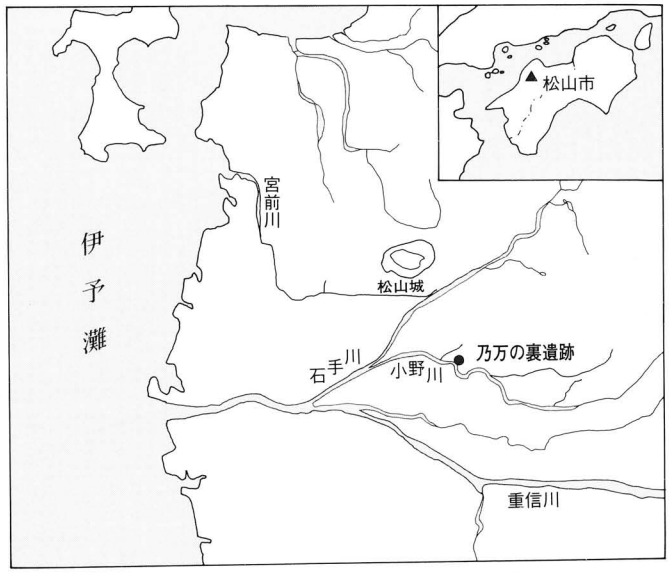
財団法人 松山市生涯学習振興財団

埋蔵文化財センター

松山市文化財調査報告書 72

乃万の裏遺跡

2次調査地



1999

松山市教育委員会
財団法人 松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

巻頭図版　SX5 出土の弥生後期土器

序

松山平野のほぼ中央部には、県下を代表する弥生遺跡の久米遺跡群が存在します。この久米遺跡群には、福音寺遺跡、釜ノ口遺跡、筋違遺跡、久米高畑遺跡のように多くの成果が得られた遺跡があり、広範囲にわたり弥生の集落が展開することが明らかになりつつあります。さらに、近年の調査では、弥生時代を遡る考古資料が見つかり、新たに注目される遺跡群のひとつに挙げられます。

当遺跡の周辺においては、1960年代の国道11号バイパスの建設に伴う発掘調査により、古墳時代を中心とした集落の存在がわかってきました。その後の福音小学校構内遺跡、北久米浄蓮寺遺跡の調査により、弥生時代～古墳時代の長期にわたり大規模な集落遺跡が展開していることが明らかとなってまいりました。

今回は乃万の裏地区の遺跡調査としては２カ所目にあたり、その結果、弥生時代後期から古墳時代後期、さらに中世にわたる複合遺跡であることがわかりました。また、調査で得られた遺物の検討から、当時の地域間交流の一端が明らかとなり、本遺跡の歴史的位置付けをおこなうことが出来ました。

このような貴重な成果が得られましたのも、ご協力をいただきました地権者をはじめ、調査関係各位のご理解のたまものと感謝しております。

本書が学術・教育文化の向上、文化財保護にご利用いただければ幸いに存じます。

平成11年３月31日

財団法人　松山市生涯学習振興財団
理事長　田　中　誠　一

例　　言

1．本書は、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター（以下、埋文センターと略記する）が平成５年度に実施した愛媛県松山市北久米町773－１、同市星岡町647外所在遺跡の発掘調査報告書である。

2．本書で使用した標高数値は海抜標高を示し、方位は国土座標を基準とした真北で、磁北から東偏６度21分を測る。

3．遺物実測図の縮尺は、土製品１／４、石製品２／３、鉄製品１／２を原則とした。遺構実測図は１／80を基本とし、異なる場合は縮尺値を記した。

4．本書に使用した遺構実測図は、加島次郎・小玉亜紀子・宮脇和人・栗林和孝・保島秀幸・広瀬岳志・岡崎壮一・山村芳貴・西原亜紀・安永由浩が作成し、浄写は加島・丹生谷道代・矢野久子・多知川富美子がおこなった。

5．本書に使用した遺物実測図は、加島・小玉・丹生谷・矢野・多知川・新出寿美子・山本早苗・金子育代・高尾久子・仙波ミリ子・仙波千秋・東山里美・二神千春が作成し、浄写は、加島・丹生谷・矢野・多知川がおこなった。

6．本書で使用した遺構写真は、大西朋子・加島が撮影し、遺物写真は大西が撮影した。

7．調査においては、下條信行（愛媛大学教授）、村上恭通（同大学助教授）、亀田修一（岡山理科大学助教授）、平井典子（岡山県総社市教育委員会）の各氏のほか、多くの先生方から貴重なご指導・ご教示を賜った。記して感謝申し上げます。

8．本書の執筆は、第Ⅳ章５―２）を小玉、他を加島がおこなった。

9．本書の編集は、加島がおこなった。作成に際しては、梅木謙一・水口あをいの協力を得た。

10．本書に関わる図面・遺物は、松山市立埋蔵文化財センターで収蔵保管している。

11．製版　カラー図版・白黒図版－175線
　　印刷　オフセット印刷
　　用紙　三菱製紙 ニューＶマット

本 文 目 次

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査組織と刊行組織 …… 1

3　調査・整理作業の経過 …… 2

4　調査区の設定と呼称 …… 4

第Ⅱ章　位置と環境 …… 5

第Ⅲ章　調査の概要

1　基本層位 …… 8

2　遺構と遺物 …… 8

第Ⅳ章　調査の記録

1　弥生時代の遺構と遺物 …… 17

2　古墳時代の遺構と遺物 …… 51

3　古代～中世の遺構と遺物 …… 56

4　近世以降の遺構と遺物 …… 65

5　包含層出土の遺物

1）Ⅴ層出土の遺物 …… 66

2）Ⅳ層出土の遺物 …… 68

第Ⅴ章　調査のまとめ …… 88

挿図目次

第１図　調査地位置図（縮尺 1／3,000）…… 3
第２図　調査地区割図（縮尺 1／400）…… 4
第３図　松山平野の主要遺跡分布図（縮尺 1／80,000）…… 7
第４図　土層模式図 …… 8
第５図　調査区北壁・西壁土層図（縮尺 1／40）…… 9
第６図　東西大ベルト・南北大ベルト土層図（縮尺 1／40）…… 11
第７図　主要遺構配置図（縮尺 1／400）…… 13
第８図　遺構全測図（第４遺構面）（縮尺 1／100）…… 15
第９図　ＳＤ10実測図（縮尺 1／80）…… 18
第10図　ＳＤ10遺物取り上げ地区割図（縮尺 1／100）…… 19
第11図　ＳＤ10出土遺物実測図 (1)（縮尺 1／4）…… 20
第12図　ＳＤ10出土遺物実測図 (2)（縮尺 1／4）…… 21
第13図　ＳＤ10出土遺物実測図 (3)（縮尺 1／4）…… 23
第14図　ＳＤ10出土遺物実測図 (4)（縮尺 1／4）…… 24
第15図　ＳＤ10出土遺物実測図 (5)（縮尺 1／4）…… 25
第16図　ＳＤ10出土遺物実測図 (6)（縮尺 1／4）…… 26
第17図　ＳＤ10出土遺物実測図 (7)（縮尺 1／4）…… 27
第18図　ＳＤ10出土遺物実測図 (8)（縮尺 1／4）…… 28
第19図　ＳＤ10出土遺物実測図 (9)（縮尺 1／4）…… 29
第20図　ＳＤ10出土遺物実測図 (10)（縮尺 1／3）…… 30
第21図　ＳＸ５実測図（縮尺 1／50）…… 31
第22図　ＳＸ５遺物取り上げ地区割図（縮尺 1／50）…… 31
第23図　ＳＸ５出土遺物実測図 (1)（縮尺 1／4）…… 32
第24図　ＳＸ５出土遺物実測図 (2)（縮尺 1／4）…… 33
第25図　ＳＸ５出土遺物実測図 (3)（縮尺 1／4）…… 34
第26図　ＳＸ５出土遺物実測図 (4)（縮尺 1／4）…… 35
第27図　ＳＸ５出土遺物実測図 (5)（縮尺 1／4）…… 36
第28図　ＳＸ５出土遺物実測図 (6)（縮尺 1／4）…… 37
第29図　ＳＸ５出土遺物実測図 (7)（縮尺 1／4）…… 38
第30図　ＳＸ５出土遺物実測図 (8)（縮尺 1／4）…… 39
第31図　ＳＸ５出土遺物実測図 (9)（縮尺 1／4）…… 40
第32図　ＳＸ５出土遺物実測図 (10)（縮尺 1／4）…… 41
第33図　ＳＸ５出土遺物実測図 (11)（縮尺 1／4）…… 43
第34図　ＳＸ５出土遺物実測図 (12)（縮尺 1／4）…… 44
第35図　ＳＸ５出土遺物実測図 (13)（縮尺 1／4）…… 45
第36図　ＳＸ５出土遺物実測図 (14)（縮尺 1／4）…… 46

第37図　ＳＸ５出土遺物実測図 ⒂（縮尺 1／4）…… 47
第38図　ＳＸ５出土遺物実測図 ⒃（縮尺 1／4）…… 48
第39図　ＳＸ５出土遺物実測図 ⒄（縮尺 1／3）…… 48
第40図　ＳＲ１実測図（縮尺 1／100）…… 49
第41図　ＳＲ１出土遺物実測図 (1)（縮尺 1／4）…… 53
第42図　ＳＲ１出土遺物実測図 (2)（縮尺 1／4）…… 54
第43図　ＳＲ１出土遺物実測図 (3)（縮尺 1／4・1／2）…… 55
第44図　ＳＤ９・ＳＸ12・ＳＸ13実測図（縮尺 1／80）…… 56
第45図　ＳＸ13出土遺物実測図（縮尺 1／4）…… 57
第46図　ＳＤ11実測図（縮尺 1／80）…… 58
第47図　ＳＤ11出土遺物実測図 (1)（縮尺 1／4・2／3）…… 59
第48図　ＳＤ11出土遺物実測図 (2)（縮尺 1／2）…… 60
第49図　ＳＤ11出土遺物実測図 (3)（縮尺 1／2）…… 61
第50図　１号掘立実測図（縮尺 1／40）…… 62
第51図　ＳＫ実測図 (1)（縮尺 1／20）…… 63
第52図　ＳＫ実測図 (2)（縮尺 1／20）…… 64
第53図　ＳＫ出土遺物実測図（縮尺 1／4）…… 64
第54図　ＳＤ３・ＳＤ８実測図（縮尺 1／80）…… 65
第55図　ＳＤ３出土遺物実測図（縮尺 1／4）…… 66
第56図　ＳＤ８出土遺物実測図（縮尺 1／4・2／3）…… 67
第57図　Ⅴ下層出土遺物実測図 (1)（縮尺 1／4）…… 69
第58図　Ⅴ下層出土遺物実測図 (2)（縮尺 2／3）…… 70
第59図　Ⅴ上層出土遺物実測図 (1)（縮尺 1／4）…… 71
第60図　Ⅴ上層出土遺物実測図 (2)（縮尺 1／4）…… 72
第61図　Ⅴ上層出土遺物実測図 (3)（縮尺 1／4）…… 73
第62図　Ⅴ上層出土遺物実測図 (4)（縮尺 1／4）…… 74
第63図　Ⅴ上層出土遺物実測図 (5)（縮尺 1／4）…… 75
第64図　Ⅴ上層出土遺物実測図 (6)（縮尺 1／2・2／3）…… 76
第65図　Ⅳ下層出土遺物実測図 (1)（縮尺 1／4）…… 77
第66図　Ⅳ下層出土遺物実測図 (2)（縮尺 1／4）…… 78
第67図　Ⅳ下層出土遺物実測図 (3)（縮尺 1／4）…… 79
第68図　Ⅳ下層出土遺物実測図 (4)（縮尺 2／3）…… 80
第69図　Ⅳ下層出土遺物実測図 (5)（縮尺 1／2）…… 81
第70図　Ⅳ上層出土遺物実測図 (1)（縮尺 1／4）…… 82
第71図　Ⅳ上層出土遺物実測図 (2)（縮尺 1／4）…… 83
第72図　Ⅳ上層出土遺物実測図 (3)（縮尺 1／4）…… 84
第73図　Ⅳ上層出土遺物実測図 (4)（縮尺 2／3）…… 85
第74図　Ⅳ上層出土遺物実測図 (5)（縮尺 1／2）…… 86
第75図　Ⅳ上層出土遺物実測図 (6)（縮尺 1／2）…… 87

表　目　次

表１　ＳＤ10出土遺物観察表（土製品・石製品）…… 89
表２　ＳＸ５出土遺物観察表（土製品・石製品）…… 95
表３　ＳＲ１出土遺物観察表（土製品・鉄製品）…… 103
表４　ＳＸ13出土遺物観察表（土製品）…… 106
表５　ＳＤ11出土遺物観察表（土製品・石製品・鉄製品）…… 106
表６　ＳＫ出土遺物観察表（土製品）…… 107
表７　ＳＤ３出土遺物観察表（土製品）…… 108
表８　ＳＤ８出土遺物観察表（土製品・鉄製品）…… 108
表９　Ⅴ下層出土遺物観察表（土製品・石製品）…… 109
表10　Ⅴ上層出土遺物観察表（土製品・石製品・鉄製品）…… 110
表11　Ⅳ下層出土遺物観察表（土製品・石製品・鉄製品）…… 114
表12　Ⅳ上層出土遺物観察表（土製品・石製品・鉄製品）…… 117

写真図版目次

巻頭図版　ＳＸ５出土の弥生後期土器
図版１．１　調査前全景（西より）
　　２　調査前近景（北より）
図版２．１　調査区北壁土層
　　２　調査区西壁土層
図版３．１　完掘状況（南西より）
図版４．１　ＳＤ10検出状況①（南より）
　　２　ＳＤ10検出状況②（北東より）
図版５．１　ＳＤ10遺物出土状況①（南より）
　　２　ＳＤ10遺物出土状況②（南より）
図版６．１　ＳＸ５検出状況①（東より）
　　２　ＳＸ５検出状況②（南西より）
図版７．１　ＳＸ５遺物出土状況（北西より）
図版８．１　第２遺構面検出状況（西より）
　　２　第２遺構面完掘状況（東より）
　　３　ＳＤ11権状石製品出土状況（東より）
図版９．１　ＳＫ３～６検出状況（西より）
　　２　ＳＫ２完掘状況（南より）
図版10．１　ＳＤ３・ＳＤ８検出状況（北より）
　　２　ＳＤ３・ＳＤ８完掘状況（北より）
図版11．１　ＳＸ１完掘状況（北東より）
　　２　現地説明会
図版12．１　ＳＤ10出土遺物
図版13．１　ＳＸ５出土遺物①
図版14．１　ＳＸ５出土遺物②
図版15．１　ＳＸ５出土遺物③
図版16．１　ＳＸ５出土遺物④
図版17．１　ＳＲ１・ＳＸ13出土遺物
図版18．１　ＳＤ11出土遺物
図版19．１　ＳＤ８・Ⅴ下層・Ⅳ下層出土遺物
図版20．１　Ⅳ上層出土遺物

第Ⅰ章　序　　説

1．調査に至る経緯

1992（平成４）年９月30日、乃万恭一氏より松山市北久米町773―１、星岡町647、648―１、642―３地内における宅地開発にあたり、当該地の埋蔵文化財の確認願いが松山市教育委員会文化教育課（以下、文化教育課と呼称する）に提出された。

申請地は松山市の指定する埋蔵文化財包蔵地の『116 川附遺物包含地』内にある。これまでに申請地周辺では、数多くの発掘調査が実施されており、周知の遺跡地帯として知られている（第１図）。申請地の北には福音小学校構内遺跡、東には北久米浄蓮寺遺跡、西には筋違遺跡があり、弥生時代～古墳時代を主体とする集落の存在が明らかになってきた。したがって、国道11号バイパスの北に広がる微高地上は主に居住域として利用されていたことが想定される。

これらのことから、文化教育課は申請地における埋蔵文化財の有無と、さらには遺跡の範囲やその性格を確認するため、1992（平成４）年10月31日から同年11月６日に試掘調査を実施した。試掘調査の結果、弥生～古墳時代の土器を主体とした遺物包含層を２層確認した。とりわけ、弥生時代の遺物は後期後半が主体であり、これは福音小学校構内遺跡や筋違遺跡と同時期であることから、いずれかの集落と有機的関係にあることが推定された。この結果、当該地における本格調査の必要性があるとの結論に達し、文化教育課・埋文センター・乃万恭一氏の三者は、遺跡の取り扱いについて協議を行った。協議の結果、遺跡が消失する地点に対し、当該地における弥生～古墳時代の集落構造を含めた当時の社会・文化の解明を主目的とした緊急調査を実施するものとした。調査は埋文センターが主体となり、申請者ならびに関係者各位の協力のもと、1995（平成７）年７月中旬から開始した。

2．調査組織と刊行組織

乃万の裏遺跡２次調査にかかわる調査組織は次の通りである。

調査組織（平成７年度）

松山市教育委員会	教育長	池田　尚郷
生涯教育部	部　長	渡辺　和彦
	次　長	杉本　　博
	次　長	三好　俊彦
文化教育課	課　長	松平　泰定
（財）松山市生涯学習振興財団	理事長	田中　誠一
	事務局長	一色　正士
埋蔵文化財センター	所　長	河口　雄三
	主　幹	山内　　仁
	次　長	田所　延行
	調査係長	田城　武志
	調査主任	栗田　正芳（文化教育課職員）
	調査担当	栗田　茂敏・加島　次郎・小玉亜紀子

本調査の報告書刊行組織は次の通りである。

刊行組織（平成10年度）

松山市教育委員会	教育長	池田尚郷
事務局	局長	大野嘉幸
	次長	岩本一夫
	次長	丹下正勝
文化教育課	課長	松平泰定
(財)松山市生涯学習振興財団	理事長	田中　誠一
	事務局長	池田秀雄
	事務局次長	河口雄三
埋蔵文化財センター	所長	河口雄三
	次長	田所延行
	調査係長	田城武志
	調査主任	栗田正芳（文化教育課職員）
	調査担当	栗田茂敏・加島次郎・小玉亜紀子・大西朋子

3．調査・整理作業の経過

本調査の調査地、遺跡名、調査期間、申請面積は以下の通りである。

調査地　松山市北久米町773―1、星岡町647、648―1、642―3

遺跡名　乃万の裏遺跡2次調査地

調査期間　1995（平成7）年7月17日～同年11月24日

申請面積　2,475m²

調査委託　乃万恭一

発掘調査は平成7年7月17日から開始した。まず、調査区内の下草刈りを行ない事務所の設置予定地の確保ならびに発掘区を設定し、発掘用具と機材の搬入を行なう。7月20日からは調査区の掘り下げを行なう。まず、重機を導入し、試掘調査報告に基づき耕作土（Ⅰ～Ⅱ層）と床土（Ⅲ層）を除去した。これら水田層は出土遺物から現代の水田と判断し、重機による掘削はⅢ層までとした。なお、掘削等で生じた廃土を調査地内で処理する必要から、試掘時に湧水が著しく認められた東半を廃土置き場とした。また、発掘区内の湧水を排水し調査の効率化を図るため、調査区四方に排水溝を設定した。しかし、調査地周辺が水田として利用されているために湧水が著しく、例年にない多雨により9月以降調査区が幾たびか水没したことから、発掘調査は困難を極めた。

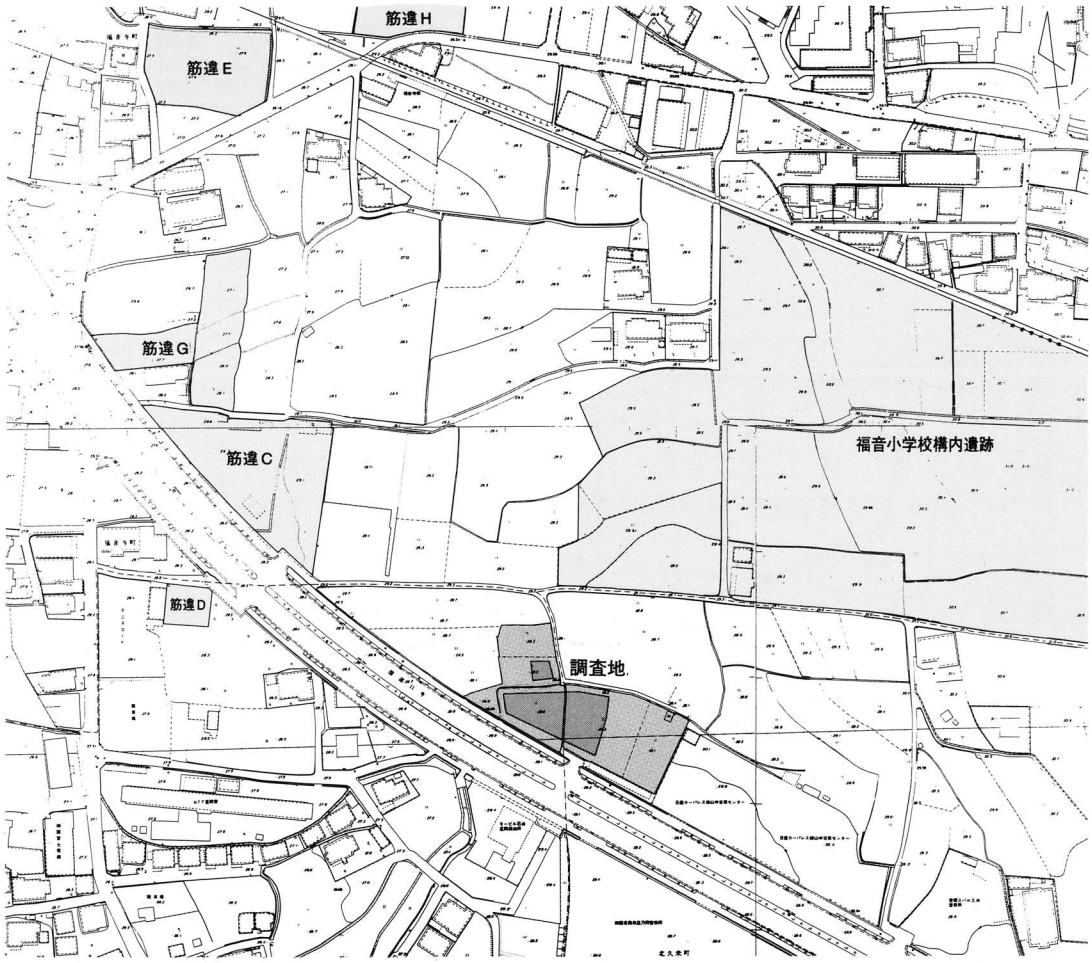
当地の東方、来住町長隆寺の北に設置された3級基準点から座標点を移動し、調査対象区に4×4mの方眼区画を設定した。調査にあたり、土層堆積状況を観察・理解するために、№2杭と№3杭ライン上に東西幅1m、№2杭と№4杭ライン上に南北幅1mの畦を設定した（以下、前者を南北大ベルト、後者を東西大ベルトと呼称する）。また必要に応じて、各方眼区画に沿って補足の畦を設定している。Ⅳ層上面において溜め池状遺構を検出した。Ⅳ層とⅤ層は比較的厚く堆積していたので、それぞれ10cmの人工層位による分層発掘を実施した。Ⅴ層上面では溝、土坑、小穴等、Ⅵ層上面では大溝、河川、土坑、小穴等、多くの遺構を検出した。Ⅴ層中（報告するⅤ下層上面）からは土器溜り

（報告するＳＸ５）を確認した。各層で検出した遺構は写真撮影と平板測量をおこなった。遺構番号を付した後、埋土の土質・色調を記録し、遺構の発掘と実測作業を併行しておこなった。

11月１日には福音小学校児童に現場を公開し、啓蒙普及活動に努めた。その後は、記録図面の補足や写真撮影をおこない、11月24日に発掘調査（野外調査）を終了した。

整理作業（屋内調査）は、11月27日から開始した。出土遺物はコンテナ（55×39×29㎝）で60箱以上を数え、その多くは弥生土器と須恵器等の土器類であった。この他に石器と鉄器がある。整理作業はこの多量の遺物に対する洗浄・注記・接合から始め、これと併行して記録図面と記録写真の台帳を作成した。基礎的な整理を平成８年３月までおこない、その後は遺物実測図を作成した。遺物実測図の作成とともに遺構実測図を整理し、これらの作業に６ヶ月を要した。その後、図版作成・浄写・執筆にとりかかり、出土遺物と検出遺構に関わる資料調査をおこなった。最後に出土遺物の個別写真と集合写真を撮影した。

室内調査は、次の屋外調査と併行して進めることとなり、今次調査の報告書作成に関わる全ての作業を終了したのは平成10年３月である。



第１図　調査地位置図（縮尺 1／3,000）

4．調査区の設定と呼称

造成土・旧水田層の掘削を行った後に、業者に委託し来住町長隆寺の北に設置されている３級基準点から座標点（No.２～No.４）を調査区西半部に移動した（第２図）。座標は以下の通りである。

No.１　X＝90854.000　Y＝－65585.000　H＝28.036

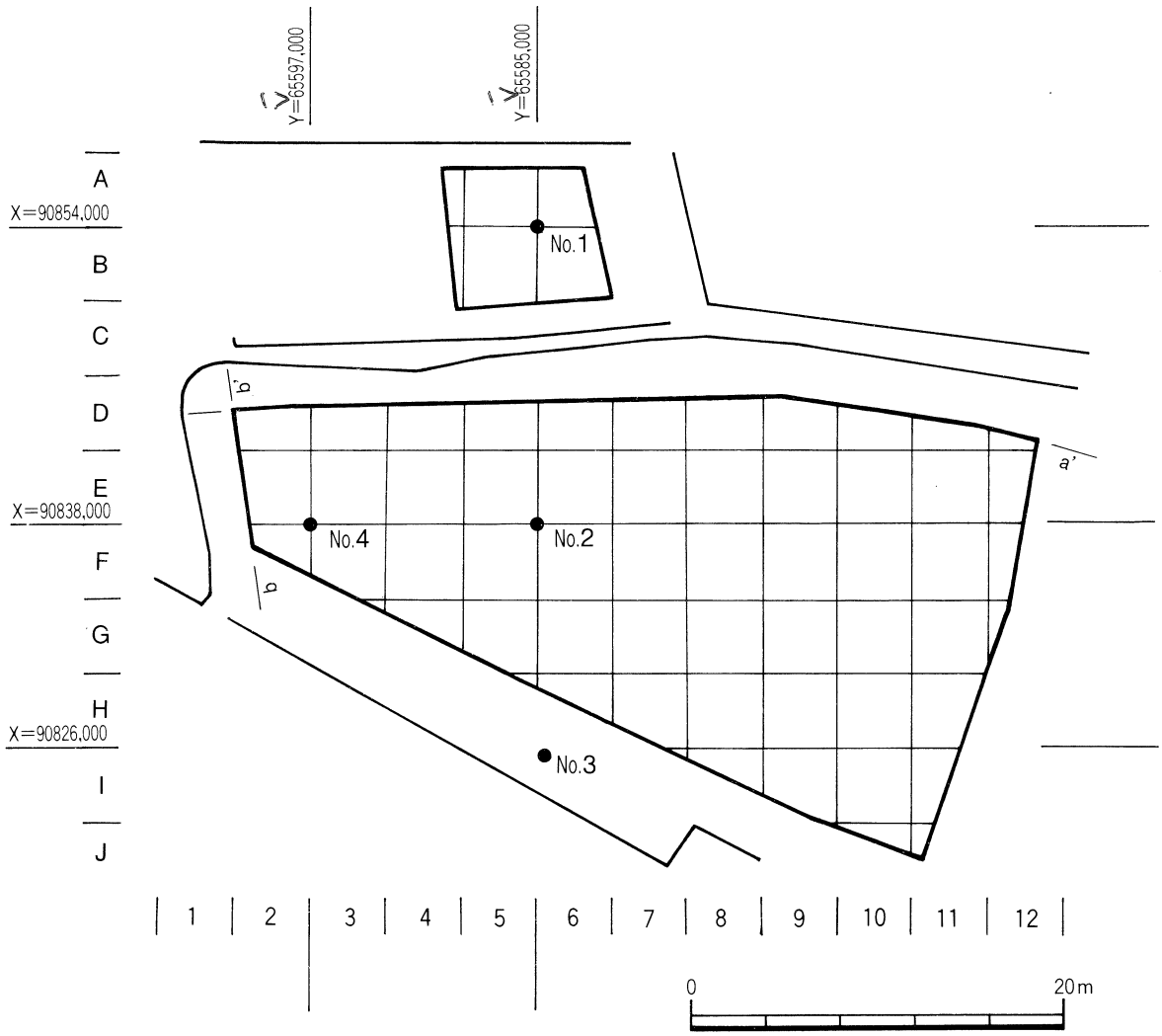
No.２　X＝90838.000　Y＝－65585.000　H＝27.659

No.３　X＝90826.000　Y＝－65585.000　H＝28.140

No.４　X＝90838.000　Y＝－65597.000　H＝27.682

これら３点の座標点のうち、No.２を中心として真北方向（磁北から東偏６度21分）を軸として４ｍ方眼区画を設定した。方眼区画は北から南へＡ・Ｂ・Ｃ…、西から東へ１・２・３…とし、これらを組み合わせて呼称することにした。なお、弥生時代後期の遺物が集中出土したＳＤ10とＳＸ５の調査では、４ｍ方眼区画をさらに細分した地区割りを用いて遺物の分布を記録した。

なお、No.１のあるＡ４～６区とＢ４～６区は、湧水のため調査ができなかった。



第２図　調査地区割図（縮尺 1／400）

第Ⅱ章　位置と環境

乃万の裏遺跡は、松山平野の東にある洪積台地に立地する縄文時代から中世までの複合遺跡である。今回の調査地点は、国道11号バイパス工事に伴って実施された１次調査地点の北西200m、松山市北久米町773、星岡町647他である。

松山市の位置する松山平野（道後平野）は、四国北西部の高縄半島の南西基部に開けた平野である。平野の中央南よりを重信川が流れている。右岸側からは石手川・小野川・悪社川が、左岸側からは表川・拝志川・御坂川・砥部川などの支流が合流し、重信川は東から西へ流れ、伊予灘に注いでいる。重信川本川と右岸側から合流する諸河川の山麓部には、南～南西方向に開いた扇状地性の低地が形成され、これらの扇状地の間には過去の扇状地堆積物が一部段丘化し、洪積台地が存在する。本遺跡は重信川中流右岸の小野川扇状地と石手川扇状地との間の洪積台地上に立地する。

この洪積台地を、鹿島愛彦と高橋治郎はその形成時期の古い順に「高位段丘」、「中位段丘」、「低位段丘（上）」、「低位段丘（下）」に区分する。平井幸弘は、小野川の現世の新しい扇状地を「平井面」、洪積台地のうち鷹子町付近の地形面を「鷹子面」、福音寺付近の地形面を「福音寺面」と呼称し、地形分類をおこなっている。本遺跡は鹿島・高橋の「低位段丘（下）」、平井の「福音寺面」に立地する。

さて、松山平野では旧石器時代に遡る遺跡は現在のところ発見されていない。しかし、丘陵部や「平井面」を中心にナイフ形石器と細石器が採集されている。これらの旧石器遺物は弥生時代の集落遺跡や古墳の調査時に確認される場合がある。「福音寺面」に立地する北久米浄蓮寺遺跡３次調査地では、ナイフ形石器が残核と剥片と共伴し出土している。束本遺跡４次調査地ではＡＴ火山灰（一次堆積層と二次堆積層）とＡｈ火山灰とが層位的に検出されている。さらに愛媛大学農学部内の樽味遺跡においてもＡＴ火山灰とが確認されており、これらは古環境や古地形を復元する上で有効な資料となっている。

縄文時代以降の遺跡は、平野の各所で点々と発見・調査されている。束本遺跡４次調査では、Ａｈ火山灰下から石器が出土しており、縄文草創期～早期の良好な資料となっている。前期～中期の良好な資料は稀薄である。一方、後期以降は比較的まとまった資料が調査によって得られている。久米窪田森元遺跡では土坑から後期中葉の土器群が一括出土し、南久米片廻り遺跡２次調査からは晩期後葉の土器群が出土している。南久米片廻り遺跡出土の土器群は、平野北部の大渕遺跡出土資料に後続するものと考えられている。平野中央部の低地における調査事例の欠如のためか、晩期の生産地の様相や構造等は明らかではない。今後の調査の進展により、重信川右岸の地域とくに小野川によって形成された扇状地の「福音寺面」周辺で水田等の生産遺跡の発見を期待する。

弥生時代になると、当遺跡が立地する洪積台地上や東の来住舌状台地上に、集落遺跡が展開する。30次を越える調査を数える久米高畑遺跡からは、弥生前期末～中期初頭の環濠が検出され、環濠の付近からは隅丸長方形の土坑群が多数検出されている。将来的には環濠の規模や様相、居住区の特定といった当該期の集落構造が明らかにされるものと期待する。福音小学校構内遺跡では中期の土坑１基、後期の区画溝１条、竪穴住居数棟、土器溜り１、壺棺墓４基が検出されている。また11地点の調査に及ぶ筋違遺跡では後期の竪穴住居址数棟が調査され、福音寺川附遺跡では土坑内に高坏を蓋に転用した壺棺が検出されている。これらの調査成果から、弥生後期には本調査地点の北～南西の微高地に集落が展開し、居住域と墓域とが近接していたと想定される。

古墳時代には、集落関連遺構の検出例が増加する。北久米浄蓮寺遺跡、福音小学校構内遺跡、筋違遺跡からは、中～後期の竪穴住居、掘立柱建物、道路状遺構が調査され、集落構造の解明に有効な資料が得られている。遺物では、北久米浄蓮寺遺跡３次調査地、福音寺遺跡竹ノ下地区からは初期須恵器が出土しており、当該期の社会背景を考察する上で重要な資料を提供している。一方、墓の調査は集落調査に比して例は少ない。とりわけ出現期～前期の古墳の調査は稀少である。その中で、大峰ケ台丘陵に所在する朝日谷２号墳は墳丘と埋葬主体の構造が明らかにされた前方後円墳である。調査によって豊富な副葬品とともに特異な形態の木棺痕跡や墳丘祭祀土器が明らかにされた。朝日谷２号墳は、当平野のみならず西部瀬戸内において古墳出現を考える際の基準資料として位置付けられている。本遺跡周辺において確認された首長墳は後期に集中する。経石山古墳、三島神社古墳、二ツ塚古墳、波賀部神社古墳、葉佐池古墳はいずれも重信川右岸地域に築造された大型前方後円墳である。群集墳は、小野川と川附川が合流する地点に展開する星岡、天山、東山の各分離独立丘陵に分布することが知られており、調査例が増えている。

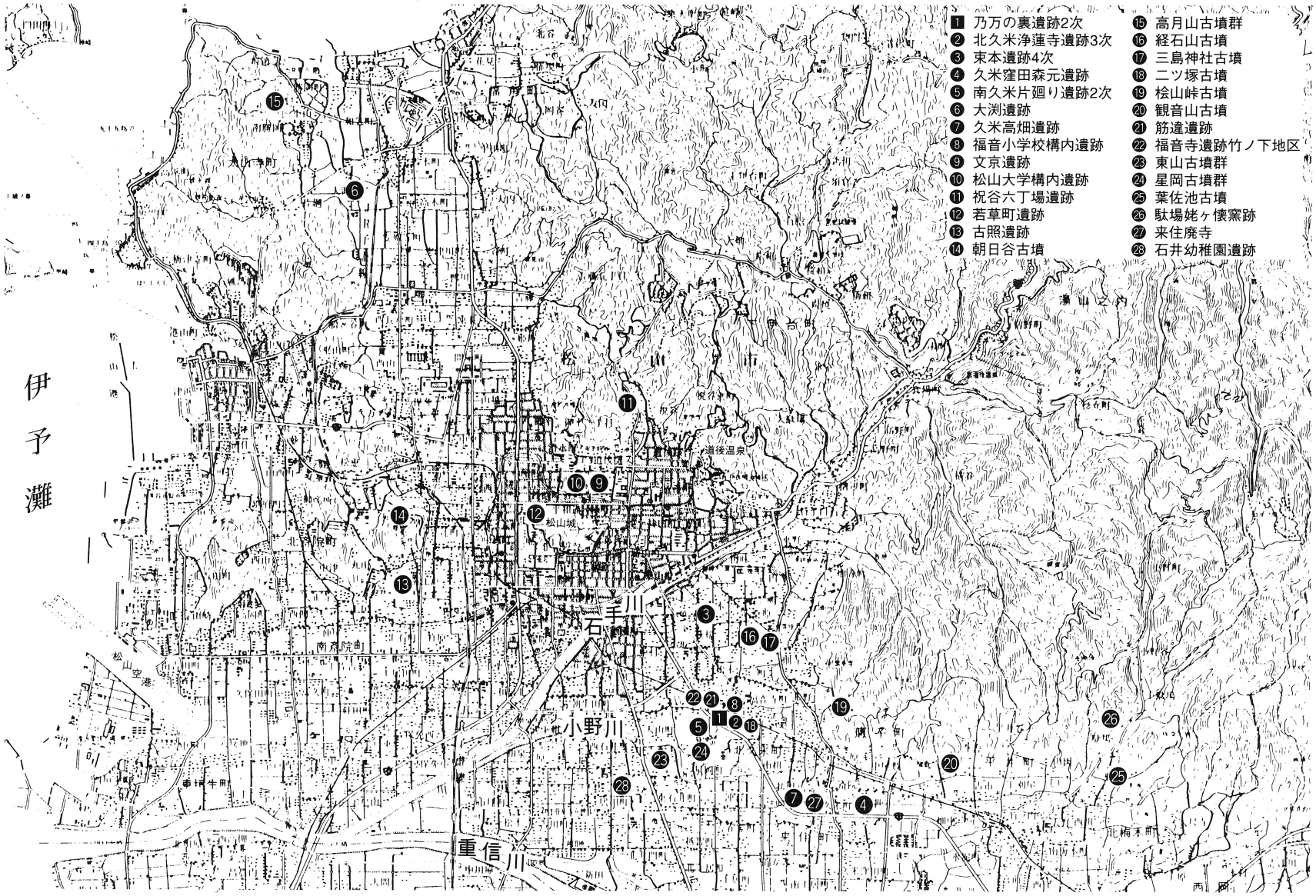
歴史時代では、来住台地上の官衙関連遺構が注目され、久米高畑遺跡７次調査地における「久米評」線刻須恵器の出土、「回廊状遺構」の検出、さらに、白鳳期の寺院である「来住廃寺」の存在があげられる。これらを考えあわせると、来住台地一帯は古代久米評・久米郡の中心地として機能したことが想定され、遺跡の構造的把握が期待されている。

中世では、来住廃寺21次調査地や鷹子遺跡で大規模な総柱の掘立柱建物群と区画溝群とが確認されている。

本遺跡周辺は標高30m前後の比較的起伏の少ない地形である。そのため現在に至っても、周辺の多くが水田として機能している。

〔参考文献〕

松山市教育委員会　1983　「北久米遺跡（常堰・乃万の裏・農免）」『国道11号バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』松山市文化財調査報告書17
鹿島愛彦・高橋治郎　1980　「四国平野の環境地質学的研究（１）―松山平野とその周辺部の地質―『愛媛大学紀要自然科学Ｄシリーズ（地学）』
平井幸弘　1989　「鷹子遺跡および樽味遺跡をとりまく地形環境」『鷹子・樽味遺跡の調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室
橋本雄一編　1984　『北久米浄蓮寺遺跡　～３次調査地～』　松山市文化財調査報告書42
高尾和長編　1996　『東本遺跡４次調査　枝松遺跡４次調査』　松山市文化財調査報告書54
松山市教育委員会　1989　『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』
松村淳・梅木謙一　1996　「南久米片廻り遺跡２次調査地」『小野川流域の遺跡』　松山市文化財調査報告書57
松山市教育委員会　（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1993　『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅴ』
松山市教育委員会　（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1995　『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』
松山市教育委員会　（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1996　『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』
松山市教育委員会　（財）松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター　1997　『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』
梅木謙一・武正良浩編　1995　『福音小学校構内遺跡　―弥生時代編―』　松山市文化財調査報告書50
梅木謙一編　1996　『福音寺地区の遺跡』　松山市文化財調査報告書52
田城武志・大森一成　1992「経石山古墳の調査」『桑原地区の遺跡』　松山市文化財調査報告書26
河野史知　1997　「経石山古墳２次調査地」『桑原地区の遺跡Ⅲ』　松山市文化財調査報告書58
松山市教育委員会　1972　『三島神社古墳』　松山市文化財調査報告書１
愛媛県史編纂委員会編　1986　『愛媛県史　資料編　考古』　松山市教育委員会



第３図　松山平野の主要遺跡分布図（縮尺 1／80,000）

第Ⅲ章　調査の概要

1．基本層位（第４～６図、図版２）

本調査区の基本層位は、６層に大別される。

〈Ⅰ層〉 暗灰色で、砂を少し混じえる土である。造成土と、旧水田土壌に細分できる。造成土は調査区の全域にみられず、その分布は東半に限られる。

〈Ⅱ層〉 灰色を呈し、調査区のほぼ全域にみられる。旧水田層の耕作土である。

〈Ⅲ層〉 暗黄褐色を呈し、鉄分とマンガンの沈着が顕著に認められる。旧水田層の床土部分に相当するものと考えられる。

〈Ⅳ層〉 調査区の全域に分布している。層厚15～20cmを測る。灰褐色土で土のしまりがある。本層は壁面を観察する限り土層の細分をおこなうことが困難であった。そこで、調査では人工的に10cmずつ分層して遺物を収納し、上層部を「Ⅳ上層」、下層部を「Ⅳ下層」とした。遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・陶磁器・瓦器・鍛冶関連遺物が出土している。本層上面（第１遺構面）では遺構検出した。

〈Ⅴ層〉 調査区の全域にみられる。層厚30～35cmを測る。土にしまりのある黒褐色シルト質土である。炭化物の細片を含んでいる。Ⅳ層同様、10cm単位の人工層位により３層（上から①、②、③）に区分している。遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・石庖丁・鉄器等が出土している。土師器・須恵器の包含を基準として、これらを包含する①層を「Ⅴ上層」、弥生土器を主体とする②・③層を「Ⅴ下層」とした。Ⅴ上層の上面（第２遺構面）では遺構を検出している。一部の遺構では輪郭が不明確なものがあり、これらは本層を一部掘り下げて検出した。なお、人為的な掘り方を伴わない遺物の溜まり（ＳＸ５）をⅤ下層上面（第３遺構面）で検出している。

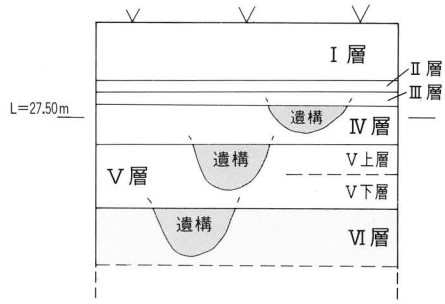
〈Ⅵ層〉 調査区の全面に広がっている。鈍い黄褐色の粘質土で、「地山」と呼ばれるものである。本層上面（第４遺構面）では遺構を検出している。調査区の北壁と西壁は人力により深掘りしたが、遺物は出土していない。

2．遺構と遺物

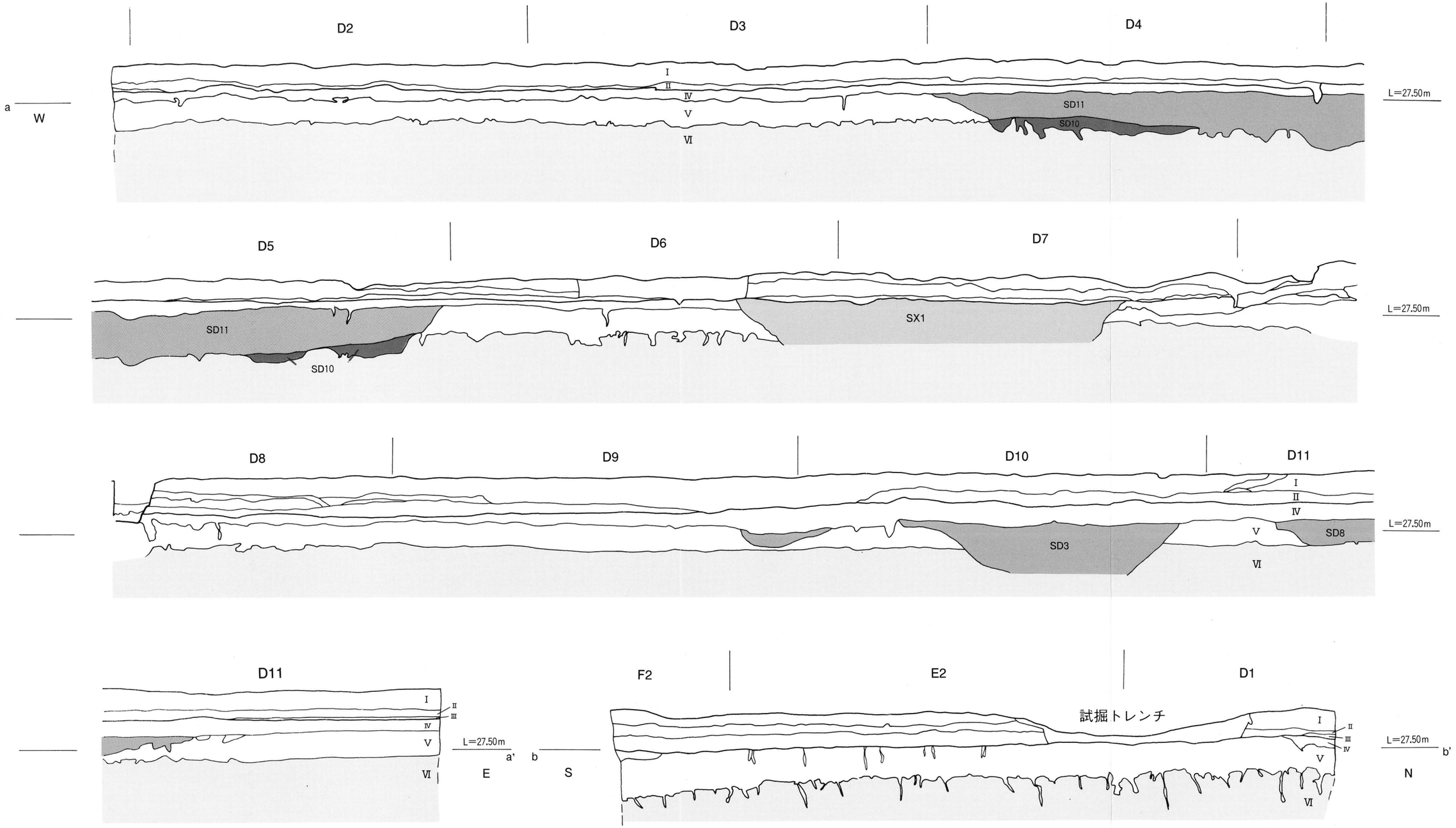
本調査では、弥生から近世までの各期の遺構を検出した。遺構の種別と数は次の通りである。

掘立柱建物	（掘立１）	1
土坑	（ＳＫ１～８）	8
溝	（ＳＤ１～11）	11
性格不明遺構	（ＳＸ１～５、９、12、13）	8
河川	（ＳＲ１）	1
小穴	（ＳＰ１～16）	16

遺物は遺構出土品と包含層出土品に大別される。遺構からは弥生後期の遺物がまとまって出土した。包含層からは弥生後期・古墳後期・古代～中世の遺物が出土した。

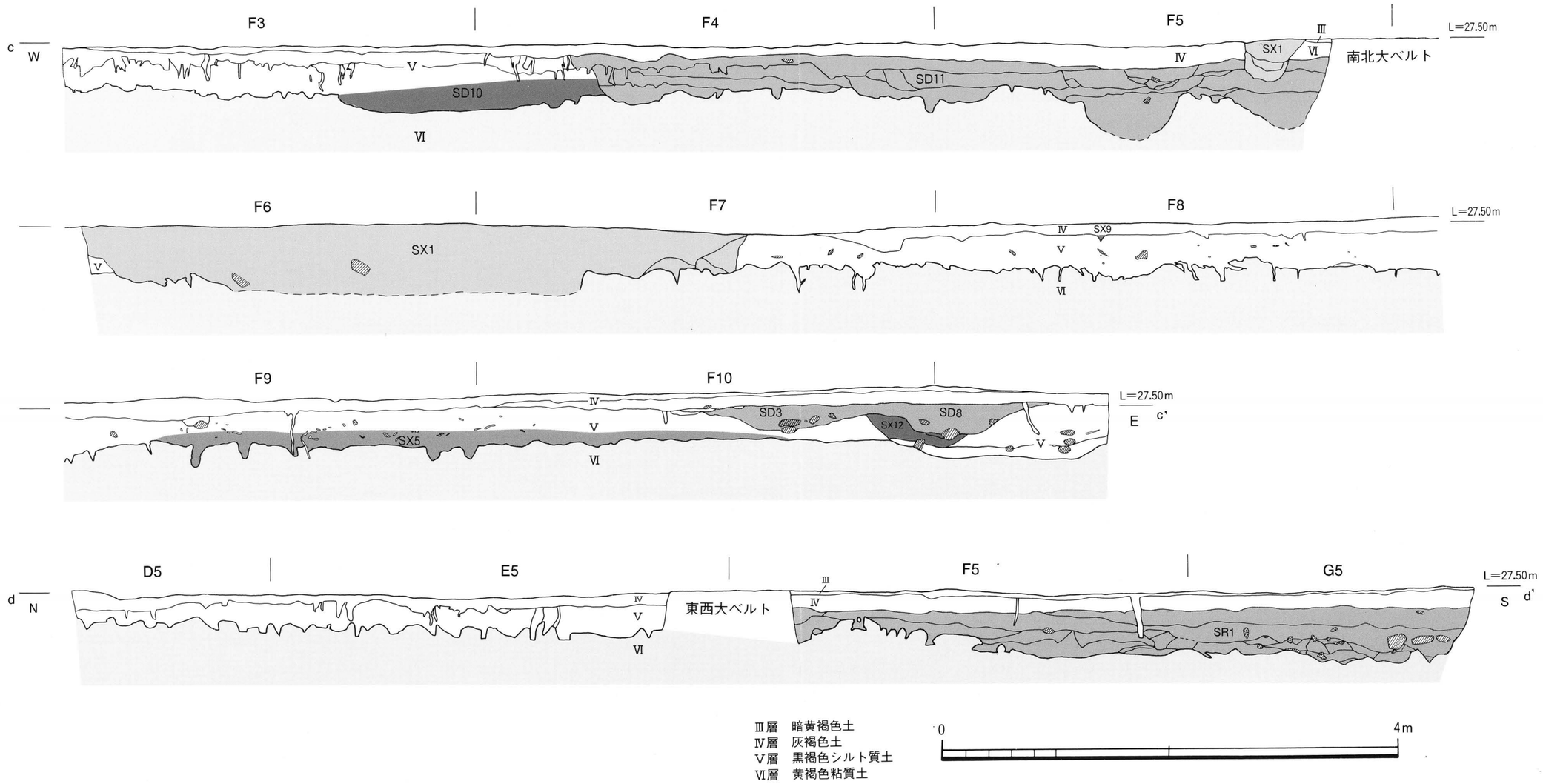


第４図　土層模式図

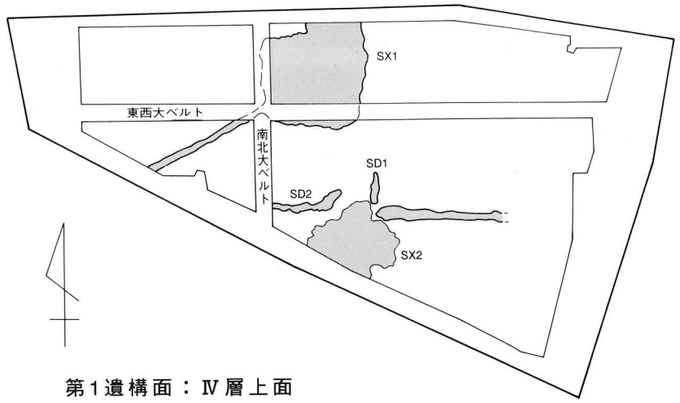


Ⅰ層　暗灰色土
Ⅱ層　灰色土
Ⅲ層　暗黄褐色土
Ⅳ層　灰褐色土
Ⅴ層　黒褐色シルト質土
Ⅵ層　黄褐色粘質土

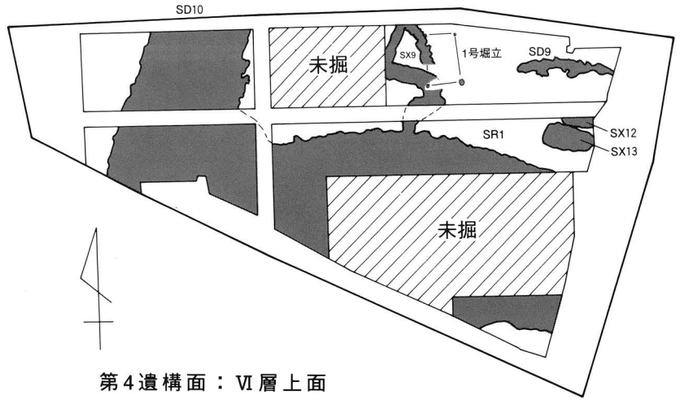
第５図　調査区北壁・西壁土層図（縮尺 1／40）



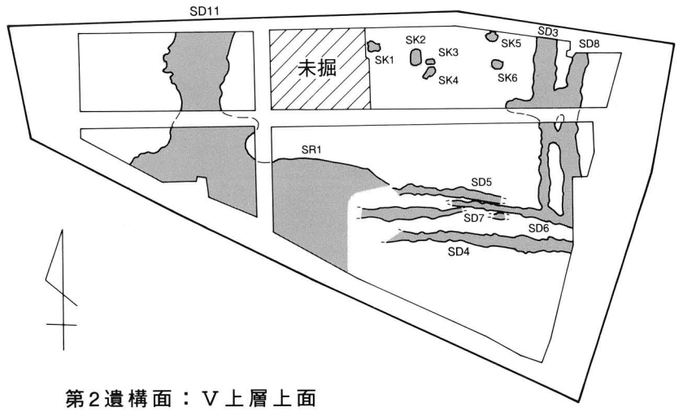
第６図　東西大ベルト・南北大ベルト土層図（縮尺 1／40）



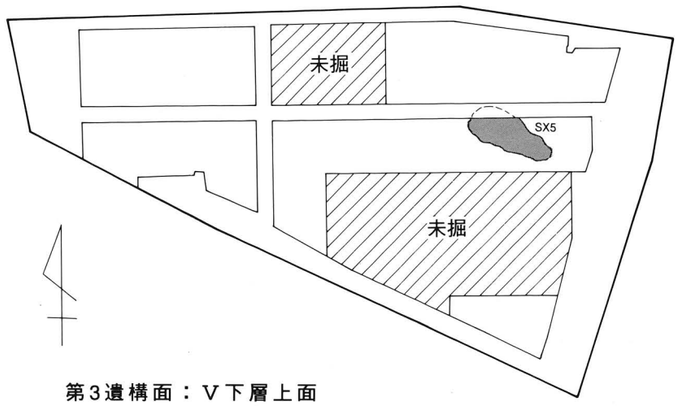
第1遺構面：Ⅳ層上面



第4遺構面：Ⅵ層上面

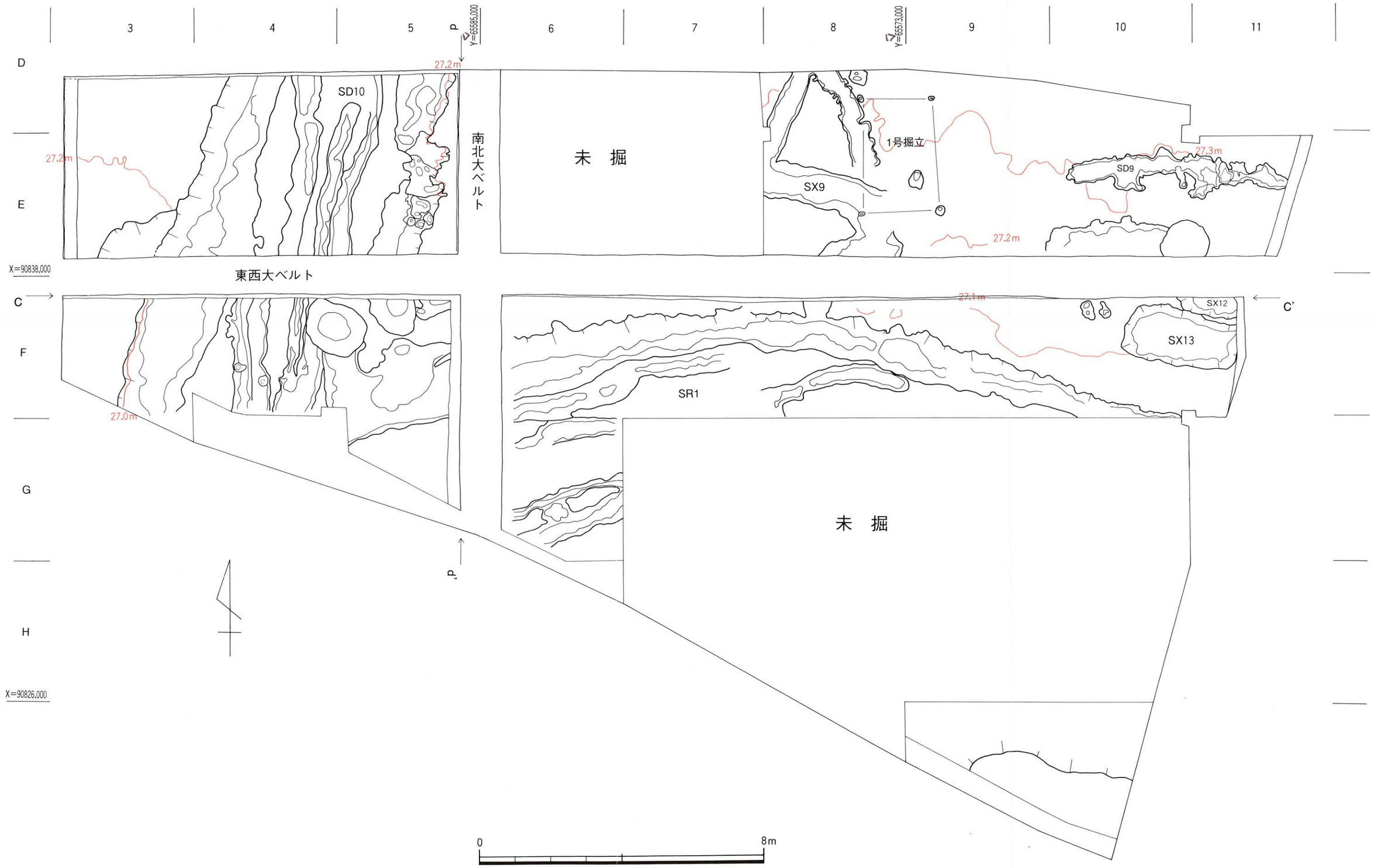


第2遺構面：Ⅴ上層上面



第3遺構面：Ⅴ下層上面

第7図　主要遺構配置図（縮尺 1／400）



第８図　遺構全測図（第４遺構面）（縮尺 1／100）

第Ⅳ章　調査の記録

本調査では弥生時代・古墳時代・古代～中世・近世以降の各時代の遺構と遺物を確認することができた。本章では、時代別に遺構の概要を報告し、出土遺物も併せて報告することとする。

1．弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構はＳＤ10、ＳＸ５、ＳＲ１である。ＳＤ10とＳＲ１は第４遺構面、ＳＸ５は第３遺構面において検出した（第７図）。ＳＲ１の検出は第４遺構面であるが、南北大ベルトの観察によって第２遺構面で遺構の輪郭が検出されていたことを確認した。ＳＲ１の埋土がＶ層と類似する地区があったために、第２遺構面においてＳＲ１の輪郭を確定することは困難であった。

ＳＤ10（第８・９図　図版４・５）

調査区西部に位置し、南北方向にはしる溝である。調査区中央部（Ｆ５・Ｆ６・Ｇ５・Ｇ６区）において、東西方向にはしるＳＲ１に合流する。溝幅は、6.6mと一定している。溝底は緩やかに南に向かって傾斜する。調査区の北側と南側における溝底の比高差は、30cm前後である。

ＳＤ10の周辺は、Ｖ層の黒褐色シルト質土と、Ⅳ層よりも色調が淡く１～２cm大から拳・人頭大の河原石を多量に含む淡灰褐色砂礫土で覆われていた。遺構の輪郭はこの両層を除去した後に確認することができた。東西大ベルト壁面と遺物を検討した結果、ＳＤ10が埋没し、徐々にＶ層が堆積し、その後に淡灰褐色砂礫土が堆積したと考えられる。

埋土は、黒色が強く、保水性に富む粘性土を基本とし、溝底には砂質土は認められない。遺物は、溝西側の中央と南に集中して出土した。出土遺物の多くは弥生土器で、破片の多くは器面に摩滅がみられない遺存良好なものである。土器片に混じって、拳大の礫が多く認められた。なお、古墳時代初頭の土師器が数点出土した。出土地点が限られており、この遺物は本遺構埋没後に構築された遺構に伴うものである。ただし、発掘調査ではこの遺構を確認することはできなかった。

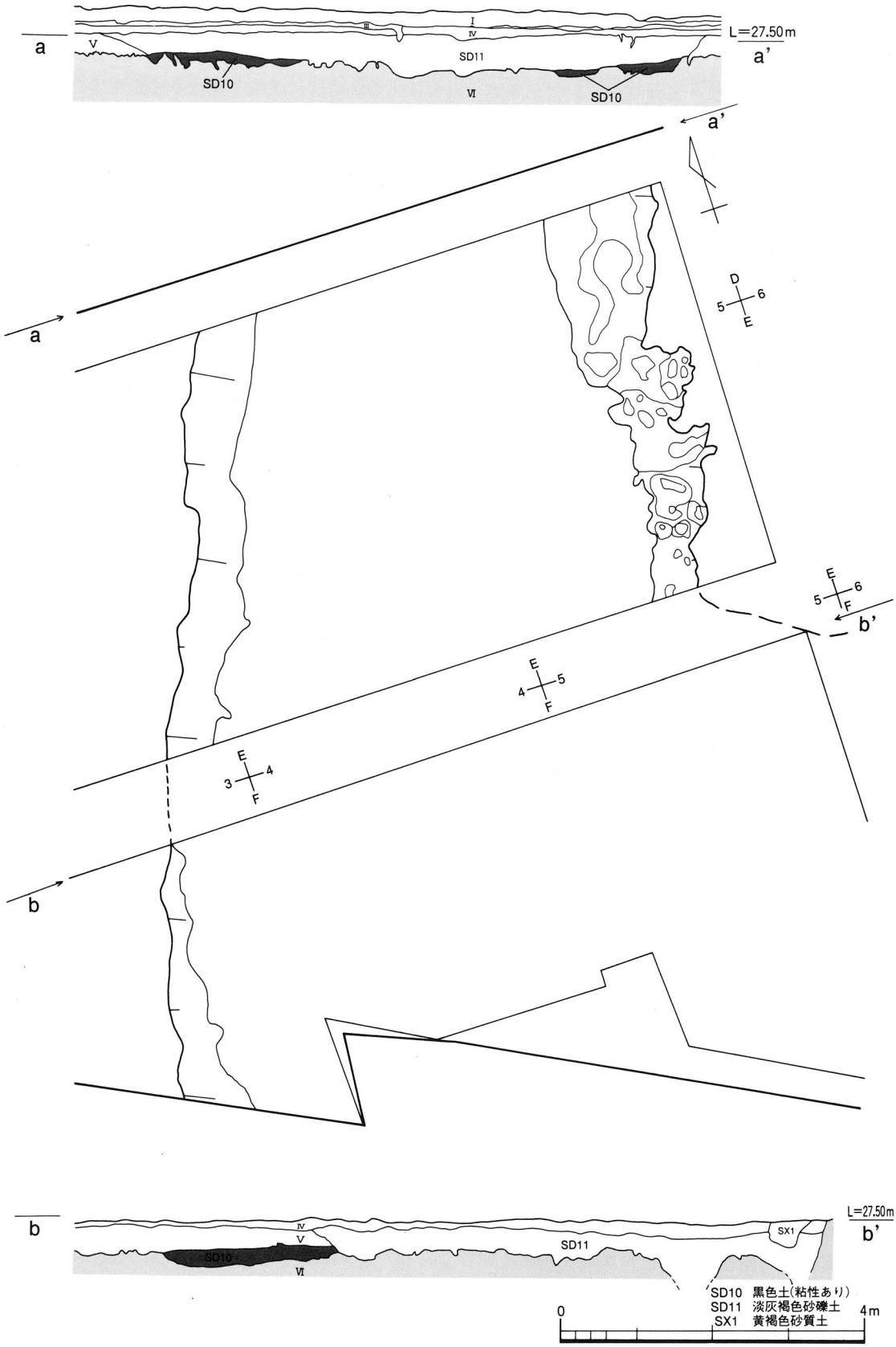
遺物取り上げでは、４m方眼の大グリッドと１m方眼の中グリッドを併用した。弥生土器は遺構の南西部で多く出土する傾向が認められた。とりわけ、Ｆ３―ｂ４区、Ｆ３―ｃ４区で遺物が多い。大グリッド別ではＦ３区に遺物が多く、ここからは本遺構出土の弥生後期土器の約８割が出土した。弥生土器の器種は、甕形土器・壺形土器・鉢形土器・高坏形土器・器台形土器・支脚形土器で構成される。器種構成比は甕形土器と壺形土器が多く、器台形土器や支脚形土器はきわめて少ない。口縁部を対象にした個体数は、甕形土器16、壺形土器33、鉢形土器７、高坏形土器２、器台形土器３、支脚形土器２であった。

出土遺物（第11～20図　図版12）

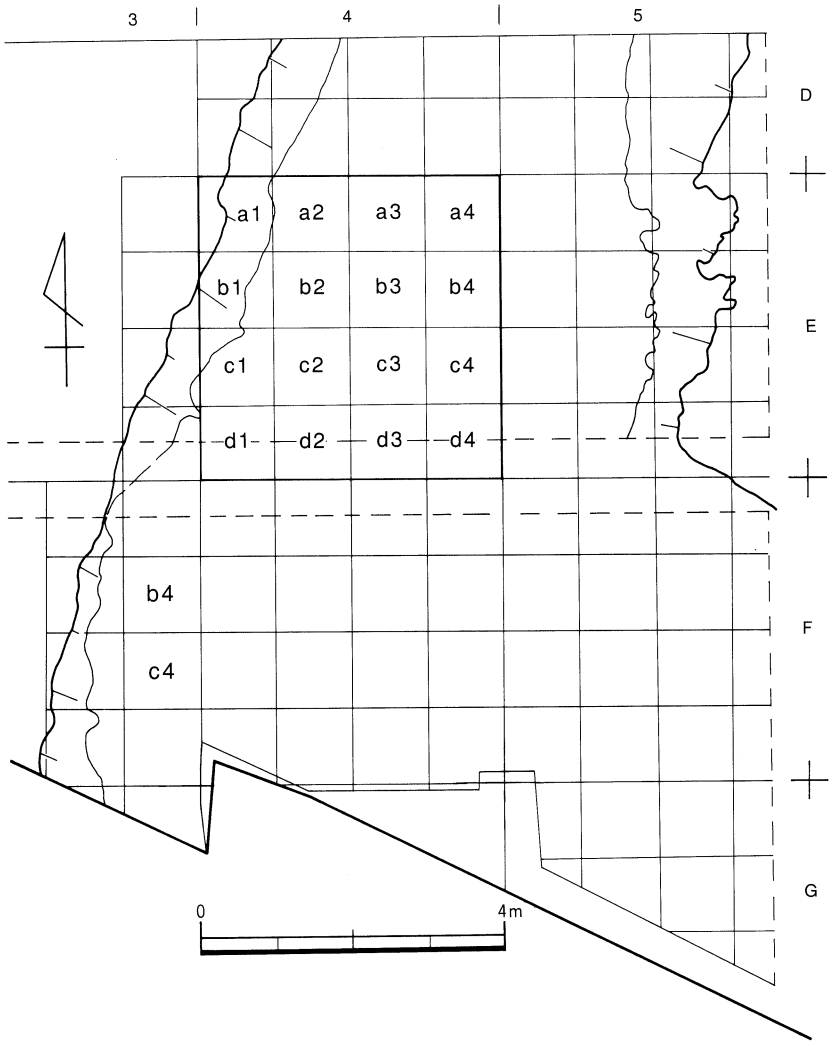
甕形土器（１～25）

本器種は法量に大・中・小の３つのものがある。以下、法量ごとにみていく。

大型品（１～６）　口径値が20cmを超えるものである。遺物が破片資料であるため、全体の形状や器高値については判然としない。１・３は器壁が厚いもの、２・４～６は器壁が薄いものである。１は外反する短い口縁部をもち、その端部はしっかりと面取りされる。２～４は緩やかに外反する短い口縁部を有すものである。２の口縁端部は面取りされる。４は胴部最大径が口縁部の直下に位置する。



第９図　ＳＤ10 実測図（縮尺 1／80）



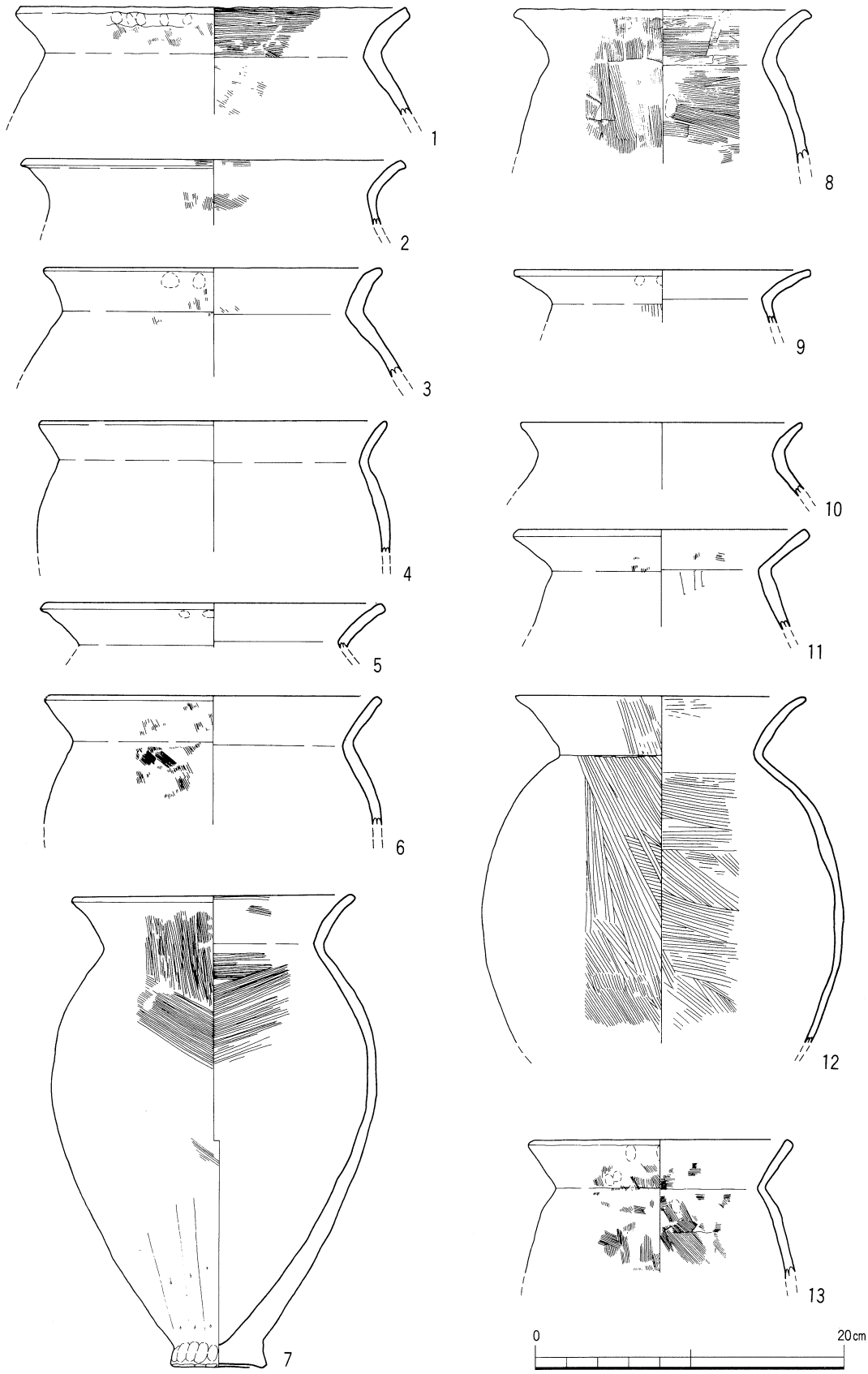
第10図　ＳＤ10 遺物取り上げ地区割図（縮尺 1／100）

頸部の締まりは弱い。口径値と胴部最大径値はほぼ同じである。口縁端部は丸くおさめられる。６は外反するやや長い口縁部をもち、口縁端部はしっかりと面取りされる。口径値と胴部最大径値がほぼ同じに復元される。

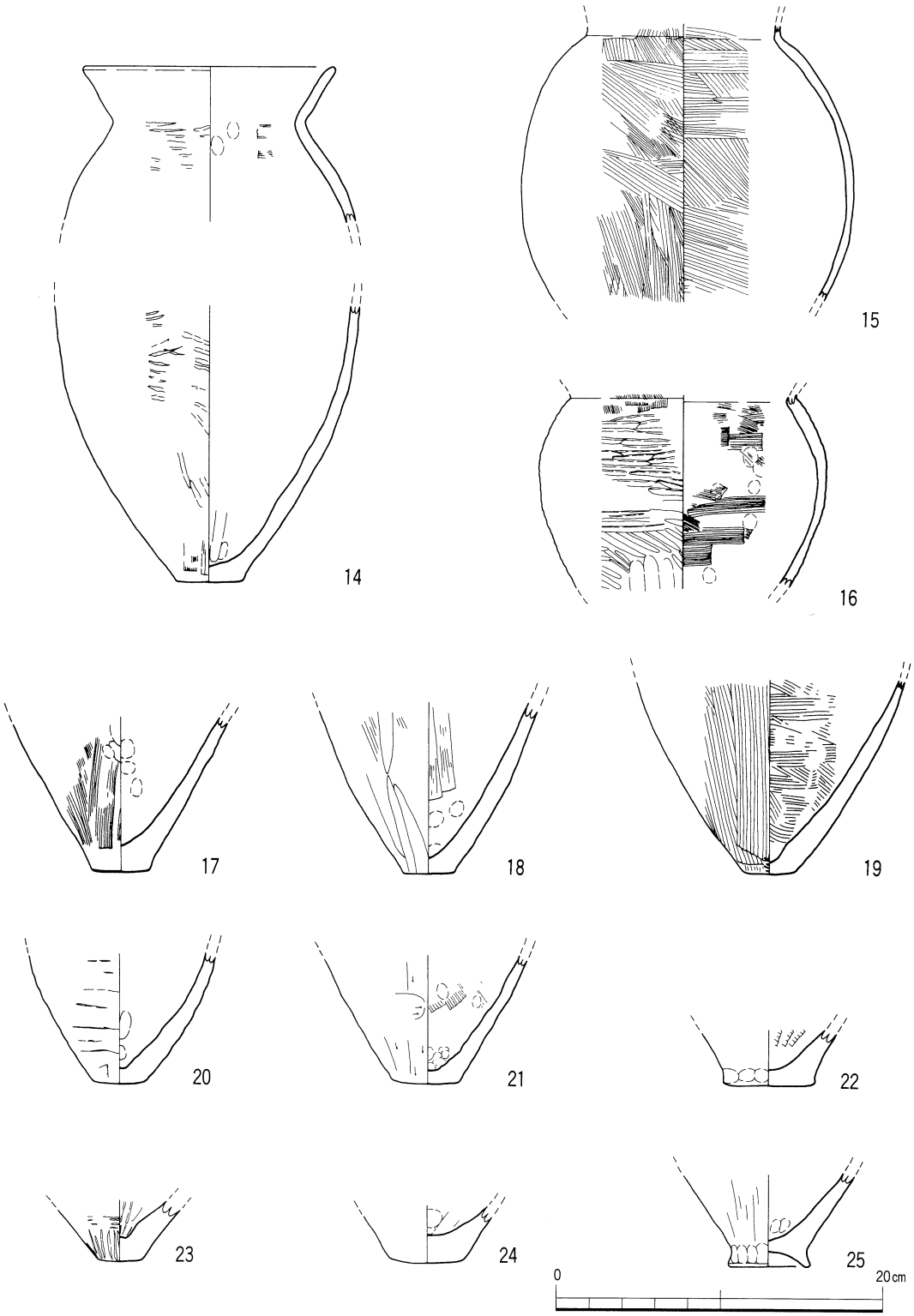
中型品ａ（７～12）　口径値が18～20cmのものである。口縁部が長いものが多い。７は整理作業時の接合よってほぼ完形に復元された資料である。肩部の張りは強く、胴部最大径値が口径値を凌ぐ。口縁部は長く、口縁端部は丸くおさめられる。器高値30.5cmを測る。10は短い口縁部をもち、肩部が張るものと考えられる。口縁端部は先細りする。12は肩部の張りが強く、胴部最大径値が口径値を凌ぐ。長い口縁部をもち、その端部は先細りする。

中型品ｂ（13～16）　口径値が13～17cmのものである。13は胴部の張りが弱く、口径値と胴部最大径値がほぼ同じと考えられる。口縁端部はしっかり面取りされる。14は一部を欠くものの、同一個体に復元したものである。長い口縁部をもち、肩部は張る。胴部最大径値が口径値を凌ぐ。器面が磨滅するものの、外面には平行タタキが看取される。15・16は肩部が張るものと考えられる。15は外面に細かい刷毛調整が施される。16は外面上半に平行タタキが看取される。

底部（17～25）　中～小型品のものであろう。平底のものと立ち上がりをもつものがあり、前者が



第11図　ＳＤ10 出土遺物実測図 (1) (縮尺 1／4)



第12図　ＳＤ10 出土遺物実測図 (2)（縮尺 1／4）

主体をなす。23は外面にタタキがみられる。立ち上がりをもつ底部には平底（22）と、上げ底（25）がある。

壺形土器（26～69）

壺形土器は複合口縁をもつものと、単口縁をもつものに大別される。

1）複合口縁壺（26～48）　複合口縁壺は複合口縁部の接合部分の形態を基準に二大別される。

①「コ」の字状接合部をもつもの（26～35）　破片資料のため、全体の形状を知れるものはない。26～28は口径値が20cmを超える大型品である。いずれも二次口縁部に加飾されない無文のものである。二次口縁部が内傾するものが多いが、28のように口縁端部を直立気味に立ち上げておさめるものがある。29・30・33は口径値が17～20cmの中型品である。29は直立気味にわずかに外反する長い一次口縁部をもつ。31・32・34・35は口径値が11～15cmの小型品である。中・小型品は、二次口縁部が内傾化する傾向が認められる。34は二次口縁部に加飾が施されており、横方向の4条の直線文と、その下にクシ状工具による波状文が組み合う。

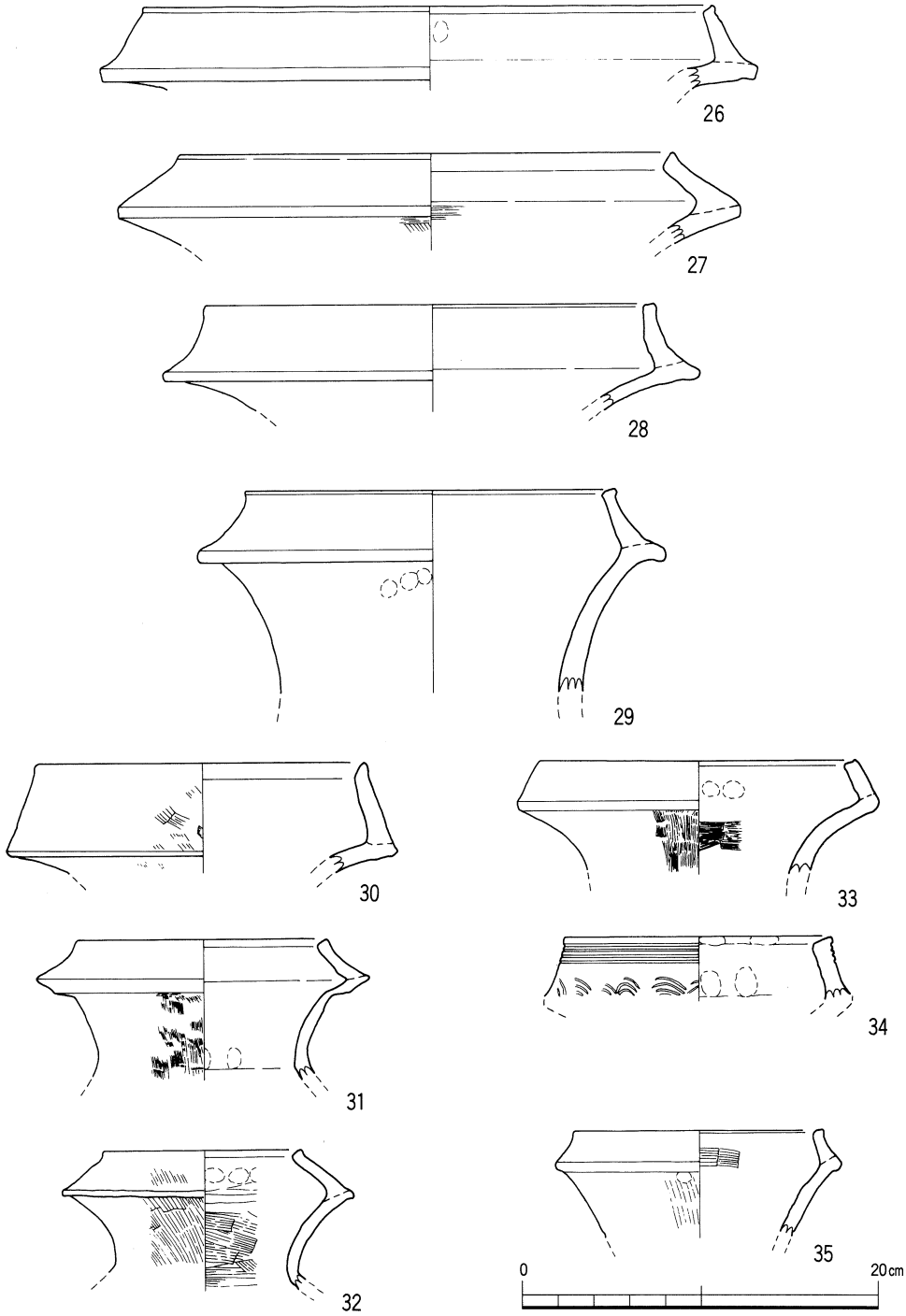
②「く」の字状接合部をもつもの（36～48）　破片資料のため、全体の形状を知れるものはない。36・37は口径値が20cmを超える大型品である。37は二次口縁部の一部が遺存する資料である。38～48は口径値が11～16cmの小型品である。小型品も、他と同様に二次口縁部が内傾するものが主体である。一次口縁が長くわずかに外反するもの（44）、一次口縁が長く直立するもの（46）、二次口縁部が袋状を呈し接合部の稜線が不明確なもの（47・48）があり、バリエーションに富む。

2）単口縁壺（49～59）

49は短い口・頸部で口縁部は大きく外反する。口縁端部はナデにより幅広の面をもつ。50～52は短く外反する口縁部をもつ。口縁端部の調整に差異が認められる。50は面取りされ、51はヨコナデにより凹む。52は丸くおさめられる。53はやや外傾する筒状の頸部に、短く外反する口縁部をもつ。頸部下端が締まり、頸部は細い形態である。54～57は口縁～胴部上半の破片資料である。54は口縁部が強く屈曲し、長く外反する。57は外面に施文がみられる。施文は横方向に二段の波状文が施された後に、弧文と魚のヒレ状文様が付加される。58は内外面ともにていねいなミガキが認められ、口縁端部は下方に拡張される。拡張された口縁端部には、ヘラ状工具による3条の沈線文後に2個一対の円形浮文が付加される。浮文には竹管文がみられる。口縁部内面にはヘラ状工具による4条の波状文が施される。本資料は器台の可能性も残されている。

60～66は底部である。60は大型品あるいは中型品の底部である。厚みがあり、立ち上がりをもつ。61・65・66は底部付近に焼成前の線刻をもつ。61は底部近くの外面に横方向に緩やかな曲線と縦方向の短い直線文が組み合う。手法は縦の後に横をひく順序である。なお、本資料は底部外面にも焼成前の線刻が施される。65の線刻は縦方向の2条の直線文である。66は小型品の底部である。線刻は横方向の緩やかなU字形の曲線と縦方向の短い直線文が組み合う。手法は横の後に縦をひいており、縦線は横線を貫通しない。

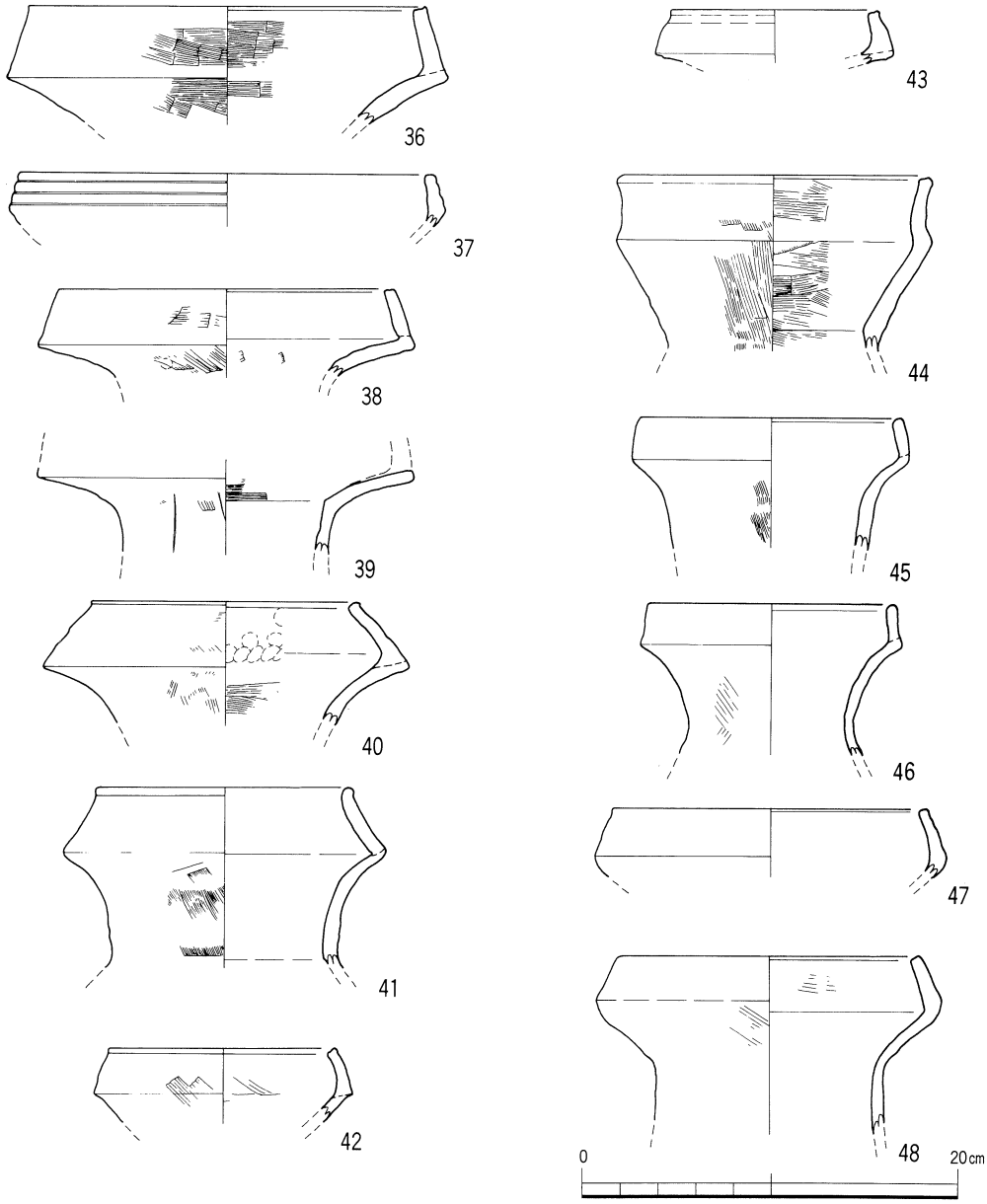
67～69は焼成前の線刻をもつ胴部片である。67は底部に近い胴部下半に線刻がみられる。縦方向を基調とした9条の線が認められるが、破片資料であるため線刻の全容は不明である。68は頸部付近の胴部上半に緩やかなU字形の線刻をもつ。頸部には斜め方向に刻みが施される。69は刻みをもつ貼付突帯下に、2条一組の工具による大きな波状文が描かれる。



第13図　ＳＤ10出土遺物実測図（3）（縮尺 1／4）

鉢形土器（70～82）

破片資料が多く、器形等不明な点が多い。口径値を基準にして大型品（70）と小型品（71～86）に分けられる。70・71は口縁部が「く」の字状に折り曲げられ、頸部には刻目突帯が巡る。72は口縁部が短く外反する。73は頸部が長く、つば状に長い口縁部を持つ。胴部下半を破損するが、80～82のように底部は「ボタン」状に突出するものであろう。74・75は口縁部が内湾するものである。74は外面粗いナデ、内面はナデが施される。内面下半には指頭痕を残しており、粗いナデ調整である。75は内

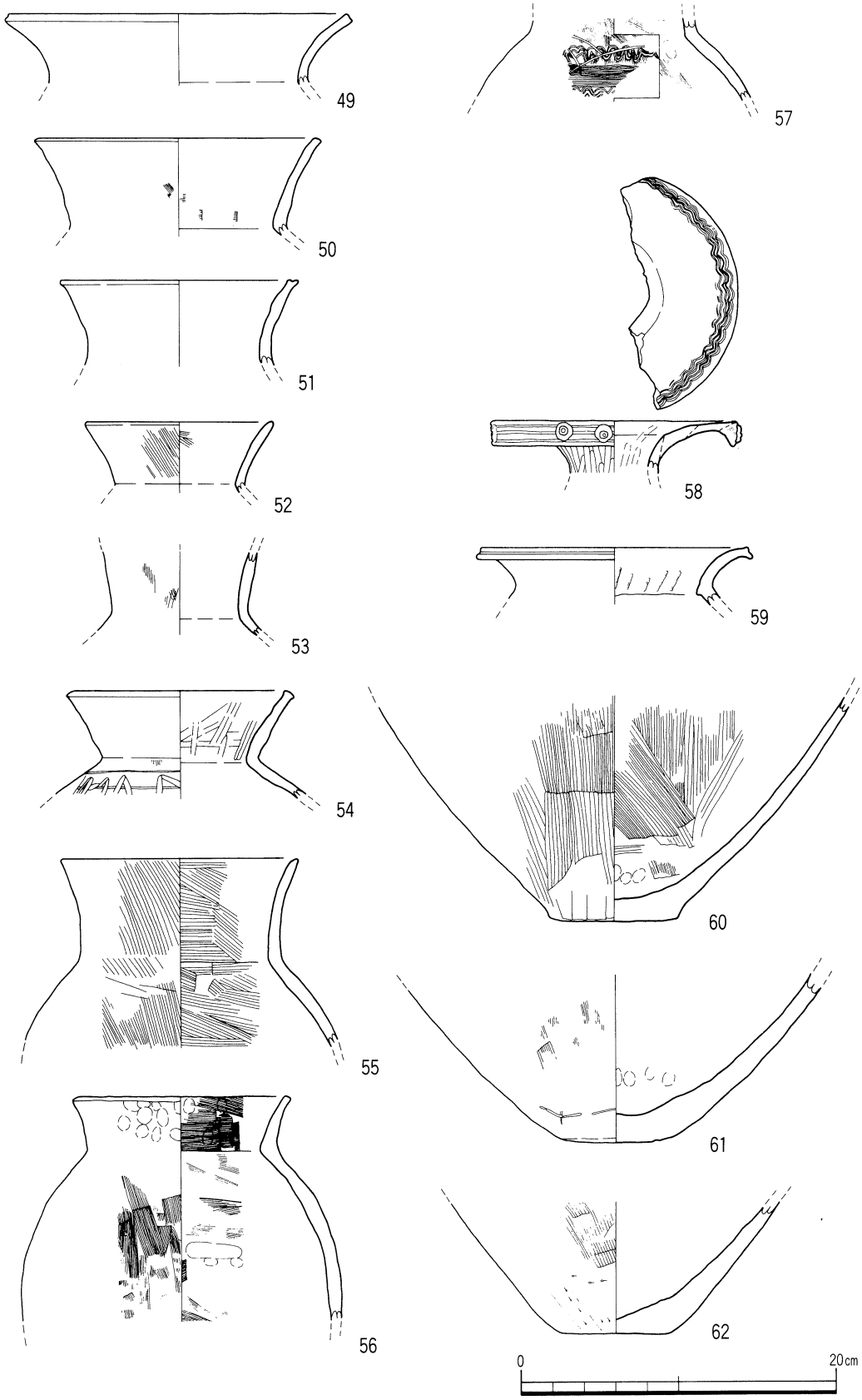


第14図　ＳＤ10 出土遺物実測図 (4)（縮尺 1／4）

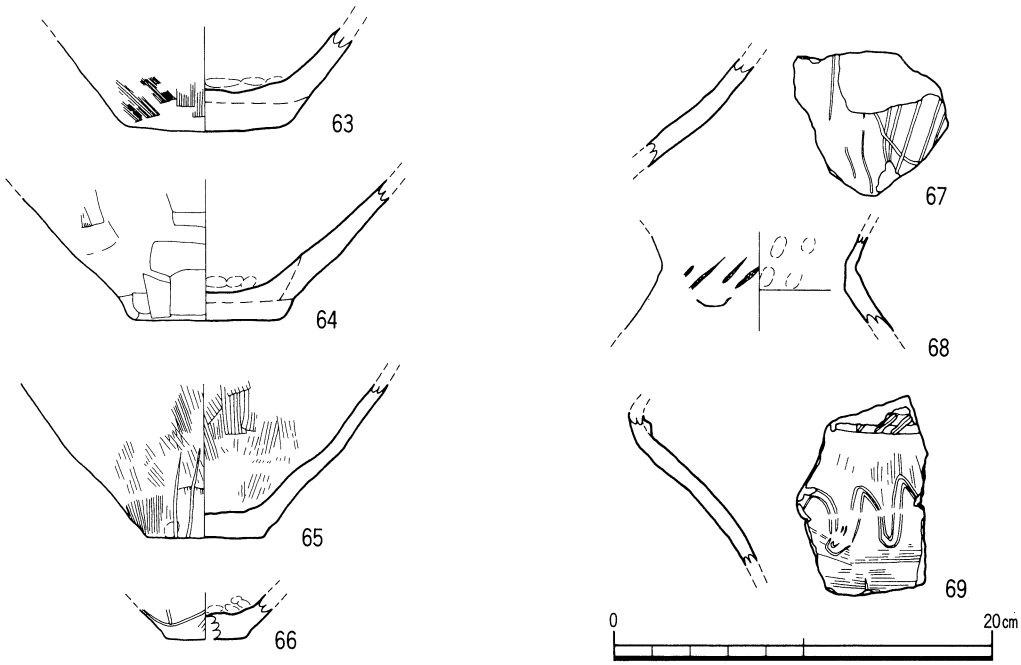
外面に縦方向のミガキがみられる。76～79は脚台付鉢である。76は直口する口縁部をもち、口縁端部は丸くおさめている。77～79は脚付部、80～82は底部が「ボタン」状に突出する。

高坏形土器（83～101）

完形品はなく、器形が判然としない。83～93は坏部～脚部である。97～101は加飾高坏である。加飾高坏の裾部は、坏部同様に有段となる。柱部の出土はないものの、中膨らみの柱部と考えられる。97・98は坏部である。口径は大きく坏部が深い形態で、著しく長く外反する口縁部をもつ。99・100は裾部である。99は段をもち、裾部が外反する。段より上部に円孔がみられ、段部の稜線上に半裁竹管文が施される。



第15図　ＳＤ10 出土遺物実測図 (5)（縮尺 1／4）



第16図　ＳＤ10 出土遺物実測図 (6)（縮尺 1／4）

器台形土器（102～106）

いずれも破片資料である。102～104は受部である。102は口縁端部がわずかに上下に拡張され、そこに２条の沈線文が施される。103・104は貼付により口縁端が下垂する。103は拡張された口縁端面に、３条の沈線文が施される。内面は縦方向のミガキ調整で仕上げられる。赤色が顕著に認められ、顔料が塗布された可能性がある。105は縦方向に円孔がみられる。上下がスカート状に開く器形をもち、器高が10cm台の小型品であろうか。

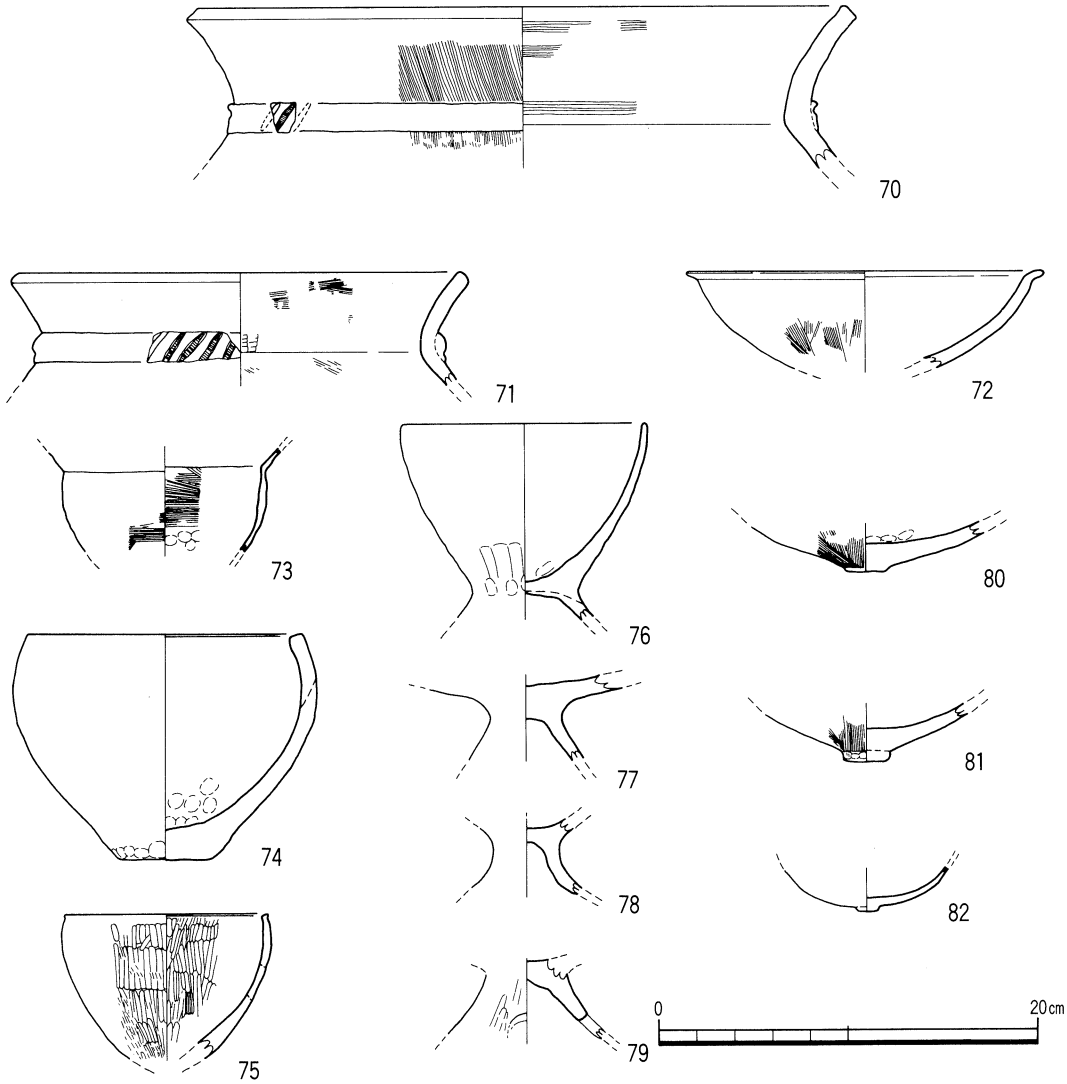
支脚形土器（107・108）

107は受部が「U」字状にカットされ、傾斜部分をもつ。外面は指おさえの後に縦方向の刷毛調整と丁寧なナデによって仕上げられる。108は「U」字状にカットされ、３本の角状の突起をもつ。

その他の遺物（109～121）

109～114は土師器の甕形土器である。109～114は「く」の字状に屈曲し、短い口縁部をもつ。口縁端部が丸くおさめられるもの（109・110）、つまみ上げられるもの（111～114）がある。調整は胴上半部内面にケズリが顕著に施されるものがある（109・111・112）。116は土師器の二重口縁壺形土器である。117は突帯文土器である。面取りされた口縁端部には刻目が施され、下がった位置に刻目突帯が付加される。内外面は粗いナデ調整である。118～121は石器である。118～120は敲石である。121は磨石である。これらの遺物のうち、109～117は、ＳＤ10の埋没過程で混入した可能性があり、本遺構に直接伴わない遺物である。

時期：混入と考えられる土器群を除いた出土土器は甕・壺・鉢・高坏・器台・支脚で構成される。甕は「く」の字状口縁をもち、頸部が締まり長胴化の傾向がみられる。壺は複合口縁壺・単口縁壺等で構成される。中・小型品にも複合口縁が採用される。鉢は口径値20cmを超える大型品がみられる。高坏は脚裾部が単純に開くものと、段をもって開くものの２形態がある。器台は器形を知れる資料はないものの、垂下する口縁部をもち、支脚は胴部が中空のものであり、受部が「U」字状に傾斜する

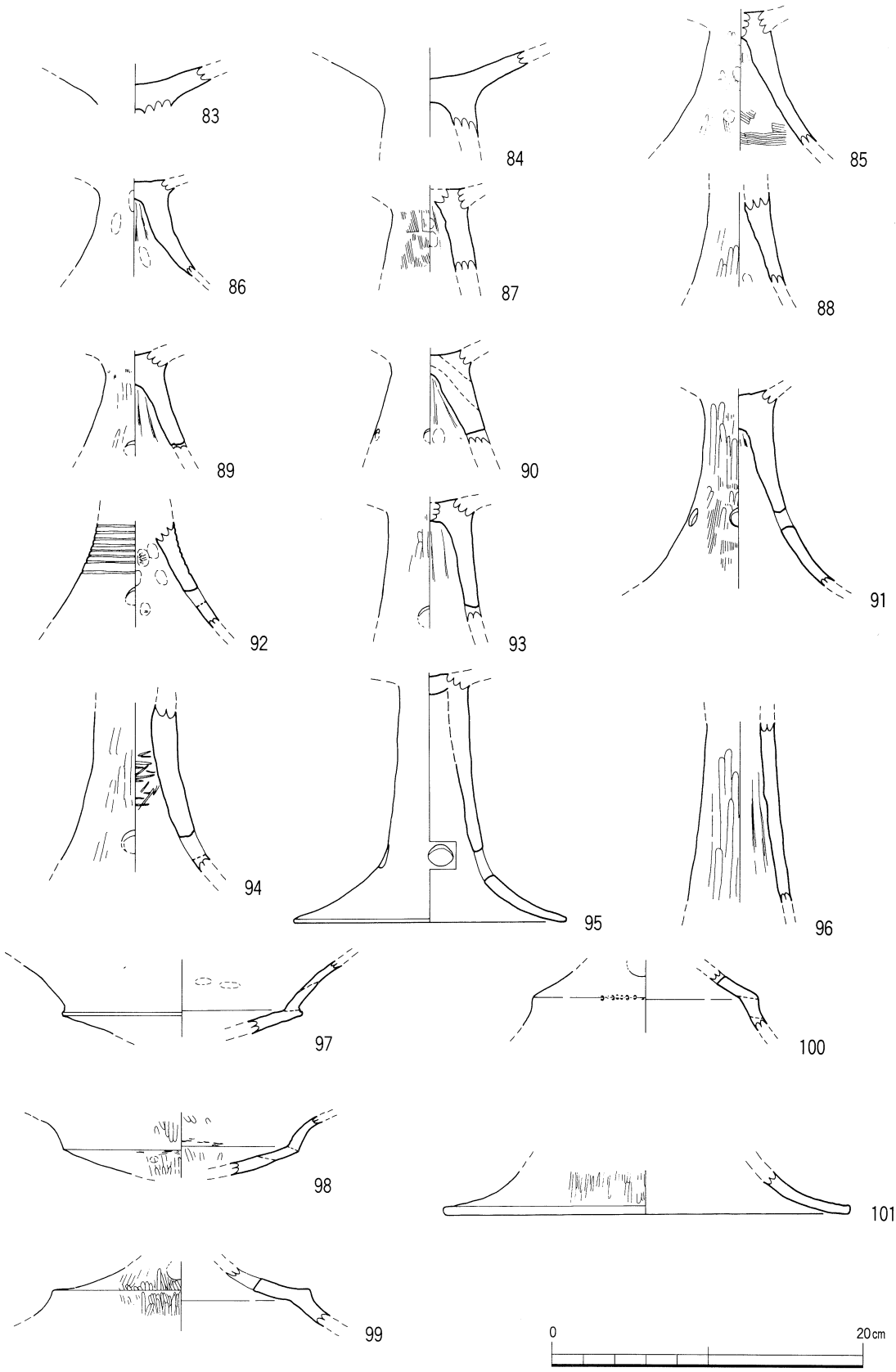


第17図ＳＤ10 出土遺物実測図 (7)（縮尺 1／4）

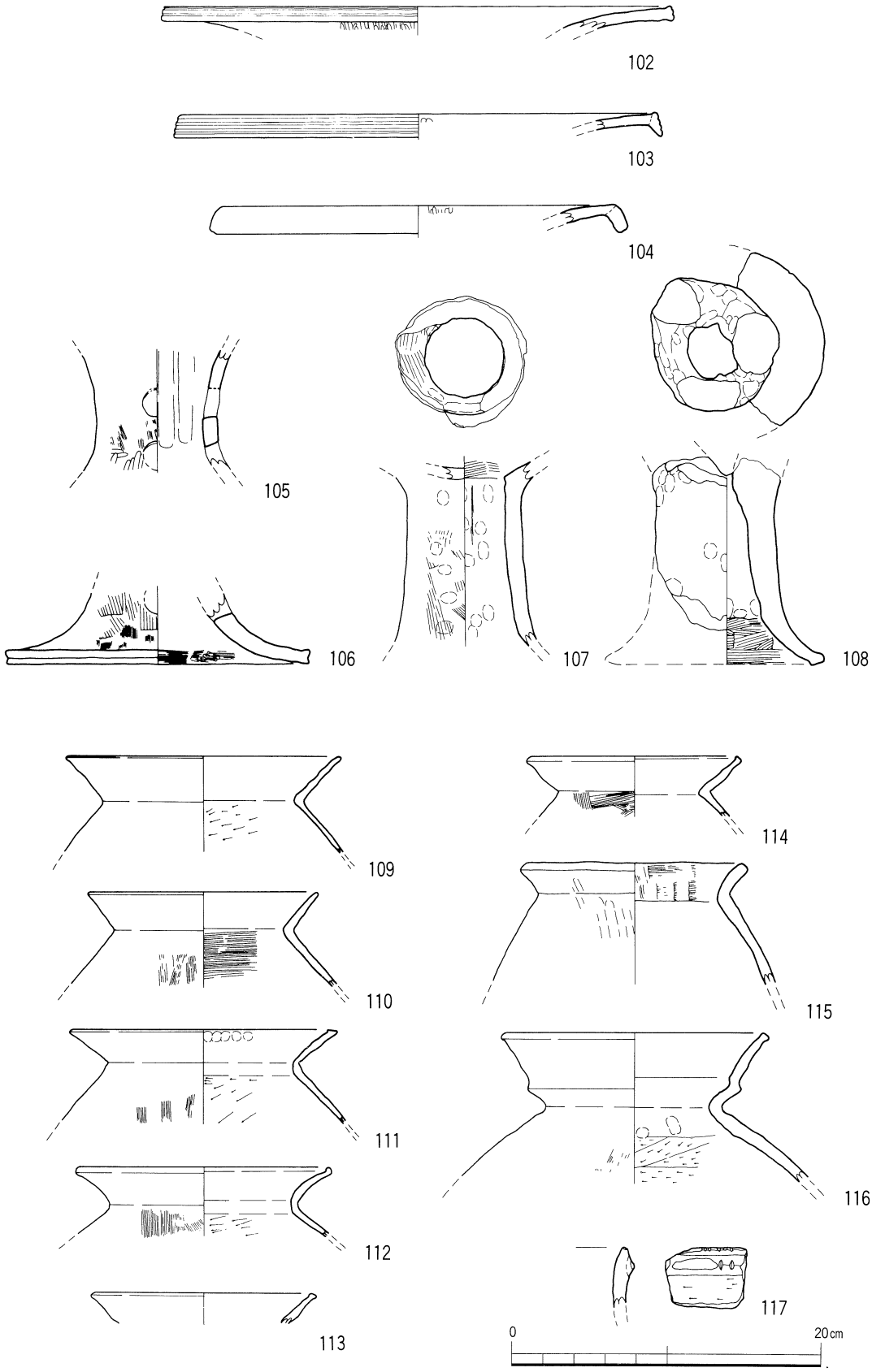
ものがある。これらは、梅木が提示した弥生後期土器編年の後葉段階に対応するものである。ただし、小型の鉢や壺に「ボタン」状に突出する底部が数多く見られないことや高坏の脚部の円孔が２段透かしでない点は、後期中葉の土器様相を一部にとどめているものとして理解できる。本調査地の北に展開する福音小学校構内遺跡ＳＤ３や土器溜まり資料と併行関係にあるものと考えておきたい。

ＳＸ５（遺物集中地点）（第７・21図　図版６・７）

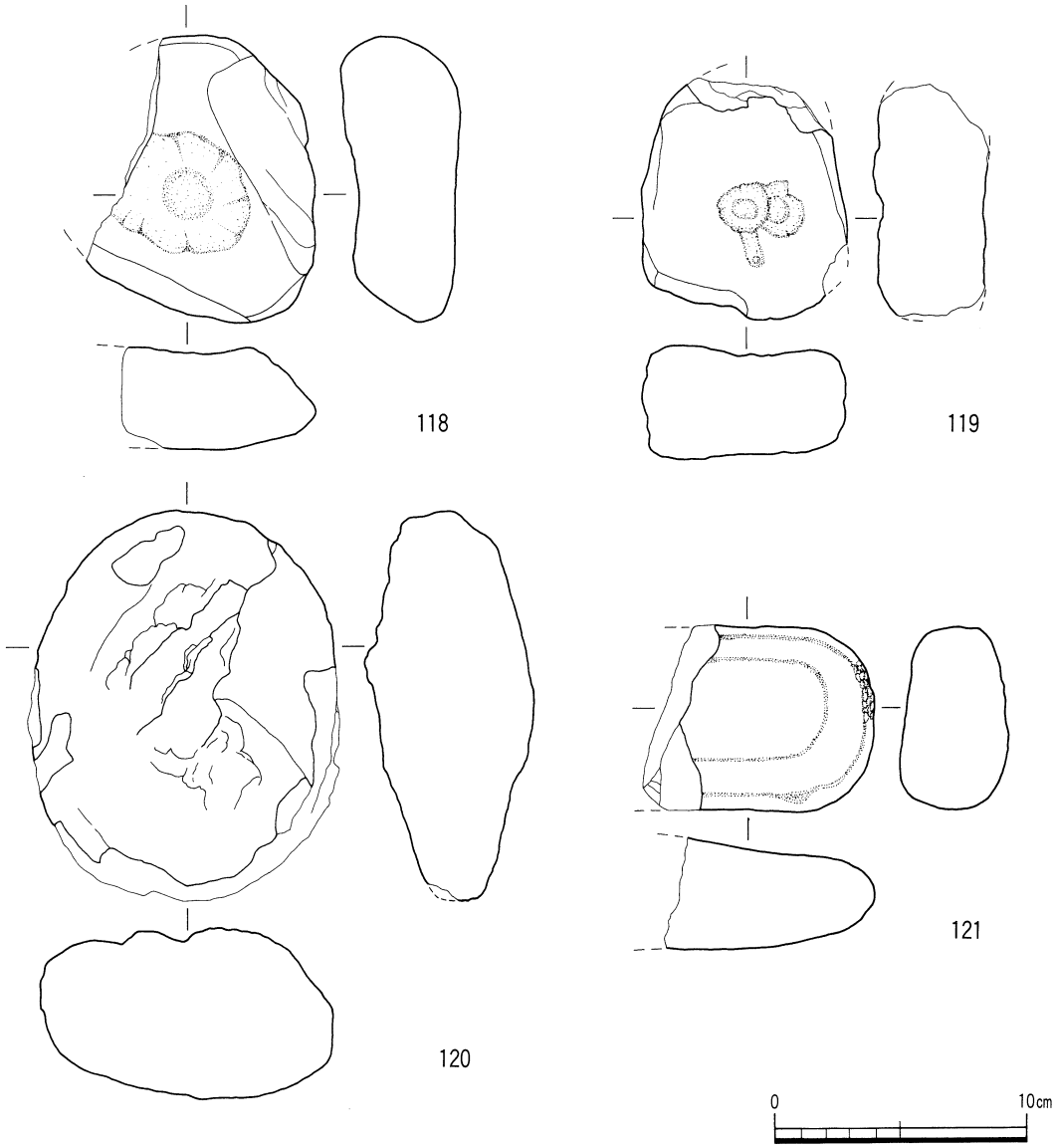
調査区の東部中央に位置する。遺物がまとまって出土した11×７ｍの不整形の範囲を指す。特に、Ｆ９区とＦ10区西側において遺物が集中していた。遺物のまとまりが確認できたのは、Ｖ層を約10cm掘り下げた段階、すなわちＶ下層上面である。この段階で平面精査を試み、さらに遺物取り上げ時にも精査を試みた。また、東西大ベルト壁面では土層堆積状況の観察をおこなった。この結果、遺物に伴う人為的な掘り込みは未検出であった。遺物は、層厚15～20cmを測るＶ下層に包含されており、Ⅵ層上面まで遺物が重なる状態で出土したところもある。遺物は弥生土器が多く、ＳＤ10同様、器面に



第18図　ＳＤ10 出土遺物実測図 (8)（縮尺 1／4）



第19図　ＳＤ10 出土遺物実測図 (9)（縮尺 1／4）



第20図　ＳＤ10 出土遺物実測図 (10)（縮尺 1／3）

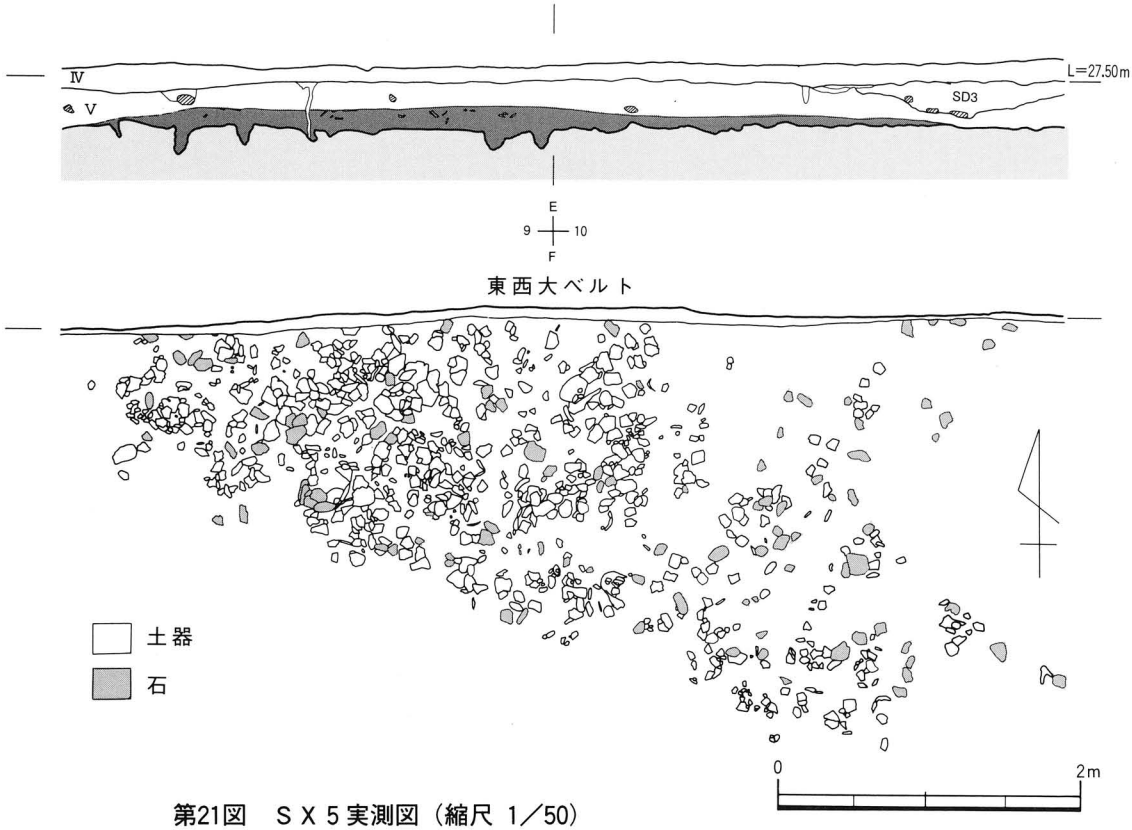
摩滅がみられないものが大半であった。接合作業中に完形に復元できたものがある。この他に拳大の礫が多く認められた。幾つかの礫は受熱により黒化・赤化したり、破砕していた。定型的な石器は2点含まれており、いずれも砥石である。土器と礫は混在するが、調査では両者の有機的関係を明らかにすることはできなかった。遺物取り上げは、50cm方眼の小グリッドを加えた、大・中・小グリッドを併用した（第22図）。

出土遺物（第23～39図　図版13～16）

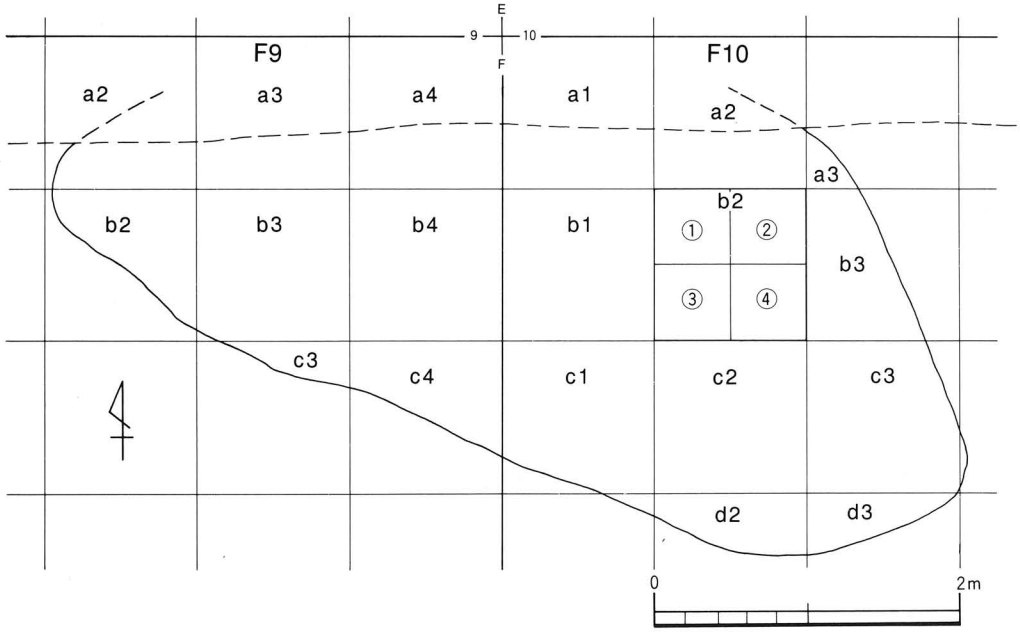
甕形土器（122～164）

本器種は法量を基準にして三大別できる。以下、法量ごとに記述する。

大型品（122～130）　口径値が20cmを超えるもの。破片資料が多く、器形を知れるものは少ない。総じて肩部が張るものが多い。123は接合・復元によって器形を知ることのできる良好な資料である。口縁部は「く」の字形に短く外反し、端部は面取りされる。肩部の張りは強く、胴部上半での最大径



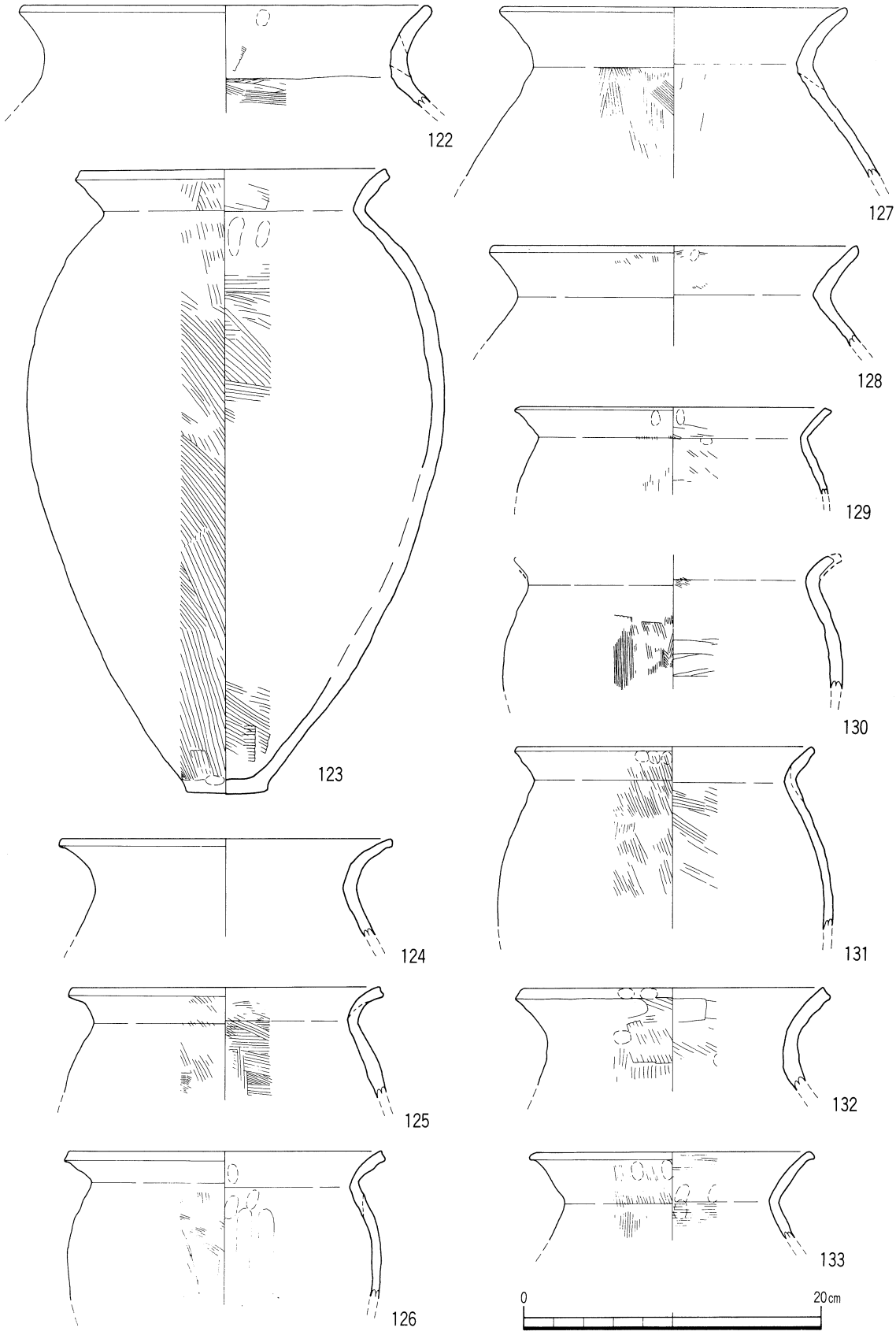
第21図　ＳＸ５実測図（縮尺 1／50）



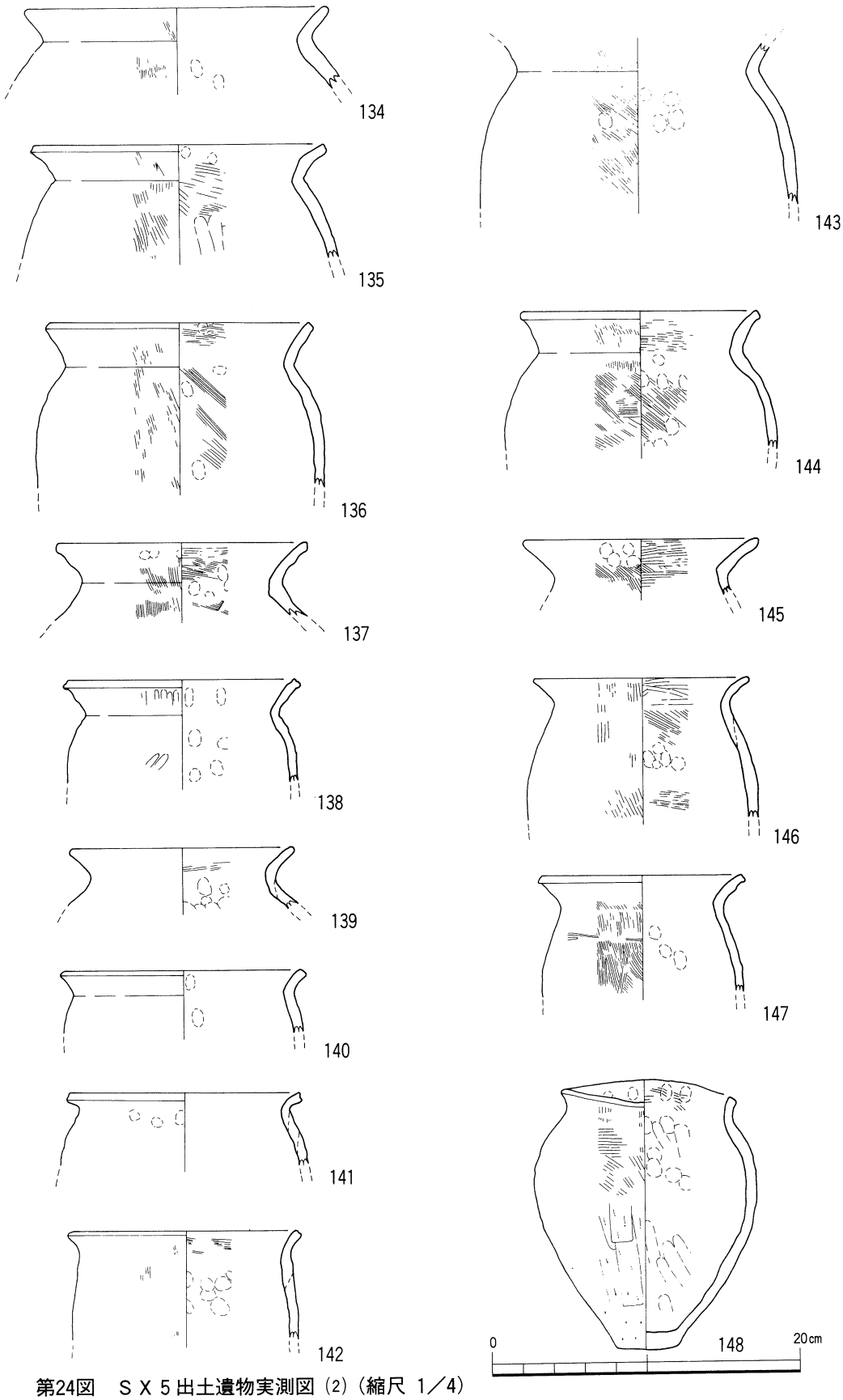
第22図　ＳＸ５遺物取り上げ地区割図（縮尺 1／50）

値が口径値を凌いでいる。底部はわずかに立ち上がりをもつ平底である。内外面は刷毛目調整を基本とする。器高値は40cmを超える。

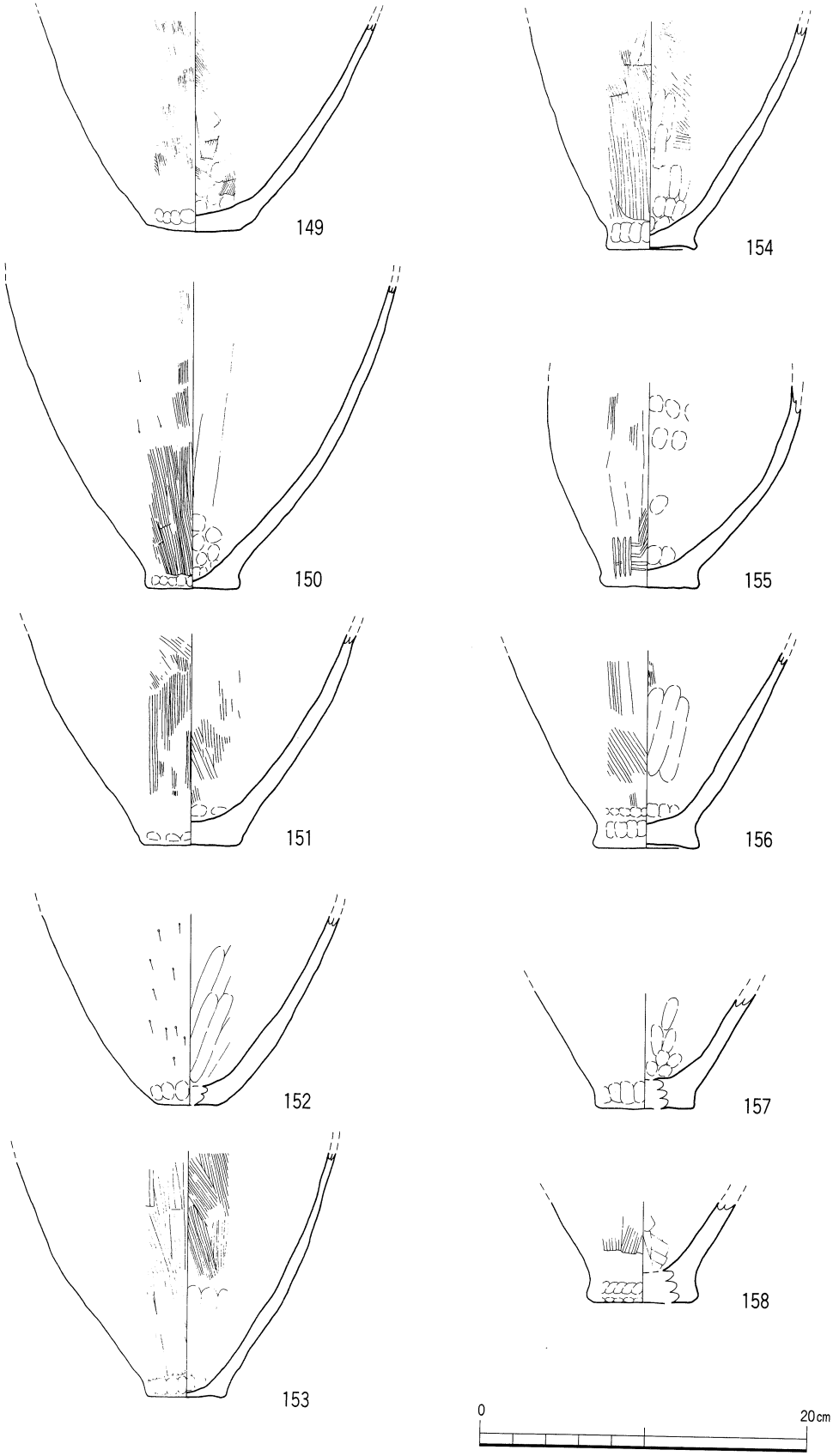
中型品ａ（131～136）　口径値が18～20cmのものである。口縁部が長いもの（132・133・136）と、短いもの（131・134・135）がある。



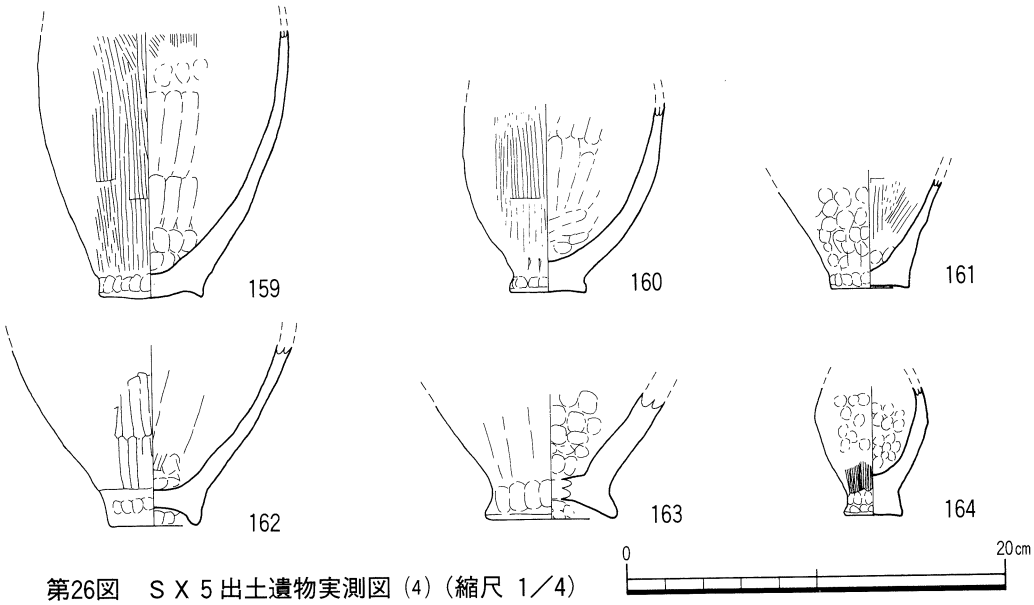
第23図　ＳＸ５出土遺物実測図 (1) (縮尺 1／4)



第24図　ＳＸ５出土遺物実測図 (2)（縮尺 1／4）



第25図　ＳＸ５出土遺物実測図 (3) (縮尺 1／4)



第26図　ＳＸ５出土遺物実測図（4）（縮尺 1／4）

中型品ｂ（137～147）　口径値が13～17cmのものである。肩部の張るものが多く、胴部最大径値が口径値を凌いでいる。少数ではあるが肩部の張らないものもある。

小型品（148）　口径値が13cmに満たないものである。

149～164は底部である。平底が主体であり、立ち上がりをもつものと立ち上がりがないもののがある。

壺形土器（165～242）

壺形土器は、複合口縁をもつものと単口縁をもつものがあり、前者が多い。多くが破片資料であり、器形を知れるものは少ない。

1）複合口縁壺（165～209）　複合口縁壺は複合口縁部の接合部分の形態を基準に二大別される。

①複合口縁部の接合部が「コ」の字状を呈する（165～185）

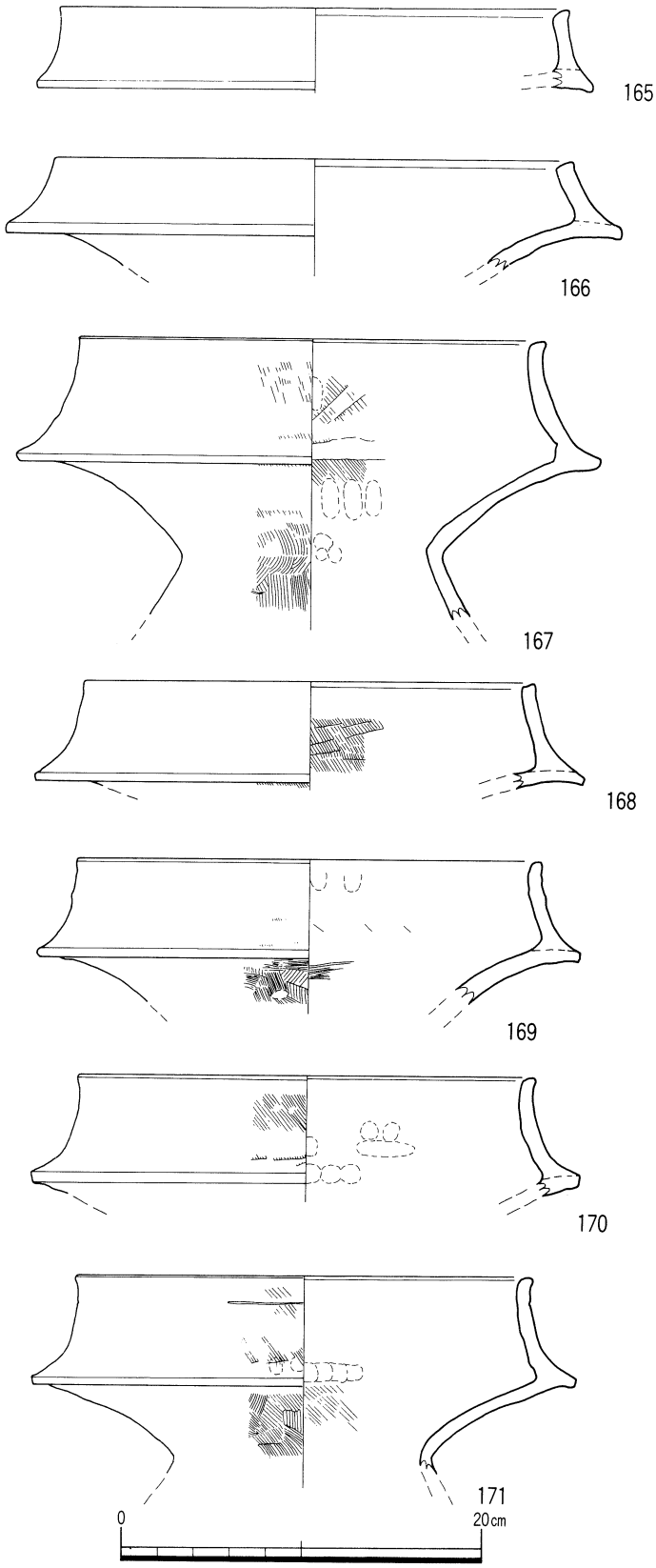
大型品（165～177）　口径値が20cmを超える。二次口縁部が直立するものと内傾するものとがある。167は長い二次口縁部が直立気味に立ち上がり、頸部は強く締まる。内外面には稜線がみられる。172は短く内傾して立ち上がる二次口縁部である。接合部内面には指頭痕がみられる。174・175は接合部が大きく外方に張り出し、タガ状を呈する。口縁部は肥厚し、端部は面取りされる。175の頸部には斜位方向に刻まれた突帯が１条巡る。

中型品（178～179）　口径値17～20cmを測る。178・179は二次口縁部が内湾しながら立ち上がる。

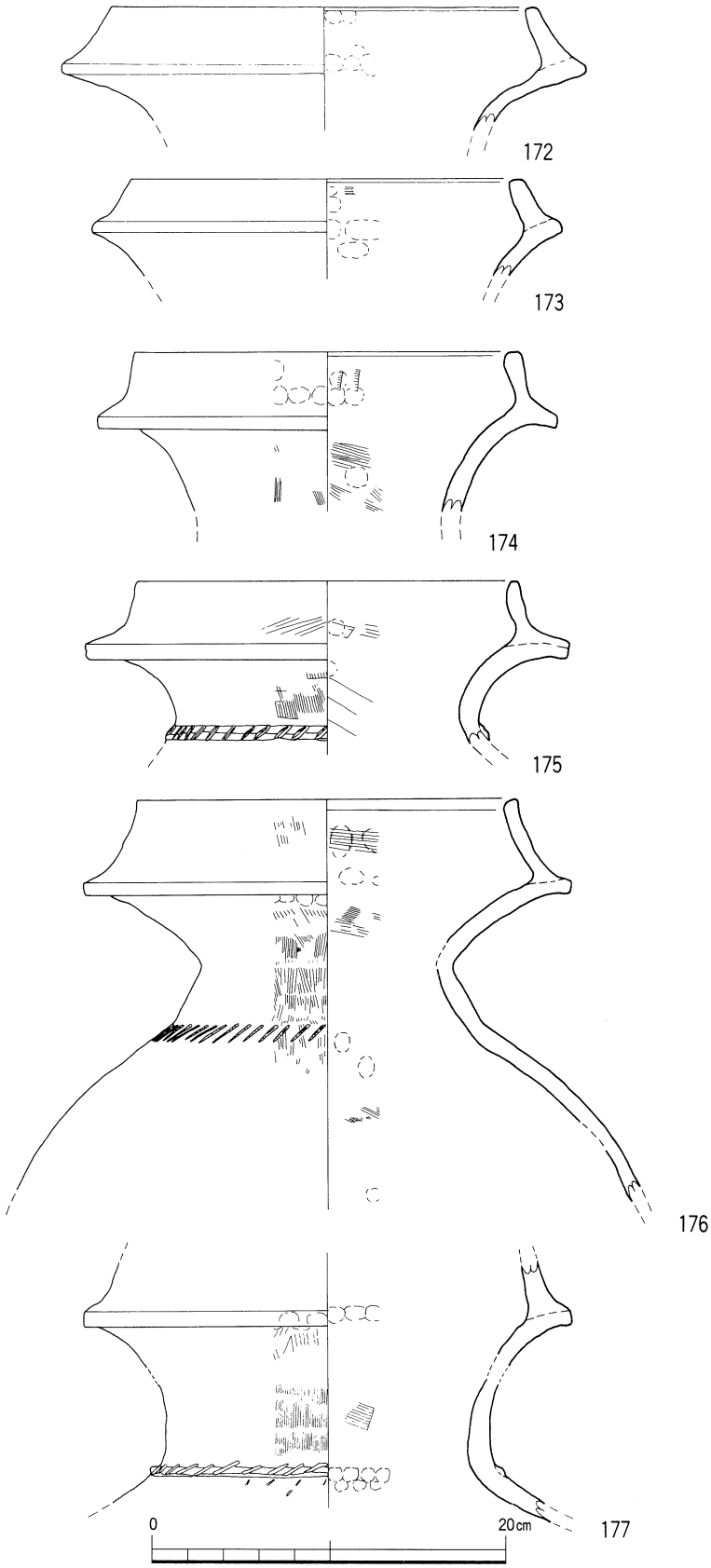
小型品（180～185）　口径値11～16cmを測る。180は二次口縁部外面に加飾がみられる。加飾は５条の波状文の下に竹管文が横列され、この組み合せが２段にわたっている。183・184は二次口縁部がきわめて短い。183は二次口縁部が磨滅し、器面の遺存は良好とはいえないものの、外面に４条の波状文が看取される。185は完形に復元できた良好な資料である。胴部は球形を呈し、強く締まる頸部には刻目突帯が付加され、短い一次口縁部の上に直立する二次口縁部が接合されている。底部は立ち上がりをもたない平底である。器高値44cmを測る。

②複合口縁部の接合部が「く」の字状を呈する（186～209）

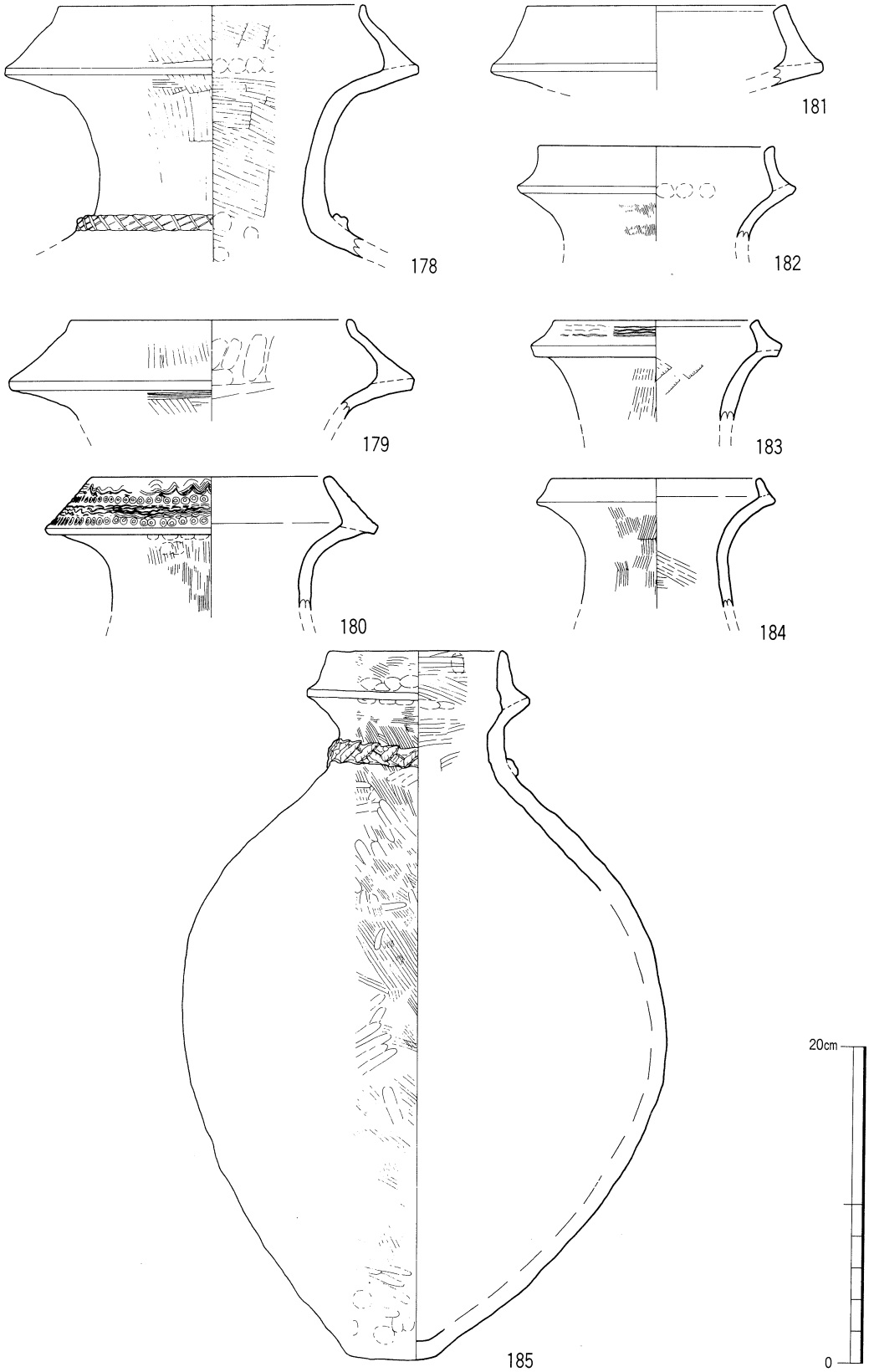
大型品（186～188）　口径値が20cmを超える。186はやや内傾して立ち上がる頸部に複合口縁部が



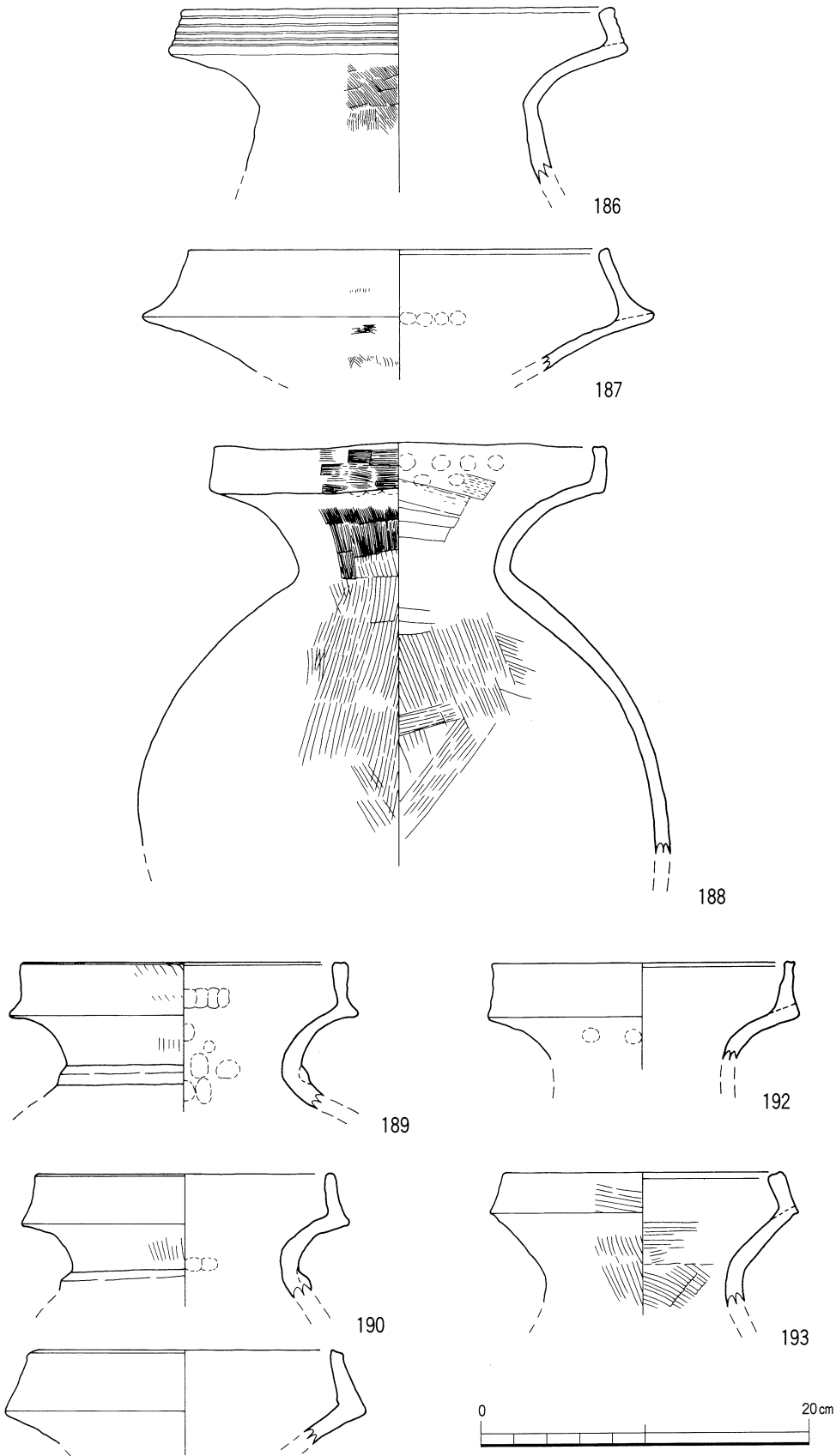
第27図　ＳＸ５出土遺物実測図（5）（縮尺 1／4）



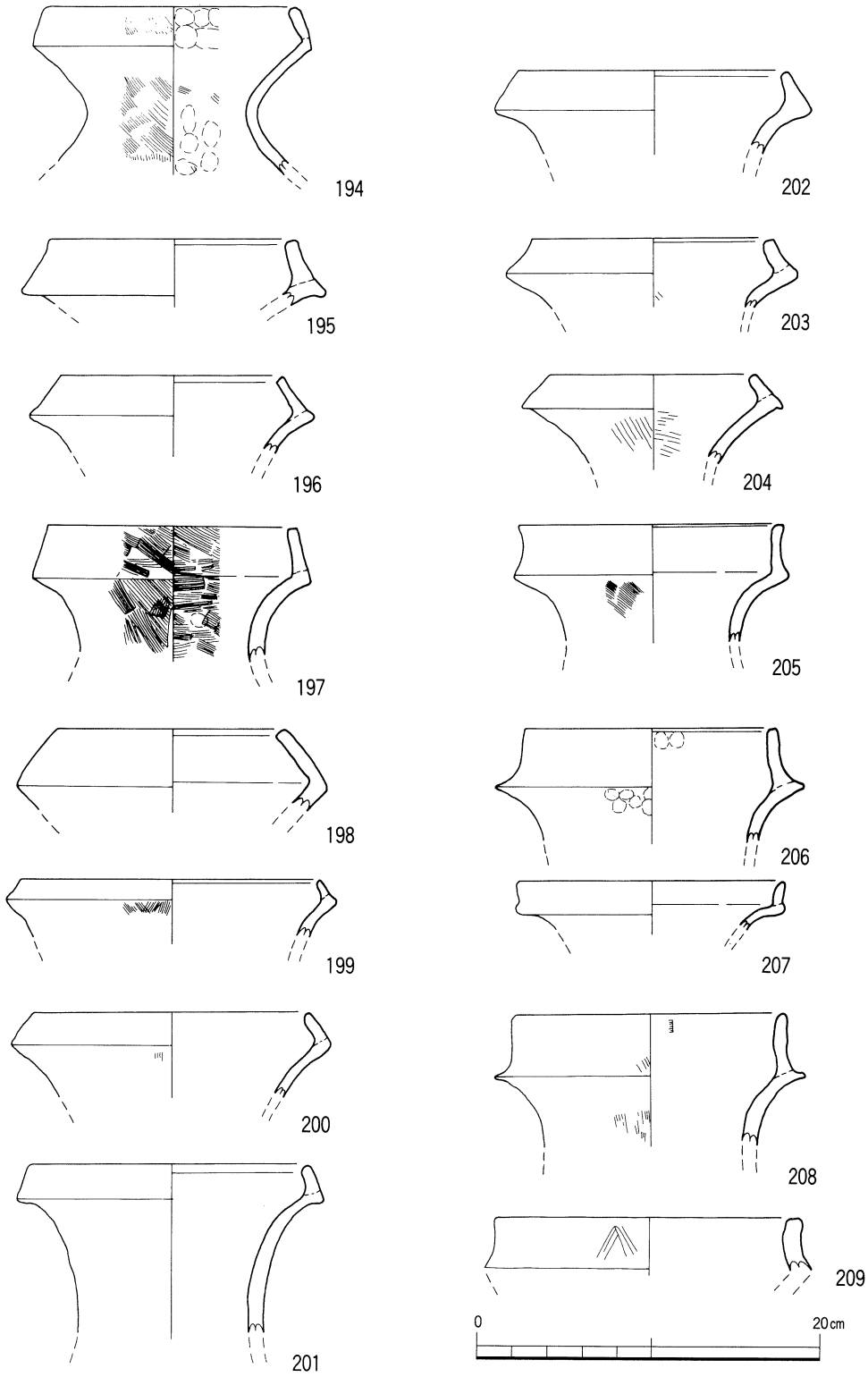
第28図　ＳＸ５出土遺物実測図（6）（縮尺 1／4）



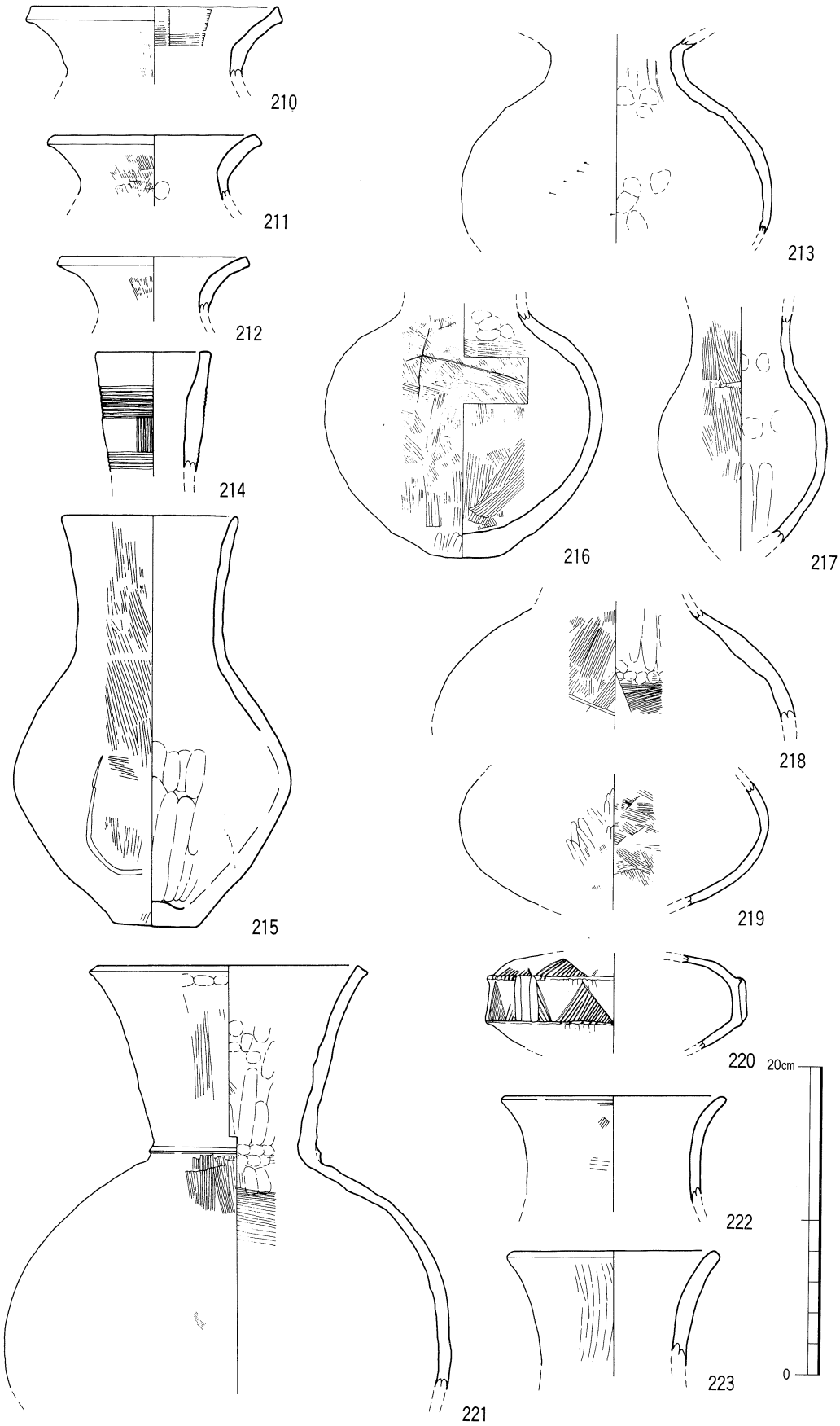
第29図　ＳＸ５出土遺物実測図 (7)（縮尺 1／4）



191 第30図　ＳＸ５出土遺物実測図（8）（縮尺 1／4）



第31図　ＳＸ５出土遺物実測図（9）（縮尺 1／4）



第32図　ＳＸ５出土遺物実測図 (10)（縮尺 1／4）

のる。二次口縁部外面には５条の沈線文が施される。187は接合部が外方に大きく張り出しタガ状を呈する。

中型品（189～192・199・209）　口径値17～20cmを測る。二次口縁部が直立気味に立ち上がるものと、内傾するものがある。

小型品（193～198・200～208）　口径値12～16cmを測る。二次口縁部が内傾して立ち上がるものが多い。209は中型品に復元される二次口縁部片である。三角文がみられる。

２）単口縁壺（210～223）

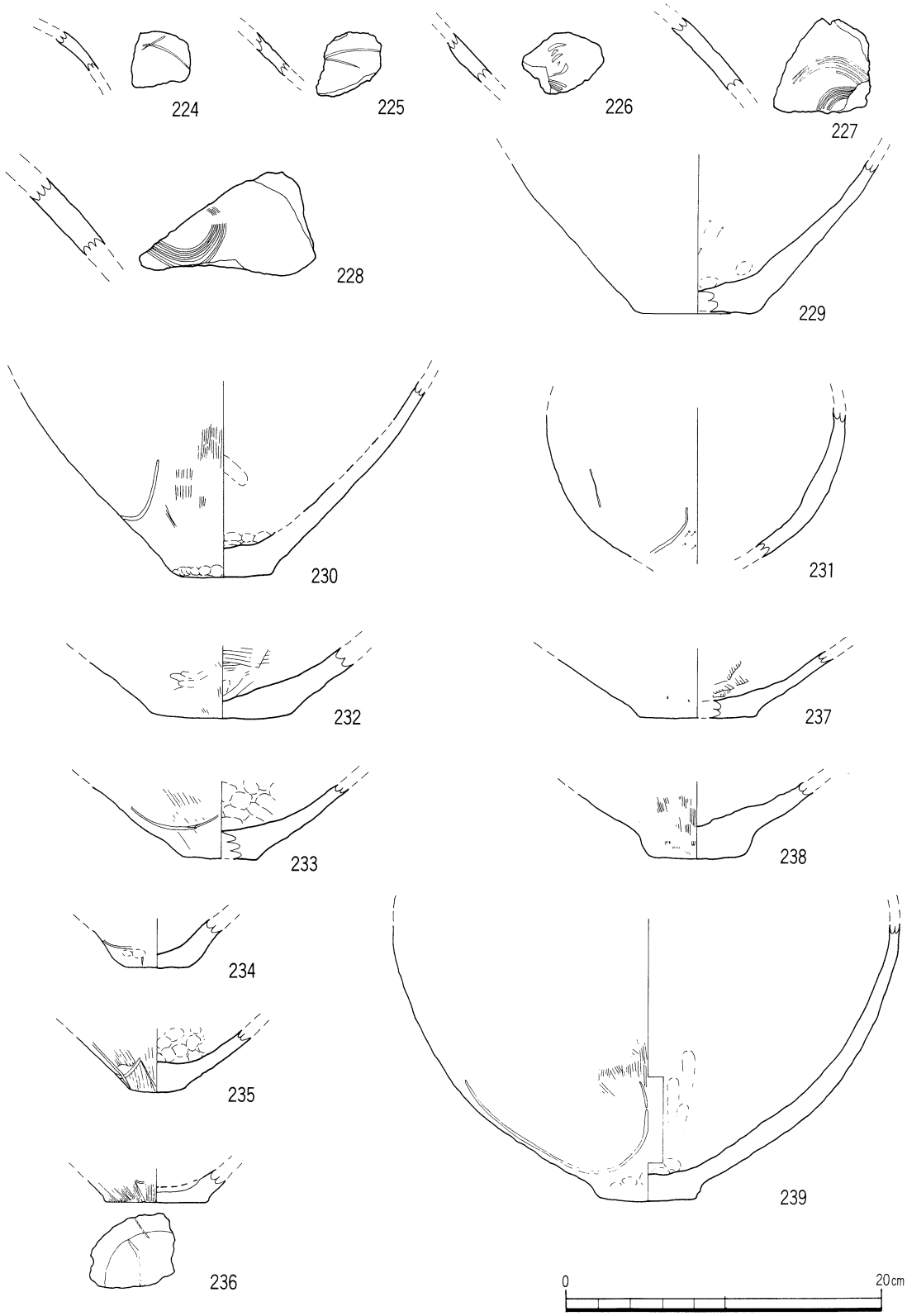
210～213は短い口・頸部のものである。210～212は横ナデにより口縁端部が幅広の面をなす。213は頸部が締まり短い筒状を呈し、外反する口縁部をもつ。214は直立する細長い頸部と直口する口縁部をもつ。頸部外面に細く浅い多条の直線文がみられる。215～218は直立・外傾する細長い頸部と、わずかに外傾する口縁部をもつ。215は肩部の張りが強く、胴部下半の一方向に焼成前の線刻が施される。220は底部を欠する胴部片である。中位がやや内傾して立ち上がる。縦方向のヘラミガキ後、胴上位と中位に加飾される。加飾は直線文と鋸歯文が組み合い、胴中位にはさらに縦２列の棒状浮文が貼付られる。221～223は外傾する長い頸部に、外反する口縁部をもつ。221は器高値が40cmを超える大型品と考えられる。

224～239は胴上半部片と下半～底部片である。焼成前の線刻をもつものを含む。224～228は胴上半部に線刻をもつ。224・225は魚のヒレ状文様、226～228は複数の弧文が施される。底部は立ち上がりをもつ平底が主体をなし、立ち上がりをもたない平底や下方に突出するものもある。線刻は底部付近に施されるものが多い。なお、236のように線刻が底部外面にみられるものもある。

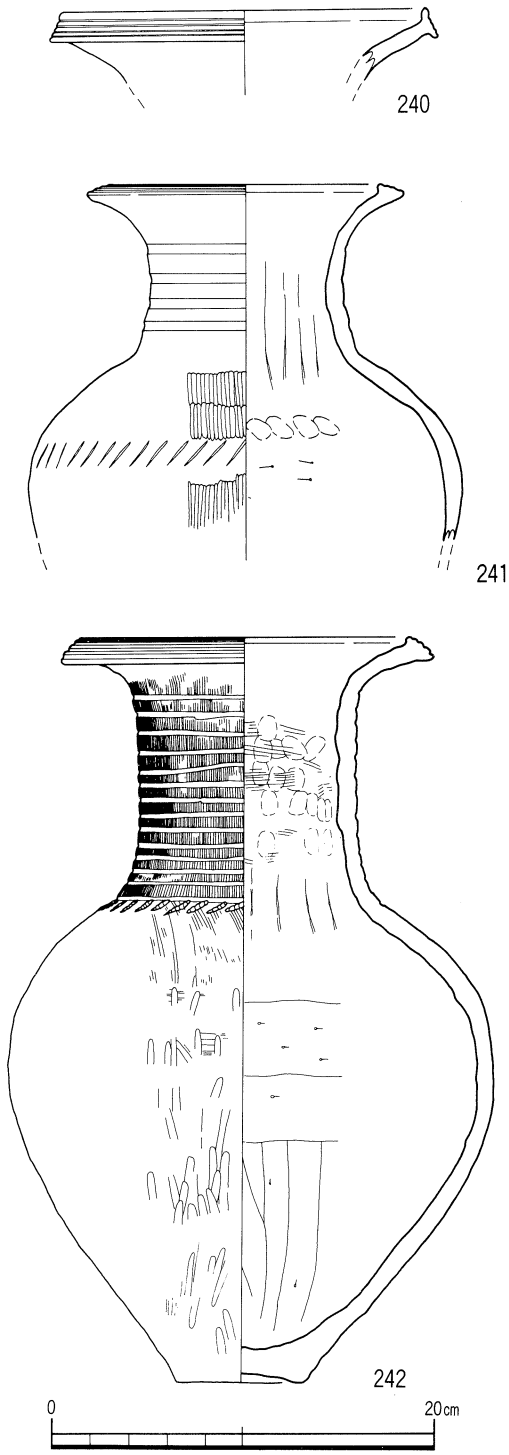
240～242は異形態。いずれも長頸壺。240は口縁部片であるが、口縁端部は上下に拡張され、沈線文がみられる。241は肩部が張り、頸部は内傾して立ち上がる。口縁部は大きく外反し端部は上方に拡張される。口縁端部には多条の沈線文、頸部に４条の凹線文、胴部最大径付近には「ノ」の字状の刺突文がみられる。調整は外面の胴上半部が縦方向のミガキ、頸部がナデである。内面は胴上半部は横方向のケズリと指頭痕、頸部にはシボリ痕がみられる。在地土器の色調とは異なり、淡乳褐色を呈する。形態・施文・胎土等から本資料は搬入土器と判断される。242は完形に復元された資料である。筒状の頸部にはタテ刷毛調整後に浅い沈線文が施される。胴上半部に最大径をもつ。肩部には板の木口を押しつけた「ノ」の字状の刺突文がみられる。底部はわずかに立ち上がりをもつ上げ底である。

鉢形土器（243～251）　口縁部を折り曲げるものと直口のものがある。244は内湾する口縁部をもつ小型品である。246は大きな平底をもち、調整は外面がヘラミガキ、内面が横～斜め方向の刷毛である。248は台付き鉢の台部、249・250は底部である。底部は下方に突出するものがある。251は脚付き鉢の脚部である。緩やかに大きく外反する裾部に焼成前の穿孔をもつ。穿孔は円形で４方向である。

高坏形土器（252～270）　252～255は坏部である。坏部の接合部に稜をもつものと段をもつものがある。252は接合部に稜をもち、大きく外反する口縁部をもつ。253は口縁部が直立してから外反する。成形は指おさえによってなされ、外面にはタテ方向の刷毛目、内面には横方向の刷毛目とミガキによる調整がなされる。254は坏部の接合部に段をもち、大きく外反し著しく長い口縁部をもつ。255は外面に焼成前の線刻をもつ。256は接合時に完形に復元された良好な資料である。坏部の接合部に稜をもち、外反する口縁部をもつ。脚部は、柱部がやや外反し、裾部が広がる形態をとる。裾部には５方向に円形の焼成前穿孔が施される。258は坏部の接合部に段をもち、直立気味に外反する口縁部をも

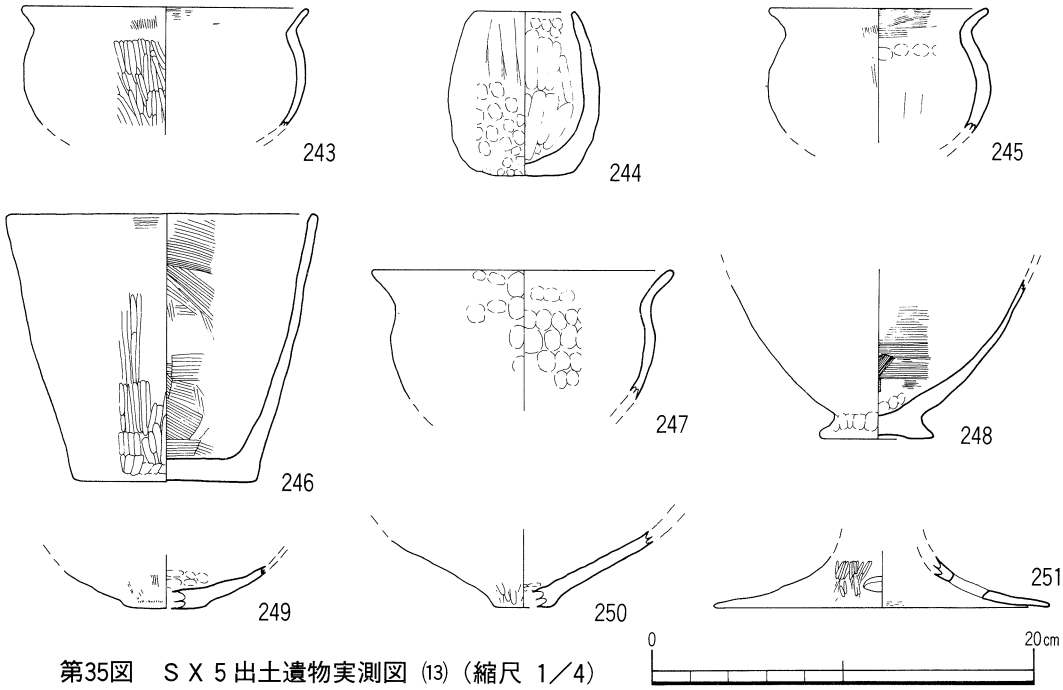


第33図　ＳＸ５出土遺物実測図 (11)（縮尺 1／4）



第34図　ＳＸ５出土遺物実測図 (12)（縮尺 1／4）

つ。口縁部は強い横ナデにより仕上げられ、端部は面取りされている。脚裾部の５方向に焼成前穿孔がみられる。260～268は坏部～脚部片、脚部片である。脚部の短いものと長いものがある。裾部はゆるやかに外反し、円孔が施されるものが多い。269は坏部の接合部に段をもつ加飾高坏である。口縁



第35図　ＳＸ５出土遺物実測図 (13)（縮尺 1／4）

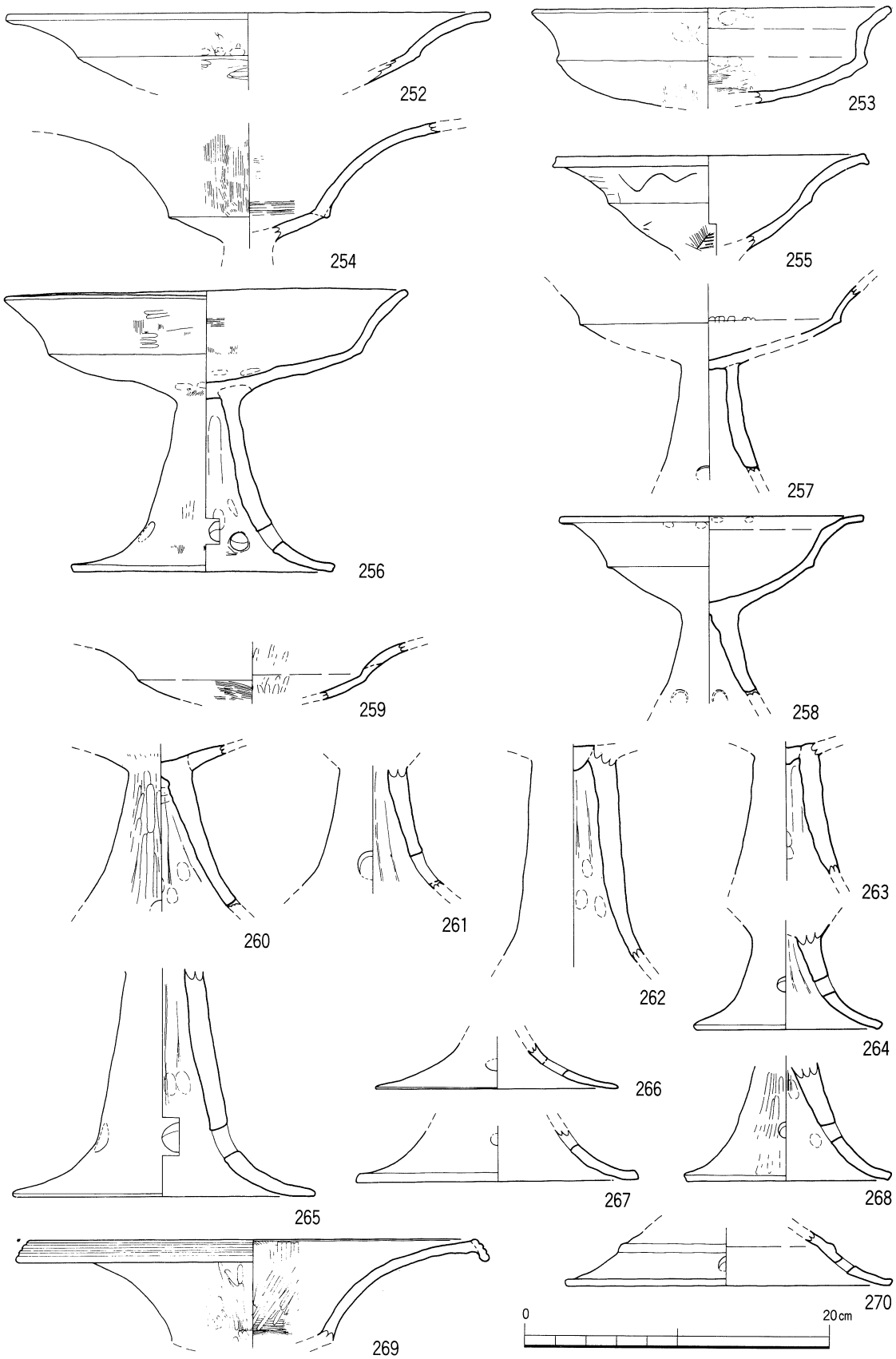
部は大きく外反し、著しく長い口縁部をもつ。口縁端部が下方に拡張され、３条の沈線文がみられる。内外面の調整は縦方向のミガキである。口縁端部と内面の一部には赤色顔料とみられる顔料が観察される。本資料は254と同一固体の可能性がある。270は裾部の接合部に段をもつ。段より下部に焼成前穿孔がみられる。

器台形土器（271～276）　個体数が少なく形態のバリエーション等、詳細不明な部分が多い。271は接合時に完形に復元できた資料である。柱部が太く、上下がスカート状に大きくひらく形態をとる。口縁（受部）の端部は下方に拡張され、斜線充填による三角文が施される。柱部には２段にわたる円孔がみられる。円孔は互い違いに配置され、ともに４方向である。裾部は外反し、端部はナデにより面取り気味におさめられる。273は受部上面に半裁竹管文が２列施される。274～276は裾部である。276は裾部端面が上下に拡張され、裾部には５条の凹線状の施文がみられる。外来系か。高坏形土器の裾部の可能性もある。

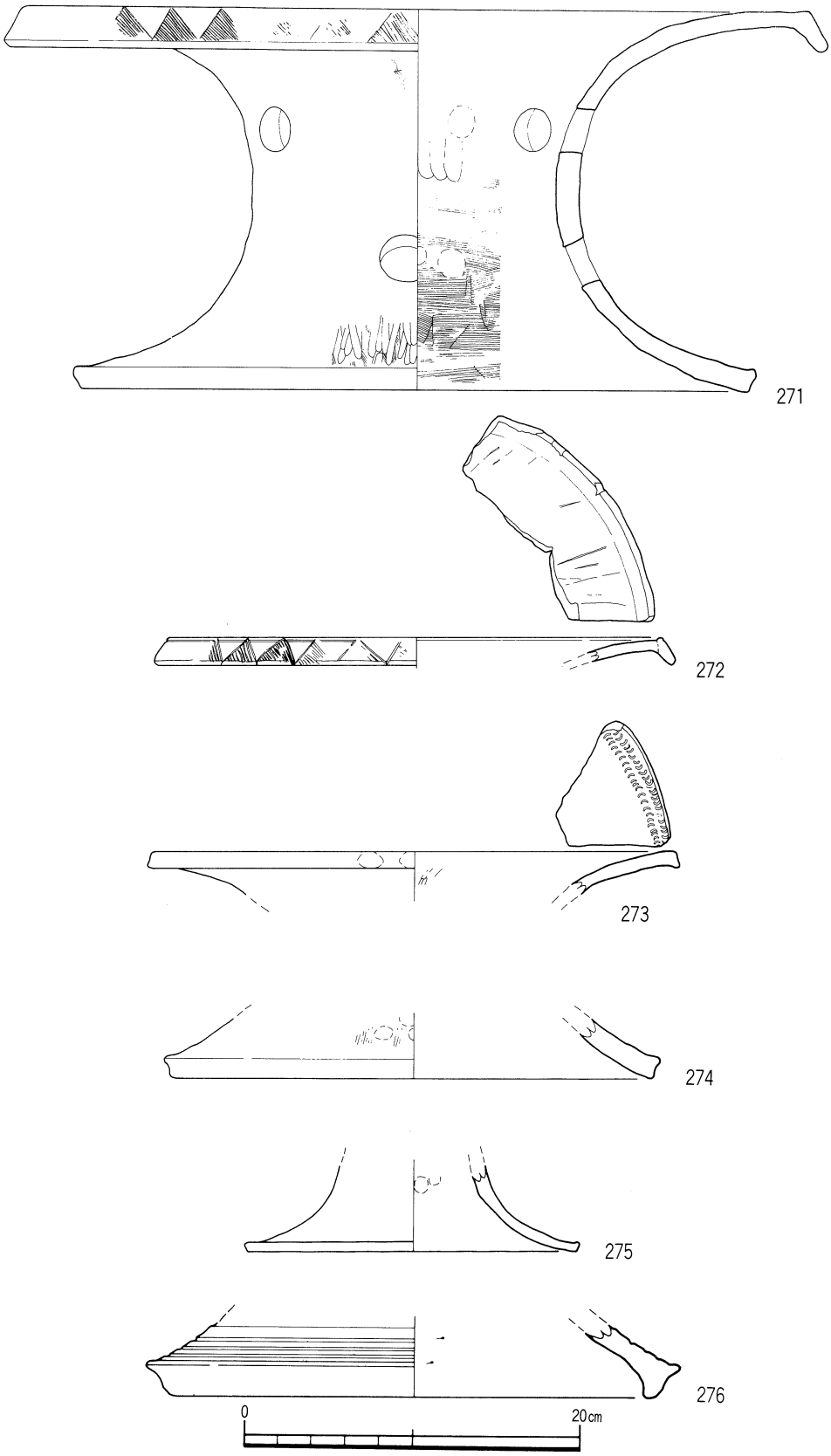
支脚形土器（277・278）　受部が「U」字状にカットされ、傾斜部分をもつ。指頭痕が顕著に残り、粗い調整により仕上げられる。

石器（279・280）　２点出土した。ともに砥石である。実測図の横断面形で示したように、各面は中央部分が凹んでおり、器面には摩滅痕や削痕が観察される。このことは４面のいずれもが機能面として扱われていたことを示している。さほど大きくないことと考えあわせて、ここでは携帯用の手持ちの砥石として理解しておきたい。

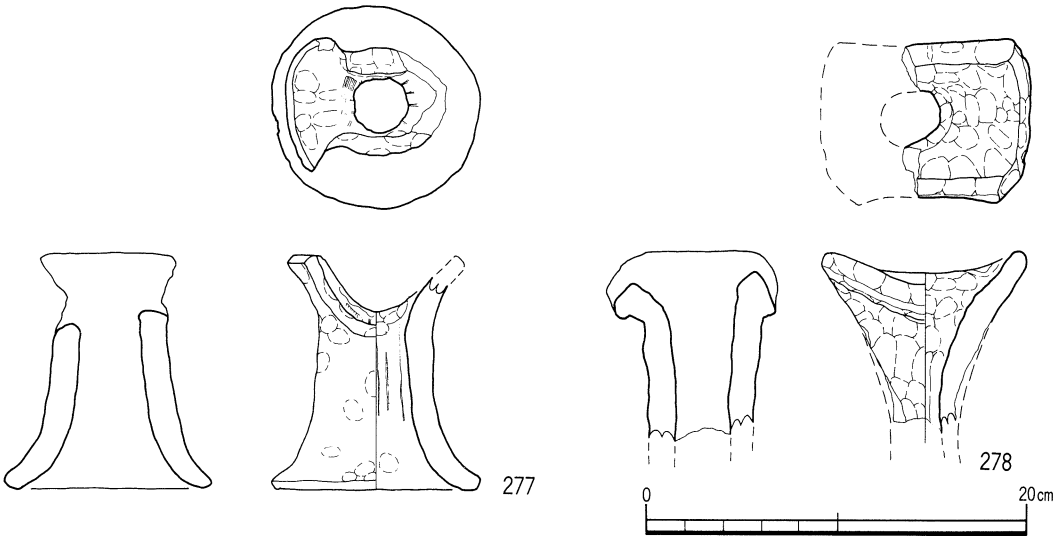
時期：出土土器は甕・壺・鉢・高坏・器台・支脚で構成される。甕は「く」の字状口縁をもち、頸部は締まり長胴化の傾向がみられる。壺は複合口縁壺・短頸壺・長頸壺・広口壺等で構成される。中・小型品の多くが複合口縁をもつ。高坏は脚裾部が単純にひらくものと、段をもってひらくものの２形態がある。器台は器形を知れる資料は少ないが、完形に復元された271のように垂下する口縁部に斜線充填の三角文が施され、上下がスカート状に大きくひらくものがある。支脚は胴部が中空で、



第36図　ＳＸ５出土遺物実測図 (14)（縮尺 1／4）



第37図　ＳＸ５出土遺物実測図 (15)（縮尺 1／4）

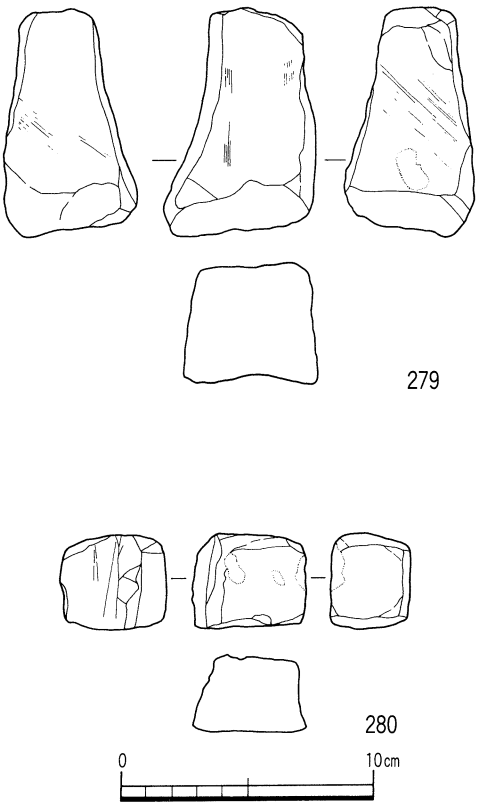


第38図　ＳＸ５出土遺物実測図 (16)（縮尺 1／4）

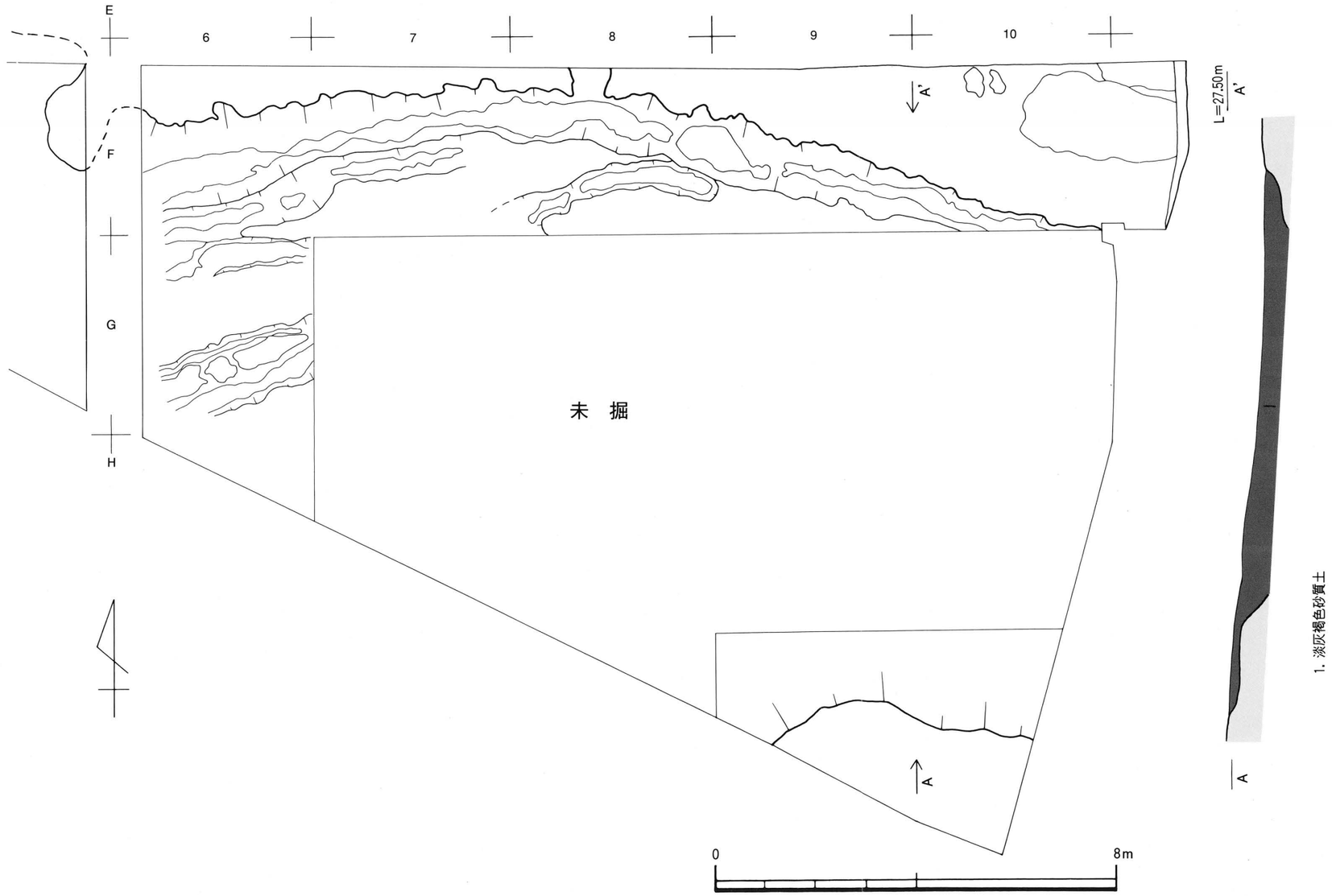
受部が「U」字状に傾斜する。これらは、梅木が提示した弥生後期土器編年の後葉段階に対応する。ただし、小型の鉢形土器や壺形土器にボタン状に突出する底部が数多くみられないことや高坏の脚部の円孔が２段透かしでない点は、後期中葉の土器様相を一部に留めているものと理解できる。時間的には、ＳＤ10出土土器とほぼ同時期と考えられ、弥生時代後期中葉～後葉に位置付けられる。

ＳＲ１（第７・40図）

調査区南半を東西にはしる幅広な河川（自然流路）である。河川東端は調査区外へ続く。西端は北方向から流れるＳＤ11と合流し、南西方向に方向が振れるものと想定される。調査工程上、一部の調査に留めざるを得なかった。河川幅10m、溝底は緩やかに西へむかって傾斜する。底には凹凸のある幅狭な小溝が多数検出された。東西大ベルトの南壁面でいくつかの落ち込みを確認したが、湧水が著しくその性格を明らかにすることはできなかった。河川の埋土は、５～10cm大の河原石と角礫を多量に含む淡灰褐色砂質土を基本とする。粒の粗い砂と細かい砂が互層となって堆積しており、恒常的に流水のあったことを示している。出土遺物は弥生土器・土師器・須恵器・鉄器等がある。ローリングを受けているため土器の器面は磨滅が著しく、調整や施文が識別できないものが多い。このことは埋土の所見と合致する。本遺構は弥生～古代にわたって機能し、完全に埋没したのは



第39図　ＳＸ５出土遺物実測図 (17)（縮尺 1／3）



第40図　ＳＲ１実測図（縮尺 1／100）

中世である。

出土遺物（第41～43図　図版17）

弥生土器（281～294）　甕・壺・高坏・器台がある。281～283は甕形土器である。281は肩部の張りが強く、胴部最大径値が口径値を凌ぐ。口縁端部は横ナデ調整により面をもつ。284～291は壺形土器である。284は「コ」の字接合部をもつ複合口縁壺の大型品である。285～287は「く」の字接合部をもつ。288は口縁部の屈曲が強く短い口頸部をもつ。口縁端部は強い横ナデが施され、上下に拡張される。289・290は頸部に刻目突帯が巡る。291は頸部を沈線によって区画された長頸壺の頸部片である。292は高坏形土器、293・294は器台形土器である。294は受部の端部が上下に拡張され、単位不明ながら円形の浮文が付加された加飾器台である。浮文は４条の沈線文の後に付加される。

須恵器（295～320）　甕、坏蓋、坏身、壺、高坏、瓶がある。295・296は甕である。295は外反する口縁部をもち、端部は丸くおさめられる。沈線文の上下に波状文が施される。297～305は坏である。297・298は天井部中央に宝珠状のつまみが付く。298は器高が高く、口縁部内面にかえりをもつ。かえりは口縁端部とほぼ同じ高さである。300は口径13cmを測る坏身である。304・305は高台がつく坏身である。306は短頸壺の蓋であろう。307～312は短く直立する頸部に外反する口縁をもつ壺、313は短頸壺である。なお、312は肩部にヘラ記号をもつ。314・315は長頸壺、317・318は無蓋高坏、319は有蓋高坏である。317は長脚２段の透かし孔をもち、坏部には刺突文が施される。320はほぼ完形の瓶である。河川中央南寄りのＧ７区から横倒しの状態で出土した。本遺構出土の須恵器の多くが破片資料であるなか、これは一部を欠くもののほぼ完形品であり注目される。胴部は球形を呈し、頸部は強く締まっており、長く緩やかに外反する口頸部をもつ。

321～323は鉄滓とふいごの羽口である。321・322の羽口には気泡を残す鉄滓が付着する。混入品の可能性が高いと考える。

時期：出土土器から弥生後期～古代に機能したと想定される。鉄滓とふいごの羽口の存在は当地周辺で鉄器の生産が実施されていたことを示唆する。出土土器が多時期にわたるため特定することは困難ではあるが、出土量から判断して古墳後期～古代に帰属する資料と考えておきたい。

２．古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は、ＳＤ９、ＳＸ９、ＳＸ12、ＳＸ13、ＳＲ１である。ＳＤ９とＳＸ９は第４遺構面で検出できた。ＳＸ12とＳＸ13は、中世段階の水路であるＳＤ３とＳＤ８に切られてはいるが、第２遺構面検出と考えておきたい。

ＳＤ９（第７・44図）

調査区北東端に位置し、東西方向の溝である。溝の東端は調査区外へ続き、西端は遺構の遺存が良好ではない。溝幅は、0.2～1.2mを測り、東半には著しい凹凸が認められた。深さは５～10cmと浅く、遺存は悪い。底には凹凸が顕著に認められる。

遺構の輪郭はⅥ層上面で確認した。しかし、溝の遺存より、本来はⅤ層上面から掘り込まれた可能性が高い。埋土は粘質の黒褐色土である。埋土から判断する限り、恒常的に流水があったとは考え難く、ここでは区画を意図した小溝と理解しておきたい。出土遺物は弥生土器ないし土師器の細片が数点あるが、図化できない。

時期：遺物が少なく、細片であることから特定することは困難である。ここでは、検出面と遺構の遺存から古墳時代後期としておく。

ＳＸ９（第７・50図）

調査区北東部の中央、屈曲しながら北から南へ続き、南端はＳＲ１に合流する。遺構の北端と西端は未調査のため不明である。溝幅は、0.6～1.5mと均一ではない。遺構の輪郭はⅥ層上面で検出したが、ＳＤ９同様、Ⅴ層上面から掘り込まれた可能性が高い。埋土は、粘質の黒褐色土であり、流水が恒常的でなかったと理解できる。出土遺物はわずかに土師器・須恵器片がある。屈曲した遺構のプランと出土遺物から、本遺構の性格を特定することは困難である。

時期：ＳＤ９同様、古墳時代後期としておく。

ＳＸ12（第７・44図）

調査区東端の中央部、Ｆ11区に位置する。遺構の北半部は東西大ベルトにかかり、未調査である。後述するＳＸ13に切られる。Ⅵ層上面で検出したが、東西大ベルト壁面と調査区東壁面で土層堆積状況を検討したところ、Ⅴ層上面から掘り込まれていた可能性が認められた。検出面における平面形は不整長方形を呈し、規模は長軸長1.8m、短軸長0.6mを測る。埋土は暗青灰色～黒褐色シルト質土であり、７～15cm大の河原石を僅かに含む。遺物は須恵器片が出土したが、図化できない。

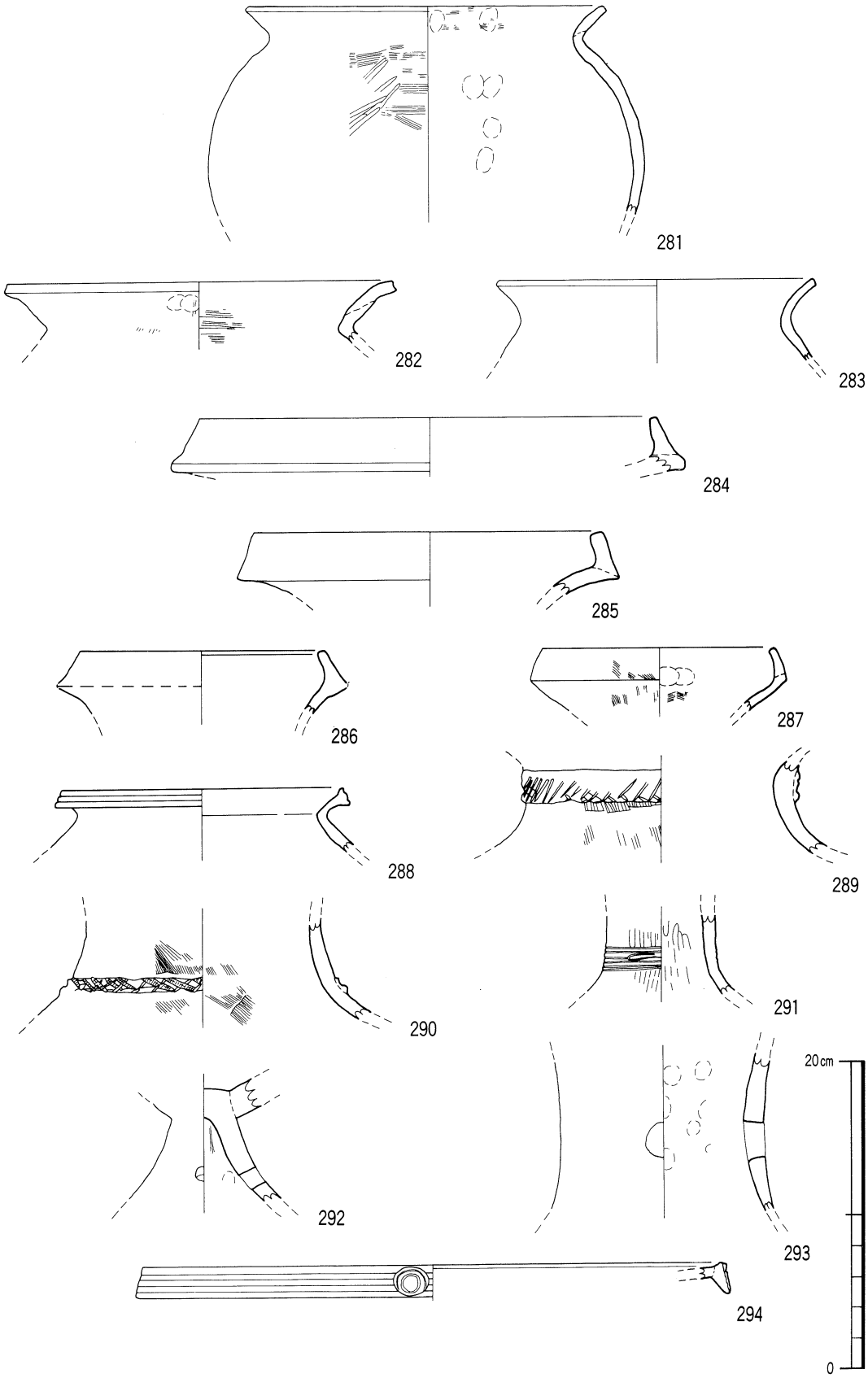
ＳＸ13（第７・44図）

調査区東端の中央部、Ｆ10・Ｆ11区に位置する。ＳＸ12を切り、調査区外に続く。ＳＸ12同様、Ⅴ層上面から掘り込まれていた可能性が高い。検出面における平面形は不整隅丸長方形で、長軸長3.2m、短軸長1.6mを測る。埋土は、３～５cm大の川原石を多量に含む暗青灰色シルト質土である。遺物は土師器甕、須恵器大型直口壺、坏身、高坏が出土した。直口壺は底部を欠き、遺構の底から破砕状態で出土しており、本遺構の性格を考える上で興味深い遺物の出土状況を示している。

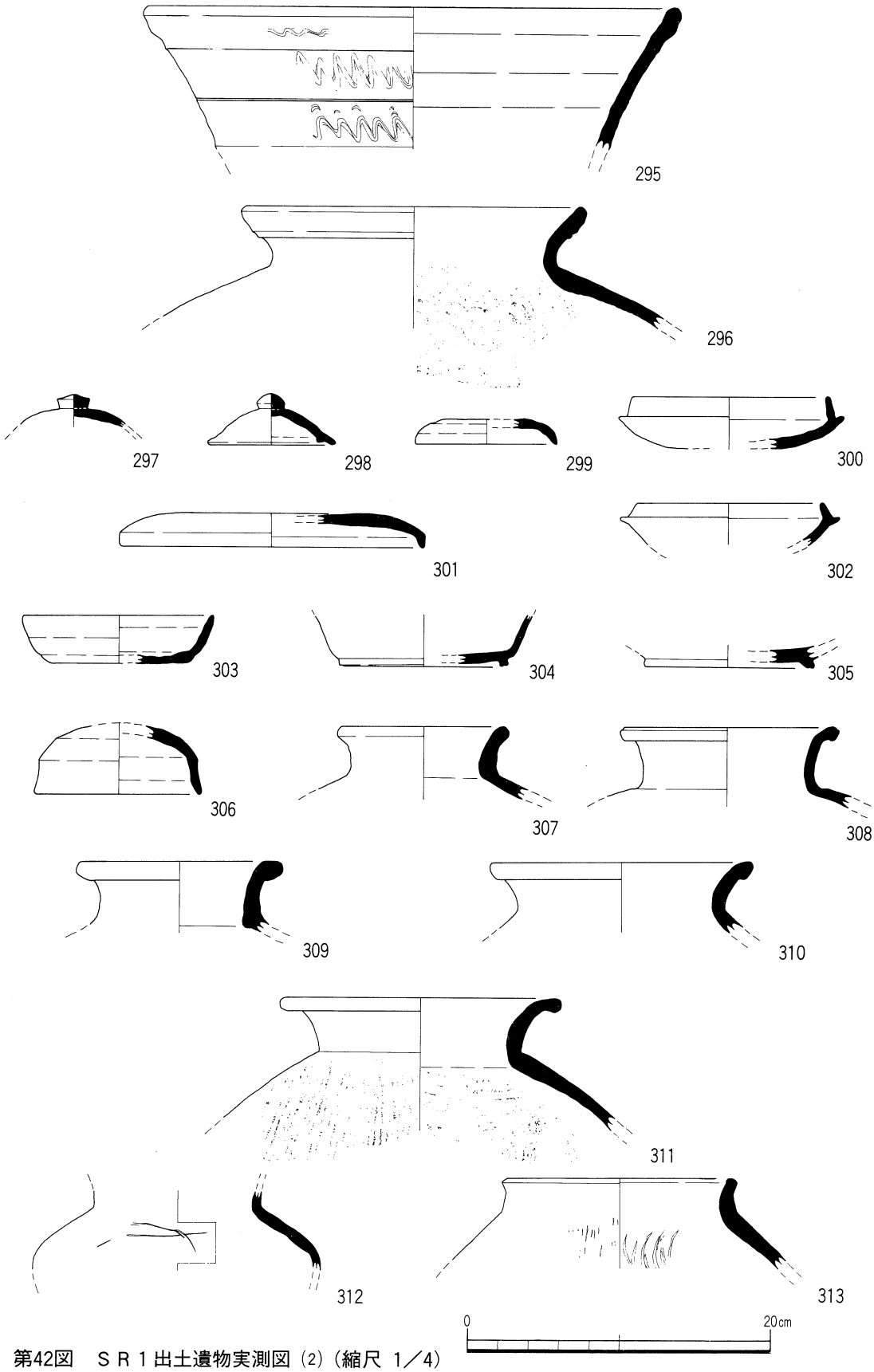
出土遺物（第45図　図版17）

324は土師器の甕の口縁部片である。325～327は須恵器である。325は底部を欠くが、遺存の良い大型品である。口縁部は短く内傾気味に直立し、端部は丸くおさめる。胴部上半部に最大径をもち、やや丸みをもちながら底部へと続く。調整は口縁部内外面が丁寧なナデ、胴部外面はカキ目の後タタキである。胴部下半にはカキ目は少なく、タタキが顕著に認められる。内面には同心円状のあて具痕跡が顕著に残る。326は坏身、327は短脚の高坏。

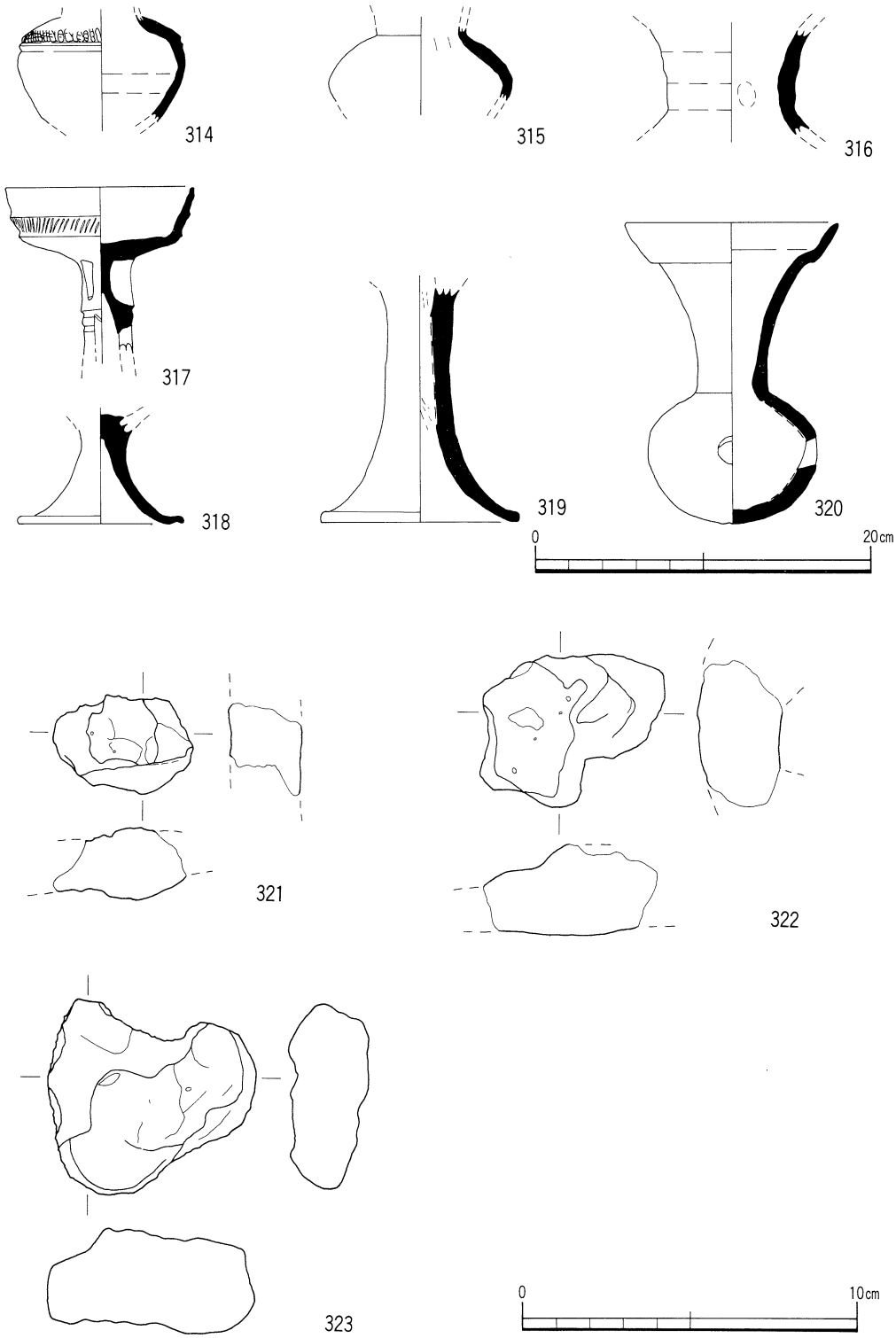
時期：遺物の形態から７世紀前半段階と考える。なお、埋土がＳＸ12と酷似することから、ＳＸ12もこの段階に位置付けておく。



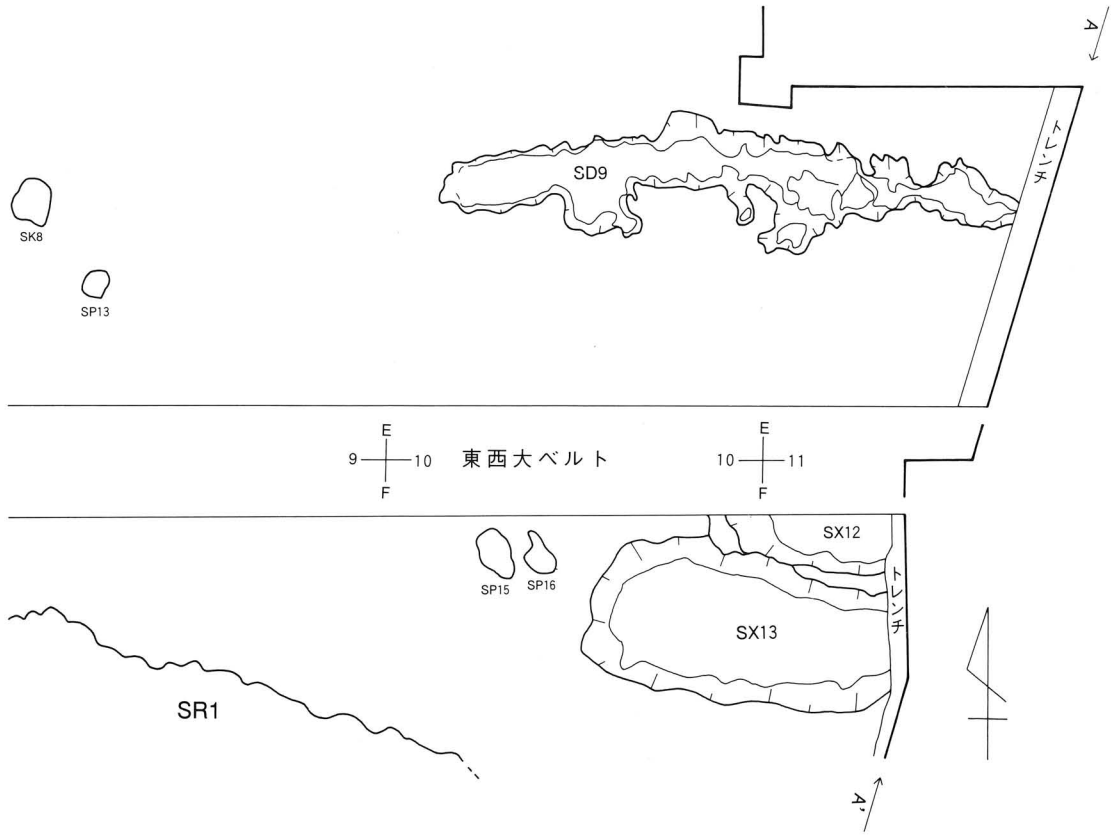
第41図　ＳＲ１出土遺物実測図（1）（縮尺 1／4）

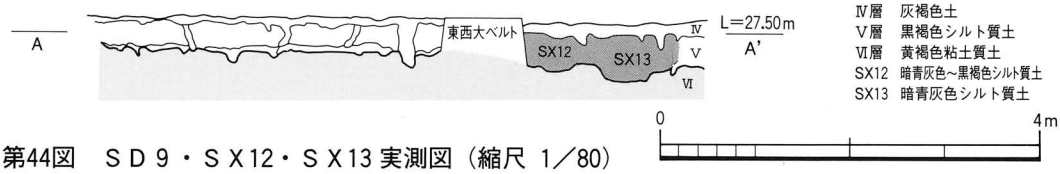


第42図　ＳＲ１出土遺物実測図（2）（縮尺 1／4）



第43図　ＳＲ１出土遺物実測図 (3)（縮尺 1／4・1／2）





第44図　ＳＤ９・ＳＸ12・ＳＸ13 実測図（縮尺 1／80）

３．古代～中世の遺構と遺物

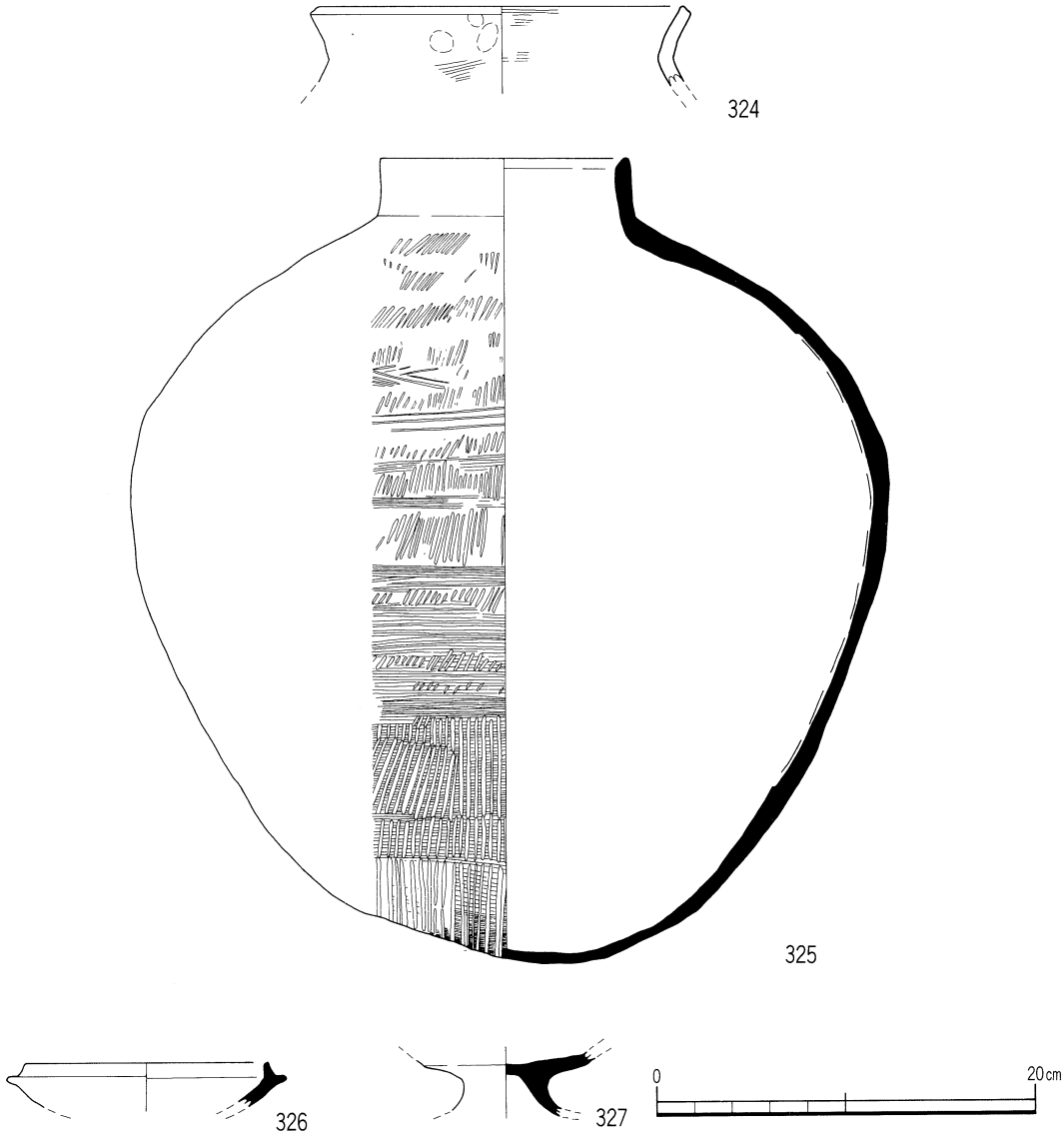
該期の遺構はＳＤ11、１号掘立、ＳＫ１～６、ＳＤ３～８である。１号掘立は第４遺構面、他は第２遺構面で検出された。

ＳＤ11（第７・46図　図版８）

調査区西部に位置し、南北方向にはしる溝である。調査区中央部のＦ５・Ｆ６・Ｇ５・Ｇ６区でＳＲ１と合流する。溝幅は、1.4～5.6mと一定しておらず、深さは20～50cmを測る。埋土は淡灰褐色の砂礫土である。埋土には１cm～拳・人頭大の河原石が多くあり、特に上層に集中していた。出土遺物は、土師器・須恵器・瓦器・鉄器である。土器の多くは細片である。注目すべき遺物に、硬玉製の丁字頭勾玉がある。これはＥ４区の東西大ベルト近くの遺構床面直上で確認した。また、Ｄ４区埋土中から出土した権状石製品も注目すべき遺物である。いずれも近接して土器は出土していない。

出土遺物（第47～49図　図版18）

土師器（336・338・339・341）　336は円盤高台がつく坏である。底外面には回転ヘラ切り痕がみられる。338・341は皿である。338は口径値12.8cm、底径値9.4cm、器高1.6cmを測る。磨滅のため底外



第45図　ＳＸ13出土遺物実測図（縮尺 1／4）

面の観察は困難である。口縁部周辺に横ナデ調整を施したため、口縁部がゆるやかに外反する。341は口径値８㎝の小型品である。外底面には回転糸切り痕がみられる。339は坏である。口径値12.7㎝、底径値６㎝、器高４㎝である。胴下半がわずかに内湾し、口縁部が外反する。比較的厚手のつくりで、底外面には回転ヘラ切り痕がみられる。

須恵器（328～335・337・342）　甕、壺、坏身、鉢がある。これらは主として古代に時期比定されるものである。343は中世須恵器である。343は亀山焼きの大壺。「く」の字形に強く折り曲げた口縁部をもち、端部は横ナデにより凹む。胴上半部外面には格子目叩き、内面には丁寧なナデ調整が施される。

瓦器（340）　胴部上半が屈曲して外面には弱い稜がみられる。内面には丁寧な横方向のミガキがみられる。

勾玉（344）　頭部に放射状の線刻が施された「丁字頭勾玉」である。入念に研磨され器面の仕上

がりは良好である。

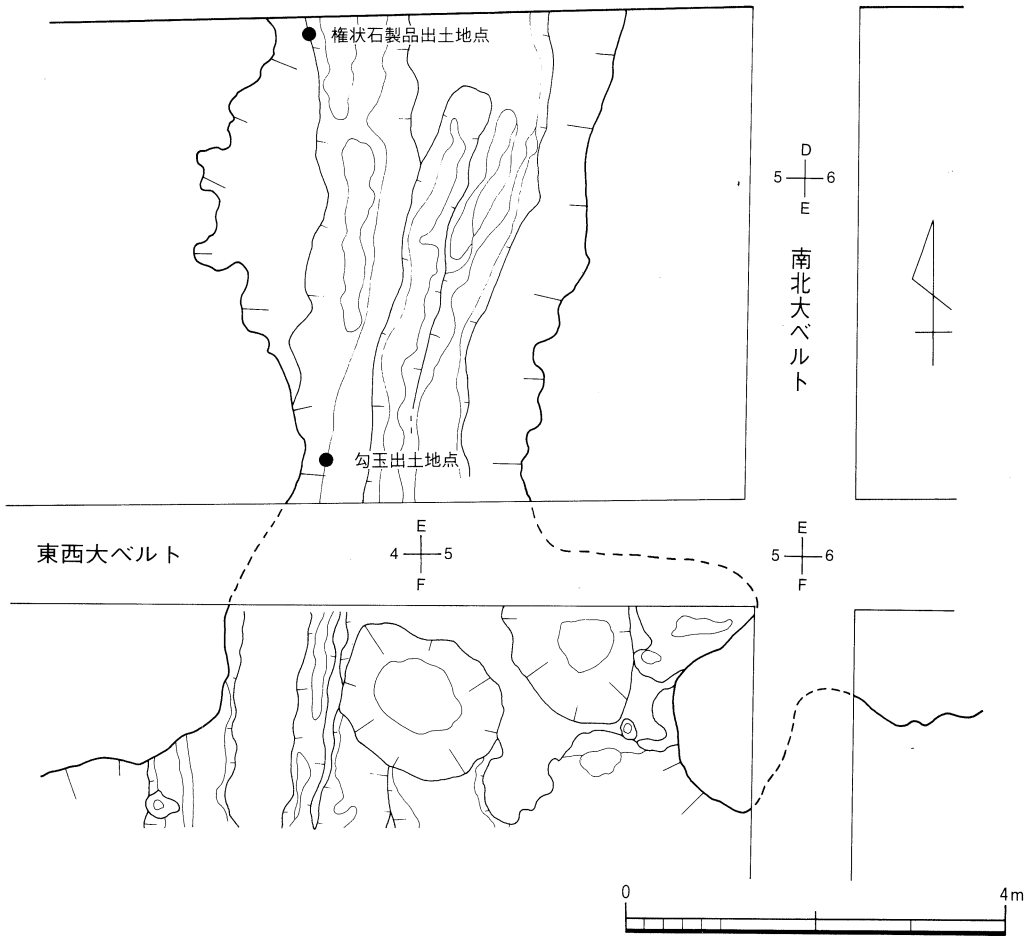
権状石製品（345）　軟質の乳白色の石を素材とする。頭部に紐通し用の鈕をもつ。身部は扁平な方柱状を呈し、器面には整形と研磨の痕跡が残る。両面に線刻がみられる。a面は縦方向に3本、b面は横方向に1本の線刻である。b面下半には整形痕が残る。紐は両面穿孔による。重量57.0g。

鉄器・鉄器関連遺物（346～358）　346・347は横断面が長方形を呈する鉄器である。347はタガネ状の鉄器か。348・349はふいごの羽口と考えられる。いずれも気泡のみられる鉄滓が付着する。350～358は鉄滓である。大きさは一定しておらず、器面には細かい気泡が多くみられる。

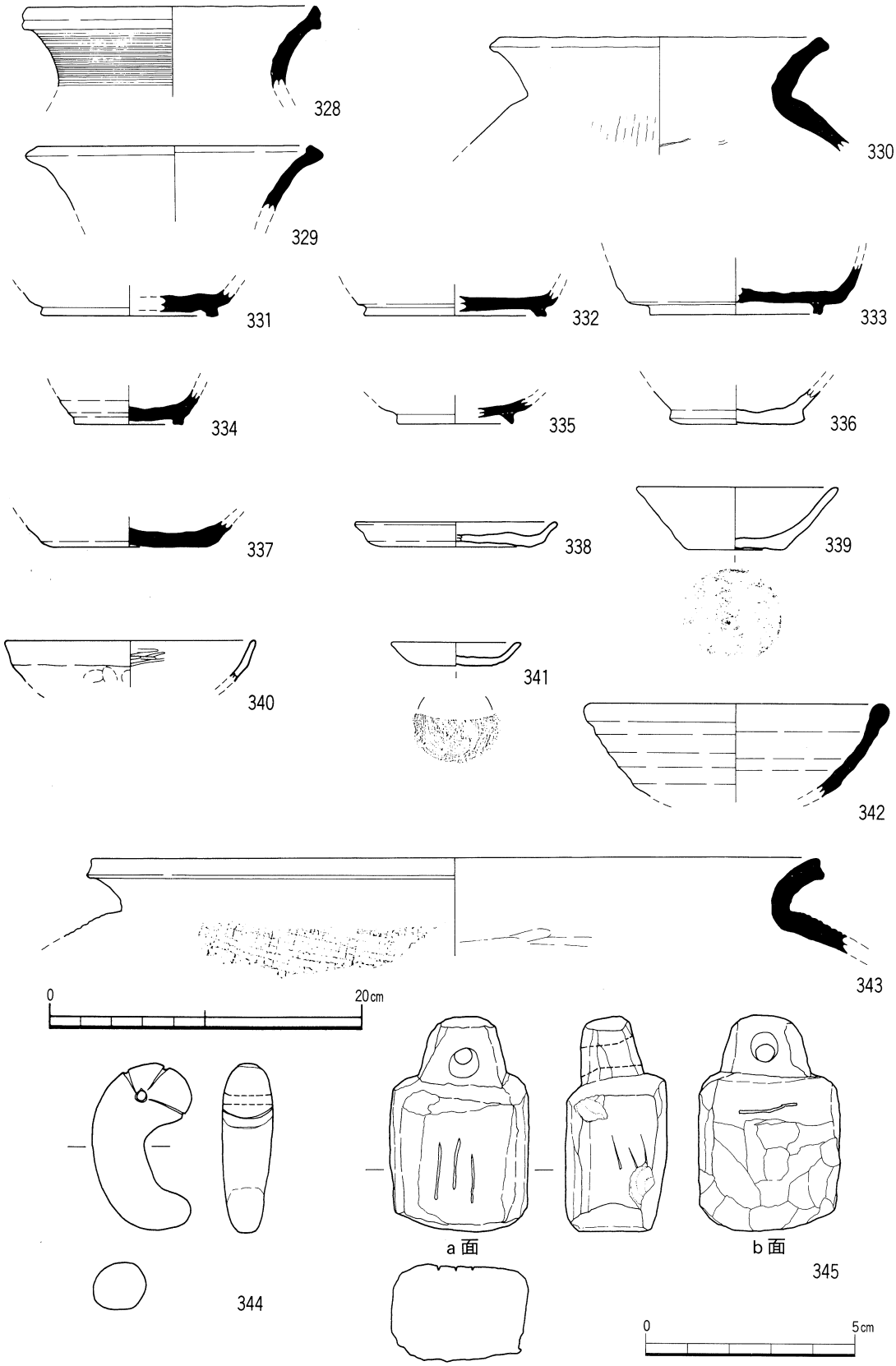
時期：出土土器から古代～中世を考えておく。完存で出土した勾玉と椎状石製品は、遺構埋没初期の混入品の可能性がある。鉄器と鉄器製作関連遺物の存在は、当地を含めた周辺で鉄器製作が実施されていたことを示している。

1号掘立（第7・50図）

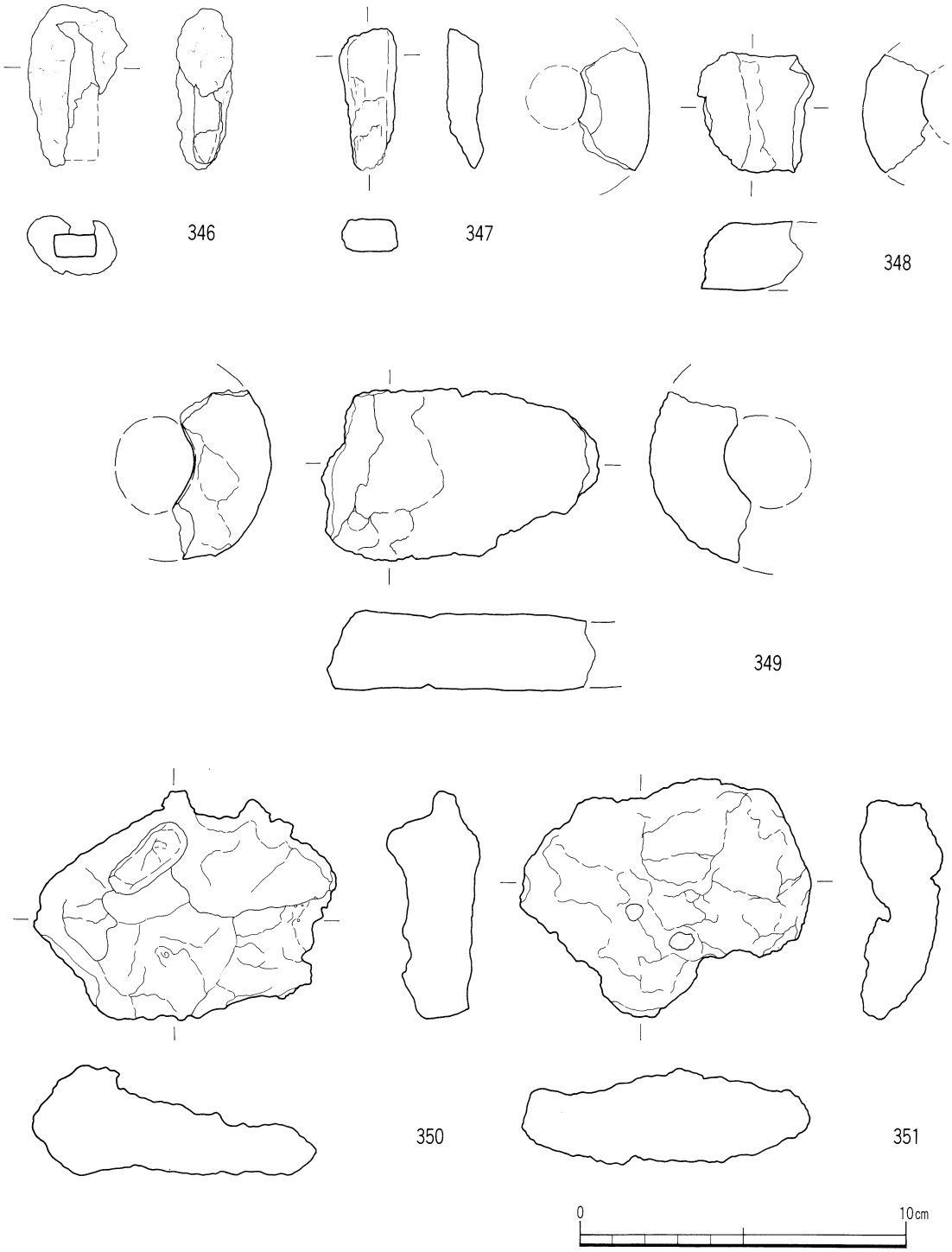
調査区北半部の中央、D区とE区に位置する。SP8・9・11・13を柱穴として構成される梁間・桁行ともに1間の建物である。梁間の長さはSP8とSP11間、SP9とSP13間が2.4m、桁行の長さはSP8とSP9間、SP11とSP13間が3.1mを測る。柱穴はすべてⅥ層上面で検出した。しかし、いずれの柱穴も現存で深さ10cm前後と浅いことから、本来はⅤ層上面から掘り込まれた可能性が高い。



第46図　SD11実測図（縮尺 1／80）



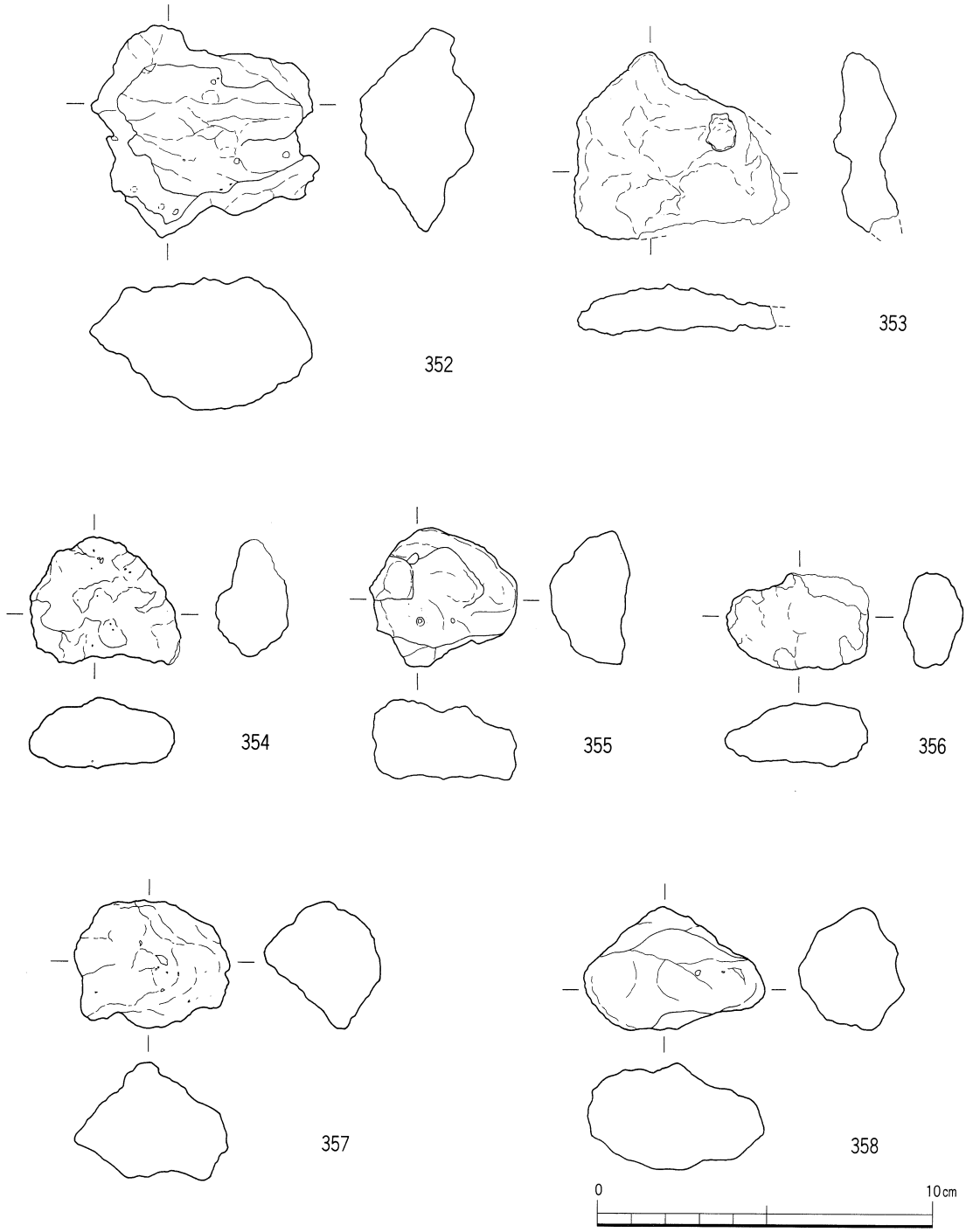
第47図　ＳＤ11 出土遺物実測図 (1)（縮尺 1／4・2／3）



第48図　ＳＤ11 出土遺物実測図 (2)（縮尺 1／2）

柱痕跡は確認できなかった。埋土は炭化物の小片が混じる褐色土である。出土遺物はない。

時期：ＳＸ９を切ることから古墳時代後期以降を上限として設定できる。ここでは建物の規模と柱穴埋土から中世に比定しておきたい。



第49図　ＳＤ11 出土遺物実測図 (3)（縮尺 1／2）

ＳＫ１（第51・53図）

調査区北東部の中央、Ｄ７区に位置し、主軸は東西方向である。平面形は隅丸の長方形で、検出面での長軸長0.7m、短軸長0.6mを測る。埋土は、１cm大の円礫を含む灰褐色土を基本とする。検出面での深さは10cmと浅く、遺構の遺存は悪い。遺物は土師器の坏があるが細片が多い。

出土遺物（第53図）　359は皿であろう。底外面には回転糸切り離し痕がみられる。

ＳＫ２（第51図）

調査区北東部の中央、ＳＫ１の東に位置する。主軸は南北方向であり、ＳＫ１と直交する位置にある。平面形は隅丸長方形で、検出面では長軸長1.0m、短軸長0.6mを測る。埋土は、１cm大の円礫をわずかに含む灰褐色土を基本とする。床はほぼ水平である。検出面での深さは20cm前後を測る。遺物は、床面直上と床から10cm程度遊離して土師器片・中～大型の角礫が出土している。大型の角礫は、土坑西側で掘りかたの傾斜に沿う状態で出土した。遺物は土師器の砕片で、図化できない。

ＳＫ３（第51図　図版９）

調査区北東部の中央、ＳＫ２の東側に位置する。主軸は東西方向であり、ＳＫ２と直交する位置にある。平面形は隅丸長方形を呈し、検出面では長軸長0.5m、短軸長0.4mを測る。埋土は、円礫をわずかに含む灰褐色土を基本とする。横断面形は浅い皿状を呈する。検出面での深さは６cmを測る。遺物は土師器の坏がある。

出土遺物（第53図）　360は坏である。比較的厚手のつくりである。口縁部周辺に横ナデ調整を施すために口縁部が外反する。

ＳＫ４（第51図　図版９）

調査区北東部の中央、ＳＫ３の南側に位置する。主軸は北東～南西方向である。平面形は不整形を呈している。埋土は灰褐色土であり、検出面での深さは８cmである。遺物は土師器の坏がある。

出土遺物（第53図）　361は坏である。やや厚手のつくり。外底面には回転糸切り離し痕がみられる。

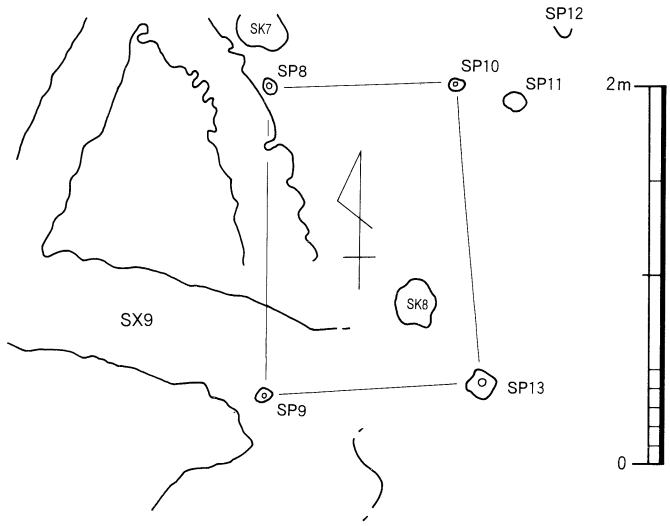
ＳＫ５（第52図　図版９）

調査区北東部、Ｄ９区に位置する。平面形は不整円形状を呈し、整ってはいない。埋土は灰褐色土であり、検出面での深さは10cmである。遺物は出土していない。

ＳＫ６（第52図　図版９）

調査区北東部、Ｅ９区に位置する。主軸はほぼ東西方向である。平面形は隅丸長方形を呈し、埋土は灰褐色土である。検出面での深さは10cmである。遺物の出土はない。

時期：ＳＫ１～６は出土遺物と検出面、そして土坑に切り合いがないことから中世とし、同時期に存在していたと理解しておきたい。



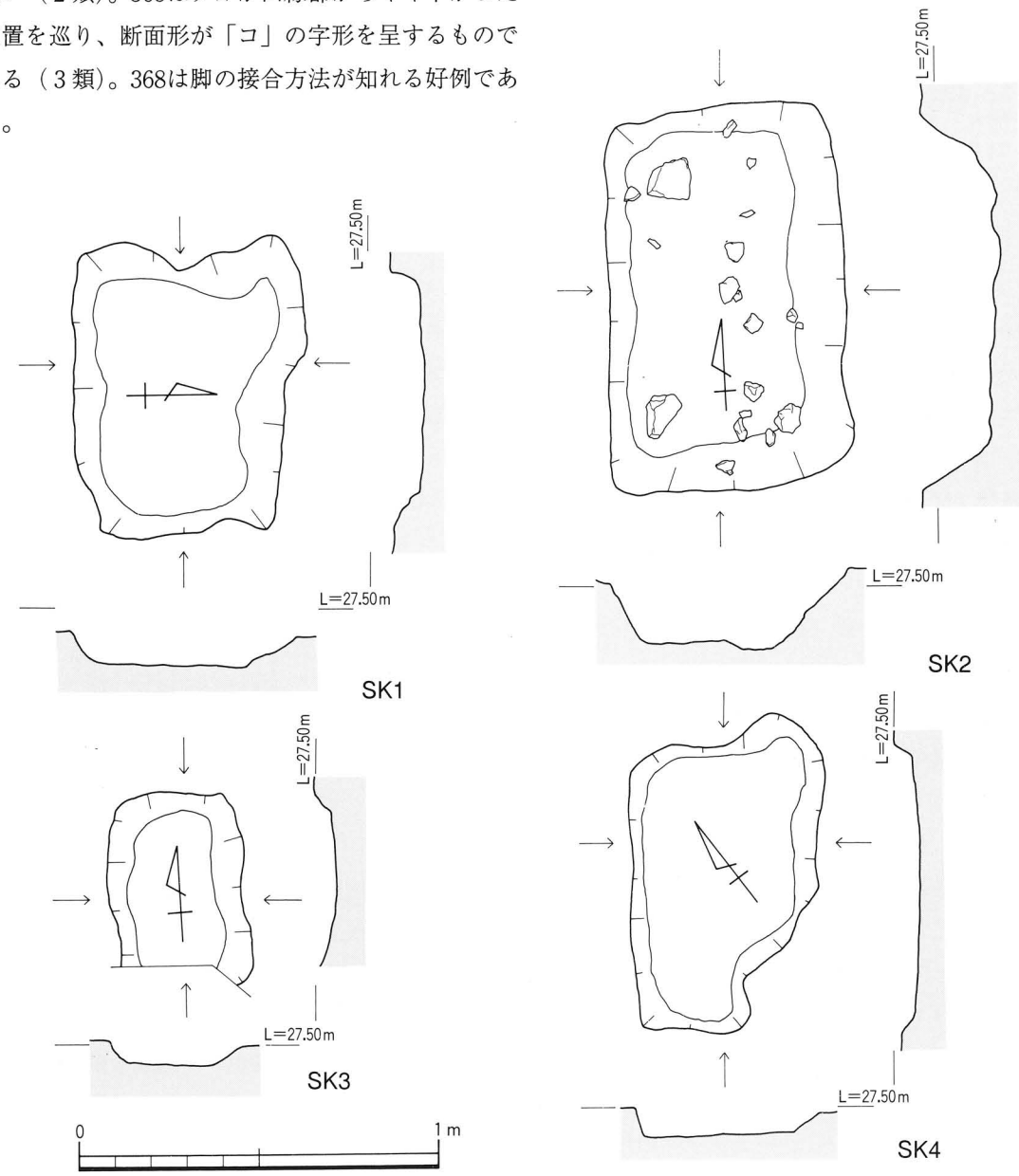
第50図　１号掘立実測図（縮尺 1／40）

ＳＤ３（第54図　図版10）

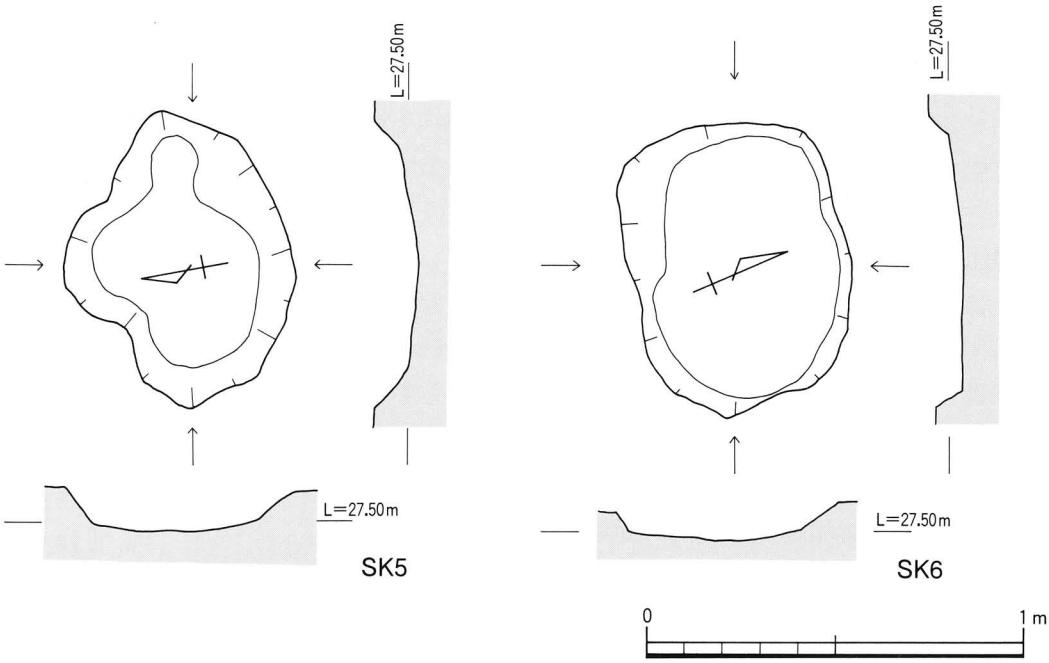
調査区東端部、ＳＤ8の西に位置し、南北方向にはしる溝である。溝の北端は調査区外へ続き、南端はＳＤ６と合流する。溝幅は0.4～1.4ｍ、深さは現存で30㎝を測る。埋土は暗青灰色粘質土である。拳大の河原石が局部的に存在する。底の北端と南端の比高差は10㎝で、ゆるやかに傾斜する。遺物は土師器の三足付き羽釜、瓦質土器の三足付き羽釜がある。

出土遺物（第55図）

瓦質土器（362～368）　362～367は瓦質土器の三足付き羽釜の口縁部である。タガの巡る部位と断面形から３種に分けられる。362～364・366はタガが口縁部から下がった位置に巡り、断面形は「コ」の字形を呈するものである（１類）。367はタガが口縁部から下がった位置に巡り、断面形が三角形に近い（２類）。365はタガが口縁部からやや下がった位置を巡り、断面形が「コ」の字形を呈するものである（３類）。368は脚の接合方法が知れる好例である。



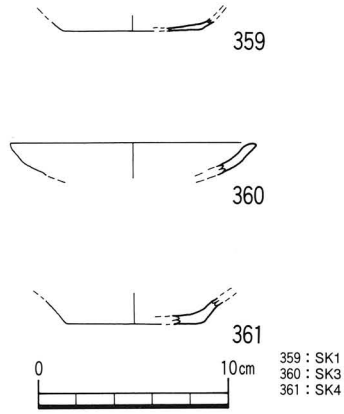
第51図　ＳＫ実測図（1）（縮尺 1／20）



第52図　ＳＫ実測図 (2)（縮尺 1／20）

土師器（369～373）　369～373は土師器の三足付き羽釜の脚である。369～370は脚の接合方法が知れる資料である。胴部に粘土板を貼り付け脚柱部分を絞って成形し、指押さえにより細かな整形を施す。371～373は脚片である。

時期：後述するＳＤ８と合流することと瓦質土器にみられるタガの位置から、14世紀前半に比定しておきたい。



第53図　ＳＫ出土遺物実測図（縮尺 1／4）

ＳＤ４～ＳＤ７（第５図　図版８）

調査区東半部に位置し、東西方向にはしる溝である。全てが同時併存していたとは考え難い。なお、これらの溝の西端は、ＳＲ１と切り合い関係にあったが、調査では判然としなかった。

ＳＤ８（第54図　図版10）

調査区東端部、ＳＤ３の東に位置する。ＳＤ３同様、北端は調査区外へ続き、南端はＳＤ６と切り合い関係にある。新旧関係は確認できなかった。溝幅は1.0～1.2m、深さは現存で20cmを測る。埋土はＳＤ３と同じである。ＳＤ３との合流地点で列をなす拳大～人頭大の河原石を検出した。一部は石を積み上げていた。溝底の北端と南端の比高差は15cmを測る。ＳＤ３～８のうち、南北方向のＳＤ３とＳＤ８は同時期に機能したと考えられる。合流地点で検出された河原石群を、小規模な堰とするならば、本遺構は小規模な水路となる。遺物は土師器の坏、瓦質土器の三足付き羽釜、東播系須恵器こね鉢、鉄器がある。

出土遺物（第56図　図版19）

土師器（374）　坏の底部である。底径値5.8cm、外底面には回転糸切り離し痕の上に板目状圧痕（簀の子状圧痕）が残る。口縁部～胴部上半が膨らみ気味で、碗に近い形態である。

瓦質土器（375・376）　三足付き羽釜。375はタガが口縁端部から下がった位置に巡らされ、タガの断面形は「コ」字形に仕上げられる。脚周辺に煤が厚く付着する。

東播系須恵器（377・378）　こね鉢である。377は口縁端部が上下に拡張される。胴部内面は磨滅している。378は口縁端部が上へ拡張される。

鉄器（379）　表面が錆で覆われている完存品である。

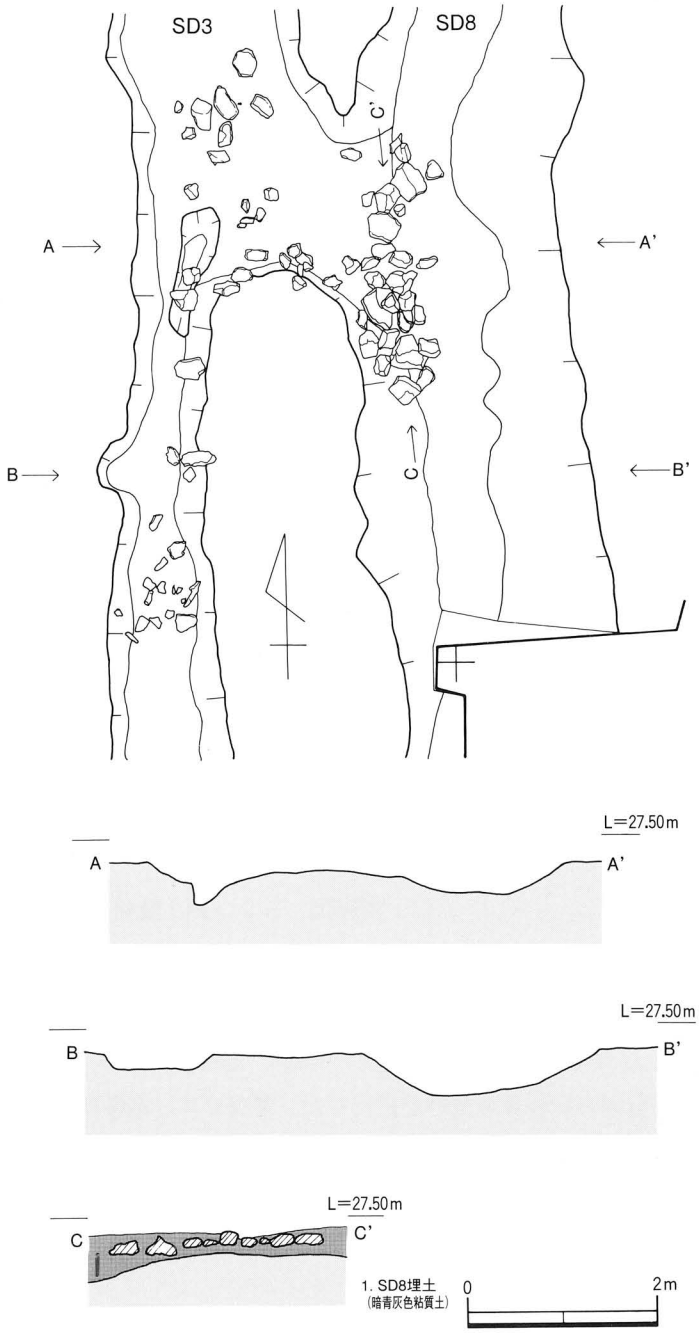
時期：土師器坏底部の糸切り技法、瓦質土器の羽釜にみられるタガの位置と断面形態、東播系須恵器こね鉢の形態等から14世紀前半に位置付けておく。

4．近世以降の遺構と遺物

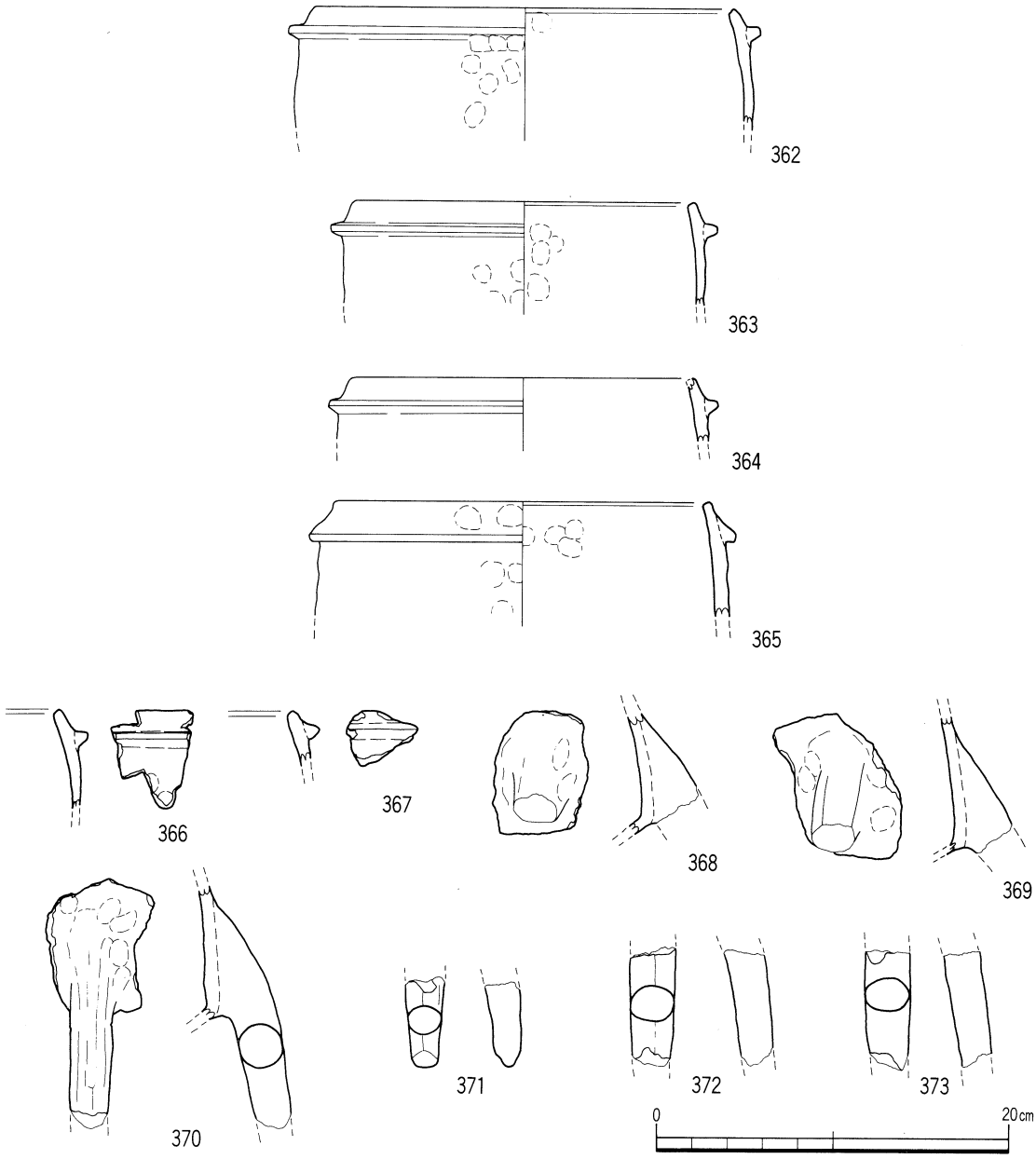
近世以降の遺構は、Ⅳ層上面で検出した（第５図）。ＳＸ１は、調査区北端中央部から南西で検出した。方形の土坑の南西部には幅狭の小溝が取り付く。調査時に方形の土坑を50cm程度掘り下げたところ、湧水が著しく認められため、危険と判断して掘り下げを中止した。埋土は、黄色・乳青色・淡燈色の粘土を基調としている。埋土の堆積状況から、二次的に埋め戻された可能性が高い。遺物は陶磁器の湯飲みが一部口縁を欠いて出土した。湧水があり、小溝が取り付くことから、溜め池のような性格を与えることができようか。

他の遺構にＳＤ1、ＳＤ2などがある。これらの遺構は遺存が良好とはいえない。加えて、遺物の出土がみられないことから、その性格を特定することは困難である。

時期：検出面と遺物から近世以降に比定される。



第54図　ＳＤ３・ＳＤ８実測図（縮尺 1／80）

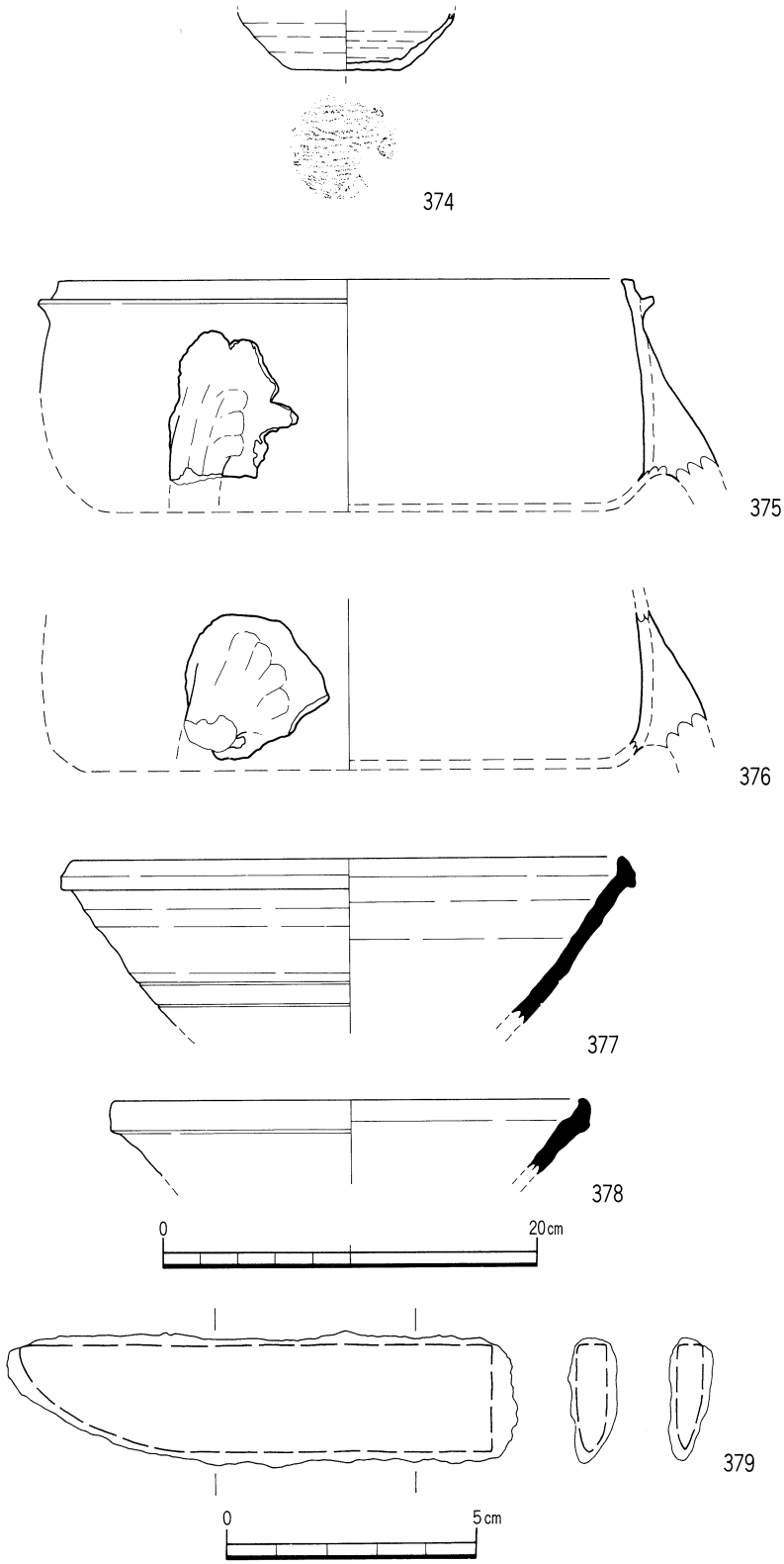


第55図　ＳＤ３出土遺物実測図（縮尺 1／4）

5．包含層出土の遺物

1）Ｖ層出土の遺物（第57～64図　図版19）

本層からは多量の遺物が出土した。調査では、本層を①～③に細分して遺物を収納した。遺物整理の段階で、土師器と須恵器の有無を基準にして、①を「上層」、②と③を「下層」とした。上層では弥生土器ともに少量の土師器と多量の須恵器が認められた。一方、下層からは多くの弥生土器が石器とともに出土した。人工層位を用いた分層発掘により、Ｖ下層が弥生後期を主体とする遺物包含層であると考えられる。



第56図　ＳＤ８出土遺物実測図（縮尺 1／4・２／３）

Ⅴ下層出土遺物（第57・58図）

本層からは弥生土器と石器が出土している。

弥生土器（380～396）　380・381は甕形土器。382～390は壺形土器。391～394は高坏形土器である。なお、391は土師器の可能性がある。394は短脚で裾が広がる形態をもつ。脚部には２段にわたって円孔が施される。395・396は器台形土器である。397は石庖丁である。緑色片岩製。円礫から剥離した剥片を素材としており、背部には打裂調整痕が認められる。刃部の研磨は両面にわたって入念におこなわれている。長方形態の磨製石庖丁の完成品であり、両端には研磨によって仕上げられた紐掛けのための抉りが作出される。398は石庖丁の打裂段階の未成品である。

Ⅴ上層出土遺物（第59～64図）

本層からは弥生土器、土師器、須恵器、石器、鉄器が出土している。弥生土器が量的に多い。

弥生土器（399～436）　399～404は甕形土器である。「く」の字状口縁部をもつ。404は貼付により口縁外面が肥厚する。405～418は壺形土器である。いずれも複合口縁部をもつ。多くが無文であるが、408は直立気味に立ち上がる二次口縁部の外面に６条の波状文が施される。419～421は鉢形土器。422～432は高坏形土器、433・434は器台形土器、435・436は支脚形土器である。なお、424は土師器の二重口縁壺の可能性がある。

土師器（437～443）　437～441は高坏である。坏部はやや内湾して立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。坏部下半に段があり、脚部は太い。裾部は外側に屈曲し、床との接地部分は狭い。坏部と脚部の接合はねじ込む形を採用しており、脚内面は丁寧なナデによって飛び出た粘土の盛り上がりを消す調整をおこなっている。442・443は甑の把手である。

須恵器（444～481）　坏蓋、坏身、壺、甕、高坏がある。

石器（482～484）　482はサヌカイト製の打製石鏃である。484は大陸系磨製石器の石器素材と考えられる。両面には自然面が大きく残置する。石庖丁の素材か。

鉄器（485～487）　485は鋤先状を呈する。486は横断面が方形を呈する棒状の製品である。487は全体が錆に覆われている器種不明の鉄器である。

２）Ⅳ層出土の遺物（第65～75図　図版19・20）

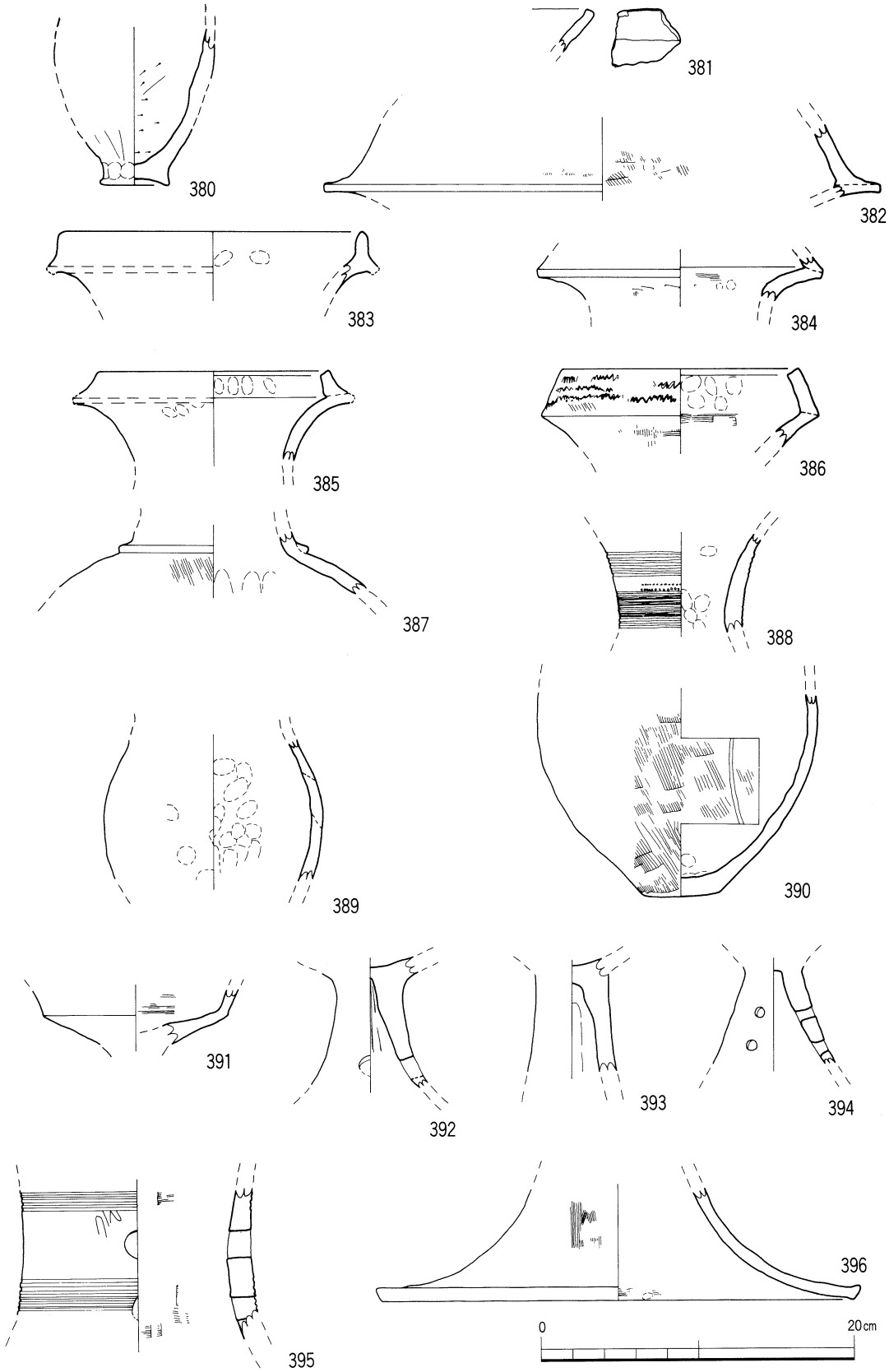
本層からは多種多量の遺物が出土した。調査では人工層位を用いて分層発掘を実施し、上層と下層に区分して遺物を取り上げた。調査当初、調査区の西半では埋土の識別が困難であったため、ＳＤ11に伴う遺物も本層として取り上げた可能性がある。

Ⅳ下層出土遺物（第65～69図）

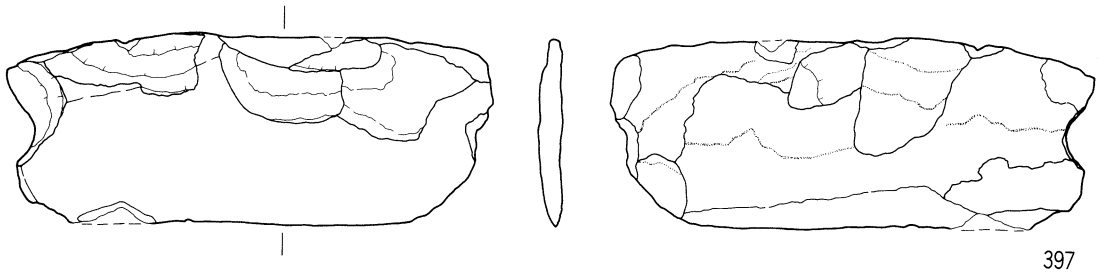
弥生土器・土師器・須恵器・瓦・緑釉陶器・瓦器・石器・鉄器等がある。

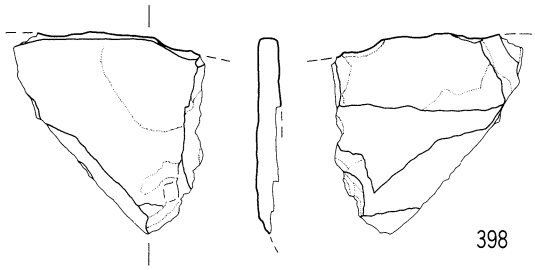
弥生土器（488～494）　488は甕形土器。小さい平底。内底面が凹む。489～492は壺形土器。489は頸部片で、斜格子目文の刻みをもつ突帯がみられる。490～492は平底の底部片。493は鉢形土器の底部で、くびれの上げ底をもつ。小型の甕形土器の可能性がある。494は高坏形土器。柱部が円柱状で太く中実の脚部片である。

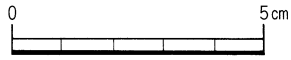
土師器（495～497・525～533）　495～497は古墳時代から古代の土師器である。525～533は中世の土師器であるので、これは後述する。



第57図　Ⅴ下層出土遺物実測図（1）（縮尺 1／4）



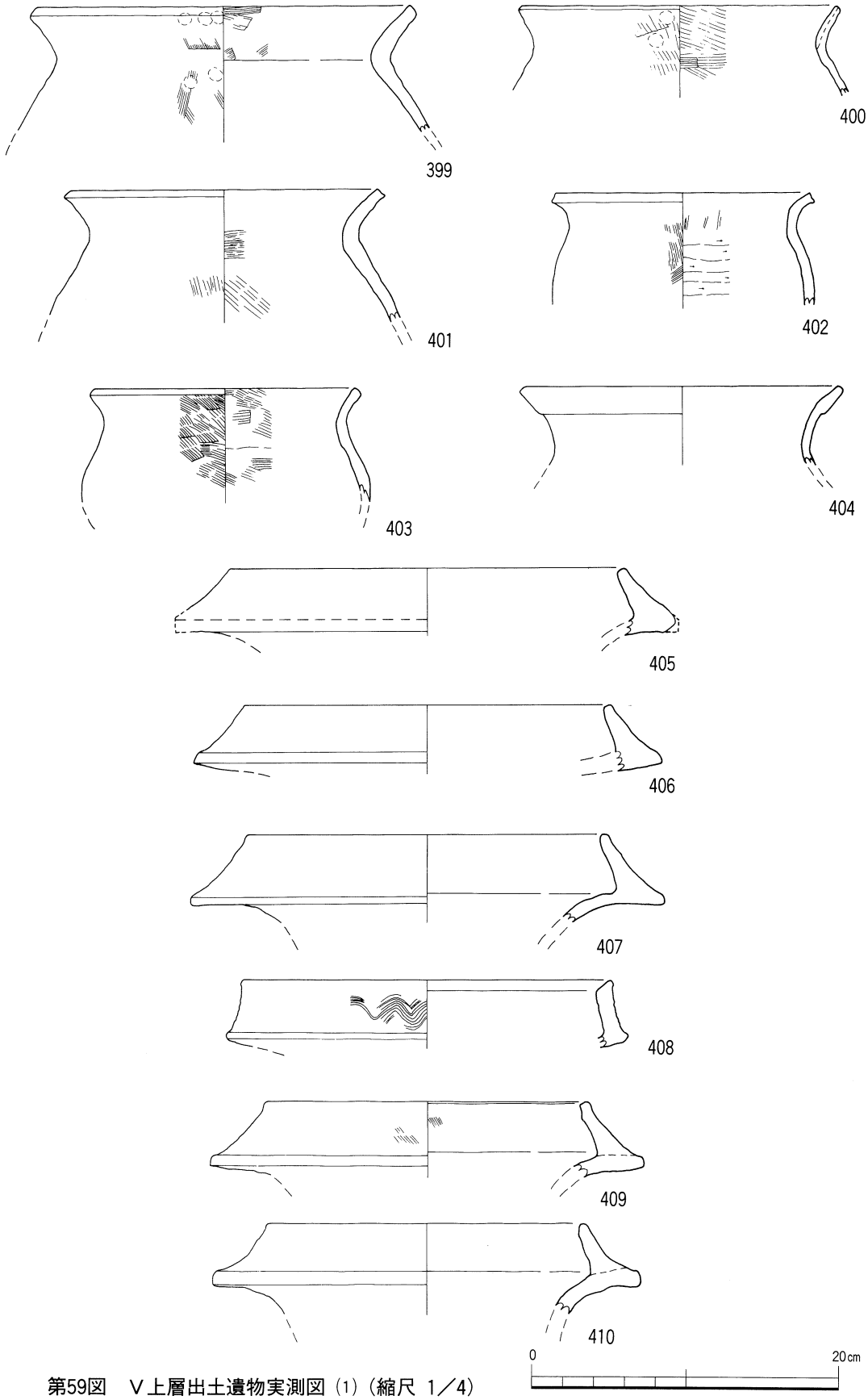




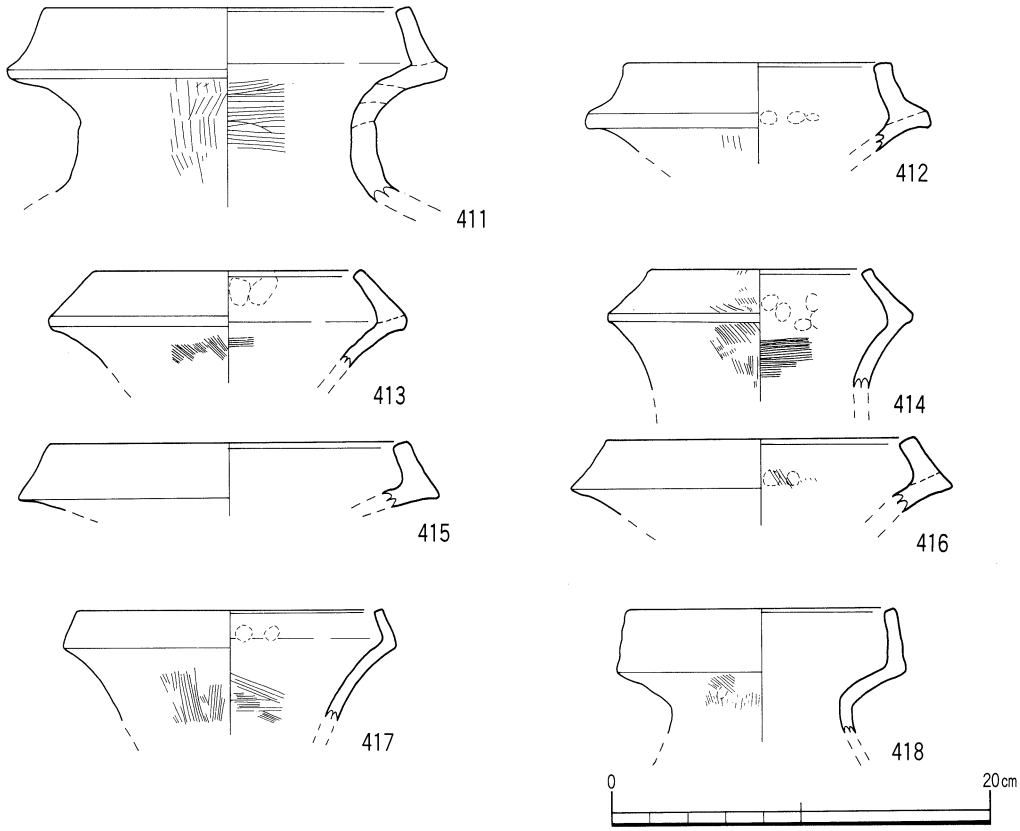
第58図　Ⅴ下層出土遺物実測図 (2) (縮尺 2／3)

496は甕形土器の口縁部。内外に稜をもち、「く」の字状に屈曲する。口縁部は直線的に外方にのび、口縁端部は尖る。497は高坏の脚部。

須恵器（498～522・537～541）　498～522は古墳時代から古代の須恵器である。537～541は中世の須恵器であるので、これらは後述する。498～500は坏蓋。498は天井部のつまみを欠く。笠形の天井部からなだらかに下がり、口縁部で屈曲する。かえりは短く口縁部より下がらない。7世紀後半。499は天井部が丸みを帯びる。口縁部は反り気味。7世紀代。500は天井部からなだらかに下がり、口縁端部は下内方に屈曲する。8世紀前半。501～504は坏身。501の立ち上がりはやや内湾し、底部は扁平。口縁端部は尖る。6世紀後半。502は口縁が直立し、受部は水平。底部は扁平である。外底面にヘラ切り痕が残る。503は口縁が内傾し、受部は内湾する。504は口縁が内傾し、受部は水平である。7世紀前半。505～511は有台坏である。いずれも貼付高台である。505は坏部がゆるやかで、底体部の境界は丸みを帯びる。高台は「ハ」の字にひらき、内側につく。8世紀初頭か。506はやや「ハ」の字にひらき、内よりに高台がつく。507は「ハ」の字にひらき、底体部より内に高台がつく。坏の口縁はゆるやかに立ち上がる。509は高台が直立し、内側につく。底体部の境界は稜をもち、坏部の口縁は直立気味である。510は底体部の境界につく。いずれも8世紀。511は高台が底体部の境界につき、「ハ」の字にひらく。8世紀後半。512～514は無蓋の高坏。いずれも長脚である。512は坏部が碗形を呈し、口縁端部は尖り気味。7～8世紀。513は坏部。口縁は直線的に立ち上がり、端部は尖り気味である。坏部外面の中位に1条の沈線文が巡る。7世紀前半頃。515・516は甕形土器。515は口縁部がゆるやかに外反し、口縁端部は面をもつ。口縁直下の外面には1条の凸線文が巡る。516は口



第59図　Ⅴ上層出土遺物実測図（1）（縮尺 1／4）



第60図　Ⅴ上層出土遺物実測図 (2)（縮尺 1／4）

縁～胴部上半部。口縁部が強く外反する。端部は玉縁状に肥厚する。7世紀代。517～521は壺形土器。517は四耳壺、あるいは三耳壺の可能性がある胴部上半部。頸胴部間のくびれに強い稜をもち、その直下に耳を貼付する。7世紀代。518・519は口縁部が強く外反する。端部は外側に肥厚し、内側が突出する。520・521は有台壺の底部。520は高台が底体部の境界につき、「ハ」の字にひらく。8世紀代。521は器壁が厚い。522は台付瓶の底部。高台は底体部の境界につき「ハ」の字にひらく。平坦接地。8～9世紀代。

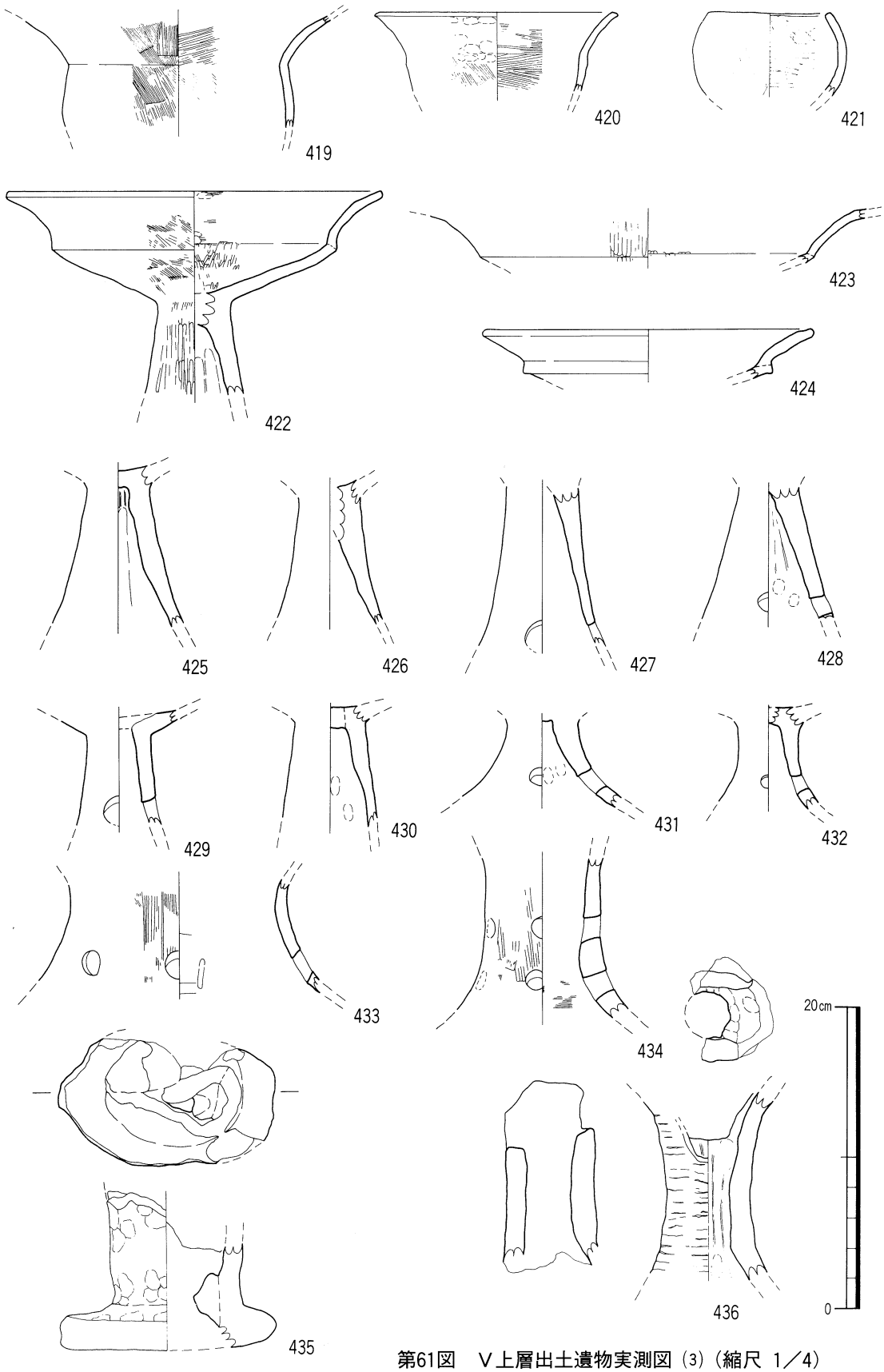
瓦（523）　平瓦。凸面にはナデ調整をおこない、凹面には布目痕が残る。凸面の側縁周辺は面取りされる。側縁部分は遺存する。

緑釉陶器（524）　碗の底部。削り出しによる円盤状高台がつく。釉薬は碗部の内外面、底部の全面に及ぶ。調整は全面にミガキが施されている。色調は薄いオリーブ色である。

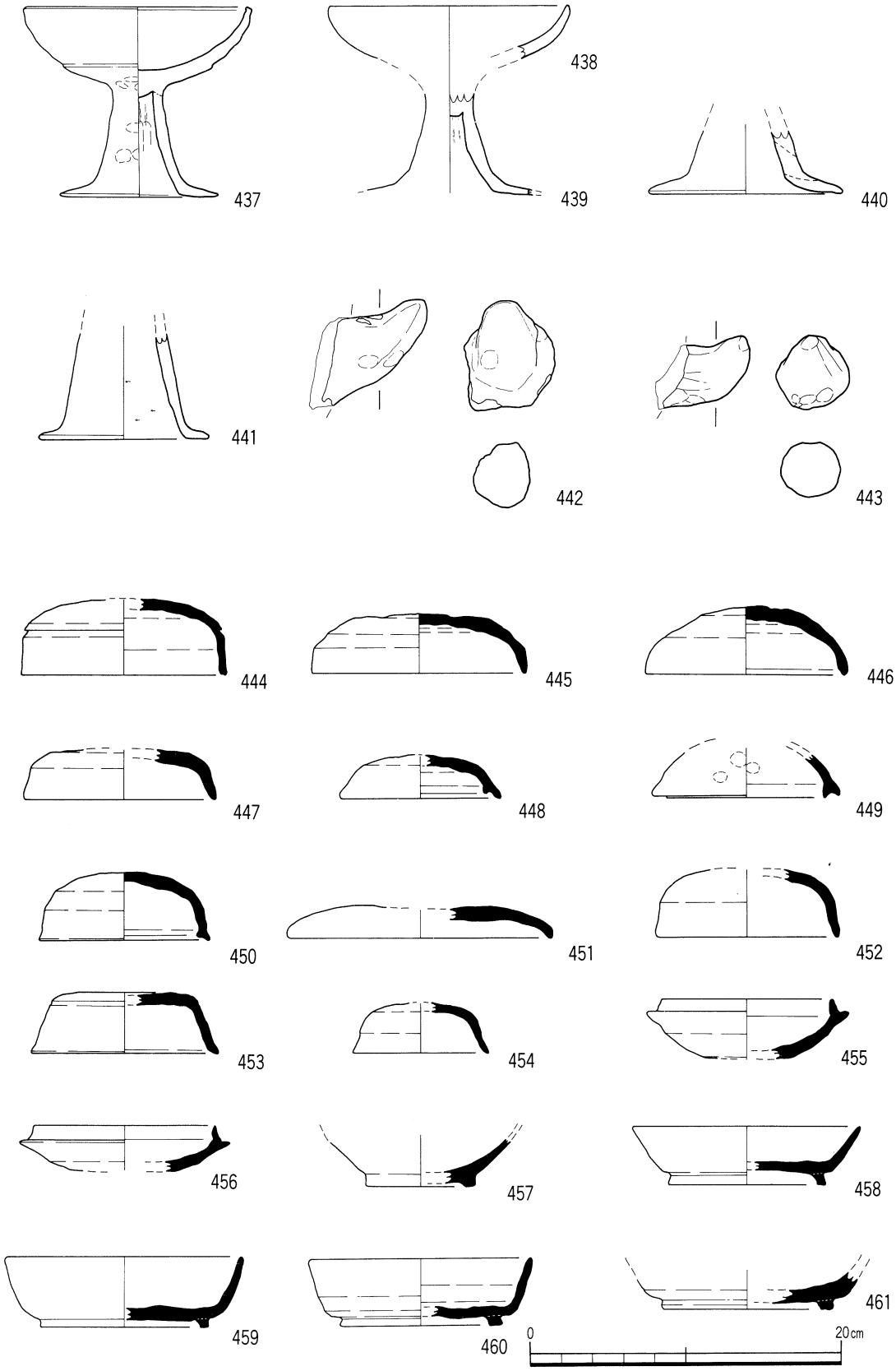
中世の土師器（525～533）　525～527は有台、528～531は無台。525は削り出しの円盤状高台である。外底面は回転ヘラ切り。10世紀。526・527は貼付の輪高台。12世紀。532・533は土師質の羽釜口縁部。532は口縁部が内湾して立ち上がる。端部には垂下した断面三角形のタガが巡る。533は口縁端部から下がった位置に断面三角形のタガが巡る。13世紀代。

瓦器（534～536）　和泉型に属する。534は碗の口縁部が内湾し、端部は丸い。535・536は貼付輪高台の底部。高台の断面が台形を呈する。和泉型Ⅲ式。13世紀前半。

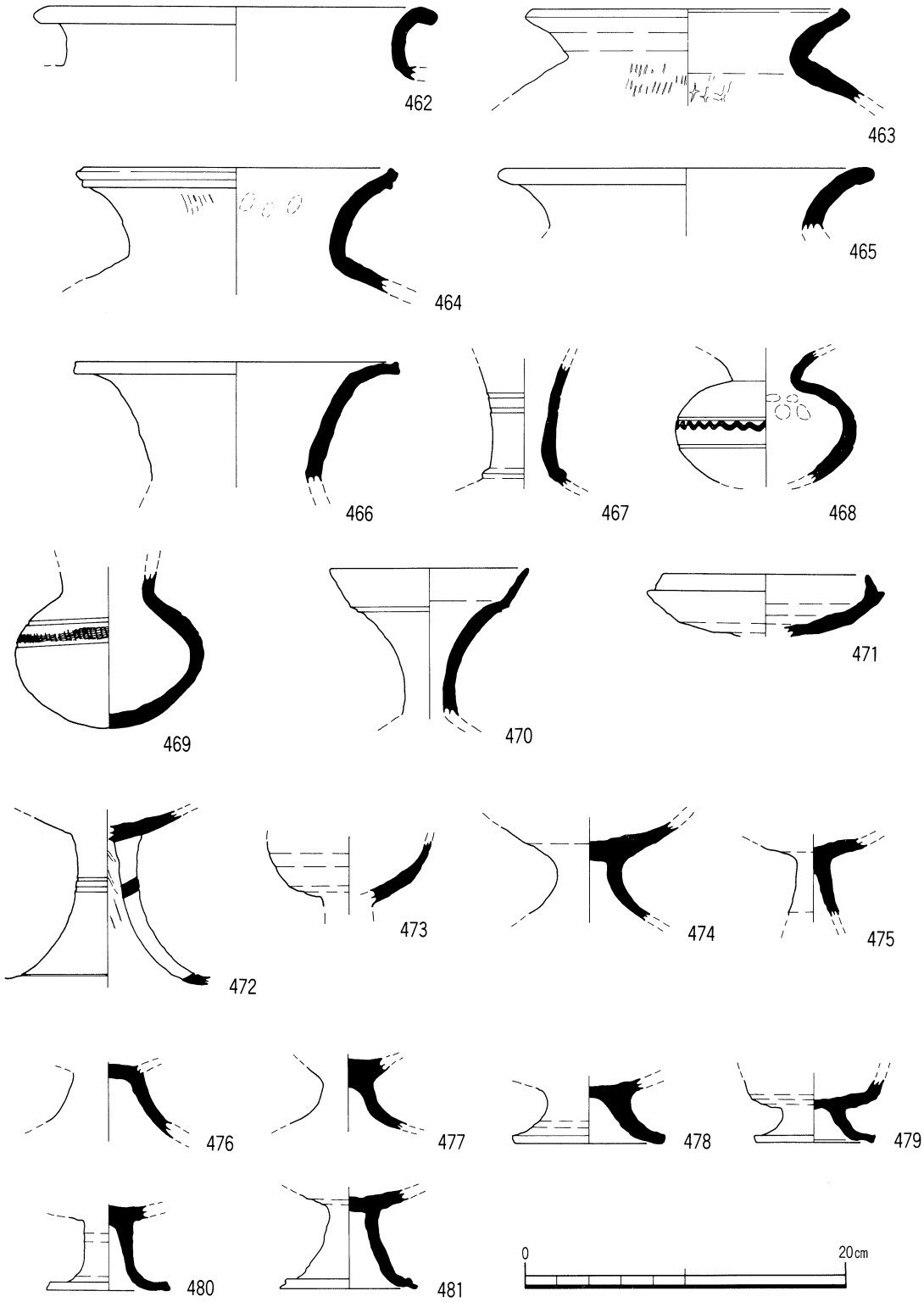
中世の須恵器（537・538）　537・538は東播系のこね鉢。538は胴部が直線的に立ち上がり、口縁端部が上下に拡張される。14世紀前半。



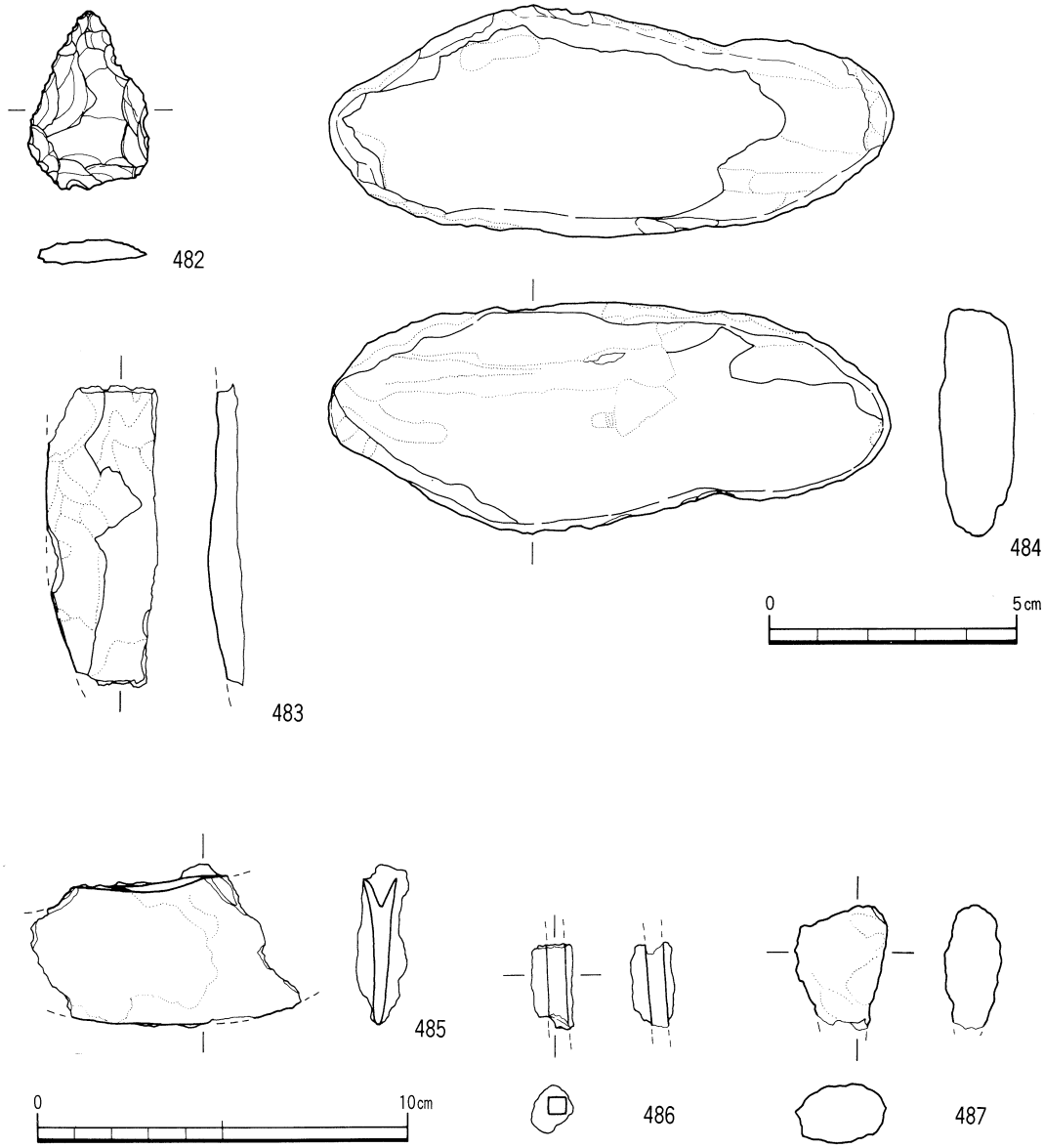
第61図　Ⅴ上層出土遺物実測図（3）（縮尺 1／4）



第62図　Ⅴ上層出土遺物実測図（4）（縮尺 1／4）



第63図　Ⅴ上層出土遺物実測図（5）（縮尺 1／4）



第64図　Ⅴ上層出土遺物実測図 (6)（縮尺 2／3・1／2）

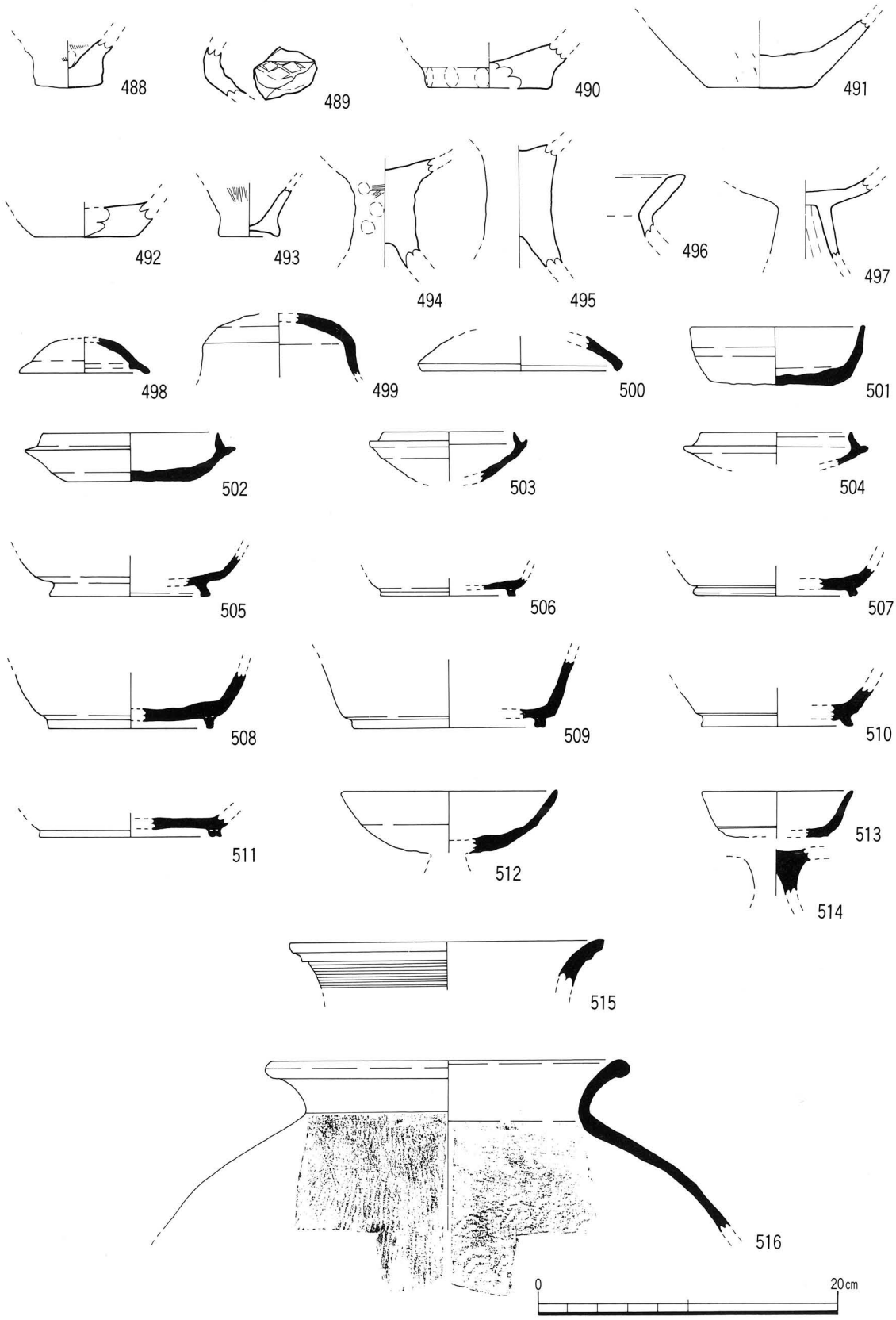
539～541は器種と所属時期が確定できないものである。

石器（542・543）　542は磨製石庖丁の刃部片。543は砥石である。

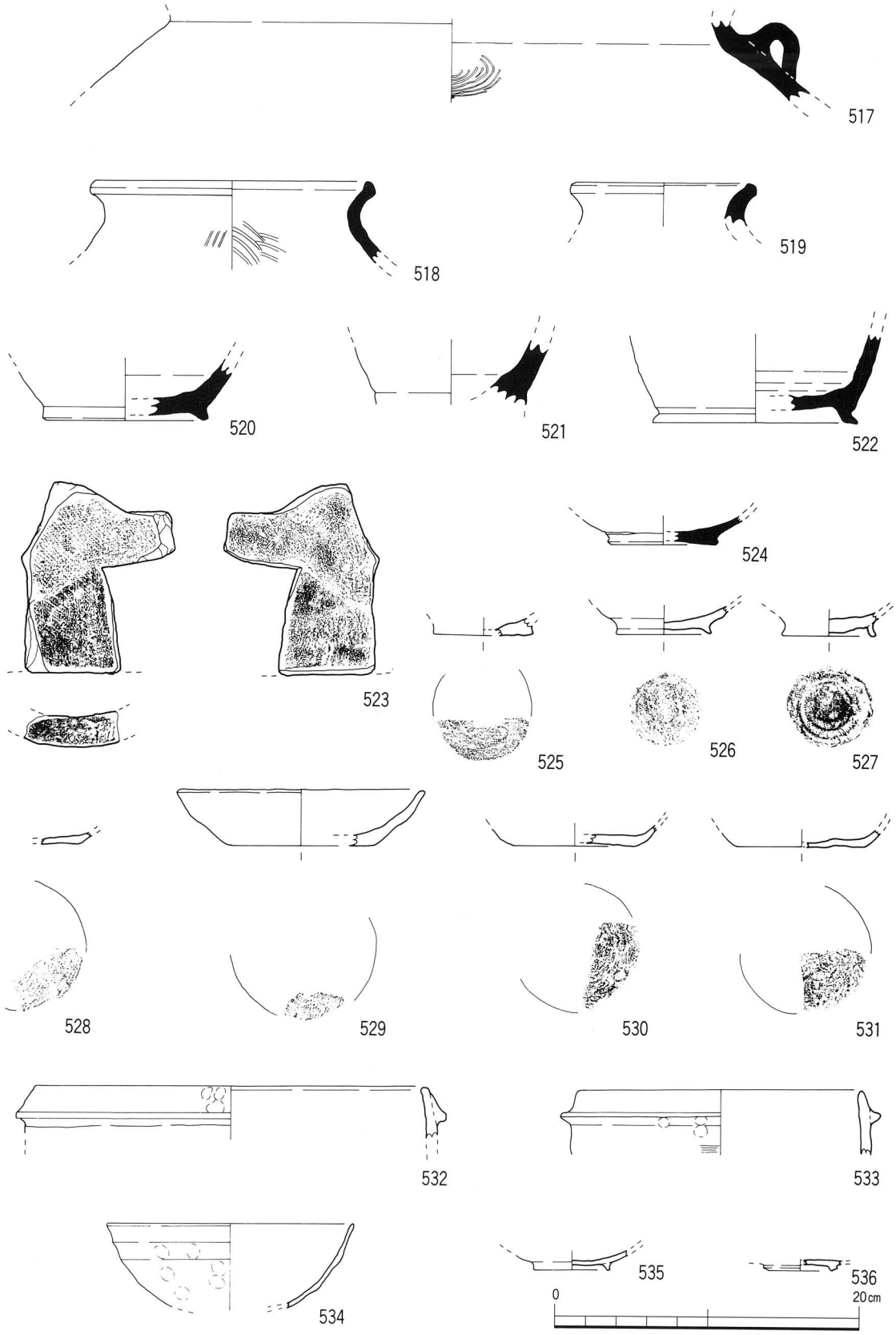
鉄器・鉄器製作関連遺物（544～555）　544～549は鉄器、550～555は鉄滓。544はタガネ状の製品である。頭部のみの遺存である。545は棒状の鉄器。546～549は器面に錆が付着し、形態不明の鉄器である。

Ⅳ上層出土遺物（第70～75図）

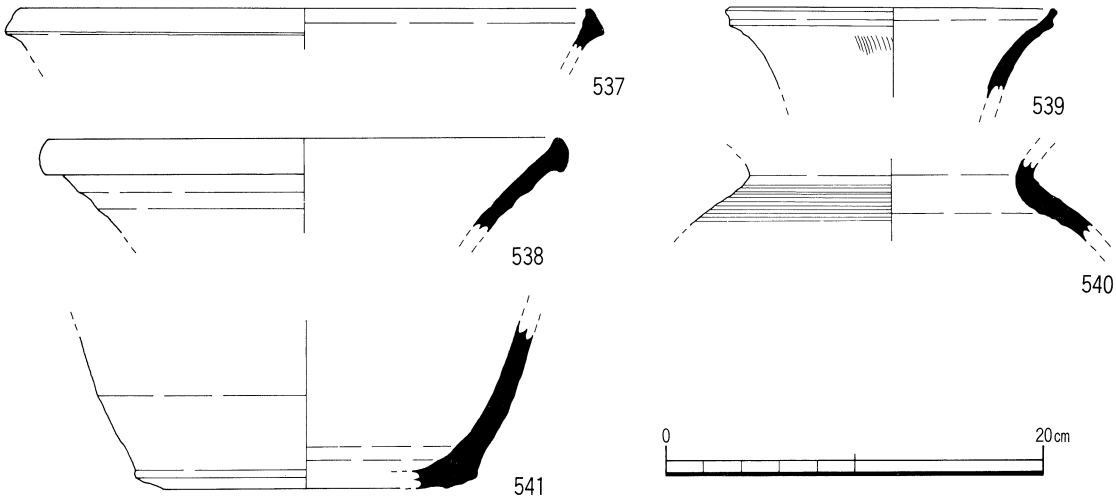
弥生土器、土師器、須恵器、瓦、灰釉陶器、緑釉陶器、瓦器、白磁、青磁、石器、鉄器等がある。白磁や青磁は主として12～13世紀に時期比定されるものである。Ⅳ下層に比して、新しい時期の資料が多くみられる。



第65図　Ⅳ下層出土遺物実測図（1）（縮尺 1／4）



第66図　Ⅳ下層出土遺物実測図（2）（縮尺 1／4）



第67図　Ⅳ下層出土遺物実測図（3）（縮尺 1／4）

弥生土器（556～561）　559・560は高坏形土器。560は坏部と脚部との接合に充填技法を用いる。

土師器（562～564・599～609）　562～564は古墳時代から古代までの土師器である。599～609は中世の土師器であるので、これは後述する。563は甑の把手である。

須恵器（565～591・617～623）　565～591は古墳時代～古代の須恵器である。565は坏蓋。天井部は丸みをもち、口縁部は垂下する。端部はナデ凹む。5世紀後半。566～568は坏身。569は高台付坏。高台は底体部の境の内につく。8世紀。570～577は高坏。572は有蓋高坏の脚部である。「ハ」の字形に外反し、端部は丸みをもつ。6世紀初頭。573・574は長脚の高坏である。6世紀後半。578は甕、あるいは器台坏部の口縁部である。6～8世紀か。579は甕の口縁部。口縁端部を内にわずかにつまみ上げている。8世紀。580は瓶の体部である。581は平瓶の頸部片。582～584は長頸壺。6世紀末～7世紀前半。587は長頸瓶である。高台は底体部の境に接して直立気味につく。588は壺あるいは瓶の底部である。高台はつかない。589～591は台付鉢。7世紀前半。592～594は平瓦。

灰釉陶器（596）　長頸壺の口縁部である。

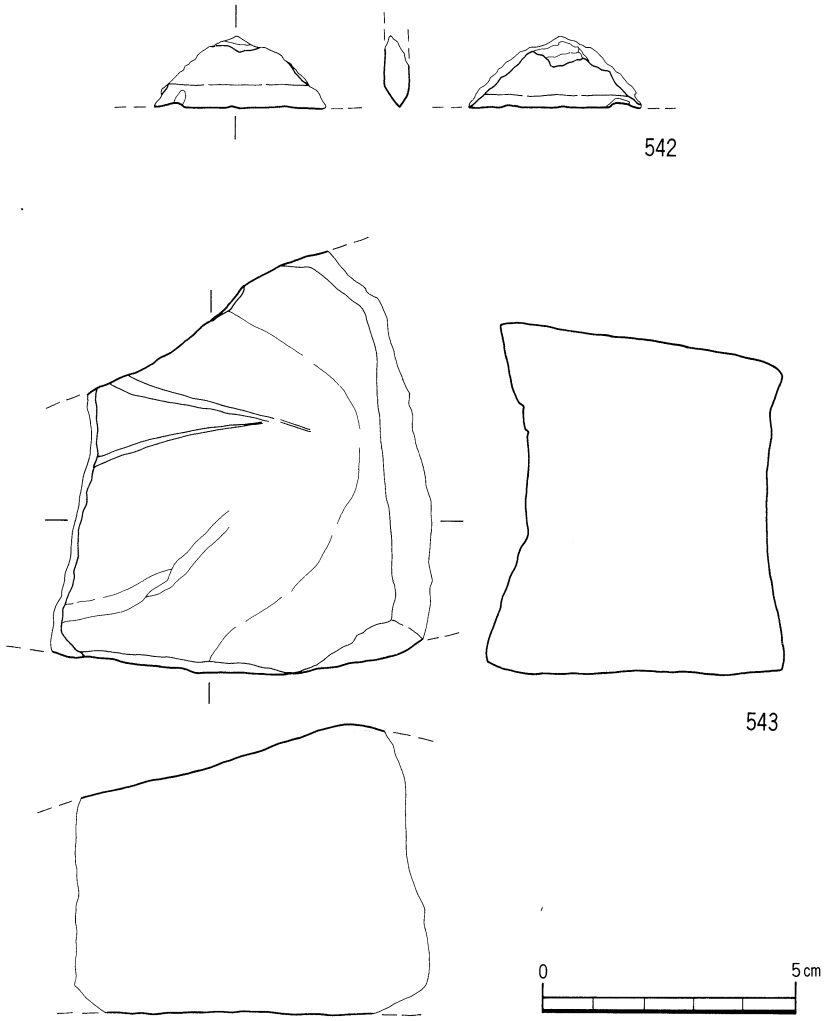
緑釉陶器（597）　円盤高台付碗である。搬入品の可能性が高い。

599～609・614は中世の土師器である。599は外底面回転ヘラ切りの坏である。600～602は外底面に回転糸切り離しがみられる。輪高台がつく坏である。12世紀。603～609は坏である。607・608は外底面に回転糸切り離しがみられる。これらの遺物は13世紀。

瓦質土器（610～613）　羽釜である。612と613は同一個体の可能性がある。

瓦器（615・616）　615は和泉型瓦器碗である。胴部上半でわずかに屈曲する。13世紀前半。

617～623は中世の須恵器である。617～622は東播系のこね鉢。口縁端部を上下に拡張し、「く」の字に近い縁帯に仕上げられる。14世紀。623は体部外面に格子のタタキがみられる。



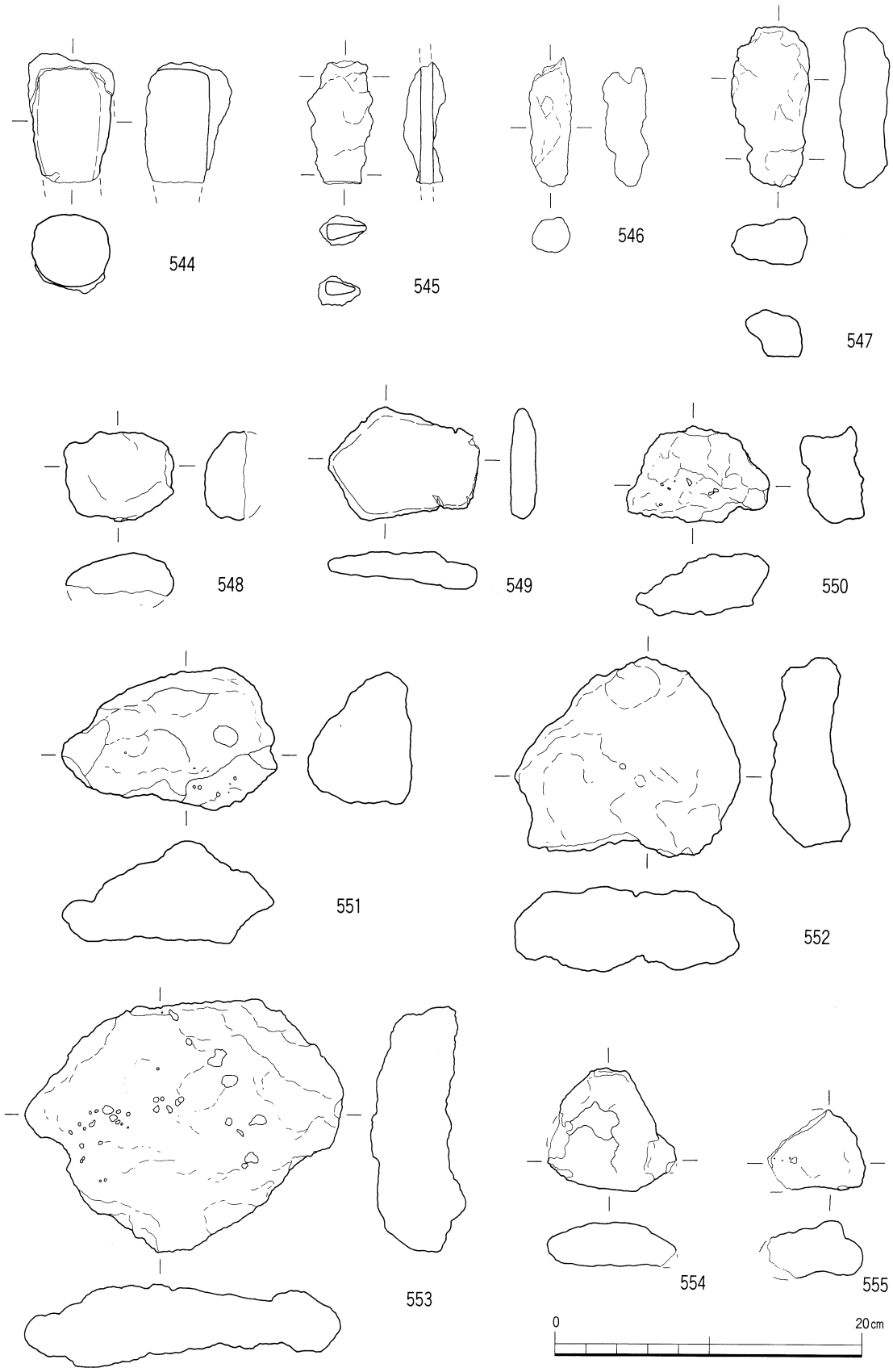
第68図　Ⅳ下層出土遺物実測図（4）（縮尺 2／3）

貿易陶磁器（624～632）　624～627は白磁の碗である。624は口縁を玉縁状に仕上げる。625・626は削り出し高台をもつ。629は高台が剥離している。628・629は龍泉窯系青磁である。628は碗。630～632は同安窯系青磁。631は削り出しによる高台がつく碗である。630・631は12世紀末～13世紀。632は皿。15世紀に位置付けられようか。

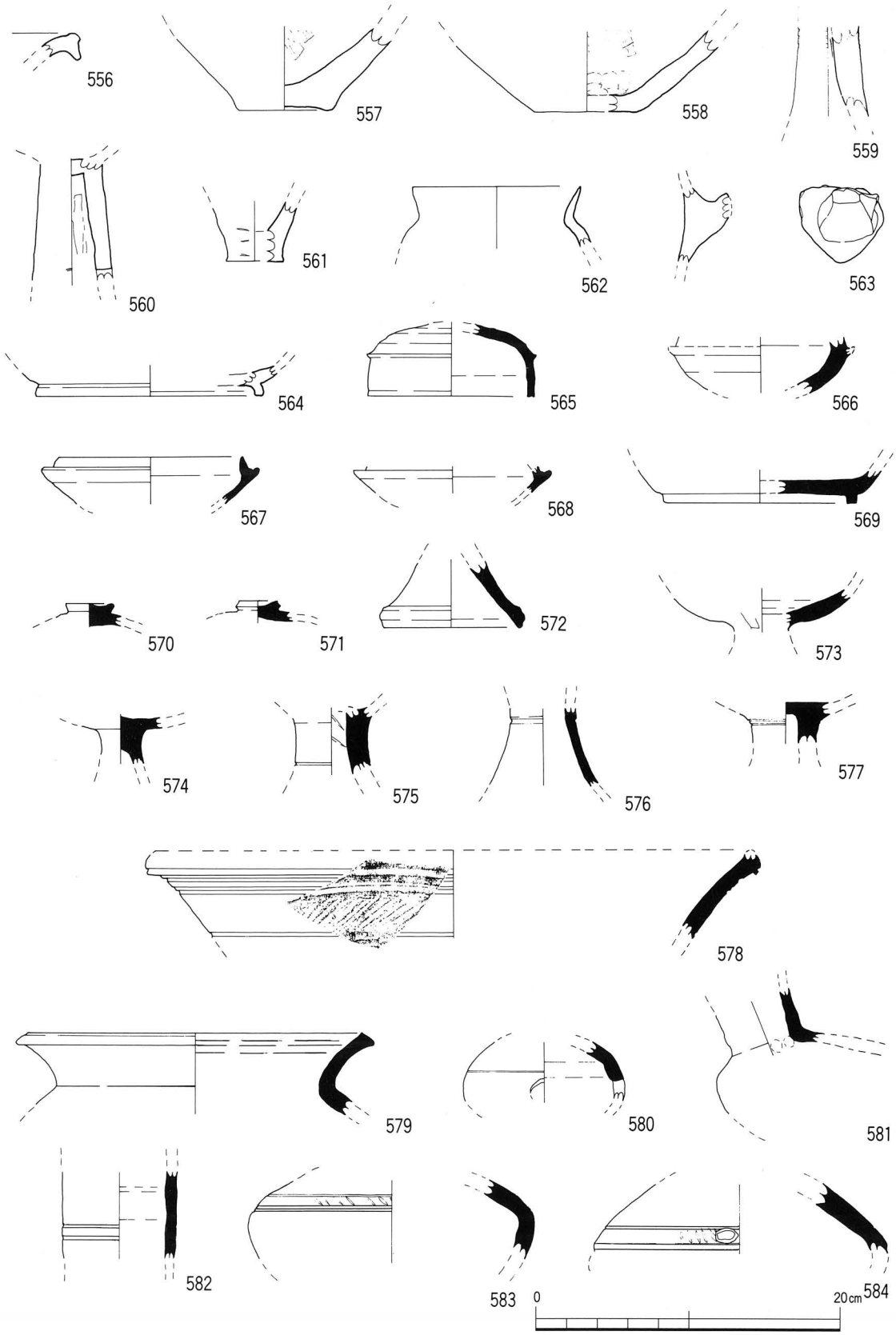
633～637は器種と所属時期が確定できないものである。633は脚付子持壺の子壺であろうか。635は器面に自然釉がみられる。14世紀を下限とする時期か。

石器（638～643）　638は直刃形態の石庖丁の製品である。639～641は石庖丁の未成品である。640は原材から剥離した板状剥片を素材として、打裂調整時に破損したものである。641は円礫を素材としている。642は大陸系磨製石器の石器素材である。形態から加工斧向きの素材と考える。643はサヌカイト製の打製石鏃の未成品である。石器は6点が出土したが、多時期の遺物を含む包含層資料である。しかし、これらの石器未成品は当地を含めた周辺地において、石器の製作がおこなわれていたことを示唆するものである。

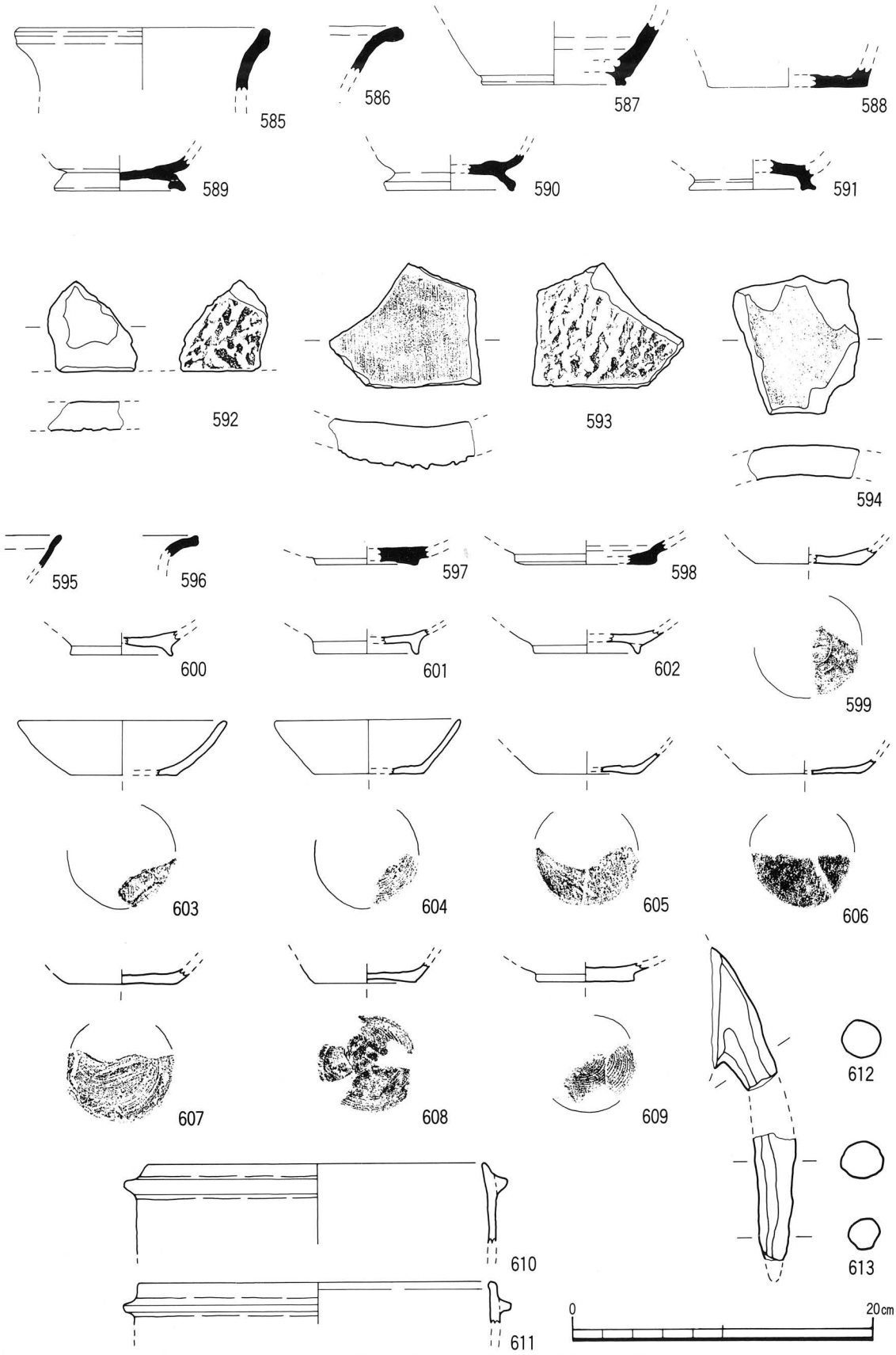
鉄器・鉄器製作関連遺物（644～669）　644～659は鉄製品、660～667は鉄滓、668・669はふいごの羽口である。644～648は棒状鉄器。644は横断面が正方形を呈するものと思われる。649はタガネ状の



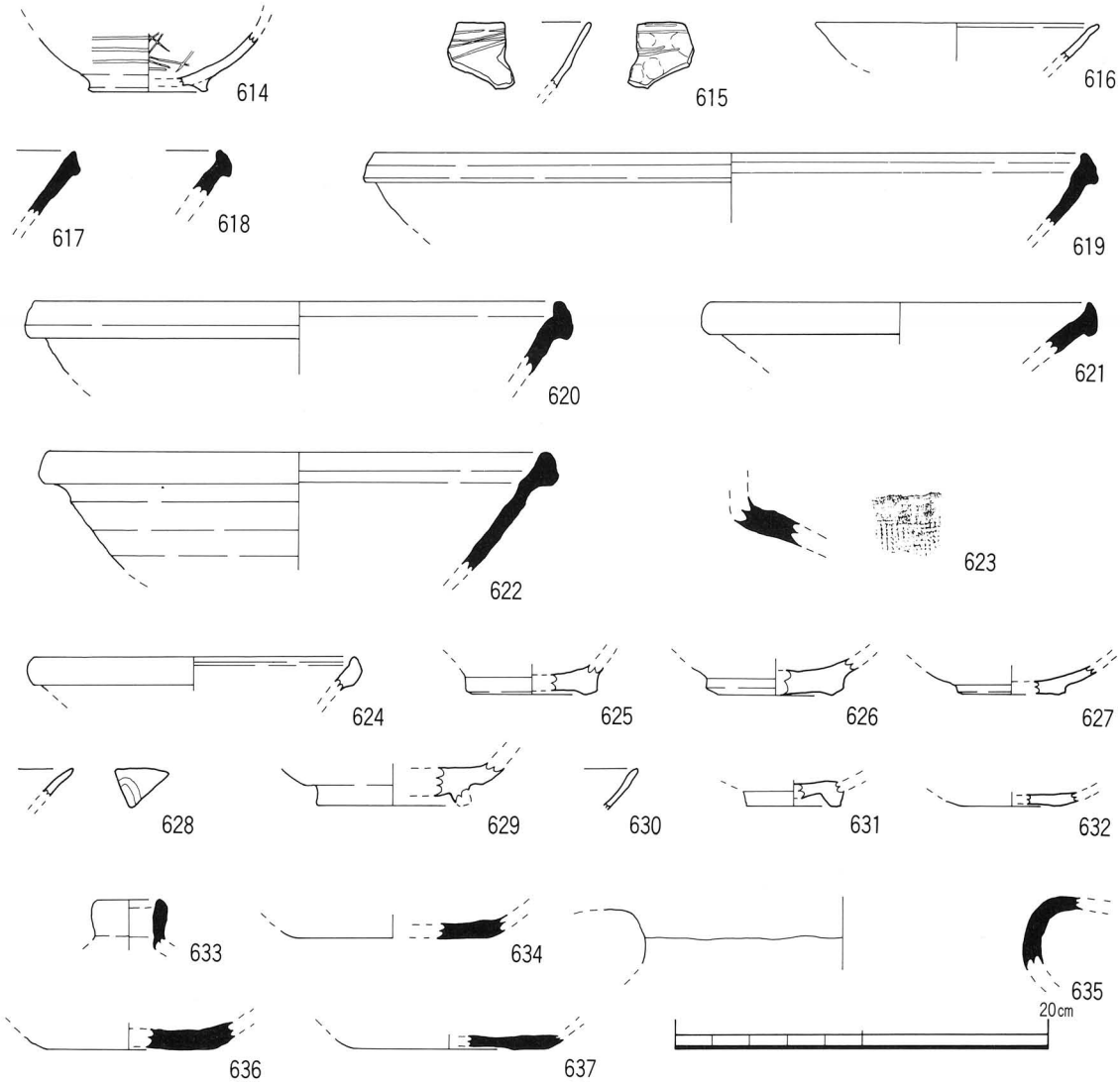
第69図　Ⅳ下層出土遺物実測図（5）（縮尺 1／2）



第70図　Ⅳ上層出土遺物実測図（1）（縮尺 1／4）



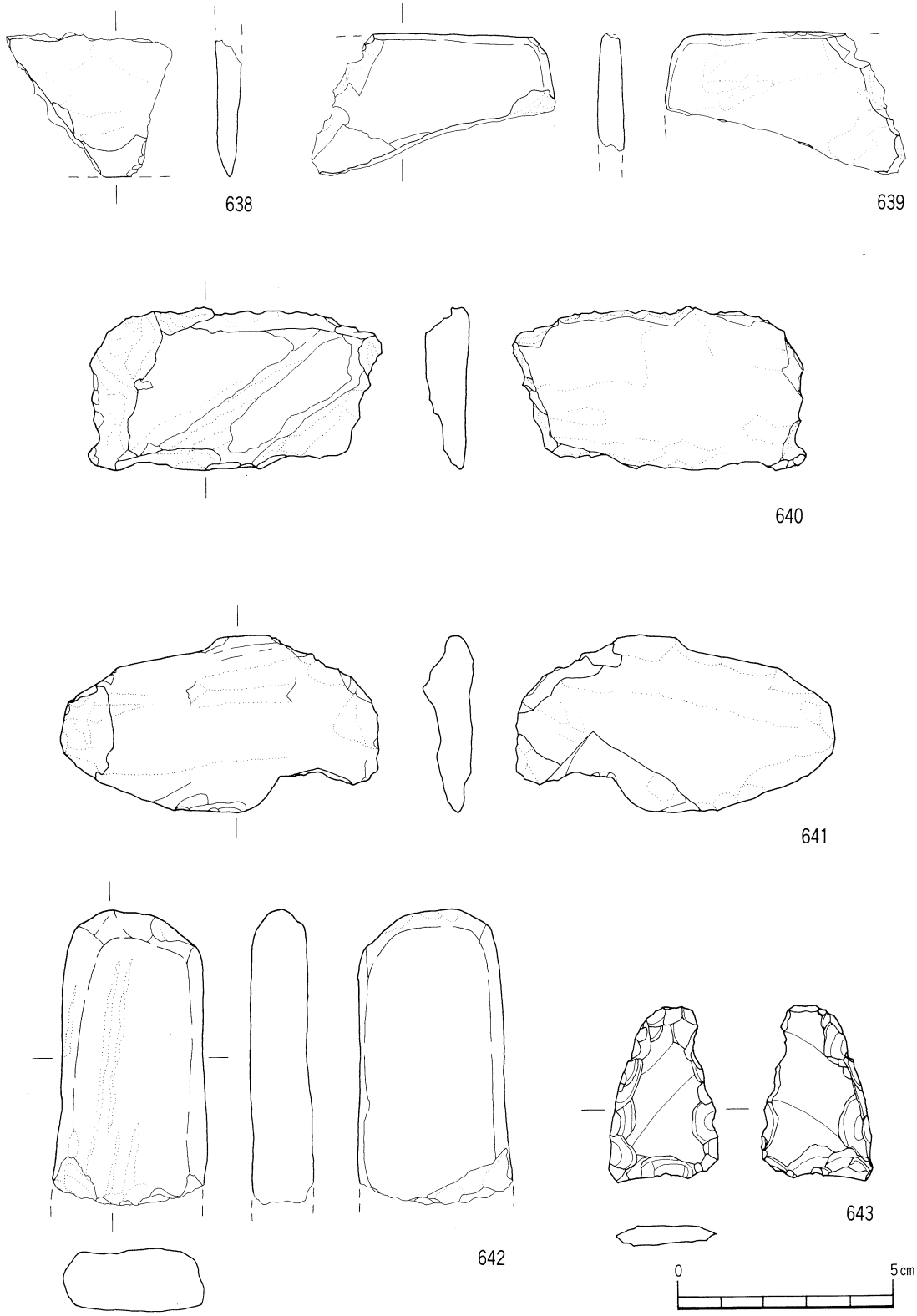
第71図　Ⅳ上層出土遺物実測図（2）（縮尺 1／4）



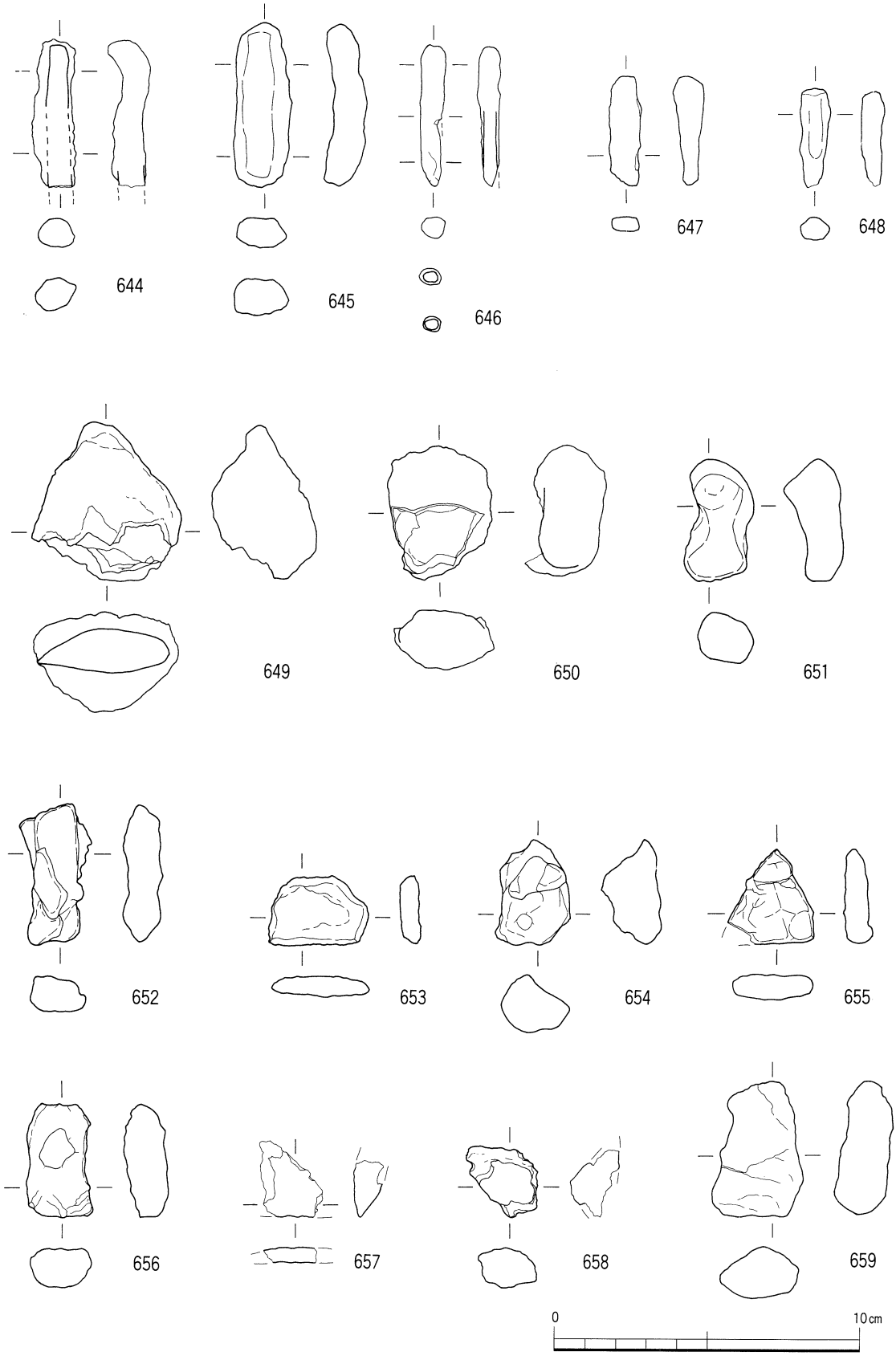
第72図　Ⅳ上層出土遺物実測図（3）（縮尺 1／4）

製品か。650～659は器面全体に付着する錆のため、形状や器が不明の製品である。多くが板状を呈している。660は器面全体が錆で覆われ、細かい気泡がみられる。表面は茶褐色系、裏面が暗青灰色系を呈している。661～667は器面に細かい気泡がみられ、破断面にも多くの気泡がみられる鉄滓である。鉄滓は赤錆ており、凹凸をもつものが多い。668は表面に黒色の物質が吸着し、裏面には二次焼成により橙色に変色している。669も668に類似する。表面には細かい気泡が多く、黒色の物質が厚さ３～４㎜で付着する。

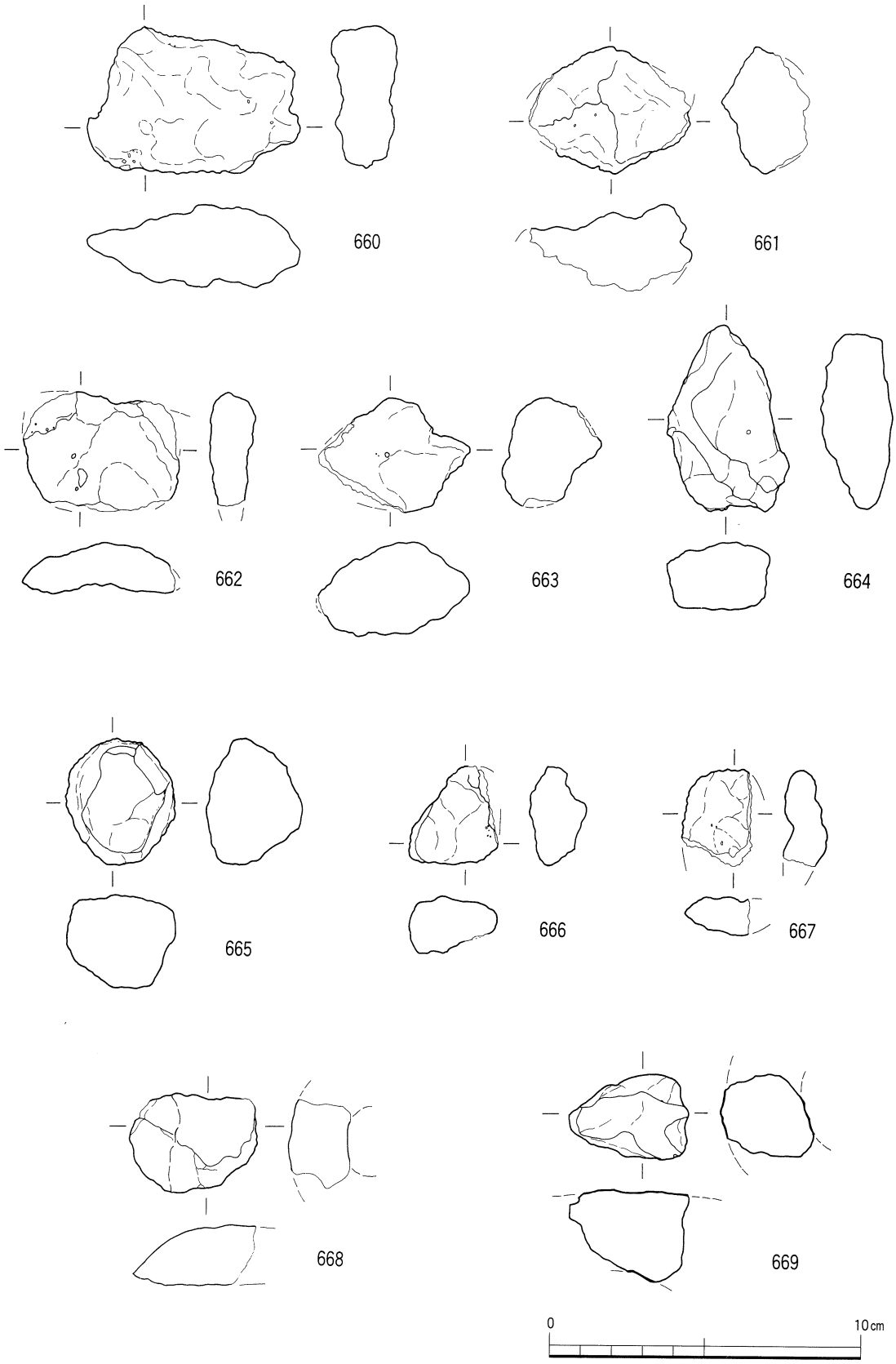
鉄器と鉄器製作関連遺物の出土は、当地を含めた周辺地で鍛冶がおこなわれていたことを示している。



第73図　Ⅳ上層出土遺物実測図（4）（縮尺 2／3）



第74図　Ⅳ上層出土遺物実測図（5）（縮尺 1／2）



第75図　Ⅳ上層出土遺物実測図（6）（縮尺 1／2）

第Ⅴ章　調査のまとめ

本調査では、弥生時代・古墳時代・古代～中世・近世以降の遺構と遺物を確認することができた。このことは、当時の人々が積極的に土地開発を行い、当地を含む周辺で生活を営んでいたことを示している。以下、成果と課題についてまとめておきたい。

弥生時代では、ＳＤ10・ＳＸ５が注目される。ＳＤ10は帰属時期と方向から調査地北に隣接する福音小学校構内遺跡ＳＤ３と同一遺構であるものと考えられる。既往の調査では、この溝の東西において数棟の住居址が検出されている。今後はこの南北に続く溝の性格を明らかにしてゆくことが望まれる。さらには、当地区における弥生後期の集落構造の解明を期待する。ＳＤ10とＳＸ５から出土した弥生後期土器は、近年精力的に進められている土器編年を考える上で有効な資料になるものと評価できる。とりわけ、ＳＸ５では多量の在地の土器とともに、搬入土器（外来土器）が確認されたことは注目すべきことである。すなわち、長頸壺（241）は備前・備中南部地域における土器編年の後期Ｉ－２期（Ｖ－２期）に帰属する。器形、細かい砂粒を含む精製された胎土、乳褐色の色調、肩部に施された「ノ」の字状刺突文、これらの諸特徴から241は搬入された可能性がきわめて高いと考えられる。一方、242は底部の形状、胎土、色調から備前・備中南部地域の土器を模倣して松山平野で製作された土器と判断される。弥生後期における瀬戸内海を介した南北交流の一端を示すものである。

古墳時代では、ＳＸ13が注目される。本遺構からは底部を欠く大型の直口壺が破砕した状態で出土している。自然流路にきわめて近い位置で出土しており、本遺構が「水」に対する意識のもとに構築され、底部を欠く大型の直口壺が据え置かれていたと理解したい。本資料については、今後の類例を待って再検討する必要がある。

古代～中世ではＳＤ11・ＳＤ３・ＳＤ８が注目される。ＳＤ11出土の勾玉と権状石製品は、当地域における類例が少なく、貴重な資料である。ＳＤ３・ＳＤ８から出土した遺物は、当該期の土器編年や流通を考える上で有効な資料となろう。

包含層資料ではⅣ層とⅤ層の遺物が注目される。弥生後期・古墳後期・古代～中世の遺物が多く認められたことは、これら多量の余剰生産物を生み出せる拠点集落が当地の北の微高地に展開していたことを示唆する。人工層位を用いた分層発掘を実施したことにより、遺物と土層の関係が明確となり得た。厚く遺存する包含層に対しては、有効な調査方法である。

以上、本調査に対する若干のまとめをおこなった。今後も既往の調査成果との比較と検討を重ね、本地区の歴史的役割を解明してゆきたい。

なお、報告書作成にあたり、弥生土器は梅木謙一氏、古墳～古代の土師器と須恵器は宮内慎一氏、古代～中世の土師器と貿易陶磁器は栗田正芳氏に御教示を賜った。記して感謝申し上げます。

（平成10年３月31日稿了）

［参考文献］

古代学協会 四国支部　1996　『弥生後期の瀬戸内海　―土器・青銅器・鉄器からみたその領域と交通―』

遺物観察表（加島、小玉、丹生谷、矢野、多知川が作成した）

遺物の観察表は以下のように掲載した。

（1）**番号**は本文中の通し番号である。

（2）**法量**は破損品に対しては復元値を括弧で示した。

（3）**調整**は遺物の各部名称を略記した。口縁部→口、口縁端部→口端、頸部→頸、胴部→胴、胴部上半→胴上、胴部下半→胴下、底部→底、坏部→坏、脚部→脚、柱部→柱、天井部→天、受部→受、裾部→裾。

（4）**胎土**は混和剤を略記した。砂粒→砂、石英→石、長石→長、金雲母→金、その他の雲母→ウンモ、精製土→精。

括弧内の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例.「1～4㎜大の石英、長石を含む」→「石・長（1～4）」である。

（5）**焼成**は焼成具合を略記した。良好→◎、良→○、不良→△。

表1　SD10 出土遺物観察表　　土製品

（1）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
1	甕	口径 (25.0) 残高 7.0	「く」の字状口縁。口縁端部は面取りされる。頸部内面に弱い稜あり。小片。	㊐指頭痕 ハケ ㊐ハケ	㊐ヨコハケ ㊐ハケ→ナデ	石・長(4)	△	F3	
2	甕	口径 (24.2) 残高 4.2	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部は面をなす。	ハケ	ハケ	石・長(3)少量	○	F3−c4	
3	甕	口径 (21.6) 残高 7.1	稜をもって外反する口縁部。	マメツ	ハケ	石・長(5) 金	△	F3	
4	甕	口径 (22.4) 残高 8.6	稜をもって外反する口縁部。口縁部は丸みをもつ。	マメツ	マメツ	石・長(4)	△	F3−b4	
5	甕	口径 (21.8) 残高 2.9	口縁部片。	㊐指頭痕 ㊐マメツ	マメツ	石・長(3) 黒	△	F3−a4	
6	甕	口径 (21.2) 残高 8.4	稜をもって外反する口縁部。	㊐胴ハケ (10本/1cm)	マメツ	石・長(3)多量	△	F3−c4	
7	甕	口径 18.2 残高 30.7	稜をもって外反する口縁部。口縁部はやや丸みをもつ。しっかりと段をもつくびれ上げ底。	㊐ナデ ㊐胴上ハケ ㊐胴下ケズリ ㊐指頭痕	マメツ	石・長(3)	○	F3−c3 F3−c4	12
8	甕	口径 (18.6) 残高 10.1	稜をもって外反する口縁部。	㊐指頭痕 ㊐胴ハケ (10本/1cm)	㊐指頭痕 ㊐胴指頭痕→ ハケ	石・長(3)少量	◎	F3	
9	甕	口径 (19.0) 残高 3.5	稜をもって外反する口縁部。	㊐指頭痕 ㊐ハケ	㊐ハケ ㊐マメツ	石・長(2)	△	F4	
10	甕	口径 (18.2) 残高 4.8	ゆるやかに外反する口縁部。口縁部端は丸みをもつ。	マメツ	マメツ	石・長(2)	△	F3	
11	甕	口径 (18.6) 残高 6.5	稜をもって外反する口縁部。	㊐マメツ ㊐ハケ ㊐マメツ	マメツ	石・長(2) 金	△	F3	

SD10 出土遺物観察表　土製品

（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
12	甕	口径 18.2 残高 22.6	稜をもって外反する口縁部。口縁端部は丸みをもつ。	ハケ	ハケ	石・長(3)	△	F3	
13	甕	口径 (16.4) 残高 9.0	稜をもって外反する口縁部。	㊐指頭痕→ハケ (11～12本/1cm) ㊐胴ハケ→ナデ	㊐ハケ→ナデ ㊐指頭痕→ハケ →ナデ	石・長(2)少量	○	F3	
14	甕	口径 14.8 底径 4.0	「く」の字状のやや長い口縁部。長胴で、平底。胴部外面にタタキ痕あり。	マメツ ㊐板状圧痕	㊐胴指頭痕→ハケ (11～12本/1cm) ㊐タテハケ、指頭痕	石・長(4)多量	△	F3	12
15	甕	残高 16.9	長球形の胴部。	ハケ	㊐ハケ ㊐ハケ(4本/1cm)	石・長(2)多量 砂	○	F3	
16	甕	残高 12.0	長球形の胴部。胴部外面にタタキ痕あり。	㊐ハケ(10本/1cm) →ナデ ㊐タタキ→板ナデ	㊐指頭痕→ ハケ(10本/1cm)→ ナデ	石・長(3)少量 金	○	F3−b4 F3−c4	
17	甕	底径 3.5 残高 9.5	平底。	㊐ハケ(10本/1cm) ㊐タタキ→板ナデ	㊐ナデ	石・長(3) ウンモ	○	F3	
18	甕	底径 (3.0) 残高 10.4	平底。	㊐ハケ→ミガキ ㊐ナデ	㊐底指頭痕 ハケ	石・長(1～2) 金	△	F3−b4	
19	甕	底径 3.1 残高 11.9	平底。	㊐タタキ→ハケ (4・5本/1cm) ㊐ナデ	㊐ハケ (4・5本/1cm)	石・長(5) 金	○	F3	
20	甕	底径 3.1 残高 8.0	平底。	不明	㊐ナデ ㊐指頭痕→ナデ	密	○	D4	
21	甕	底径 4.1 残高 7.9	平底。	㊐ケズリ ㊐布状圧痕か?	ナデ	石・長(3)・金	○	F3−c4	
22	甕	底径 (5.6) 残高 3.4	立ち上がりをもつ平底。	㊐ナデ ㊐指頭痕→ナデ	ハケ→ナデ	密・石(1)	○	F3	
23	甕	底径 2.5 残高 3.7	平底。	㊐タタキ→ナデ ㊐ナデ	シボリ痕 板圧痕	石・長(4)	○	F3	
24	甕	底径 (4.4) 残高 3.5	厚みのある平底。	ハケ→ナデ	ハケ	密・石(2)	○	F3−b4	
25	甕	底径 (4.8) 残高 5.8	くびれをもつ平底。	㊐ハケ→ミガキ ㊐指頭痕	マメツ	石・長(4)・砂	◎	F3	
26	壺	口径 (32.0) 残高 4.7	「コ」の字接合の複合口縁壺。口縁端部は面をなす。	ヨコナデ	ナデ	石(1～4)金・多量	○	F3−c3	
27	壺	口径 (27.6) 残高 5.2	「コ」の字接合の複合口縁壺。	マメツ	㊐ナデ ㊐ハケ	石・長(1～5)	△	E4−b4	
28	壺	口径 (25.0) 残高 6.0	「コ」の字接合の複合口縁壺。	マメツ	マメツ	石(2)多量	△	F3−b4	
29	壺	口径 (20.8) 残高 11.5	「コ」の字接合の複合口縁壺。長く外反する一次口縁部に短く内傾する二次口縁部。	㊐ヨコナデ ㊐ハケ→ナデ	ヨコナデ	石(1～4)金・多量	○	F3	
30	壺	口径 (18.4) 残高 6.2	「コ」の字接合の複合口縁壺。	㊐ヨコナデ ㊐ハケ→ヨコナデ	ナデ	石(4)・多量	○	出土地区 不明	
31	壺	口径 (14.0) 残高 7.9	「コ」の字接合の複合口縁壺。口縁端部は面をなす。	㊐マメツ ㊐ハケ(10～11本/1cm) →ヨコナデ	㊐ナデ ㊐指頭痕	石・長(4)・金・多量	△	F3	

SD10 出土遺物観察表　土製品

（3）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
32	壺	口径(11.0) 残高 7.9	「コ」の字。	㊐ハケ→ヨコナデ ㊍ハケ(4~5本/1cm) →ナデ	㊐指頭痕→ナデ ㊍ハケ (5~6本/1cm)	石・長(1~5)多量	○	F3-a4	
33	壺	口径(17.8) 残高 6.4	「コ」の字。	㊐ナデ ㊍ハケ (12本/1cm)	㊐指頭痕 ㊍ハケ→ナデ	石・長(1~3)	○	出土地区 不明	
34	壺	口径(15.0) 残高 3.5	口縁部片。直線文4条、櫛描波状文4条。	ナデ	指頭痕→ナデ	石・長(2)	○	F3-c4	
35	壺	口径(14.0) 残高 6.1	「コ」の字。	㊐ナデ ㊍ハケ (7本/1cm)	㊐ヨコナデ ㊍ハケ→ナデ	石・長(1~2)	○	F3	
36	壺	口径(21.0) 残高 6.3	「く」の字接合の複合口縁壺。口縁端部は面とりされている。	ハケ→ナデ	ハケ (8本/1cm) →ナデ	石・長(1~5)	○	F3	
37	壺	口径(22.0) 残高 2.7	口縁部片。「く」の字接合。凹線文3条。	ヨコナデ	マメツ	密・石・長(1)	○	D4	
38	壺	口径(17.8) 残高 4.9	「く」の字。	ハケ(8本/1cm)	ハケ(12本/1cm)	石・長(1~2)金・多量	○	F3	
39	壺	残高 4.5	複合口縁壺	ハケ(10本/1cm)	ハケ(10本/1cm)	密・石・長(1~2) 多量 金	○	F3	
40	壺	口径(14.4) 残高 6.6	「く」の字接合の複合口縁壺。	ハケ (8~9本/1cm)	ハケ	石(2)	○	F3-c4	
41	壺	口径(13.6) 残高 9.7	「く」の字接合の複合口縁壺。内傾して立ち上がる二次口縁。	㊐ヨコナデ ㊍ハケ	マメツ	石・長(1~3)多量	△	F3-b3	
42	壺	口径(12.2) 残高 4.0	「く」の字接合の複合口縁壺。	ハケ (7~8本/1cm)	ハケ	密 石・長(1) 金	○	F3-c4	
43	壺	口径(11.0) 残高 2.7	「く」の字接合。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~2)	○	F3-c4	
44	壺	口径(16.2) 残高 9.3	「く」の字接合。長い一次口縁に直立する二次口縁。口縁端部は面とり。	㊐ハケ(9本/1cm) →ヨコナデ ㊍ハケ(9本/1cm)	㊐ハケ(10本/1cm) ㊍ハケ(12本/1cm)	石・長(1~4)	○	F3	
45	壺	口径(14.0) 残高 7.0	「く」の字接合の複合口縁壺。	㊐マメツ ㊍ハケ	マメツ	石・長(1~4)	△	F3	
46	壺	口径(13.0) 残高 8.1	口縁部は直立気味。口縁端部は丸くおさめられている。	㊐マメツ ㊍ハケ	マメツ	石(1~3)多量	△	F3	
47	壺	口径(16.8) 残高 3.6	口縁部片。「く」の字接合の複合口縁壺。	マメツ	マメツ	石(1~3)多量	△	F3-b4	
48	壺	口径(16.2) 残高 9.5	口縁端部は面とりされていて、接合部はあまい稜をもつ。	ハケ	ハケ	石(1~3)多量	○	F3-b4	
49	壺	口径(21.2) 残高 4.5	大きく外反する口縁部。	(口端)ヨコナデ ㊐マメツ	マメツ	石・長(1~2)	△	F3	
50	壺	口径(17.2) 残高 5.9	外反する口縁部。口縁端部は面をなす。	ハケ	ハケ	石(1~2)多量	△	F3	
51	壺	口径(14.8) 残高 5.4	外板口縁。口縁端部はつまみ上げる。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1~3) 金	△	F3	

SD10 出土遺物観察表　土製品

（4）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
52	壺	口径(11.6) 残高 4.5	外反する口縁。口縁端部はつまみ上げる。	(口端)ヨコナデ (口)ハケ	(口端)ヨコナデ (口)ハケ (頸)ヨコナデ	長(1)多量	○	F3	
53	壺	残高 5.0	長頸壺の頸部。	ハケ	ハケ	石・長(3)	△	出土地区不明	
54	壺	口径(13.2) 残高 7.0	強く屈曲し、やや長く外反する口縁部。	ヨコナデ	(口)ヨコナデ (板状) (頸)マメツ	石・長(1～2)	○	F3-c4	
55	壺	口径(14.8) 残高 11.9	直立気味に外反する口縁部。端部はやや丸い。	ハケ(6～7本/1cm)	ハケ	石・長(3)多量	◎	F3	
56	壺	口径 13.2 残高 14.2	ゆるやかに外反する短い口縁部。	(口端) (口)指頭痕→ナデ (胴)ハケ(15～16本/1cm)	(口)指頭痕→ ハケ(15本/1cm) (胴)ハケ→ナデ	石・長(3)少量 金	○	F3	
57	壺	残高 5.3	胴上半に焼成前の線刻。	ハケ	指頭痕→ハケ ナデ	石・長(1)	○	F3-b4	12
58	壺	口径(15.4) 残高 3.3	広口壺の口縁部。口縁端部は下方に拡張され、外面に3条の沈線文、2個一対の円形浮文。口縁部内面に4条の波状文。	(口端)ヨコナデ (口)ミガキ	ミガキ	石・長(3)少量 金	○	F3	12
59	壺	口径(17.0) 残高 3.7	広口壺。外反する口縁で口縁端部は下方にやや拡張されている。口縁端面に1条の沈線文。	ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	密 石・長(1) 金	○	F9-b4	
60	壺	底径 (8.0) 残高 14.3	厚みをもち、やや立ち上がりのある平底。	ハケ(4～5本/1cm)	(底)布目圧痕 (胴)ハケ (4～5本/1cm)	石・長(2)多量	◎	F3	
61	壺	底径 (7.0) 残高 8.4	やや丸みのある平底。底部付近に焼成前の線刻。	ハケ(10本/1cm) →ナデ	指頭痕→ナデ	石・長(4) ウンモ	○	F3	
62	壺	底径 (7.1) 残高 8.3	平底。	(底)ハケ (6本/1cm) (胴)ケズリ	マメツ	石・長(1～5)	△	F3-c4	
63	壺	底径 (8.4) 残高 5.5	厚みのある平底。	ハケ(11本/1cm) →ナデ	指頭痕、ナデ	密 石(1～3)	△	F3	
64	壺	底径 (7.4) 残高 7.5	立ち上がりのある平底。	ハケ→ナデ	指頭痕	石・長(3)	○	E4-b1	
65	壺	底径 (6.2) 残高 8.1	平底。底部付近に焼成前線刻。	ハケ	ハケ(4本/1cm)	石・長(3)少量 ウンモ	○	F3-b4	
66	壺	底径 (4.2) 残高 2.4	厚みのある平底。底部付近に焼成前線刻。	ハケ→ナデ	指頭痕→ナデ	石・長(3)少量 ウンモ	○	D4	
67	壺	残高 5.7	胴下半片。一部に器面の剥落、外面に焼成前線刻。	ナデ	ハケ→ナデ	石・長(5)	○	F3	12
68	壺	残高 5.7	頸部片。頸部に焼成前の線刻。板木口の押圧による「ノ」の字状文。	ハケ→ナデ	指圧痕→ナデ	石・長(2)少量	○	F4	12
69	壺	残高 8.0	頸胴部片。頸部に刻目突帯。胴上半に焼成前線刻。2条の波状文。	ハケ→ナデ	(頸)ミガキ (胴)ハケ	石・長	○	F3	12
70	鉢	口径(34.4) 残高 8.6	大型品。「く」の字状に折り曲げた口縁端部は面をなす。頸部に刻目突帯。	(口)ハケ→ナデ (頸)ハケ(8本/1cm)	ハケ→ナデ	長(3)	○	F3-b4	
71	鉢	口径(23.2) 残高 6.0	中型品。「く」の字状に折り曲げた口縁。口縁端部はやや丸い。頸部に刻目突帯。	マメツ	ハケ	石・長(1～2) 金	○	F3-c4	

SD10 出土遺物観察表　土製品

(5)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
72	鉢	口径(18.6) 残高 5.1	外反する短い口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。	㊐ハクリ ㊀ハケ(14本/1cm)	マメツ	石・長(1) 砂	○	F3−a4	
73	鉢	残高 5.4	頸部は締まり、口縁は「く」の字状に折り曲げられ、つば状に長い。	ハケ(8〜9本/1cm)	㊀頸胴ハケ ㊀胴下指頭痕	石・長(1〜2)多量	○	F3	
74	鉢	口径(14.4) 器高 12.9 底径 4.8	完形品。内湾する直口口縁。口縁端部は面とりされる。底部はやや立ち上がりをもち厚みのある平底。	ナデ ㊀底指頭痕→ナデ	㊀口ヨコナデ ㊀胴ナデ ㊀底指頭痕→ナデ	石・長(1〜4)多量	○	F3−c4	
75	鉢	口径(10.6) 残高 7.6	内傾して立ち上がる直口口縁。口縁端部は面をなす。	㊀口端ヨコナデ ㊀胴ハケ→ミガキ	㊀口端ヨコナデ ㊀胴ミガキ	石・長(1〜3)多量	◎	F3	
76	鉢	口径(12.8) 残高 10.4	台付鉢。やや内傾して立ち上がる直口口縁。口縁端部は丸く仕上げられている。底部はくびれをもつ上げ底。	指頭痕	指頭痕→ナデ	石・長(1〜2)少量	○	F3	
77	鉢	残高 4.5	台付鉢の台部。	マメツ	マメツ	密・金	△	F3−b3	
78	鉢	残高 3.9	台付鉢の台部。	ナデ	ナデ	石・長(2)少量	○	F3−c4	
79	鉢	残高 4.2	台付鉢の台部。焼成前の穿孔4方向。	ミガキ	ナデ	石・長(2)少量	△	F3−c4	
80	鉢	底径 1.9 残高 2.4	突出する平底。	ハケ (9〜10本/1cm)	指頭痕	石・長(1)・多量	○	F3−b4	
81	鉢	底径 2.0 残高 3.1	突出する平底。	㊀底指頭痕 ㊀胴ハケ (10本/1cm)	ハケ	砂・多量	○	F3−c4	
82	鉢	底径 1.0 残高 2.3	小さく突出する平底。	マメツ	マメツ	石・長(1)・砂・多量	△	E4−b2	
83	高坏	残高 2.8	坏部片。	ナデ	指頭痕→ナデ	石(2)・金	○	F3−c3	
84	高坏	残高 5.6	坏部片。	布目圧痕→ナデ	㊀坏ナデ ㊀脚指頭痕→ナデ	石・長(4)・ウンモ・多量	△	F3	
85	高坏	残高 8.6	脚部片。裾部へむけて大きくひろがる。	指頭痕→ハケ→ミガキ	㊀坏ナデ ㊀脚上シボリ痕 ㊀脚下ハケ→ナデ	石・長(3)・ウンモ	○	F3	
86	高坏	残高 6.1	脚部片。柱部は短いと思われる。	指頭痕→ナデ	㊀坏マメツ ㊀脚上シボリ痕 ㊀脚下指頭痕→ナデ	石・長(4)・金	○	E4−c1	
87	高坏	残高 5.4	脚部片。	ハケ(10本/1cm)	指頭痕→シボリ痕→ナデ	石・長(4)少量	○	F3−c4	
88	高坏	残高 6.0	脚部片。	ミガキ→ナデ	指頭痕→ナデ	密・金	○	E4−b1	
89	高坏	残高 6.3	脚部片。焼成前の穿孔4方向。	ハケ→ミガキ	㊀坏ナデ ㊀脚シボリ痕 →ナデ	石・長(2)・金・少量	○	E4−c1	
90	高坏	残高 6.2	脚部片。焼成前の穿孔4方向。	ハケ→ミガキ	㊀坏ナデ ㊀脚上シボリ痕 ㊀脚下指頭痕	石・長(3)・ウンモ・少量	○	F3−b3	
91	高坏	残高 12.7	脚部片。裾部へむけて大きくひろがる。焼成前の穿孔4方向。(φ1.2cm)	ハケ→ミガキ→ナデ	㊀坏ナデ ㊀脚シボリ痕 →ナデ	密・石・長(2)・ウンモ・少量	○	E4−c2	

SD10 出土遺物観察表　土製品

(6)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
92	高坏	残高 6.3	脚部片。裾部へむけて大きくひろがる。沈線文8条以上。焼成前の穿孔。	マメツ	布目圧痕	石・長(5)	△	F3	
93	高坏	残高 7.9	脚部片。細長い柱部で焼成前穿孔4方向。	ハケ→ミガキ	ナデ	石・長(4)・ウンモ	○	F3−b3	
94	高坏	残高 10.9	脚部片。焼成前穿孔4方向。	ミガキ→ナデ		石・長(2)・ウンモ・多量	○	F3−c4	
95	高坏	底径(17.6) 残高 16.0	脚部片。裾部は大きくひろがる。焼成前穿孔4方向(φ1.8cm)。	マメツ	マメツ	石・長(3)・ウンモ・少量	△	F3	
96	高坏	残高 11.6	脚部。細長い柱部。	布目圧痕→ミガキ	シボリ痕	密 石・長(3)少量 金	○	F3−c4	
97	高坏	残高 3.8	有段の坏部。大きく外反する口縁部。	ミガキ→ナデ	ミガキ→ナデ	石・長(3)少量 金	○	F3−b3	
98	高坏	残高 3.7	有段の坏部。大きく外反する口縁部。	ナデ	ナデ	石・長(3) ウンモ	○	F3	
99	高坏	残高 3.8	有段の脚部。段より上部に焼成前穿孔。	ナデ	ミガキ	石・長(2)少量 金	○	F3	
100	高坏	残高 3.9	有段の脚部。段に半載竹管文。段より上部に焼成前穿孔。	ナデ	ナデ	密 石英(1)少量 ウンモ	○	F3	
101	高坏	底径(25.8) 残高 2.8	裾部。大きくひろがる。端部は面をなす。	(脚)ミガキ (裾)ナデ	ナデ	石・長(4) ウンモ	○	E4−a1	
102	器台	口径(32.8) 残高 1.5	口縁端部上下に拡張。端部に2条の沈線。	(口端)ヨコナデ (口)ミガキ	ミガキ	石・長(4)少量	○	F3−b4	
103	器台	口径(30.8) 残高 1.5	口縁端部上下に拡張。端部に3条の沈線。	マメツ	ミガキ	石・長(1)少量	○	F4	
104	器台	口径(25.6) 残高 1.8	口縁端部は垂下する。	(口端)ヨコナデ (口)ハケ→ミガキ	ミガキ	石・長(3)少量	○	F3−c4	
105	器台	残高 7.8	柱部片。円孔(φ1.0cm)。	ハケ→ミガキ→ナデ	指ナデ	石・長(2)少量 金	○	F3	
106	器台	底径(19.6) 残高 4.6	大きく広がる裾部。端部はヨコナデ。	ハケ(5・6本/1cm)	ハケ→ナデ	石(3) 金	○	F3	
107	支脚	残高 12.0	やや細長い柱部をもつ。中空。角をもつ。	指頭痕→ハケ(5本/1cm)→ナデ	しぼり痕→指圧痕→ハケ→ナデ	石・長(4)少量 ウンモ	○	F3−c4	
108	支脚	残高 13.5	ゆるやかに広がる裾部。中空。角をもつ。	指頭痕	(脚下裾)ハケ(2・3本/1cm) (脚)指圧痕	石・長(3)	○	F3 F3−b4	
109	甕	口径(17.4) 残高 6.2	「く」の字状に屈曲する短い口縁部。 口縁端部は丸い。	ヨコナデ	(口)ヨコナデ (胴)ケズリ	砂 石・長(4)	○	F3−b4	
110	甕	口径(14.8) 残高 6.1	「く」の字状に屈曲する。短い口縁部。 口縁端部は丸い。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ→ヨコナデ	(口)ヨコナデ (胴)ハケ	砂多量	△	E4−b2	
111	甕	口径(17.2) 残高 6.0	「く」の字状に屈曲する。短い口縁部。 口縁端部はつまみ上げられる。	(口)ヨコナデ (胴)ケズリ	(口)ヨコナデ (胴)ハケ→ヨコナデ	石・長(1) 砂	◎	F3−b4	

SD10 出土遺物観察表　土製品

(7)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
112	甕	口径(16.2) 残高 4.5	「く」の字状に屈曲する口縁部。口縁端部は上方につまみあげられる。	㊐ヨコナデ ㊗ハケ	㊐ヨコナデ ㊗ケズリ	石・長(3) 砂	△	F3−a4	12
113	甕	口径(14.2) 残高 2.0	口縁部片。口縁端部はつまみ上げられる。	ヨコナデ	マメツ	砂 多量	○	F3−b4	
114	甕	口径(13.3) 残高 3.9	「く」の字状に屈曲し、やや内湾気味に立ち上がる口縁部。口縁端部はつまみ上げられる。	㊐ヨコナデ ㊗ハケ	㊐ヨコナデ ㊗マメツ	石・長(1)少量 砂	○	E4−c1	
115	甕	口径(14.0) 残高 7.9	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部はやや丸い。	ミガキ→ナデ(?)	㊐ハケ→ナデ ㊗ナデ	石・長(4)	○	F 3	
116	壺	口径(16.8) 残高 9.6	二重口縁。二次口縁はやや外湾し口縁端部はつまみ上げられる。	(口頭)ヨコナデ ㊗ハケ→ナデ	㊐ヨコナデ ㊗ケズリ	砂 ウンモ	○	F3−c4	12
117	深鉢	残高 3.9	粗製深鉢。口縁端部は面とりされ、刻目が入る。口縁部から下がった位置に刻目突帯。	㊐ヨコナデ ㊗ケズリ	ナデ	石・長(1〜3)多量	○	D 3	

SD10 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
118	敲石	2/3		11.2	9.0	4.2	511.5	F 3 − b 4	
119	敲石	4/5		9.5	8.1	4.6	572.0	F 3 − c 4	
120	敲石	ほぼ完存		15.4	12.3	6.6	1649.5	F 3 − b 4	
121	磨石	2/3		9.1	7.3	4.1	426.0	D 4 − d 2	

表2　SX 5 出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
122	甕	口径(26.8) 残高 6.9	ゆるやかに外反する口縁。口縁端部は丸くおさめられている。	㊐ヨコナデ ㊗マメツ	㊐指頭痕→ハケ→ナデ ㊗ハケ(9〜10本/1cm)	石・長(4)	○	F9−b3 ②・④	
123	甕	口径(20.2) 器高 41.8 底径 5.4	長胴。くびれをもつ平底。外反する口縁。口縁端部は面をなす。	㊐ハケ(5本/1cm)→ナデ ㊗ハケ ㊞指頭痕→ナデ	㊐ハケ (頸)指頭痕→ナデ ㊗ハケ→ナデ	石・長(4) ウンモ	○	F9−b3③・④ F9−a4④・c1① F10−c3④	13
124	甕	口径(22.0) 残高 6.6	ゆるやかに外反する口縁。口縁端部は面をなす。	マメツ	マメツ	石・長(3)多量	△	F9−b3①	
125	甕	口径(20.6) 残高 7.4	稜をもち外反する口縁。口縁端部は外傾し、端面はナデによりやや拡張している。	ハケ(6本/1cm)→ナデ	㊐ハケ→ナデ ㊗ハケ(6本/1cm)	石・長(2)・ウンモ・少量	○	F9−b2①	
126	甕	口径(20.8) 残高 9.9	稜をもち外反する口縁。口縁端部は面をなし、ナデによりやや拡張している。	㊐ヨコナデ ㊗ハケ	㊐指頭痕→ナデ ㊗指頭痕→ナデ	石・長(2)少量	○	F10−d2②	
127	甕	口径(23.0) 残高 11.4	ゆるやかに外反する口縁。口縁端部は面をなす。	㊐マメツ ㊗ハケ(7本/1cm)	㊐マメツ ㊗ハケ	石・長(2)少量	○	F9−a2③ F9−b1 F9−c1・c2	
128	甕	口径(24.2) 残高 6.7	外反する口縁。口縁端部は丸くおさめられている。	㊐ハケ→ナデ	㊐指頭痕→ハケ→ナデ	石・長(3)多量	○	F9−b4②	
129	甕	口径(20.2) 残高 5.8	稜をもって外反する口縁。口縁端部は面をなす。	指頭痕→ハケ→ナデ	㊐指頭痕→ナデ ㊗ハケ→ナデ	石・長(2)・ウンモ	○	F9−b2②	

SX 5 出土遺物観察表　土製品

（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
130	甕	残高 8.9	外反する口縁。口縁端部の形態は欠損のため不明。	ハケ（9本/1cm）→ナデ	㊐ナデ ㊥指頭痕→板ナデ	石・長(2)・少量	○	F9−c4	
131	甕	口径(19.6) 残高 11.9	ゆるやかな稜をもって外反する口縁。 口縁端部は丸くおさめる。	㊐指頭痕→ハケ→ナデ ㊥ハケ(7本/1cm)→ナデ	㊐ナデ ㊥ハケ(7本/1cm)→ナデ	石・長(3)・ウンモ	○	F9−b4④	
132	甕	口径(20.0) 残高 6.9	ゆるやかに外反する口縁。口縁端部は面をなす。	㊐指頭痕→ハケ(5本/1cm)→板ナデ ㊥ハケ→ナデ	指頭痕→ハケ→板ナデ	石・長(3)・金・少量	○	F9−b4②	
133	甕	口径(18.4) 残高 5.9	稜をもち外反する口縁。口縁端部は面取りされており、やや下方に拡張している。	㊐指頭痕→ハケ(7本/1cm)→ナデ ㊥ハケ→ナデ	指頭痕→ハケ→ナデ	石・長(3)・少量	○	F9−c3	
134	甕	口径(19.2) 残高 5.2	外反する口縁。口縁端部はマメツのため、はっきりしない。	ハケ（マメツ）	指頭痕（マメツ）	石・長(3)・ウンモ・少量	○	F9−c4	
135	甕	口径(18.8) 残高 7.4	稜をもって外反する口縁。口縁端部は面をなす。	㊐ハケ→ナデ ㊥ハケ(8本/1cm)	㊐指頭痕→ハケ→ナデ ㊥ハケ→ナデ	石・長(4)・金・少量	○	F9−c3	
136	甕	口径(16.8) 残高 10.7	ゆるやかな稜をもって外反する口縁。 口縁端部は面をなす。	㊐ハケ→ヨコナデ ㊥ハケ(6本/1cm)→ナデ	指頭痕→ハケ→ナデ	石・長(3)・ウンモ・少量	○	F10−a2③	
137	甕	口径(16.2) 残高 4.9	外反する口縁。口縁部はあまい面をなす。	㊐指頭痕→ハケ(10本/1cm)→ナデ ㊥ハケ→ナデ	指頭痕→ハケ→ナデ	石・長(4)	○	F10−a1④	
138	甕	口径(14.8) 残高 4.7	稜をもって外反する口縁。口縁端部はナデのため上下にやや拡張している。	(口端)ヨコナデ ㊥ミガキ→ナデ	指頭痕→ナデ	石・長(2)少量	○	F10−d2②	
139	甕	口径(14.3) 残高 4.0	ゆるやかな稜をもって外反する口縁。 口縁端部は丸くおさめる。	マメツ	㊐ハケ ㊥指頭痕→ナデ	石・長(2)少量	△	F9−a2③	
140	甕	口径(15.2) 残高 4.1	ゆるやかに外反する口縁。口縁端部はあまい面をもつ。	マメツ	指頭痕（マメツ）	石・長(4)多量	△	F10−c1①	
141	甕	口径(14.8) 残高 4.7	稜をもって外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(3) ウンモ	○	F10−d2①	
142	甕	口径(14.4) 残高 7.1	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部はあいまいな面をなす。	ハケ→ナデ	㊐ハケ ㊥指頭痕→ナデ	石・長(3)	○	F10−b1①	
143	甕	残高 10.4	口縁欠損。	ハケ（8本/1cm）→ナデ	㊦ナデ ㊥ハケ→ナデ	石・長(4) ウンモ	○	F9−a4③	
144	甕	口径(15.2) 残高 9.0	稜をもって外反する口縁部。口縁端部は面をなす。	㊐ハケ→ヨコナデ ㊥ハケ(8本/1cm)	㊐ハケ(7本/1cm)→ナデ ㊥指頭痕→ハケ→ナデ	石・長(2)少量 ウンモ	○	F10−d3①	
145	甕	口径(15.0) 残高 3.6	稜をもって外反する口縁部。口縁端部は、丸みをもつ。	指頭痕→ハケ→ナデ	ハケ・ナデ	石・長(4)	○	F9−b3④	
146	甕	口径(13.9) 残高 9.2	稜をもって外反する口縁部。口縁端部はあいまいな面をなす。	ハケ（5本/1cm）→ナデ	㊐ハケ→ナデ ㊥指頭痕 ハケ→ナデ	石・長(2) ウンモ	○	F10−c1②	
147	甕	口径(13.0) 残高 7.8	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部は面をなす。線刻あり。	ハケ（7本/1cm）→ナデ	㊐ヨコナデ ㊥指頭痕 ハケ→ナデ	石・長(3)少量 砂	○	F9−b4①	
148	甕	口径 11.4 器高 17.6 底径 3.8	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部はひずんでいる。平底。	㊐ハケ→ナデ ㊥ハケ(6本/1cm)→ケズリ ㊦指頭痕→ナデ	㊐指頭痕→ハケ→ナデ ㊥指頭痕→ナデ	石・長(3)	○	F10−c2④ c3③	
149	甕	底径 6.0 残高 12.8	平底。	㊥ハケ ㊦布目圧痕	ハケ（7本/1cm） 指頭痕	石・長(4)多量	○	F10−a2②	

SX5 出土遺物観察表　土製品

（3）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
150	甕	底径 5.6 残高 18.8	立ち上がりをもつ平底。	(胴下)ケズリ→ハケ (底)指頭痕	指頭痕→ナデ	石・長(2)多量	○	F9-a3④	
151	甕	底径 5.8 残高 13.1	平底。	(胴上)ハケメ (8本/1cm) (底)指頭痕→ナデ	(胴下)ハケ (底)指頭痕	石・長(3) 金	○	F9-d1	
152	甕	底径 (3.4) 残高 11.6	丸みをもつ平底。	ケズリ→ナデ	ナデ	石・長(4)多量	○	F9-c4①	
153	甕	底径 4.8 残高 15.0	わずかに立ち上がりをもつ上げ底。	(胴)ハケメ (4本/1cm) (底)指頭痕	(胴)ハケ (7本/1cm) (底)指頭痕→ナデ	石・長(2)多量	○	F9-b3① F10-c3④	
154	甕	底径 5.6 残高 13.8	くびれの上げ底。	(胴)ハケ (底)指頭痕	(胴上)ハケ (5本/1cm) (胴下)ナデ	石・長(4)多量	○	F9-b4② ③ -c3	
155	甕	底径 5.5 残高 12.5	わずかにくびれをもつ平底。	(胴)ハケ (底)タタキ	指頭痕→ナデ	石・長(8)多量	○	F10-c3④	
156	甕	底径 6.0 残高 12.1	くびれをもつ上げ底。	(胴上)ハケ→ナデ (底)指頭痕→ナデ	指頭痕→ナデ	石・長(3)多量	○	F10-b1④	
157	甕	底径 (5.6) 残高 7.2	立ち上がりをもつ平底。	マメツ (底)指頭痕	指頭痕→ナデ	石・長(2)多量	△	F9-c3	
158	甕	底径 (6.0) 残高 6.7	立ち上がりをもつ上げ底。	(胴下)ハケ (底)指頭痕→ナデ	ハケ	石・長(2)多量	○	F10-b3④	
159	甕	底径 5.6 残高 14.0	わずかに立ち上がりをもつ上げ底。	(胴)ハケ (7本/1cm) (底)指頭痕	指頭痕、ナデ	石・長(3)多量	○	F9-b3④	
160	甕	底径 4.0 残高 10.0	小さくくびれる上げ底。	ハケ(6本/1cm)	指頭痕、指ナデ	石・長(3)	○	F9-b4③	
161	甕	底径 (4.0) 残高 5.8	立ち上がりをもつわずかな上げ底。	指頭痕、ナデ	ハケ(5本/1cm)、 指頭痕	石・長(3)多量	○	F9-c4①	
162	甕	底径 (4.6) 残高 9.6	くびれの上げ底。	(胴下)タタキ (底)指頭痕	(胴下)ハケ (底)指頭痕	砂 石・長(2)	○	F9-c4④	
163	甕	底径 (6.4) 残高 6.6	くびれの上げ底。	(胴下)ケズリ (底)指頭痕	指頭痕	石・長(5)多量	△	F9-c4②	
164	甕	底径 (2.8) 残高 6.8	下方に突出する厚い平底。	(胴下)指頭痕 ハケ(10本/1cm) (底)指頭痕	指頭痕、ナデ	石・長(4)多量	△	F9-c2	
165	壺	口径 (28.0) 残高 4.5	複合口縁。「コ」の字接合。	マメツ	マメツ	石・長(1～2)	△	F9-c3②	
166	壺	口径 (28.6) 残高 6.0	複合口縁。「コ」の字接合。	マメツ	ナデ、マメツ	石・長(1～3)	△	F9-b3④	
167	壺	口径 (25.6) 残高 15.3	複合口縁。「コ」の字接合。 口縁端部は面をなす。	ハケ(10本/1cm) →ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	石(1～4)多量 金	○	F9-b4③	
168	壺	口径 (25.0) 残高 5.8	複合口縁。「コ」の字接合。 口縁端部は面をなす。	タテハケ (7本/1cm) ヨコナデ	タテハケ (7本/1cm)	石・長(1～2)	○	F10-a1①	
169	壺	口径 (25.4) 残高 7.9	複合口縁。「コ」の字接合。	ハケ(8本/1cm) →ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ 指頭痕	石(1～3)多量 金	○	F9-b4④	

SX5 出土遺物観察表　土製品

（4）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
170	壺	口径(25.0) 残高 6.5	複合口縁。「コ」の字接合。口縁端部は面をなす。	ハケ(10本/1cm) →ヨコナデ	指頭痕→ヨコナデ	密 石(1～4)多量 金	○	F3-b4①	
171	壺	口径(25.0) 残高 11.0	複合口縁。「コ」の字接合。口縁端部は面をなす。	ヨコナデ ハケ	ヨコナデ 指頭痕 ハケ	石(1～4)多量 金	○	F9-b4①	
172	壺	口径(24.0) 残高 6.9	複合口縁。「コ」の字接合。口縁端部は面をなす。	ヨコナデ マメツ	ヨコナデ 指頭痕	石・長・多量 金	△	F10-c3①	
173	壺	口径(22.0) 残高 5.5	複合口縁。「コ」の字接合。口縁端部は面をなす。	ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	石(1～3) 金	○	F10-c1③	
174	壺	口径(21.6) 残高 9.1	複合口縁。「コ」の字接合。口縁端部は面をなす。黒斑。	ハケ(9本/1cm) →ナデ 指頭痕	ハケ(8本/1cm) →ナデ 指頭痕	石・長(1～3) 金	○	F10-c2③	
175	壺	口径 21.4 残高 9.2	複合口縁。「コ」の字接合。口縁端部は面をなす。	ハケ→ナデ (5本/1cm) (7本/1cm)	ハケ→ナデ 指頭痕	石・長(1～4) 金	○	F10-b1② -c1①	
176	壺	口径(21.4) 残高 14.3	複合口縁。「コ」の字接合。胴上半に「ノ」の字状の刻目。	ハケ→ナデ 指頭痕	指頭痕→ハケ	石・長(3)	○	F9-b3② -b4① ② ③	13
177	壺	残高 6.0	複合口縁。「コ」の字接合。頸部は内傾する。	ハケ(5本/1cm) 指頭痕	(頸)ハケか ヨコナデ 指頭痕	石・長(4)多量 金	○	F9-c4① ② F10-c1①	
178	壺	口径(19.2) 残高 16.0	複合口縁。「コ」の字接合。口縁端部は丸い。頸部に刻目突帯。	ハケ(3本/1cm) →ナデ	ヨコハケ(4本/1cm)→ナデ 指頭痕	石・長(1～2)	○	F9-b4③ ④	
179	壺	口径(17.6) 残高 6.3	「コ」の字接合の複合口縁壺。二次口縁部はやや内湾し、口縁端部は立ち上がり気味。	ハケ→ナデ	ナデ	密 石(1～2) 金	○	F9-b4①	
180	壺	口径(15.2) 残高 8.5	「コ」の字。口縁端部は丸くおさめられる。波状文と竹管文が組み合い、これらが2段にわたって施文される。	指頭痕 (6～8本/1cm)	マメツ	石・長(1)	△	F9-c3②	13
181	壺	口径(16.4) 残高 5.3	「コ」の字接合の複合口縁壺。口縁端部、接合部は面をなす。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1～3)	○	F10-c2④	
182	壺	口径(14.8) 残高 6.0	やや外反する二次口縁部。口縁端部はあまい面をなす。「コ」の字。	ハケ(10本/1cm) →ナデ	指頭痕→ナデ	石・長(1～3)	○	F9-a4③	
183	壺	口径(12.8) 残高 6.3	「コ」の字。二次口縁はやや短く、接合部は面をなす。マメツのためはっきりしないが波状文4条か。	指頭痕→ハケ (6本/1cm)→ナデ	ハケ→ナデ	石・長(1～2)	○	F10-c3④	
184	壺	口径(13.0) 残高 8.0	短い二次口縁。口縁端部は丸くおさめられている。長めの頸部。「コ」の字接合。	ハケ(8本/1cm)	ハケ(5本/1cm)	石・長(1～4)	△	F9-a3④	
185	壺	口径(11.0) 器高 44.6 底径 5.5	「コ」の字接合。二次口縁部は直立し、口縁端部は丸くおさめる。頸部に斜格子目文の刻目突帯。平底。	(口)指頭痕→ハケ(7本/1cm)→ナデ (胴)ハケ→ミガキ→ナデ (底)指頭痕→ナデ	指頭痕→ハケ (5本/1cm)→ナデ	石・長(2)少量	○	F9-b3① ② ④ b4①-③ c1① c3③	13
186	壺	口径(26.0) 残高 10.9	「く」の字接合。二次口縁部は直立気味で、口縁端部は面取りしてる。直線文5条。	ハケ(10本/1cm) →ナデ	マメツ	粗 石・長(1～3)多量	△	F9-c4① ②	
187	壺	口径(25.4) 残高 7.5	「く」の字接合の複合口縁壺。口縁端部は面をなす。	ハケ→ヨコナデ	指頭痕(マメツ)	石・長(3)多量	○	F9-b3③	
188	壺	口径 23.6 残高 25.3	直立する短い二次口縁部。口縁端部はナデ凹み。「く」の字接合。赤色顔料。	ハケ(5本/1cm)	ハケ(10本/1cm)	石・長(1～4)	○	F10-b1③	13
189	壺	口径(19.6) 残高 9.0	「く」の字接合。二次口縁部は直立し、口縁端部は面をなす。接合部は外方にタガ状に突出する。	ハケ(4～5本/1cm) →ナデ	指頭痕→ナデ	石(1～3)	○	F10-c2①	

SX 5 出土遺物観察表　土製品

（5）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
190	壺	口径(18.0) 残高 7.7	直立気味の二次口縁部。口縁端部は面をなす。頸部に貼付突帯。「く」の字接合。	ハケ(5本/1cm)→ナデ	指頭痕→ナデ	石(1)	○	F10-c1①	
191	壺	口径(18.0) 残高 5.8	「く」の字接合。口縁端部は面をなす。	ヨコナデ	ヨコナデ	石(1～3)・ウンモ	○	F10-b1②	
192	壺	口径(18.4) 残高 6.0	「く」の字接合。二次口縁部は直立し、口縁端部は面をなす。	指頭痕→ナデ	ナデ	長(5)	○	F10-c3④	
193	壺	口径(16.8) 残高 8.4	「く」の字接合。二次口縁部は短く口縁端部は面をなす。	ハケ(5本/1cm)→ナデ	ハケ→ナデ	石・長(1)	○	F9-b3②	
194	壺	口径(14.4) 残高 9.9	「く」の字接合。二次口縁部は短く、口縁端部はあまい面をなす。	ハケ(9本/1cm)→ナデ	指頭痕→ハケ→ナデ	石・長(1～3)・金	○	F9-c4②	
195	壺	口径(14.0) 残高 3.8	「く」の字接合。口縁端部は面をなし、接合部はやや下方に拡張している。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1～1.5) 金	○	F10-c1③	
196	壺	口径(12.8) 残高 4.6	「く」の字接合。口縁端部は面をなす。	ナデ	ナデ	石・長(1～2)	△	F9-b2④	
197	壺	口径 14.4 残高 7.9	「く」の字接合。二次口縁部は直立気味で口縁端部は面をなす。	ハケ(10本/1cm)	指頭痕→ハケ	石・長(1～2)	○	F10-a2④ -b2②	
198	壺	口径(13.2) 残高 4.8	複合口縁壺。二次口縁部は内傾し、端部は面をなす。	ナデ	ヨコナデ	石(1～2) 金	○	F10-c2④	
199	壺	口径(17.4) 残高 3.4	複合口縁壺。二次口縁部は短く内傾する。	ヨコナデ ハケ	ハケ→ナデ	石・長(1～2)	○	F9-b3②	
200	壺	口径(16.0) 残高 4.9	複合口縁壺。「く」の字接合。	マメツ	マメツ	石(1～2)	○	F9-b3③	
201	壺	口径(16.2) 残高 10.0	複合口縁壺。二次口縁部は直立気味に立ち上がる。	マメツ	マメツ	石・長(1～5)	◎	F9-d1	
202	壺	口径(15.6) 残高 4.9	複合口縁壺。「く」の字接合。	マメツ	マメツ	石(1～3)	○	F10-b1①	
203	壺	口径(14.2) 残高 4.0	複合口縁壺。「く」の字接合。二次口縁部は内傾し、端部は面をなす。	ハケ→ヨコナデ	ヨコナデ	石(1～2) 金	○	F10-c1④	
204	壺	口径(12.0) 残高 5.3	複合口縁壺。「く」の字接合。	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	石・長(1)	○	F10-c2①	
205	壺	口径(15.4) 残高 6.9	複合口縁壺。「く」の字接合。二次口縁部は直立し、端部は面をなす。	ハケ→ヨコナデ	(口端)ヨコナデ ハケ→ヨコナデ	密 石(1～2)	○	F10-c1②	
206	壺	口径(14.6) 残高 6.6	複合口縁壺。「く」の字接合。接合部はタガ状に突出する。	指頭痕→ヨコナデ	(口)ヨコナデ (頸)指頭痕→ヨコナデ	石・長(1～3) 金	○	F9-c4	
207	壺	口径(12.0) 残高 2.9	複合口縁壺。口縁部に3条の沈線。口縁部は直立気味に立ち上がる。	ヨコナデ	ヨコナデ	長(1)	○	F9-a3 -b4①	
208	壺	口径(15.4) 残高 7.8	複合口縁壺。「く」の字接合。口縁部は直立気味に立ち上がる。接合部はタガ状に突出する。	ハケ→ヨコナデ	(口端)ヨコナデ ハケ→ナデ	石・長(1～3)	○	F10-c1③	
209	壺	口径(17.4) 残高 3.0	複合口縁壺。口縁部は直立気味に立ち上がる。二次口縁部外面に三角文か。	ナデ	ナデ	石・長(1～2)	○	F10-c1②	

SX 5 出土遺物観察表　土製品

（6）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
210	壺	口径 (16.0) 残高 4.6	短い口・頸部の単口縁壺。	ハケ→ヨコナデ	ハケ→ヨコナデ	石・長(1～2)	○	F9-b4①	
211	壺	口径 (13.0) 残高 3.8	外反する口縁部。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	石・長(1～3) 金	○	F10-b3④	
212	壺	口径 (12.0) 残高 3.5	大きく外反する口縁部。	ヨコナデ	ハケ→ナデ	石・長(1～2)	○	F10-c3	
213	壺	残高 12.6	扁球形の体部。頸部は短く内傾し、口縁部は欠損する。	頸 ヨコナデ 胴上 ナデ 胴下 ケズリ	頸 シボリ痕 指頭痕 胴 指頭痕→ナデ	石・長(4)	○	F10-c2③	
214	壺	口径 (7.2) 残高 7.8	長頸壺の口縁部片。タテ刷毛後に細く浅い多条の直線文。口縁端部は面をなす。	ヨコナデ、タテナデ、タテハケ	ヨコナデ	石・長(1～3)	○	F10-d3①	
215	壺	口径 (11.4) 器高 26.5 底径 5.4	肩部の張りが強く、直立気味の頸部にわずかに外傾する口縁部。胴部下半に焼成前線刻。	胴上 ハケ (6本/1cm) 底 ハケ→ナデ	口胴 ハケ→ナデ 底 ナデ	石・長(3)	△	F9-b4④ -c4① ②	14
216	壺	底径 4.4 残高 16.0	扁球形の体部。底部はやや丸みをもつ。刷毛調整後に線刻。黒斑。	ハケ 底 ナデ	指頭痕、ハケ	石・長(2) ウンモ	○	F9-a3④ -b3②	14
217	壺	残高 14.9	肩部の張りがやや弱い長い胴部。	ハケ(7本/1cm)	指頭痕→ナデ	石・長(2) ウンモ	○	F9-a3③	
218	壺	残高 7.0	肩部片。	ハケ(10本/1cm)	指ナデ、指頭痕 タテハケ (10本/1cm)	石・長(3)多量	△	F9-b4①	
219	壺	残高 8.1	扁球形の体部下半。	ハケ→ミガキ	ハケ、ナデ (9本／1cm)	石・長(5) ウンモ	○	F9-b2②	
220	壺	残高 6.1	長頸壺の体部。中位は内傾して立ち上がり、胴上位と中位に加飾。	ミガキ→ナデ	ナデ	石・長(1)少量	○	F9-b4② ③ ④	14
221	壺	口径 (17.0) 残高 27.3	外傾する長い頸部に、外反する口縁部。口縁端部は面をなす。器高40cmを越える大型品か。	口 ナデ 頸胴 ミガキ	口 ナデ、指ナデ 頸胴 ハケ、指頭痕 (6本/1cm)マメツ	石・長(1) 金	△	F10-c1①	14
222	壺	口径 (14.0) 残高 6.9	口縁部片、ゆるやかに外反する口縁部。	ハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	石・長(0.5～1)	○	F10-a1③	
223	壺	口径 (13.0) 残高 7.4	口縁部片。	マメツ	タテハケ (3本/1cm)	石・長(1～2)	○	F9-c4④	
224	壺	残高 2.5	肩部片。焼成前線刻。	ナデ	指頭痕	石・長(1)	○	F9-c3	15
225	壺	残高 2.8	肩部片。焼成前線刻。	マメツ	マメツ	石・長(3)多量 金	△	F10-c3②	15
226	壺	残高 3.1	肩部片。焼成前線刻。	マメツ	マメツ	石・長(2)	△	F9-c2	15
227	壺	残高 4.6	肩部片。焼成前線刻。	マメツ	マメツ	石・長(3)多量	△	F10-c1④	15
228	壺	残高 4.9	肩部片。焼成前線刻。	マメツ	マメツ	石・長(3)多量 金	△	F10	15
229	壺	底径 (7.0) 残高 9.8	わずかに立ち上がりをもつ平底。黒斑。	ナデ	指頭痕 ケズリ	石・長(4)多量	△	F9-c4②	

SX 5 出土遺物観察表　土製品

（7）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
230	壺	底径 6.0 残高 12.5	わずかに立ち上がりをもつ平底。胴下半に焼成前線刻。	胴ハケ(8本/1cm) 底指頭痕 ヨコナデ	指頭痕	石・長(3)多量 金	○	F10-b1③	15
231	壺	残高 9.5	胴下半に焼成前線刻。	ナデ・ケズリ	ナデ	石・長(3)多量 金	△	F10-b1③	15
232	壺	底径 (8.6) 残高 4.6	厚みのある平底。	胴ハケ→ミガキ →ナデ 底ナデ	ヨコハケ→ナデ (4本/1cm)	石・長(5) 金	○	F10-c2④	
233	壺	底径 (4.4) 残高 4.8	厚みのある平底。底部付近に焼成前線刻。	ハケ(6本/1cm) ナデ	指頭痕・ヨコナデ	石・長(2)多量 金	○	F10-c1①	15
234	壺	底径 (4.0) 残高 3.1	厚みのある平底。底部付近に焼成前線刻。	指頭痕→ナデ	マメツ	石・長(2)多量	△	F9-c4	15
235	壺	底径 3.6 残高 3.9	厚みのある平底。底部付近に焼成前線刻。	ハケ→ナデ (5本/1cm)	指頭痕	石・長(3)多量 金	○	F10-b1③	15
236	壺	底径 (6.4) 残高 2.1	やや立ち上がりをもつ平底。底外面に焼成前線刻。	ハケ(10本/1cm)	ハクリ	石・長(2)多量	△	F9-b3②	15
237	壺	底径 (7.4) 残高 4.2	やや立ち上がりをもつ平底。	ケズリ	ハケ(6本/1cm) →ナデ	石・長(2)・金	○	F9-b1	
238	壺	底径 6.0 残高 4.9	立ち上がりをもち、厚みのある平底。	ハケ(10本/1cm) →ナデ	ハクリ	石・長(2)	○	F9-b3③	
239	壺	底径 6.0 残高 13.7	底部はやや立ち上がりをもつ平底。胴部は球形。下半に焼成前線刻。	ハケ(13本/1cm) →ナデ	指頭痕→ナデ	石・長(4)金	○	F9-c2④	15
240	壺	口径 (18.8) 残高 3.8	口縁端部は上下に拡張され、直線文4条。外来系か。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1～3)	◎	F9-c2	
241	壺	口径 (14.0) 残高 18.8	長頸壺。肩部が張る胴部に、長い筒状の頸部。口縁は大きく外反し、端部は上方に拡張される。口端は直線文。頸部に凹線文。肩部に「ノ」の字文。搬入品。	口頸ヨコナデ 胴ミガキ	口ヨコナデ 頸シボリ痕 胴指頭痕・ケズリ	密・石・長(2)	○	F10-a1① ③ ④	14
242	壺	口径 17.0 器高 39.7 底径 (6.5)	長頸壺。肩部は張り、底部はやや小さい上げ底。長い筒状の頸部に、大きく外反する口縁部。胴内面は顕著なケズリ。	口ヨコナデ 頸ハケ(11本/1cm) 胴ハケ→ミガキ 底面指頭痕→ナデ	口ヨコナデ 頸上指頭痕→ハケ→ナデ 頸下シボリ痕 胴底ケズリ	石・長(4)・ウンモ	○	F9-a3④ -a4③ -b3② -b4①	14
243	鉢	口径 (14.6) 残高 6.2	ゆるやかに外反する口縁。口縁端部はあまい面をなす。	口ハケ→ヨコナデ 胴ミガキ	口ハケ→ヨコナデ 胴ヨコナデ	石・長(4)多量	○	F10-a1③	
244	鉢	口径 (5.2) 器高 8.7 底径 5.2	体部はやや内湾し、口縁端部は丸くおさめられている。直口口縁。平底。	胴上シボリ痕 胴下指頭痕	指頭痕→ナデ	砂・多量	○	F10-c1③	
245	鉢	口径 (11.2) 残高 6.6	ゆるやかに外反する口縁。口縁端部はあまい面をなす。	口ハケ 頸指頭痕→ハケ 胴ハケ	口ハケ→ヨコナデ 頸指頭痕 胴ハケ	石・長(2)多量	○	F9-b2②	
246	鉢	口径 (15.8) 器高 14.1 底径 9.6	体部はやや外傾し、口縁端部は丸くおさめられている。直口口縁。平底。	口ハケ 胴ミガキ 底面ハケ→ナデ	ハケ (6本/1cm)	石・長(2)多量	△	F10-b1③	16
247	鉢	口径 (15.4) 残高 6.9	ゆるやかに外反する口縁。口縁端部は丸くおさめられている。	指頭痕→ナデ	指頭痕→ナデ	石・長(3)多量	○	F10-d2② -d3①	
248	鉢	底径 5.8 残高 8.5	くびれをもつ上げ底。	胴マメツ 底指頭痕	ハケ (12本/1cm)	石・長(2)多量	△	F9-b3①	
249	鉢	底径 (4.3) 残高 2.3	くびれをもつ平底。	胴ハケ→ナデ 底面ナデ	指頭痕→ナデ	石(1)	◎	F9-a4④	

SX 5 出土遺物観察表　土製品

(8)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
250	鉢	底径 (3.0) 残高 4.0	くびれをもつ平底。	(胴)マメツ (底)ミガキ (底面)ナデ	(胴)マメツ (底)指頭痕	石・長(1)・ウンモ	○	F9-b4④	
251	鉢	底径 (17.6) 残高 2.7	脚付鉢の脚部。脚端部は丸くおさめられている。焼成前穿孔4方向。	ハケ→ミガキ	ハケ（マメツ）	石・長(2)・多量	○	F10-c1③	
252	高坏	口径 (31.2) 残高 4.8	坏部。有段。口縁は大きく外反し、口縁端部は面をなす。	指頭痕→ミガキ→ナデ	ナデ	石・長(2)・ウンモ	○	F9-b4①③	
253	高坏	口径 22.1 残高 6.3	坏部。有段。段から直立したのち外反する口縁。口縁端部は面をなす。	指頭痕→ハケ(9本/1cm)→ナデ	指頭痕→ハケ→ナデ	石・長(2)	○	F10-c2③	
254	高坏	残高 7.9	坏部片。有段。大きく外反する口縁。口縁端部の形態は欠損のため不明。	ハケ(8本/1cm)→ナデ	ハケ(5本/1cm)→ナデ	石・長(2)・少量	○	F9-b4③	
255	高坏	口径 (20.2) 残高 6.4	坏部片。有段。外反する口縁。口縁端部は面をなし、やや下方に拡張。焼成前線刻。	ナデ	ナデ	石・長(3)	△	F9-b4 -c4	
256	高坏	口径 26.0 器高 18.7 底径 (16.9)	稜をもって外反する口縁部。裾部に焼成前穿孔5方向。	(口)ハケ→ミガキ (坏)指頭痕ハケ→ナデ (裾)ハケ→ミガキ→ナデ	(口)ハケ→ナデ (坏)指頭痕→ナデ (裾)ハケ→ナデ	石・長(2) 金	○	F9-a3④	16
257	高坏	残高 12.2	坏部に有段。焼成前穿孔4方向か。	マメツ	(坏)ミガキ→ナデ 布目圧痕	石・長(3)	△	F9-b4②	
258	高坏	口径 (19.8) 残高 11.8	外反する口縁。有段。口縁端部は面をなす。焼成前穿孔5方向。	(口)指頭痕→ナデ (坏)ナデ (裾)ナデ	(口)指頭痕→ナデ (坏)ナデ (裾)指頭痕→ハケ→ナデ	石・長(3)	○	F10-b1②	
259	高坏	残高 3.8	坏部片。段をもって外反する口縁。口縁端部の形態は欠損のため不明。	ハケ→ナデ	ミガキ	石・長(2)	○	F10-c1①	
260	高坏	残高 10.7	焼成前穿孔。	(坏)ハケ→ナデ (裾)ミガキ	(坏)マメツ (裾)シボリ痕・指頭痕→ナデ	石・長(2)	○	F10-c4	
261	高坏	残高 8.1	焼成前穿孔4方向。	マメツ	マメツ シボリ痕	石・長(2)多量	△	F9-c3	
262	高坏	残高 14.8	脚部片。円板充填技法。	ナデ	シボリ痕・指頭圧痕 →ナデ	石・長(2) ウンモ	○	F9-b4③	
263	高坏	残高 8.7	坏部の底部は充填による。	ナデ	指頭痕→ナデ	石・長(1) 砂	○	出土地区 不明	
264	高坏	底径 (11.8) 残高 6.9	短い脚部。裾端部にあまい面をなす。焼成前穿孔。	布目圧痕か	シボリ痕→ナデ	石・長(4)	△	F9-c3④	
265	高坏	底径 (19.4) 残高 15.0	焼成前穿孔5方向か。	マメツ	(柱)シボリ痕→ナデ (裾)布目圧痕	石・長(2)	△	F9-c3	
266	高坏	底径 (15.0) 残高 2.6	大きく外反する裾部。裾端部は丸くおさめられている。焼成前穿孔。	マメツ	マメツ	石・長(3)	△	F10-b1③ -b4④	
267	高坏	底径 (18.0) 残高 3.4	大きく外反する裾部。裾端部は面をなす。焼成前穿孔。	マメツ、ヨコナデ	マメツ	石・長(2) ウンモ	△	F9-c3	
268	高坏	底径 (13.0) 残高 7.7	焼成前穿孔。端部面取り。	ハケ→ミガキ→ナデ	シボリ痕・指頭痕→ナデ	石・長(3) ウンモ	○	F9-b2①	
269	高坏	口径 (29.2) 残高 6.7	大きく外反する口縁。口縁端部は下方に垂下（拡張）させ端面に直線文3条を施す。	(口端)ハケ→ナデ (口)ハケ→ミガキ→ナデ	(口端)ハケ→ミガキ (口)ハケ→ミガキ→ナデ	石・長(1)	○	F9-b3② -b4①	

SX 5 出土遺物観察表　土製品

(9)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
270	高坏	底径 (21.0) 残高 3.6	裾部片。有段。 焼成前穿孔。	マメツ	マメツ	石・長(3)	△	F9-c4①	
271	器台	口径 46.8 器高 23.1	斜線充塡の三角文。 焼成前穿孔（4方向)。	ハケ→ナデ	(口胴)ナデ、指頭痕 (裾)ハケ→ミガキ→ナデ	石・長(1)	△	F10-b1③	16
272	器台	口径 29.4 残高 1.65	口縁端面に斜線充塡による三角文が施されている。	ナデ	ナデ	石・長(3)少量	△	F10-c2④	16
273	器台	口径 (31.0) 残高 2.6	2条の半載竹管文。	(口端)指頭痕→ナデ (口)ナデ	ミガキ→ナデ	石・長(2)・ウンモ	○	F9-c4	16
274	器台	底径 (28.6) 残高 3.7	大きく外反する裾部。裾端部はナデのため上方にやや拡張されている。	指頭痕→ナデ	ナデ	密 石(1)	○	F9-b2②	
275	器台	底径 (19.6) 残高 5.2	底部。穿孔が施されていたかもしれない。	マメツ (底)ヨコナデ	指頭痕	石・長(2)	△	F9-b3②	
276	器台	底径 (28.0) 残高 4.4	底部。5条の沈線。	ヨコナデ	ヨコナデ→ケズリ	石・長(2) 金	○	F9-c1	16
277	支脚	底径 9.3 残高 12.3	受部は、「U」字状に傾斜する。	(口底)ナデ (胴)指頭痕→ナデ	シボリ痕 指頭痕→ハケ(7本/1cm)→ナデ	石・長(3)	○	F9-c4①	
278	支脚	受部径 (10.2) 残高 9.5	中空。受部は斜めにカットされる。	指頭痕→ナデ	指頭痕→ナデ	石・長(3) ウンモ	○	F9-b3①	

SX 5 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
279	砥石	完存		9.0	5.8	4.8	256.6	F9－c3	16
280	砥石	完存		4.5	3.7	3.0	81.6	F10－c2	16

表3　SR1 出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
281	甕	口径 (22.6) 残高 13.5	口縁部は短く外反し端部は面取り。 肩部の張りは弱い。	ヨコハケ(12本/1cm)→ナデ→ミガキ	(口)指頭痕→ハケ→ナデ (胴)指頭痕→ナデ	石・長(4) ウンモ	○	H10	
282	甕	口径 (24.2) 残高 4.1	口縁部は「く」の字に外反し端部は面取り。	指頭痕→ハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ(6本/1cm)	石・長(2) ウンモ	○	E4	
283	甕	口径 (20.0) 残高 5.3	ゆるやかに外反する口縁部。口縁端部は面をもつ。	マメツ	マメツ	石・長(4) ウンモ	△	H8	
284	壺	口径 (29.0) 残高 3.6	複合口縁壺。「コ」の字接合。	マメツ	マメツ	石・長(3)多量	△	F7	
285	壺	口径 (22.2) 残高 4.0	複合口縁壺。「く」の字接合。	(口)マメツ (胴)ヨコナデ	マメツ	石・長(1)多量	○	G8	
286	壺	口径 (15.6) 残高 4.1	複合口縁壺。「く」の字接合。	マメツ	マメツ	石・長(1)多量	△	G6	

SR1 出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
287	壺	口径(14.6) 残高 3.6	複合口縁壺。「く」の字接合。	ハケ→ナデ (10本/1cm)	指頭痕→ハケ (10本/1cm)→ ナデ	石・長(2)	○	F 7	
288	壺	口径(17.8) 残高 4.1	口縁部の屈曲が強く、短い口・頸部をもつ。口縁端部には2条の沈線を施す。	ヨコナデ	ナデ	石・長(1) ウンモ	○	H10	
289	壺	残高 6.0	複合口縁壺の頸部片。斜格子文の刻目突帯が頸部に巡る。	ハケ (5本/1cm)	マメツ	石・長(2)	△	H 7	
290	壺	残高 6.5	複合口縁壺。頸部に斜格子文の刻目突帯。	ハケ・ヨコナデ (12本/1cm)	ハケ(15本/1cm)	石・長(2)多量	○	F11	
291	壺	残高 5.1	直立する細長い頸部をもつ。肩部との境界には6条の沈線を施す。	ミガキ	ミガキ	石・長(2)	○	F10	
292	高坏	残高 7.2	柱部片。坏底部は充塡技法でない可能性がある。	マメツ	指頭痕→ナデ	石・長(2) 金	○	F 9	
293	器台	残高 10.5	焼成前穿孔。4方向か。	マメツ	マメツ 指頭痕	石・長(2) ウンモ	△	F10	
294	器台	口径(37.0) 残高 2.1	受部片。端部が下方に拡張され、端面に加飾。	マメツ	マメツ	石・長(1) ウンモ	△	F 7	
295	甕	口径(34.2) 残高 9.4	口縁部片。	ヨコナデ	ヨコナデ	密	○	G 8	
296	甕	口径(21.8) 残高 8.0	口縁部片。頸部は稜をもって外反する。	㊐回転ナデ ㊒回転カキ目	㊐回転ナデ ㊒タタキ	密	○	F 5	
297	坏蓋	残高 2.1	宝珠つまみの付く坏蓋。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	G 6	
298	坏蓋	口径 (8.2) 器高 3.4	宝珠つまみの付く坏蓋。笠形の天井部からなだらかに下り、口縁部は丸く仕上げる。かえりは、口縁端部より短い。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	G 6	
299	蓋	口径 9.0 残高 1.7	やや扁平な笠形の天井部。口縁端部は細くなる。	回転ヘラ削り 回転ナデ	回転ナデ	密	◎	Tr	
300	坏身	口径(12.7) 残高 3.4	立ち上がりは内傾し、端部は丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	G 6	
301	坏蓋	口径(19.8) 残高 2.2	やや扁平な笠形の天井部。口縁部は下方へ屈曲する。受部は上外方へのびる。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	E 4	
302	坏身	口径(12.0) 残高 2.8	立ち上がりは内傾し、端部は丸く仕上げる。受部は上外方へのびる。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	出土地区 不明	
303	坏	口径(12.4) 底径 8.6 器高 3.2	無台坏。口縁端部はやや丸みをもつ。	回転ナデ	回転ナデ	密 石・長(1)	◎	F 6	
304	坏	底径(11.0) 残高 3.4	口縁部は欠損。高台は「ハ」の字状に開き接地面は凹面をなす。	㊒回転ナデ ㊓回転ヘラ削り	回転ナデ	密 長(1)	◎	G10	
305	坏	底径(11.0) 残高 1.4	口縁部は欠損。高台は「ハ」の字状に開き接地面は凹面をなす。	回転ナデ 回転ヘラ削り	ナデ	密	◎	G 5	
306	蓋 (短頸壺)	口径(10.6) 残高 4.5	丸みのある天井部。口縁端部は内傾する。	回転ナデ 回転ヘラ削り	回転ナデ ナデ	密	◎	F 5	

SR1出土遺物観察表　土製品

（3）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
307	壺	口径 (10.4) 残高 4.8	広口壺。頸部は外反し口縁端部は丸く仕上げる。	ナデ	ヨコナデ	密	△	G8	
308	壺	口径 (13.6) 残高 5.3	広口壺。頸部は外反し口縁端部珠玉縁状に仕上げる。	㊐回転ナデ ㊖タタキ	回転ナデ	密 石・長(1)	◎	F9	
309	壺	口径 (12.8) 残高 4.7	頸部は外反し口縁端部はあいまいな面をもつ。	回転ナデ	㊐回転ナデ ㊖タタキ (青海波紋)	密 石(1)	◎	F9	
310	壺	口径 (17.0) 残高 4.7	頸部は直線的に立ち上がり口縁部は外反する。端部は拡張する。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	G6	
311	壺	口径 (17.8) 残高 8.8	頸部は直線的に立ち上がり、口縁端部は珠玉状に仕上げる。	㊐㊖回転ナデ ㊒タタキ後回転ナデ	㊐㊖回転ナデ ㊒タタキ (青海波紋)	密 石・長(2)	◎	F5	
312	壺	残高 5.2	頸部片。肩部に線刻。	回転ナデ	回転ナデ	密 石・長(1)	◎	F7	
313	短頸壺	口径 (14.6) 残高 5.9	短頸壺。頸部は短く外反する。	㊐ヨコナデ ㊒タタキ	㊐ヨコナデ ㊒タタキ	密	△	G9	
314	長頸壺	残高 6.3	半球形の体部。肩部に刺突文を施す。	㊖ナデ ㊒ヨコナデ	㊖ナデ ㊒ヨコナデ	密	○	G7	
315	長頸壺	残高 4.5	胴部片。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	F7	
316	壺	残高 6.3	長頸壺。頸部片。頸部は外反する。	ヨコナデ	ヨコナデ→指頭痕	密 砂	○	F4	
317	高坏	口径 (11.1) 残高 9.9	無蓋、長脚二段透かし。透かしは長方形。	回転ナデ	㊍回転ナデ ㊏シボリ痕	密	◎	F5	
318	高坏	底径 9.8 残高 5.5	低脚。裾部は大きくひらき、脚端部は下方にわずかに屈曲する。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	G9	
319	高坏	底径 11.8 残高 13.8	長脚。外面に自然釉。無蓋。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	G6	
320	瓶	口径 12.7 器高 17.9	頸部は外反した後屈曲し、口縁部は外反気味に開く。肩球形の体部。	回転ナデ	㊐㊒回転ナデ ㊓回転ヘラ削り	密 長(4)	◎	G7	17
321	ふいご	長さ 4.2 幅 2.9 厚さ 2.1	大きく欠損する。外面に気泡が残る。鉄滓が付着する。	指頭痕、ナデ	ナデ		○	H9	17
322	ふいご	長さ 5.4 幅 4.4 厚さ 2.7	大きく欠損する。	指頭痕、ナデ	ナデ		○	H9	17

SR1 出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
323	鉄滓	一部欠	鉄	6.2	5.7	2.8	94.7	F 3	17

表4　SX13 出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
324	甕	口径 (19.0) 残高 4.2	ゆるやかに外反する口縁部。	(口端)ヨコナデ (口)指頭痕→ヨコナデ (胴)ハケ	(口)ハケ→ヨコナデ (胴)ナデ	石・長(1)	○		
325	短頸壺	口径 13.0 器高 42.5	完形品。口縁部は直立し、端部は尖り気味に丸く仕上げる。半球形の体部。	(口)ナデ (胴上)タタキ→ナデ (胴下)ケズリ→タタキ (底)タタキ	ヨコナデ	密	◎		17
326	坏身	口径 (12.6) 残高 2.3	たちあがりは短く内傾し、受部は水平にのびる。	マメツ	マメツ	長(1)	△		
327	高坏	残高 3.4	脚部は大きく外反する。	マメツ	マメツ	密	△		

表5　SD11 出土遺物観察表　　土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
328	甕	口径 (18.4) 残高 5.2	口頸部は外反し、口縁端部付近でやや垂れ下がる。口縁端部に稜をなす。	(口端)回転ナデ (口)回転カキ目	回転ナデ	密	○	F 5	
329	甕	口径 (17.4) 残高 4.2	口縁部は外反し、口縁端部は内傾し内面に稜をなす。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	E 4	
330	甕	口径 (20.4) 残高 7.3	頸部は稜をなして屈曲し、端部は外反する。口縁端部は内傾する面をなす。	(口)回転ナデ (胴)タタキ	(口)回転ナデ (胴)タタキ→回転ナデ	密	○	E 5	
331	坏	底径 (10.8) 残高 1.7	高台付坏。輪高台。	回転ナデ マメツ	マメツ	石・長(1)	△	E 4	
332	坏	底径 (11.6) 残高 1.6	高台付。高台は輪高台、「ハ」の字状に開く。	回転ナデ (底)回転ヘラ切り	ナデ	密	◎	F 5	
333	坏	底径 (10.8) 残高 3.2	高台付。体部は直線的に立ち上がる。 高台は輪高台。	回転ナデ	(坏)回転ナデ (底)指ナデ	砂	◎	E 4	
334	坏	底径 (7.0) 残高 2.2	高台付。	回転ナデ (底)回転糸切り	回転ナデ	長(1)	◎	E 5	
335	坏	底径 (7.4) 残高 1.6	高台付。	回転ナデ (底)ナデ	ナデ	密	△	F 4	
336	坏	底径 (6.6) 残高 2.3	平底の底部から斜め上方に直線的に立ち上がる。	回転ナデ	指ナデ	密	○	E 4	
337	坏	底径 (10.0) 残高 1.6	無台坏。体部は斜め上方に直線的に立ち上がる。	回転ナデ、ナデ	指ナデ	石・長(1)	△	F 4	
338	皿	口径 (12.8) 器高 1.6 底径 (9.4)	体部は内湾して立ち上がり口縁部は外反する。	マメツ	マメツ	密	△	E 5	
339	坏	口径 (12.7) 器高 4.0 底径 6.0	体部は斜め上方に直線的に立ち上がる。	(坏)回転ナデ (底)回転ヘラ切り	回転ナデ	密	○	E 4	
340	瓦器椀	口径 (15.8) 残高 2.7	口縁は外反し口端は内湾する。	横ナデ、指頭痕	(口端)ヨコナデ (口)ミガキ	密	○	D 3	
341	皿	口径 (8.0) 器高 1.5 底径 4.6	体部は外反する。	(口)回転ナデ (底)回転糸切り	回転ナデ、ナデ	密	○	F 4	

SD11 出土遺物観察表　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
342	鉢	口径 (18.6) 残高 5.9	体部は内反し口縁部は玉縁状に仕上げる。	ヨコナデ	回転ナデ	密	○	E 4	
343	壺	口径 (46.6) 残高 6.0	亀山焼。口縁端部はナデ凹む。	(口端)横ナデ (胴)タタキ	ナデ	石·長(1)	○	F 5	
348	ふいご	長さ 3.6 幅 3.6 厚さ 2.0	大きく欠損。羽口片。気泡残る鉄滓付着。	指頭痕、ナデ	ナデ		○	F 5	
349	ふいご	長さ 8.5 幅 5.3 厚さ 2.5	一部欠損。羽口片。気泡残る鉄滓付着。	指頭痕、ナデ	ナデ		○	F 5	

SD11 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
344	勾玉	完存	硬玉	4.0	2.4	1.25	13.7	E 4	18
345	権状石製品	ほぼ完存		5.15	3.4	2.4	57.0	D 4	18

SD11 出土遺物観察表　鉄製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
346	棒状	下半欠	鉄	4.9	3.0	1.7	18.8	F 5	18
347	タガネ状	欠	鉄	4.3	1.8	1.1	19.3	F 4	18
350	鉄滓	完存	鉄	6.9	9.2	3.3	197.7	E 1	18
351	鉄滓	完存	鉄	7.3	8.9	3.0	176.2	F 5	18
352	鉄滓	完存	鉄	6.4	6.7	4.0	148.9	E 4	18
353	鉄滓	一部欠	鉄	5.6	6.4	1.8	57.5	E 4	18
354	鉄滓	完存	鉄	3.8	4.5	2.4	40.0	E 4	18
355	鉄滓	完存	鉄	4.2	4.4	2.3	40.4	F 5	18
356	鉄滓	完存	鉄	2.9	4.3	1.8	30.0	F 5	18
357	鉄滓	完存	鉄	3.8	4.6	3.5	40.8	F 4	18
358	鉄滓	完存	鉄	3.7	5.4	3.0	49.5	F 4	18

表6　SK 出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
359	皿	底径 (6.8) 残高 0.6	土師皿の底部。体部は外反する。	(体)マメツ (底面)糸切り	マメツ	密	△	SK1	
360	坏	口径 (12.8) 残高 1.7	口縁は外反し、口縁端部は丸く仕上げる。	ヨコナデ	ヨコナデ	密	○	SK3	
361	坏	底径 7.0 残高 1.4	体部は外反する。	(体)ヨコナデ (底面)回転糸切り	ヨコナデ	長(1)	△	SK4	

表7　SD3 出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
362	羽釜	口径 (23.6) 残高 6.9	瓦質。三足付羽釜の口胴部。口縁端部より下がった位置にタガが貼りつけられる。	指頭痕→ヨコナデ	指頭痕→ヨコナデ	石・長(1)	○	F10	
363	羽釜	口径 (19.0) 残高 5.8	瓦質。三足付羽釜の口胴部。口縁端部より下がった位置にタガが水平に貼りつける。	指頭痕→ヨコナデ	指頭痕→ヨコナデ	石・長(1)	○	F10	
364	羽釜	口径 (19.0) 残高 3.5	瓦質。三足付羽釜の口胴部。口縁端部より下がった位置にタガが貼りつけられる。	指頭痕→ナデ	ヨコナデ	長(1)	○	F10	
365	羽釜	口径 (21.0) 残高 6.5	瓦質。三足付羽釜の口胴部。口縁端部より下がった位置にタガが下垂して貼りつける。	指頭痕→ヨコナデ	指頭痕→ヨコナデ	石・長(2)	○	F11	
366	羽釜	残高 5.6	瓦質。三足付羽釜の口縁部片。	指頭痕→ヨコナデ	ヨコナデ	密	○	F10	
367	羽釜	残高 3.1	土師質。三足付羽釜の口縁部片。口縁端部より若干下がった位置に貼りつくタガの端部は丸く仕上げられている。	マメツ	ヨコナデ	石・長(1)	△	F10	
368	羽釜	残高 6.8	瓦質。脚の接合部。	指頭痕→ナデ	ヨコナデ	石・長(1)	○	F10	
369	羽釜	残高 7.8	土師質。脚の接合部。	指頭痕→ナデ	マメツ	石・長(2)	○	F10	
370	羽釜	残高 13.6	土師質。脚部。	指頭痕→ナデ	ナデ	密	○	F10	
371	羽釜	残高 4.5	土師質。脚端部。	マメツ		石・長(1)	△	F10	
372	羽釜	残高 5.9	土師質。脚部。	ナデ		石・長(1)	○	F10	
373	羽釜	残高 6.5	土師質。脚部。	ナデ		石・長(3)	○	F10	

表8　SD8 出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
374	坏	底径 (5.8) 残高 3.1	土師質。体部は外反して立ち上がり稜をもつ。	ヨコナデ	㊍ヨコナデ ㊐回転糸切り→板状圧痕	ウンモ	△	E11	
375	羽釜	口径 (29.6) 残高 10.8	瓦質。三足付羽釜の口胴部。口縁端部より下がった位置にタガを貼りつける。煤付着。	㊐㊍ヨコナデ ㊍ナデ	ヨコナデ	石(1)	○	G10	
376	羽釜	残高 7.7	瓦質。三足付羽釜の脚部。煤付着。	ナデ	ヨコナデ	石・長(1)	○	G10	
377	こね鉢	口径 29.4 残高 8.8	東播系こね鉢。口縁部は外反し、口縁端部は内傾する面をなす。	㊐回転ナデ ㊍ヨコナデ	横ナデ	石・長(1)	○	F10	
378	こね鉢	口径 (25.2) 残高 4.0	東播系こね鉢。口縁部は外反し、口縁端部は内傾する面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	長(1)	○	出土地区不明	

SD8 出土遺物観察表　　鉄製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
379	刀子	完存	鉄	10.2	2.7	1.07	40.0	E11	19

表９　Ⅴ下層出土遺物観察表　　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
380	甕	底径 4.0 残高 10.0	くびれをもつ上げ底。	指頭痕→ナデ	ケズリ	石・長(1～3)・雲母	○	F10	
381	甕	残高 2.8	口頸部片。口縁端部は面をなす。	マメツ	マメツ	石・長(1)多量	△	E 5	
382	壺	残高 4.7	「コ」の字接合の複合口縁壺。	ハケ(7本/1cm)→ナデ	指頭痕→ハケ→ナデ	石・長(2)	○	E 9	
383	壺	口径 (19.0) 残高 4.0	「コ」の字接合。二次口縁部は短く直立し、口縁端部は丸く仕上げる。	指頭痕	マメツ	石・長(3)	△	F10	
384	壺	残高 2.9	「コ」の字接合。	ハケ→ヨコナデ	指頭痕→ハケ→ナデ	石・長(2)・金	○	Tr	
385	壺	口径 (14.6) 残高 5.7	「コ」の字接合。二次口縁部は短く、内傾する。口縁端部は面をなす。	指頭痕→ナデ	指頭痕→ナデ	石・長(3)・金	○	F10	
386	壺	口径 (15.0) 残高 5.0	「く」の字接合。二次口縁部は内傾する。口縁端部は面をなす。波状文３条。	ハケ(8本/1cm)→ヨコナデ	指頭痕→ハケ→ナデ	石・長(2)	○	E 8	19
387	壺	残高 4.0	頸部片。貼付突帯。	ハケ(7本/1cm)→ナデ	ナデ	石・長(1～2)多量	△	F10	
388	壺	残高 6.3	頸部片。直線文５条、刺突文２段、直線文11条。	ナデ	指頭痕→ナデ	石・長(2)・金	○	F10	19
389	壺	残高 9.0	胴部片。	指頭痕→ナデ	指頭痕→ナデ	石・長(2)	○	E 9	
390	壺	口径 5.0 残高 13.0	平底。胴下半に焼成前線刻。	(胴底)ハケ(7本/1cm) (底面)ナデ	指頭痕	石・長(1～3)多量	△	E 9	
391	高坏	残高 3.4	坏部片。有段。	ヨコナデ	ハケ(8本/1cm)→ナデ	密・金	○	F 3	
392	高坏	残高 8.5	脚部片。焼成前穿孔４方向。(φ1.4cm)	マメツ	シボリ痕→ナデ	石・長(2)	△	F10	
393	高坏	残高 7.3	脚部片。円筒状の柱部。	ナデ	(坏)マメツ (脚)ナデ	石・長(1)	○	F 8	
394	高坏	残高 6.3	脚部片。裾部へ向けて大きく広がる。上段４方向、下段６方向の焼成前穿孔(φ0.7cm)。	マメツ	マメツ	石・長(2)・金	○	F10	
395	器台	残高 9.6	柱部片。直線文６条以上２段、焼成前穿孔２段以上。何方向かは不明。	ミガキ	ハケ→ナデ	石・長(1)	○	F 9	
396	器台	底径 (30.2) 残高 7.1	大きく外反する裾部。裾端部は上方へやや拡張されている。	ハケ(10本/1cm)→ナデ	指頭痕→ハケ→ナデ	石・長(2)・金	○	F10	

Ⅴ下層 出土遺物観察表　　石製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
397	石庖丁	ほぼ完存	緑色片岩	9.5	3.8	0.56	34.7	F 8	19
398	石庖丁	1/4	緑色片岩	3.7	4.0	0.51	9.7	E 5	

表10　Ⅴ上層出土遺物観察表　　土製品

（1）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
399	甕	口径 (24.4) 残高 8.2	稜をもって外反する口縁部。口縁端部は丸く仕上げる。	口 指頭痕 ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	石・長(1～3) 金	○	F 3	
400	甕	口径 (20.6) 残高 5.8	ゆるやかに外反する口縁部。	ハケ(6本/1cm) →ナデ	ハケ(6本/1cm)	石・長(1～3) 金	△	F 9	
401	甕	口径 (20.0) 残高 8.8	ゆるやかに外反する口縁部。	口 ヨコナデ 胴 ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	石・長(1～3)	△	F 3	
402	甕	口径 (16.6) 残高 7.5	直立する頸部に外反する口縁部。口縁端部はナデ凹む。	口 横ナデ 胴 ハケ→ナデ	口 ナデ 胴 ケズリ	石・長(1～2)	○	F 9	
403	甕	口径 (17.0) 残高 7.3	ゆるやかに外反する口縁部。	口端 ナデ 頸 ハケ(7/cm) →ナデ	ハケ(6本/1cm)	石・長(1～2)	○	F10	
404	甕	口径 (20.4) 残高 5.1	口縁部は外反し、口端は外面肥厚する。	マメツ	マメツ	石・長(2)	△	F 3	
405	壺	口径 (25.8) 残高 4.4	複合口縁。「コ」の字接合。	マメツ	マメツ	石・長(1～3)	△	G 7	
406	壺	口径 (24.0) 残高 4.2	複合口縁。「コ」の字接合。	マメツ	マメツ	石・長(1～3)	△	G 7	
407	壺	口径 (23.4) 残高 5.7	複合口縁。「コ」の字接合。接合部は外方に突出する。	マメツ	マメツ	石・長(1～3) 金	△	G 7	
408	壺	口径 (24.0) 残高 4.3	複合口縁。「コ」の字接合。二次口縁部は直立気味に立ち上がり、外面に波状文を施す。	ハケ→ナデ	ヨコナデ	石・長(1～2) 金	△	F 3	
409	壺	口径 (21.0) 残高 4.8	複合口縁。「コ」の字接合。強いヨコナデにより口端は直立する。	口 ヨコナデ ハケ→ナデ	口 ハケ→ヨコナデ 頸 ナデ	石・長(1～2)	△	G 7	
410	壺	口径 (20.6) 残高 5.8	複合口縁。「コ」の字接合。接合部は外方にやや突出する。	マメツ	マメツ	石・長(1～2)	△	G 8	
411	壺	口径 (19.2) 残高 10.3	複合口縁。「コ」の字接合。口縁端部面をなす。頸部は短く直立する。	口 ヨコナデ 頸 ハケ (3～4本/1cm)	口 ヨコナデ 頸 ハケ (6本/1cm)	石・長(1～4)	△	F10	
412	壺	口径 (13.6) 残高 4.6	複合口縁。「コ」の字接合。口縁端部面をなす。	口 ヨコナデ 頸 ハケ→ナデ	ヨコナデ、指頭痕	石・長(1～2)	△	F10	
413	壺	口径 (14.0) 残高 5.1	複合口縁。「コ」の字接合。口縁端部面をなす。	口 ナデ、指頭痕 頸 ハケ→ヨコナデ	口 ヨコナデ 頸 ハケ	石・長(1～3)	△	F 9	
414	壺	口径 (11.6) 残高 6.3	複合口縁。「コ」の字接合。二次口縁部は強く内傾する。	口 ヨコナデ 頸 ハケ→ナデ	口 ヨコナデ 頸 ハケ	石・長(1～2)	△	F 3	
415	壺	口径 (18.6) 残高 3.4	複合口縁。「く」の字接合。	口 マメツ 頸 ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(1～2) 金	△	G 8	
416	壺	口径 (16.0) 残高 4.0	複合口縁。「く」の字接合。	ヨコナデ	口 ヨコナデ 頸 ハケ→ヨコナデ	石・長(1～2) ウンモ	△	G 7	
417	壺	口径 (16.0) 残高 6.2	複合口縁。「く」の字接合。一次口縁は長く外反し、二次口縁は短く内傾する。	口 ヨコナデ 頸 ハケ(7本/1cm) →ヨコナデ	口 ヨコナデ 頸 ハケ→ヨコナデ	石・長(1～2)	△	F11	
418	壺	口径 (14.0) 残高 6.6	「く」の字接合。二次口縁部はやや内湾しながら立ち上がる。口縁端部は面をなす。	ハケ (6本/1cm) →ナデ	マメツ	石・長(1～3) 小石(5)?	△	F 3	

Ⅴ上層出土遺物観察表　土製品

（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
419	鉢	残高 7.2	ゆるやかに外反する長めの口縁。	ハケ(10～11本/1cm)→ナデ	ハケ→ナデ	石・長(1～2)	○	F 3	
420	鉢	口径 (15.4) 残高 5.3	ゆるやかに外反する口縁。口縁端部は面をなす。	指頭痕→ハケ(7本/1cm)→ナデ	ハケ→ナデ	石・長(2)・金・多量	○	F 9	
421	鉢	口径 (8.0) 残高 5.4	内湾する直口口縁。	ハケ→ナデ	ハケ(4本/1cm)→指頭痕	石・長(1～2)・金	○	F11	
422	高坏	口径 (24.5) 残高 13.4	外反する口縁。有段。口縁端部は丸く仕上げる。	坏 ハケ(8本/1cm)→ナデ 脚 ハケ→ミガキ→ナデ	坏上 指頭痕→ハケ→ナデ 坏下 指頭痕→ハケ→ミガキ 脚 ナデ	石・長(2)・金	○	出土地区不明	
423	高坏	残高 3.6	坏部片。外反する口縁。有段。	坏上 ミガキ→ナデ 坏下 ハケ→ミガキ	坏上 ナデ 坏下 ミガキ	石・長(1)・ウンモ・少量	○	F 9	
424	高坏か壺	口径 (21.4) 残高 3.3	口縁端部は丸く仕上げる。有段。	マメツ	ハケ→ナデ	石・長(3)・ウンモ	△	F 3 F 4	
425	高坏	残高 10.5	脚部片。三角錐状に広がる柱部。	マメツ	坏 マメツ 脚 シボリ痕→ナデ	石・長(2)	○	F 3	
426	高坏	残高 9.5	脚部片。	マメツ	マメツ	石・長(1)少量	△	G 8	
427	高坏	残高 10.5	脚部片。焼成前穿孔5方向。(φ1.4cm)	マメツ	マメツ	石・長(1)多量	△	F 3	
428	高坏	残高 8.6	脚部片。焼成前穿孔4方向か？	ナデ	シボリ痕→指頭痕→ナデ	石・長(3)・ウンモ・少量	○	出土地区不明	
429	高坏	残高 7.5	脚部片。焼成前穿孔4方向。	マメツ	マメツ	石・長(1)・金	△	F 3	
430	高坏	残高 8.0	脚部片。接合部は円板充填技法。	ナデ	坏 ナデ 脚 指頭痕→ナデ	石・長(1)・ウンモ・少量	○	H 9	
431	高坏	残高 5.8	脚部片。裾部へ向けて大きく広がる。 焼成前穿孔4方向。(φ1.4cm)	ナデ	シボリ痕→指頭痕→ナデ	石・長(3)・ウンモ	○	F 11	
432	高坏	残高 6.7	脚部片。焼成前穿孔4方向。(φ1.0cm)	マメツ	マメツ	石・長(3)・金	○	F 3	
433	器台	残高 7.5	柱部。焼成前穿孔6方向。	ハケ(9本/1cm)→ナデ	ハケ→ナデ	石・長(2)多量	○	F10	
434	器台	残高 10.6	柱部片。焼成前穿孔6方向2段。(φ1.4cm)	ハケ(11～12本/1cm 5本/1cm)→ナデ	ハケ(11本/1cm)→ナデ	石・長(3)・ウンモ	○	F 3	
435	支脚	残高 9.8		指頭痕→ナデ	指頭痕→ナデ	石・長(3)	○	E10	
436	支脚	残高 12.4	「U」字状の受部を2ヶもつ。中空。	タタキ→ナデ	シボリ痕、指頭痕→ナデ	石・長(3)・ウンモ	○	F 3	
437	高坏	口径 (14.0) 器高 12.2 底径 (9.5)	やや内湾する口縁。口縁端部は面とりされている。三角錐状の柱部に外反する裾部をもつ。	指頭痕→ナデ	坏 ナデ 脚 シボリ痕→ナデ	密	○	E 8	
438	高坏	口径 (15.2) 残高 3.4	ゆるやかに内湾する口縁。口縁端部は丸く仕上げる。	ナデ	ナデ	密	○	F 6	
439	高坏	残高 6.5	脚部。三角錐状の柱部に外反する裾部。	マメツ	シボリ痕	密	△	E 8	

Ⅴ上層出土遺物観察表　土製品

（3）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
440	高坏	底径 (12.2) 残高 4.0	外反する短い裾部。	ナデ	ナデ	密・ウンモ	○	E 3	
441	高坏	底径 (10.6) 残高 6.8	外反する裾部。	ナデ	ケズリ	石・長(1)少量	△	E 8	
442	甑	残高 6.8	把手。上方向にのびる。端部は丸くおさめる。	指頭痕→ナデ	マメツ	石・長(1)	○	G 7	
443	甑	残高 4.6	把手。横方向に水平にのび、先端部は上方向にのびる。端部は丸くおさめる。	指頭痕→ナデ		密	○	E 9	
444	坏蓋	口径 (13.0) 残高 4.7	扁平な天井部。やや下垂する稜をもち、口縁部は直立気味に下がる。口縁端部は凹面をなす。	㊦回転ヘラ削り ㊤回転ナデ	回転ナデ	密	◎	E 9	
445	坏蓋	口径 (13.6) 器高 3.8	扁平な天井部。口縁部はやや外反し、口縁端部は丸く仕上げる。	㊦回転ヘラ削り ㊤回転ナデ	回転ナデ	密	◎	E11	
446	坏蓋	口径 (13.0) 器高 4.3	丸味のある天井部。口縁部はやや外反し、口縁端部はわずかに凹面をなす。	㊦回転ヘラ削り ㊤回転ナデ	回転ナデ	石・長(1～3)	◎	出土地区 不明	
447	坏蓋	口径 (12.0) 残高 3.1	扁平な天井部。口縁部はやや外反する。口縁端部は丸く仕上げる。	㊦回転ヘラ削り ㊤回転ナデ	回転ナデ	密	◎	G 9	
448	坏蓋	口径 (10.2) 残高 2.7	扁平な天井部。かえりは短く口縁端部より下がらない。	㊦回転ヘラ削り ㊤回転ナデ	回転ナデ	密・長(2)	◎	E 7	
449	坏蓋	口径 (10.0) 残高 2.7	口縁部は屈曲し、口縁端部とかえり端部はほぼ同じ位置で接地する。	㊦回転ヘラ削り →指頭痕 ㊤回転ナデ→指頭痕	回転ナデ→指頭痕	密	◎	E 7	
450	坏蓋	口径 (10.8) 器高 4.3	扁平な天井部。口縁はやや内湾し口縁で屈曲する。かえりは口縁端部より下がらない。	㊦回転ヘラ削り →ヨコナデ ㊤回転ナデ	回転ナデ	密	△	F 9	
451	坏蓋	口径 (16.8) 残高 2.1	笠形の天井部。口縁部は下方へ屈曲し、口縁端部は丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	G 4	
452	坏蓋	口径 (13.4) 残高 4.4	扁平な天井部。口縁部はやや外反し、口縁端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	F 6	
453	坏蓋	口径 (11.8) 残高 3.9	笠形の天井部。口縁部は外反し口縁端部は丸く仕上げる。	㊦回転ヘラ削り ㊤回転ナデ	回転ナデ	密	◎	F 9	
454	坏蓋	口径 (8.6) 残高 3.2	扁平な天井部にゆるやかに外反する口縁部。口縁端部は尖り気味。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	G10	
455	坏身	口径 (10.8) 残高 3.8	たちあがりは内傾し、端部は丸く仕上げる。受部は太く水平にのびる。	㊤回転ナデ ㊧回転ヘラ削り	回転ナデ	密・長	◎	E 8	
456	坏身	口径 (11.4) 残高 2.9	立ち上がりは比較的短く、内傾する。端部は丸く仕上げる。受部はやや上外方にのびる。	回転ナデ	回転ナデ	密 砂	◎	F 6	
457	坏	底径 (6.8) 残高 3.0	高台の付く坏。高台は体部と底部の境界線付近に付く。高台は貼り付け。	㊤回転ナデ ㊧ナデ	回転ナデ	密	◎	F 4	
458	坏	口径 (14.6) 底径 (10.0) 器高 3.8	高台の付く坏。高台は体部と底部の境界付近に付く。高台端部はやや内傾する。高台は貼り付け。	㊤ヨコナデ ㊧ヘラケズリ	ナデ	石(1)	◎	F 7	
459	坏	口径 (15.0) 底径 (10.6) 器高 4.5	高台の付く坏。高台は体部と底部の境界付近に付く。	回転ナデ	㊤回転ナデ ㊧ナデ	密 砂	◎	G 7	
460	坏	口径 (14.1) 底径 (10.2) 器高 4.3	体部と底部の境は稜をなし、高台は境界より内側に付く。高台は貼り付け。	㊤回転ナデ ㊧回転ナデ 回転ヘラ削り	回転ナデ	密	◎	F10	

上層出土遺物観察表　土製品

（4）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	版番
461	坏	底径 (10.8) 残高 2.4	高台の付く坏。高台接地面はわずかに凹面をなす。	㊐回転ナデ ㊞ナデ・回転ヘラ削り	ナデ	密	◎	F 7	
462	壺	口径 (23.0) 残高 4.5	頸部は小さく外反し、口縁端部は丸く仕上げる。口縁はひずんでいる。	㊐回転ナデ ㊐頸カキ目 →回転ナデ	回転ナデ	密	◎	F 4	
463	壺	口径 (19.0) 残高 5.8	頸部は稜をもって外反し、口縁端部は面をなす。	㊐ヨコナデ ㊐頸胴タタキ →ナデ消し	㊐ヨコナデ ㊐頸胴タタキ →ナデ消し	密	◎	F10	
464	壺	口径 (19.0) 残高 7.7	口縁部片。頸部は大きく外反。	タタキ→回転ナデ	指頭痕→ナデ	長(3)	◎	E 9	
465	壺	口径 (22.6) 残高 3.9	口縁部は外反し、口縁端部は丸く仕上げる。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	F11	
466	長頸壺	口径 (19.8) 残高 7.5	広口壺の口縁部。口縁は外反する。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	G 8	
467	壺	残高 7.5	長頸壺の頸部片。	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	密	◎	F 8	
468	壺	残高 8.1	球形の体部。頸部は大きく外反する。胴部に3～4条の波状文。	ナデ	㊐頸ナデ ㊐胴指頭痕→ナデ	密	◎	F10	
469	壺	残高 9.7	球形の体部。肩部に刺突文。		㊐頸回転ナデ ㊐胴回転ヘラ削り ㊞底ナデ	密	◎	E 8	
470	甕	口径 (12.2) 残高 9.1	口縁部は稜をもって外反する。口縁端部は細い。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	F10	
471	高坏	口径 (12.8) 残高 3.8	立ち上がりは内傾し、端部は内傾する。受部は水平にのびる。	㊐回転ナデ ㊞回転ヘラ削り	㊐回転ナデ ㊞ナデ	密	◎	F11	
472	高坏	残高 10.75	脚部片。脚部は大きく外反する。脚部に透かし上下2ヶ所。	回転ナデ	㊐坏ナデ ㊐脚しぼり・ナデ・回転ナデ	密	◎	F11	
473	高坏	残高 4.1	坏部片。坏部のひずみが大きい。	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	密	◎	F 9	
474	高坏	残高 6.1	脚部片。大きく開く裾部。	㊐坏回転ヘラ削り ㊐脚回転ナデ	㊐坏回転ナデ・ナデ ㊐脚回転ナデ	密	◎	G 7	
475	高坏	残高 4.7	脚部片。	回転ナデ	ナデ ㊐脚シボリ痕	密	◎	G 9	
476	高坏	残高 4.4	口縁部欠損。	回転ナデ	㊐坏ナデ ㊐脚回転ナデ	密	◎	G10	
477	高坏	残高 4.4	脚部は大きく外反している。	マメツ	マメツ	密	△	F 9	
478	高坏	底径 (9.2) 残高 4.0	低脚。脚部は大きく外反し、脚端面は、「コ」の字状に仕上げている。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	F10	
479	高坏	底径 (7.2) 残高 3.9	低脚。脚部は外方へ開き、脚端部は上下に拡張する。	㊐坏回転ヘラヘズリ回転ナデ ㊐脚回転ナデ	㊐坏ナデ・回転ナデ ㊐脚回転ナデ	密	◎	H 9	
480	高坏	残高 6.1	坏部及び脚部は欠損。脚部は大きく外反する。	回転ナデ	㊐坏ナデ ㊐脚回転ナデ	密	◎	G10	
481	高坏	底径 (8.6) 残高 6.1	ひずんでいる。脚端部は下方へ屈曲する。端部は凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	F 9	

Ⅴ上層 出土遺物観察表　　石製品

番号	器　種	遺存状態	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
482	打製石鏃	完　存	サヌカイト	3.6	2.4	0.55	4.5	D 8	
483	扁平片刃石斧	1/2	緑色片岩	6.1	2.2	0.65	13.6	E 3	
484	石庖丁	完　存	緑色片岩	11.4	4.7	1.55	118.1	G10	

Ⅴ上層 出土遺物観察表　　鉄製品

番号	器　種	遺存状態	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
485	鋤先状	両端欠	鉄	4.4	7.3	1.5	46.0	G 7	
486	棒　状	上下欠	鉄	2.3	1.15	1.24	3.7	F10	
487	棒　状	一部欠	鉄	3.3	2.5	1.7	10.1	F 3	

表11　Ⅳ下層出土遺物観察表　土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		胎　土	焼成	備考	図版
				外　面	内　面				
488	甕	底径 4.4 残高 3.2	小さい平底。内底面が凹む。	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	石・長(3)多量	○	G 6	
489	壺	残高 3.3	斜格子目文の刻目突帯あり。	ナデ	ナデ	石・長(3)多量	○	E 4	
490	壺	底径 (8.0) 残高 3.0	平底。	マメツ (指頭痕)	マメツ	石・長(2)多量	△	G 6	
491	壺	底径 (7.0) 残高 4.5	平底。	マメツ	マメツ	石・長(3)	○	G 6	
492	壺	底径 (6.8) 残高 2.3	平底。	マメツ	マメツ	石・長(3)	○	E 9	
493	鉢	底径 (3.8) 残高 3.3	くびれの上げ底。小型の甕形土器の可能性あり。	ナデ (一部ハケ)	ハケ→ナデ	石・長(1)	○	D 4	
494	高坏	残高 7.3	脚部片。柱部が円柱状で太く、中実。長い脚部を持つ高坏。	ナデ (マメツ) (指頭痕)	(坏底)マメツ (柱上)ナデ	密、赤色粒	○	G 5	
495	高坏	残高 8.1	脚部片。柱部が円柱状で太く、中実。長い脚部を持つ。	ナデ (マメツ)	マメツ (柱上)ナデ	石・長(1)多量	○	G 6	
496	甕	残高 4.2	口縁部。内外ともに稜をもち「く」の字に屈曲。口縁端部は尖る。	ナデ	ナデ	砂	△	D 4	
497	高坏	残高 5.3	三角錐の柱部。	マメツ	マメツ (シボリ痕)	石・長(2)	○	G 5	
498	坏蓋	口径 (8.6) 残高 2.3	笠形に天井部からなだらかに下がり、口縁部で屈曲。かえりは短く、口縁端部より下がらない。	(天)回転ヘラケズリ (口)回転ナデ	回転ナデ	密	◎	G 6	
499	坏蓋	残高 4.2	蓋。天井部は丸みを帯びる。口縁部は反り気味。	(天)回転ヘラ切りの未調整 (体)回転ナデ	回転ナデ	密	◎	F 9	

Ⅳ下層 出土遺物観察表　　土製品

(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
500	坏蓋	口径 (13.0) 残高 2.3	口縁端部は下内方に屈曲する。	回転ナデ	回転ナデ	密・長(3)	◎	H10	
501	坏身	口径 (11.5) 器高 3.9 底径 8.8	立ち上がりはやや内湾。底部は扁平。口縁端部は尖る。	㊐回転ナデ ㊡ナデ	回転ナデ	密・石・長(1)	◎	H 8	
502	坏身	口径 (11.6) 器高 3.2 底径 8.0	立ち上がりは直立し。受部は水平。底部は扁平。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ (ヘラ切り痕)	㊐回転ナデ ㊡回転ナデ→ナデ	密・長(1)	◎	G 6	
503	坏身	口径 (8.7) 残高 3.4	立ち上がりは内傾し、受部は内湾する。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	回転ナデ	密・長(1)	◎	F10	
504	坏身	口径 (10.0) 残高 2.2	口縁は内傾し、受部は水平。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	G 9	
505	坏	底径 (10.6) 残高 2.9	貼り付け高台。高台は底体部より内側につく。	回転ナデ	回転ナデ	密・石・長(1)	○	G 9	
506	坏	底径 (9.0) 残高 1.3	貼り付け高台。高台は内側につく。	回転ナデ	回転ナデ	密・石・長(1)	◎	E 4	
507	坏	底径 (11.0) 残高 2.1	貼り付け高台。「ハ」の字に開く。底体部より内側につき、坏の立ち上がりはゆるやか。	回転ナデ	回転ナデ→ナデ	密	◎	D 4	
508	坏	底径 (11.0) 残高 3.7	貼り付け高台。底体部の境につき、直立する。	㊍回転ナデ ㊡マメツ	回転ナデ	密・砂	△	E 4	
509	坏	底径 (12.6) 残高 4.4	貼り付け高台。直立に下がり内側よりにつく。坏部の立ち上がりは急。	回転ナデ	回転ナデ	密	△	E 4	
510	高坏	底径 (10.0) 残高 2.5	貼り付け高台。「ハ」の字に開き、底体部の境につく。坏の立ち上がりは急。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	D 4	
511	高坏	底径 (12.0) 残高 1.5	貼り付け高台。底体部の境につき、やや「ハ」の字に開く。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	E 4	
512	高坏	口径 (14.4) 残高 4.2	無蓋高坏。碗形の坏部。口縁端部は尖り気味。	㊐㊍回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	㊐㊍回転ナデ ㊡回転ナデ→ナデ	石・長(3)	◎	G 9	
513	高坏	口径 (10.0) 残高 3.0	口縁は直線的に立ち上がる。端部は尖り気味。1条の沈線がめぐる。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	G 9	
514	高坏	残高 3.0	脚部片。長脚の高坏。	回転ナデ	回転ナデ→ナデ	密 石・長(1)	◎	E 4	
515	甕	口径 (21.0) 残高 3.1	口縁部。ゆるやかに外反する。口縁部は外面に突出する。口縁端部は面をもつ。	㊐回転ナデ ㊥回転カキ目	回転ナデ	密・石・長(1)	◎	G10	
516	甕	口径 (23.0) 残高 11.3	口縁～胴部上半分。口頸部はつよく外反する。口縁端部は外側に玉縁状に肥厚。	㊐回転ナデ ㊍平行タタキ →ナデ	㊐回転ナデ ㊍青海波文タタキ →ナデ	密	◎	G 6	
517	壺	残高 5.3	四耳壺、又は三耳壺の胴部上半分。頸胴部のくびれに強い稜を持ち、直下に耳を貼付する。	㊍回転カキ目 ㊉ナデ	㊍同心円文タタキ →ナデ	密	◎	I 8	
518	壺	口径 (17.8) 残高 5.2	口頸部は強く外反。口縁端部の外側は肥厚。	マメツ ㊍平行タタキ	マメツ ㊍同心円文タタキ	密・石・長(1)	△	G 5	
519	壺	口径 (11.0) 残高 2.8	口頸部は短く外反する。口縁端部は内側に突出する。	回転ナデ	回転ナデ	密	△	G 6	
520	壺	底径 (11.0) 残高 4.0	有台壺の底部。高台は底体部の境につき、「八」の字に開く。	回転ナデ	回転ナデ	密・石・長(1)	△	F 5	

Ⅳ下層 出土遺物観察表　　土製品

（3）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
521	壺	残高 4.3	有台壺の底部と考える。器厚が非常に厚い。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	H10	
522	瓶	底径 (13.6) 残高 5.9	有台瓶の底部。低体部の境につき、「八」の字に開く。平坦接地。坏の立ち上がりは急である。	回転ナデ→ナデ	㊍回転ナデ ㊐回転ナデ→ナデ	密	○	G 9	
523	平瓦	長さ 2.5 幅 10.2 厚さ 2.1	小片。	(凸面) ナデ	(凹面) 布目痕	密	○	H 7	
524	碗	底径 (6.8) 残高 1.9	緑釉陶器。削り出しの円盤状高台。釉薬は坏部内外、底部全体に施す。	施釉 ナデ→ミガキ	施釉 ㊍ナデ→ミガキ ㊐ミガキ	密・石・長(1)	◎	F 5	
525	坏	底径 (6.6) 残高 1.2	土師質。円盤状に突出した平底。	㊒ヨコナデ ㊐回転ヘラ切り	ヨコナデ→ナデ	密	○	F 5	
526	坏	底径 6.3 残高 1.9	土師質。貼り付け高台。底体部の境に「八」字につく。断面三角形。	回転糸切り（？） →板状工具圧痕	マメツ	石・長(1)	△	H 8	
527	坏	底径 (6.0) 残高 1.6	土師質。貼り付け高台。底体部の境に「八」字につく。底外面に同心円状に凹みが巡る。	マメツ	ヨコナデ→ナデ	石(1)・少量	○	F 5	
528	坏	残高 0.8	土師質。	㊍ヨコナデ ㊐回転糸切り	ヨコナデ→ナデ	密・石(1)	◎	H 8	
529	坏	口径 (16.3) 器高 3.7 底径 (9.8)	土師質。胴部下半でくぼむ。口縁部はやや内湾し、口縁端部は丸い。	㊍マメツ ㊐回転糸切り	マメツ	密・砂	○	H 8	
530	坏	底径 (7.9) 残高 1.4	土師質。底部の外面が凹む。	㊍ヨコナデ ㊐回転糸切り	ヨコナデ→ナデ	密	◎	H 7	
531	坏	底径 (8.2) 残高 1.1	土師質。	㊍ヨコナデ ㊐回転糸切り	ヨコナデ	石(4)・少量	○	G 8	
532	羽釜	口径 (25.4) 残高 3.4	土師質。口縁端部にやや垂下した断面三角形のタガが巡る。	ヨコナデ (指頭痕)	ヨコナデ	石(2)・少量	○	F 6	
533	羽釜	口径 (18.6) 残高 4.3	土師質。口縁端部からやや下がった部分に断面三角形のタガが巡る。	ナデ ハケ痕？	ナデ	石・長(2)	○	F10	
534	碗	口径 (16.2) 残高 5.4	瓦器。坏部は内湾しながら立ち上がる。口縁端部は丸い。和泉型。	㊐ヨコナデ ㊍ナデ (指頭痕)	ナデ	密・石(1)	○	H 8	
535	碗	底径 (5.0) 残高 1.3	瓦器。貼り付け高台。断面は台形。和泉型。	㊍ヨコナデ ㊐ナデ	マメツ	密	○	H 8	
536	碗	底径 (4.2) 残高 0.8	瓦器。貼り付け高台。断面は台形。和泉型。	㊐ナデ	ナデ	密・石(3)	○	G 6	
537	すり鉢	口径 (30.0) 残高 2.3	須恵質。口縁端部は断面三角形。東播系。	ヨコナデ	ヨコナデ	石・長(2)少量	○	G 9	
538	すり鉢	口径 (26.9) 残高 4.9	須恵質。胴部は直線的に立ち上がる。口縁端部は下方に垂下、上方が立ち上がる。東播系。	㊐ヨコナデ ㊍ナデ	㊐ヨコナデ ㊍ナデ	石・長(2)	◎	G 9	
539	不明	口径 (17.0) 残高 4.8	須恵器。口頸部と考える。ゆるやかに立ち上がる頸部。口縁端部は内外面に段を持つ。外面に斜線文。	回転ナデ	回転ナデ	石(1)・少量	○	E 9	
540	不明	残高 4.4	須恵器。胴部片。	回転カキ目	回転ナデ	長(1)・少量	◎	G 7	
541	不明	底径 (15.0) 残高 8.8	須恵器系の瓶、又はすり鉢の可能性あり。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	E 4	

Ⅳ下層 出土遺物観察表　　石製品

番号	器　種	遺存状態	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
542	石庖丁	一　部	緑色片石	3.4	1.4	0.47	2.8	H 7	
543	砥　石	1/3か		8.3	7.5	5.9	478.0	G 8	

Ⅳ下層 出土遺物観察表　　鉄製品

番号	器　種	遺存状態	材　質	法　量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
544	タガネ状	一部欠	鉄	4.2	2.8	2.7	72.6	F 4	19
545	棒　状	一部欠	鉄	4.0	2.1	1.25	12.1	D 4	19
546	形態不明	完　存	鉄	4.2	1.4	1.4	7.7	G 9	19
547	形態不明	完　存	鉄	5.2	2.5	1.5	21.4	E 4	19
548	形態不明	一部欠	鉄	3.6	2.9	1.4	15.5	G 5	19
549	形態不明	完　存	鉄	3.7	5.0	1.1	19.3	H 7	19
550	鉄　滓	完　存	鉄	3.2	4.6	2.45	37.9	E 4	19
551	鉄　滓	完　存	鉄	4.65	7.0	3.35	115.1	E 4	19
552	鉄　滓	完　存	鉄	6.5	7.3	2.5	198.9	G 5	19
553	鉄　滓	完　存	鉄	8.3	10.4	2.9	239.0	G 5	19
554	鉄　滓	完　存	鉄	4.0	4.2	1.8	24.5	F 4	19
555	鉄　滓	一部欠	鉄	2.6	3.2	1.9	15.3	E 4	19

表12　Ⅳ上層 出土遺物観察表　　土製品

(1)

番号	器種	法量(cm)	形　態・施　文	調　整		胎　土	焼成	備 考	図版
				外　面	内　面				
556	壺	残高　1.7	口縁端部は下方に垂下する。	㊐ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	長(1)・少量	○	F 7	
557	壺	底径　(6.0) 残高　5.4	小さくくびれる上げ底。	㊍ハケ→ナデ ㊎ナデ	ハケ→ナデ	石・長(1～3)	○	G 8	
558	壺	底径　(6.6) 残高　5.4	平底。	ハケ→ナデ	㊍ハケ (6本/10cm) ㊎指頭痕	石・長(2)・多量	○	G 7	
559	高坏	残高　5.9	脚部片。柱上部に4条の平行沈線が巡る。	ナデ	ナデ (シボリ痕)	石(1)	○	出土地区 不 明	
560	高坏	残高　8.0	脚部片。円孔推定3～4個。充填技法。	マメツ	ナデ (シボリ痕)	石・長(1)・多量	△	B 5	
561	不明	底径　(3.8) 残高　3.9	小さな平底。ややくびれる。小形の甕形土器の可能性あり。	ナデ ㊎マメツ	ナデ	密・砂	○	出土地区 不 明	
562	壺	口径 (11.1) 残高　3.9	口縁は直線的に立ち上がり、口縁端部は尖る。頸部で「く」の字状に屈曲する。	マメツ	㊐マメツ ㊍指頭痕	石(1～3)	△	D 9	

Ⅳ上層 出土遺物観察表　土製品

（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
563	甑	残高 5.1	甑の把手。短い舌状を呈する。貼り付け法で接合。	ナデ	ナデ	石・長(2)多量	○	G 7	
564	坏	底径 (15.0) 残高 2.0	土師質の坏。貼り付け高台。「ハ」字に開き、底体部より内側につく。	マメツ	マメツ	密	○	G 7	
565	坏蓋	口径 (11.0) 残高 4.7	天井部は丸みを帯びる。稜は短く尖い。口縁端部は内側に凹む。	㊦回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	密・石(2)	◎	出土地区不明	
566	坏身	残高 3.6	受部は短い。器壁厚い。	㊐回転ナデ ㊞回転ヘラケズリ	回転ナデ	密	○	F 6	
567	坏身	口径 (12.0) 残高 3.0	立ち上がりは内傾し、受部は内湾する。受部の内側に沈線が1条巡る。	回転ナデ	回転ナデ	密	△	F 5	
568	坏身	残高 1.7	立ち上がりは内傾する様子、受部は内湾する。受部の内側に沈線が1条巡る。	回転ナデ	回転ナデ	密・石(1)	○	出土地区不明	
569	坏	底径 (12.8) 残高 2.2	貼り付け高台。底体部の内側につき「ハ」字に開く。坏はゆるやかに立ち上がる。	㊥回転ナデ ㊞回転ヘラケズリ→ナデ	㊥回転ナデ ㊞ナデ	密・砂	◎	出土地区不明	
570	高坏	残高 1.5	有蓋高坏の蓋のつまみ。中央部がやや突出する。	回転ナデ	ナデ	密	○	B 5	
571	高坏	残高 1.4	有蓋高坏の蓋のつまみ。中央部がくぼむ。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	E 5	
572	高坏	底径 (9.0) 残高 4.3	短脚高坏の脚部。方形の透し孔を有す。	回転カキ目	回転ナデ	長(1)少量	○	H 7	
573	高坏	残高 3.0	長脚高坏の坏部。坏底部はやや丸底気味。方形の透し孔を有す。	回転ヘラケズリ→ナデ	回転ナデ	密・砂	○	F 6	
574	高坏	残高 3.1	長脚。柱上部は細く、直線的に伸びる。	回転ナデ	ナデ	密	○	出土地区不明	
575	高坏	残高 4.3	やや内湾する柱上部。下半に1条の沈線が巡る。柱上部は太い。	マメツ	ナデ (シボリ痕)	密	◎	F 5	
576	高坏	残高 4.9	脚部が三角錐状に広がる。上半に沈線が一条巡る。	回転ナデ→ナデ	回転ナデ	密	○	G 7	
577	高坏	残高 2.7	高坏の脚部片。柱上部の部分に2条の沈線が巡る。	回転ナデ	ナデ	密・長(1)	○	出土地区不明	
578	不明	口径 (39.0) 残高 5.4	頸部はゆるやかに外反。口縁部は上下方に突出。外面に沈線と列点文を施す。甕あるいは器台坏部の口縁部片。	回転ナデ	回転ナデ	密・長(1)	◎	出土地区不明	
579	甕	口径 (22.0) 残高 5.3	甕の口頸部～胴部上半。頸部は外反し、口縁部は下方に拡張。口縁端部は面を持つ。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	出土地区不明	
580	甕	残高 3.8	甕の脚部。丸みのある肩球形の胴部。円孔あり。肩部に沈線一条巡る。	㊧回転ナデ ㊥回転ヘラケズリ→ナデ	回転ナデ	密	○	出土地区不明	
581	平瓶	残高 6.5	平瓶の頸部～胴部上半。頸部は直線的に立ち上がる。肩部はやや張る。	㊧回転ナデ ㊧ナデ ㊥回転ヘラケズリ→ナデ	回転ナデ	密 石・長(1)	◎	出土地区不明	
582	長頸壺	残高 5.7	長頸壺の頸部。筒状を呈し、4条の沈線が巡る。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	出土地区不明	

Ⅳ上層 出土遺物観察表　土製品

（3）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
583	長頸壺	残高 5.1	長頸壺の胴部。最大径の上半には2条の沈線の間に列点文を施す。	㊥回転カキ目	回転ナデ	密・長(1)	○	出土地区不明	
584	長頸壺	残高 4.5	長頸壺の胴部上半。最大径の上半には2条の沈線。刺突文を施す。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	E 9	
585	壺	口径 (16.8) 残高 4.3	長頸壺の口頸部か？頸部はゆるやかに外反し、口縁部は外方に拡張する。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	G 4	
586	不明	残高 3.1	壺又は甕の口頸部。頸部はゆるやかに外反する。口縁部は外方に拡張し段を有する。	回転ナデ	回転ナデ	密	△	G 9	
587	長頸瓶	底径 (9.7) 残高 4.3	長頸瓶の底部。貼り付けの輪高台。底体部の境につき、「ハ」字につく。内端接地。	㊥回転ヘラケズリ ㊦回転ナデ	ナデ	密 石・長(1)	◎	G 5	
588	不明	底径 (10.8) 残高 1.2	長頸瓶の底部。平底。立ち上がりは急である。長頸壺の可能性もある。	㊥回転ナデ ㊦ナデ	回転ナデ	密 石・長(1)	○	G 6	
589	鉢	底径 (8.7) 残高 2.4	台付鉢の底部。高台は底体部の内側につき、「ハ」字に開く。内端屈曲で、外端接地。	回転ナデ	回転ナデ	密 石・長(1)	◎	出土地区不明	
590	鉢	底径 (8.4) 残高 2.4	台付鉢の底部。高台は底体部の内側につき、「ハ」字に開く。高台端部は下内方に屈曲している。	回転ナデ	回転ナデ	密 長(1)	○	G 8	
591	鉢	底径 (8.6) 残高 2.0	台付鉢の底部。比較的幅広の高台で、高台の外端面はやや突出する。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	F 3	
592	平瓦	長さ 6.1 幅 5.9 厚さ 2.0	重さ65g	(凸面) 細縄タタキ	(凹面) ナデ	密	△	H 8	
593	平瓦	長さ 8.4 幅 10.1 厚さ 2.8	重さ270g	(凸面) 細縄タタキ	(凹面) 布目痕→ヨコナデ	密	◎	H 8	
594	平瓦	長さ 9.3 幅 8.3 厚さ 2.1	小片。磨滅が激しい。平瓦の可能性もあり。重さ190g	(凸面) マメツ	(凹面) マメツ	密	△	G 8	
595	碗	残高 2.2	須恵器。碗の口縁部。口縁端部は屈曲し、丸くしあげられている。	回転ナデ	回転ナデ	密	◎	F 5	
596	長頸壺	残高 1.4	灰釉陶器。長頸壺の口縁部。口縁部は強く屈曲。釉薬は内面と端部に施す。	回転ナデ 施釉	回転ナデ 施釉	密	◎	出土地区不明	
597	碗	底径 (6.8) 残高 1.2	緑釉陶器。削り出しの蛇の目高台。内底面全体と外面体部と高台に施釉。	㊥回転ナデ ミガキ ㊤削り出し 施釉	㊦ミガキ 施釉	密	◎	B 5	
598	坏	底径 (9.4) 残高 1.6	須恵質の坏底部。円盤状高台。平底。	ナデ	ナデ	密	○	G10	
599	坏	底径 (7.0) 残高 1.1	土師質。坏の底部。器壁厚し。	㊥ヨコナデ ㊦回転ヘラ切り	ナデ	密	○	E 8	
600	坏	底径 (6.8) 高台高 0.6 残高 1.6	土師質。貼り付け輪高台。底体部の境につき、「ハ」字につく。	マメツ	ナデ（マメツ）	密	△	H 8	
601	坏	底径 (6.9) 高台高 0.8 残高 1.6	土師質。輪高台。底体部の境につき、直立につく。	マメツ	マメツ	密	△	H 8	
602	坏	底径 (7.0) 高台高 0.5 残高 1.6	土師質。貼り付け輪高台。底体部の内側につき、直立につく。	㊥ヨコナデ ㊦ナデ	ナデ	密	○	F 4	

Ⅳ上層 出土遺物観察表　土製品

(4)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
603	坏	口径(13.8) 底径(7.0) 器高 3.6	土師質。ゆるやかに立ち上がる。口縁部はやや内湾気味。口縁端部は丸い。	㊍回転ナデ →ナデ ㊐回転糸切り	㊍回転ナデ →ナデ	密	○	H 9	
604	坏	口径(12.2) 底径(7.2) 器高 3.6	土師質。立ち上がりは直線的。口縁端部は丸い。	㊍ヨコナデ ㊐回転糸切り	ヨコナデ	密	○	G 7	
605	坏	底径(7.0) 残高 1.5	土師質。底部の外面が凹む。	㊍マメツ ㊐回転糸切り	マメツ	密	○	B 5	
606	坏	底径(7.4) 残高 0.9	土師質。	㊍マメツ ㊐回転糸切り	マメツ	密	○	F 7	
607	坏	底径(7.0) 残高 1.0	土師質。	㊍ナデ ㊐回転糸切り →板圧痕	㊐回転ナデ →ナデ	密	○	H 9	
608	坏	底径(6.6) 残高 1.3	土師質。外面は凹む。	㊍ヨコナデ ㊐回転糸切り	ヨコナデ	密・石・長(2)	○	F 5	
609	坏	底径(6.4) 高台高 0.5 残高 1.2	土師質。円盤状高台。	㊍ナデ ㊐回転糸切り	ナデ	密	○	H10	
610	羽釜	口径(22.2) 残高 5.3	土師質。羽釜の口縁部。立ち上がりはやや内湾。口縁端部よりやや下がった部分に断面三角形の箍が巡る。	ナデ	マメツ	砂・長(1)	△	F10	
611	羽釜	口径(24.0) 残高 2.7	土師質。羽釜の口縁部。口縁端部よりやや下がった部分に断面「コ」の字形の箍が巡る。	ヨコナデ	ヨコナデ	砂・長(1)	○	F10	
612	羽釜	残高 9.5	瓦質。三足付き羽釜の脚部。胴部との接合部分に煤が付着。	ヨコナデ	ナデ	砂・長(1)	○	H 9	
613	羽釜	残高 8.3	土師質。三足付き羽釜の脚部。	マメツ	—	密・金	△	E10	
614	碗	底径(6.4) 高台高 0.9 残高 3.1	土師質。碗の底部。貼り付け輪高台。断面三角形を呈す。	ヨコナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	密	○	F 5	
615	碗	残高 3.5	瓦質。碗の口縁。立ち上がりは直線的で口縁端部は丸い。和泉型。	ナデ (指頭痕)	ナデ	密	○	E 5	
616	碗	口径(15.0) 残高 2.0	土師質。碗の口縁。口縁端部で外に屈曲し、丸く仕上げる。	ヨコナデ→ナデ	ヨコナデ	密	◎	F 4	
617	こね鉢	残高 3.4	須恵質。口縁部が下方向へ拡張。外面は明瞭な段あり。直線的な立ち上がり。東播系。	ヨコナデ	ヨコナデ	密・砂	○	F 4	
618	こね鉢	残高 2.4	須恵質。口縁部が上下方向へ拡張している。立ち上がりは直線的。東播系。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	砂・石・長(1)	○	F10	
619	こね鉢	口径(38.0) 残高 3.8	須恵質。口縁部が上下方向とも拡張している。内面には1条の沈線が巡る。東播系。	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	砂・石(1)	◎	G 9	
620	こね鉢	口径(28.1) 残高 3.9	須恵質。口縁部が上下方向とも拡張する。内面には1条の沈線が巡る。東播系。	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	砂	○	G 8	
621	こね鉢	口径(20.0) 残高 2.7	須恵質。口縁部が上下方向とも拡張する。東播系。	ヨコナデ ナデ	ヨコナデ	密・長(1)	○	G 9	
622	こね鉢	口径(26.6) 残高 6.2	須恵質。立ち上がりは直線的。口縁部が上下方向とも拡張する。外側には明瞭な段を有す。東播系。	ヨコナデ	ヨコナデ	密・長(1)	○	G 8	

Ⅳ上層 出土遺物観察表　土製品

(5)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	胎土	焼成	備考	図版
623	甕	残高 2.5	須恵質。甕の胴部上半部。東播系か亀山焼きの甕か不明。	ヨコナデ ㊍格子目タタキ	ヨコナデ ㊍同心円文叩きか？	密・長(2)	◎	出土地区不明	
624	碗	口径 (17.0) 残高 1.8	白磁。碗の口縁部。口縁端部は玉縁状を呈す。	施釉	施釉	密	◎	F 5	
625	碗	底径 (7.0) 高台高 0.9 残高 1.5	白磁。碗の底部。高台は削り出しの円盤高台。内面のみ施釉。	ヨコナデ ㊞削り出し	施釉	密	◎	F 6	
626	碗	底径 (7.3) 高台高 0.8 残高 1.9	白磁。碗の底部。高台は削り出しの円盤高台。内面のみ施釉。	ヨコナデ ㊞削り出し	施釉	密	◎	出土地区不明	
627	碗	底径 (5.8) 高台高 0.4 残高 1.5	白磁。碗の底部。輪高台の部分は剥離している。施釉は内面と高台外面のみ。	施釉 ㊞削り出し	施釉	密	◎	出土地区不明	
628	碗	残高 1.5	青磁。碗の口縁部。外面に蓮弁文が施されている。内外ともに施釉。龍泉窯。	施釉	施釉	密	◎	出土地区不明	
629	碗	残高 2.1	青磁。碗の底部。内面見込みに段を有す。施釉は内面と高台外面のみ。龍泉窯。	施釉 ㊞削り出し	施釉	密	◎	G 9	
630	碗	残高 2.2	青磁。碗の口縁部。口縁端部は丸い。内面に段をもつ。施釉は内外面。同安窯。	施釉	施釉	密	◎	F 5	
631	碗	底径 (5.0) 高台高 0.8 残高 1.4	青磁。碗の底部。削り出し高台。高台は突出している。施釉は内面のみ。高台の一部に垂れた痕跡あり。同安窯。	㊞削り出し	施釉	密	◎	F 5	
632	皿	底径 (5.2) 残高 0.7	青磁。皿の底部。内面には櫛状工具で平行条線を施文する。釉薬は内面と体部外面に施す。同安釜。	施釉 ㊞削り出し	施釉	密	○	G 5	
633	不明	口径 (3.2) 残高 2.6	須恵質。器種不明。	回転ナデ	回転ナデ	密	○	F 4	
634	不明	底径 (11.0) 残高 1.1	須恵質。東播系こね鉢の底部の可能性あり。	ナデ ㊞ケズリ→ナデ	回転ナデ	細砂粒、2㎜大の砂粒含む	△	G 7	
635	不明	残高 3.9	須恵質。壺の口頸部か？ 釉は内外面とも鉄釉を施釉。	頸下 自然釉 頸上 施釉	頸下 自然釉 頸上 施釉	密・石(1)	◎	G 5	
636	不明	底径 (8.6) 残高 1.4	須恵質。坏か皿か不明。	㊍ナデ(マメツ) ㊞回転糸切り	マメツ	石・長(3)少量	△	G 6	
637	不明	底径 (11.0) 残高 0.7	須恵質。坏か皿か不明。	マメツ	マメツ（一部ナデ）	密・石(1)	△	出土地区不明	
668	ふいご	長さ 4.1 幅 3.2 厚さ 2.0	羽口片。	指頭痕、ナデ	ナデ		○	G 5	
669	ふいご	長さ 3.9 幅 2.7 厚さ 2.8	羽口片。	指頭痕、ナデ	ナデ		○	G 7	

Ⅳ上層 出土遺物観察表　石製品

番号	器種	遺存状態	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
638	石庖丁	1/5か	緑色片岩	3.8	3.4	0.53	8.7	D 9	
639	石庖丁	1/3か	緑色片岩	5.6	3.3	0.64	18.2	B 6	
640	石庖丁	完存	緑色片岩	6.8	3.9	1.0	40.2	G 9	

Ⅳ上層 出土遺物観察表　　石製品

番号	器　種	遺存状態	材　質	法量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
641	石庖丁	完　存	緑色片岩	7.4	4.2	1.04	36.6	B 6	
642	扁平片刃石斧	2/3	緑色片岩	7.0	3.6	1.54	77.0	F 5	
643	打製石鏃	完　存	緑色片岩	4.1	2.6	0.45	5.9	出土地区不明	

Ⅳ上層 出土遺物観察表　　鉄製品

番号	器　種	遺存状態	材　質	法量				備　考	図版
				長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
644	棒　状	一部欠	鉄	4.9	1.4	1.1	8.4	H 7	20
645	棒　状	完　存	鉄	5.4	1.9	1.2	17.3	出土地区不明	20
646	棒　状	完　存	鉄	4.65	0.85	0.72	3.4	出土地区不明	20
647	棒　状	完　存	鉄	3.6	1.1	1.1	3.9	F 5	20
648	棒　状	完　存	鉄	3.3	1.0	0.76	3.1	G 7	20
649	タガネ状？	一部欠	鉄	5.2	4.8	3.3	64.7	F11	20
650	鉄製品	一部欠	鉄	4.4	3.4	2.3	36.0	F 4	20
651	鉄製品	完　存	鉄	4.0	2.3	1.8	15.6	出土地区不明	20
652	鉄製品	完　存	鉄	4.6	2.2	1.4	10.0	F 4	20
653	鉄製品	完　存	鉄	2.3	3.3	0.7	6.2	出土地区不明	20
654	鉄製品	完　存	鉄	3.45	2.35	1.9	23.3	F 4	20
655	鉄製品	一部欠	鉄	3.1	2.8	0.85	8.1	F 7	20
656	鉄製品	完　存	鉄	3.7	2.1	1.3	13.4	G 7	20
657	鉄製品	大きく欠	鉄	2.5	2.1	0.9	5.2	F11	20
658	鉄製品	大きく欠	鉄	2.35	2.3	1.38	7.1	F11	20
659	鉄製品	完　存	鉄	4.4	3.1	1.7	26.0	出土地区不明	20
660	鉄　滓	完　存	鉄	4.8	6.8	2.8	124.5	F 4	20
661	鉄　滓	大きく欠	鉄	4.1	5.2	2.85	53.4	F 4	20
662	鉄　滓	一部欠	鉄	3.9	5.0	1.6	47.1	F 7	20
663	鉄　滓	一部欠	鉄	3.7	4.8	3.0	49.3	F 4	20
664	鉄　滓	完　存	鉄	6.0	3.9	2.2	56.7	出土地区不明	20
665	鉄　滓	完　存	鉄	4.1	3.45	3.1	55.0	B 5	20
666	鉄　滓	完　存	鉄	3.2	2.8	1.85	18.1	E 5	20
667	鉄　滓	一部欠	鉄	3.2	2.3	1.4	13.6	F 7	20

写　真　図　版

写真図版例言

1．遺構の撮影は加島次郎・大西朋子がおこない、一部やぐらを使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーアンギュロン　90㎜他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス６７　55㎜他
	ニコンニューＦＭ２		ズームニッコール　28～85㎜他
フィルム	プラスＸパン・ネオパンＳＳ・エクタクロームＥＰＰ		

2．遺物の撮影は、大西がおこなった。

使用機材：

カメラ	トヨ／ビュー45Ｇ	レンズ	ジンマーＳ 240㎜他
ストロボ	コメット／ＣＡ-32・ＣＢ2400（バンク使用）		
スタンド他	トヨ／無影撮影台・ウエイトスタンド101		
フィルム	プラスＸパン		

3．白黒写真の現像・焼き付けは、一部を除いて大西がおこなった。

使用機材：

引伸機	ラッキー450ＭＤ	レンズ	エルニッコール 135㎜
	ラッキー90ＭＳ		エルニッコール　50㎜
印画紙	イルフォードマルチグレードⅣＲＣ		
フィルム現像剤	コダックＤ－76・ＨＣ110		

【参考】　『埋文写真研究』Vol.　1～8

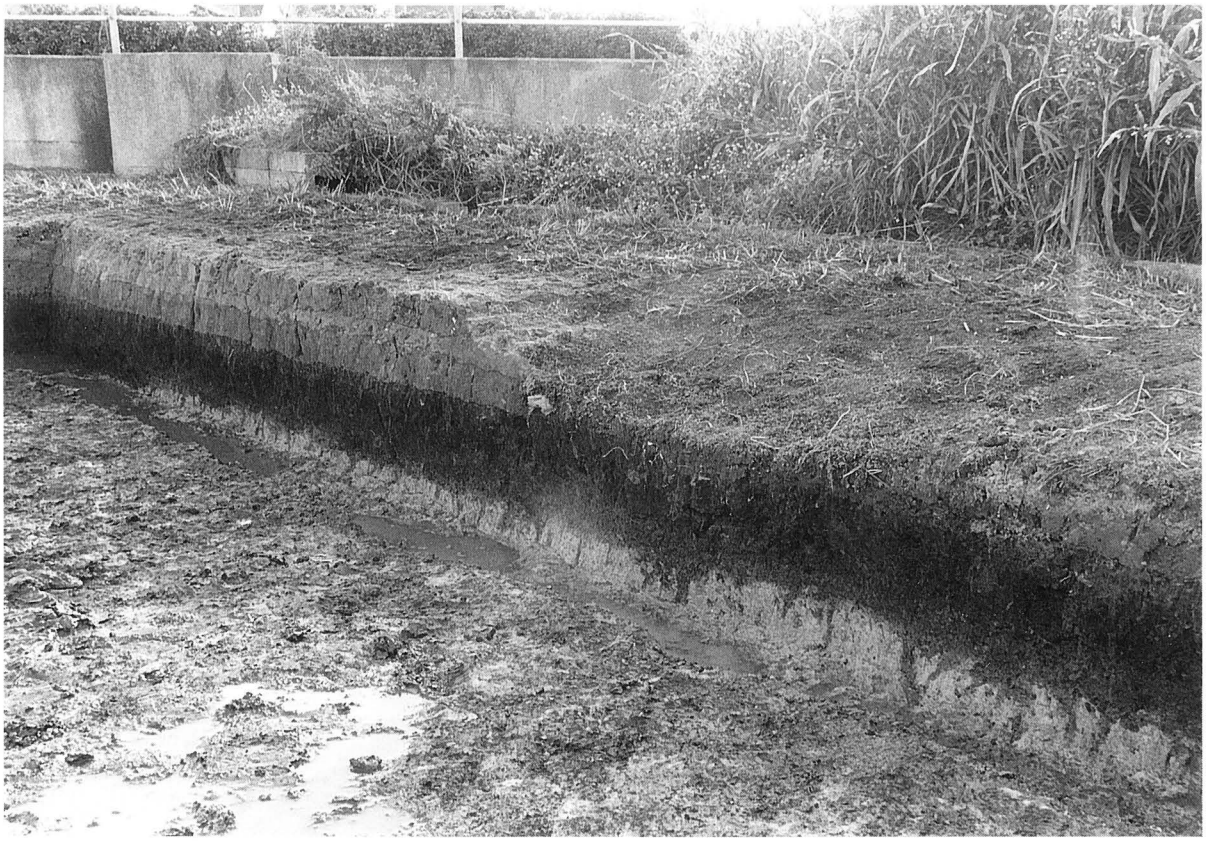
〔大西朋子〕

1．調査前全景（西より）

2．調査前近景（北より）

図版二

1．調査区北壁土層



2．調査区西壁土層

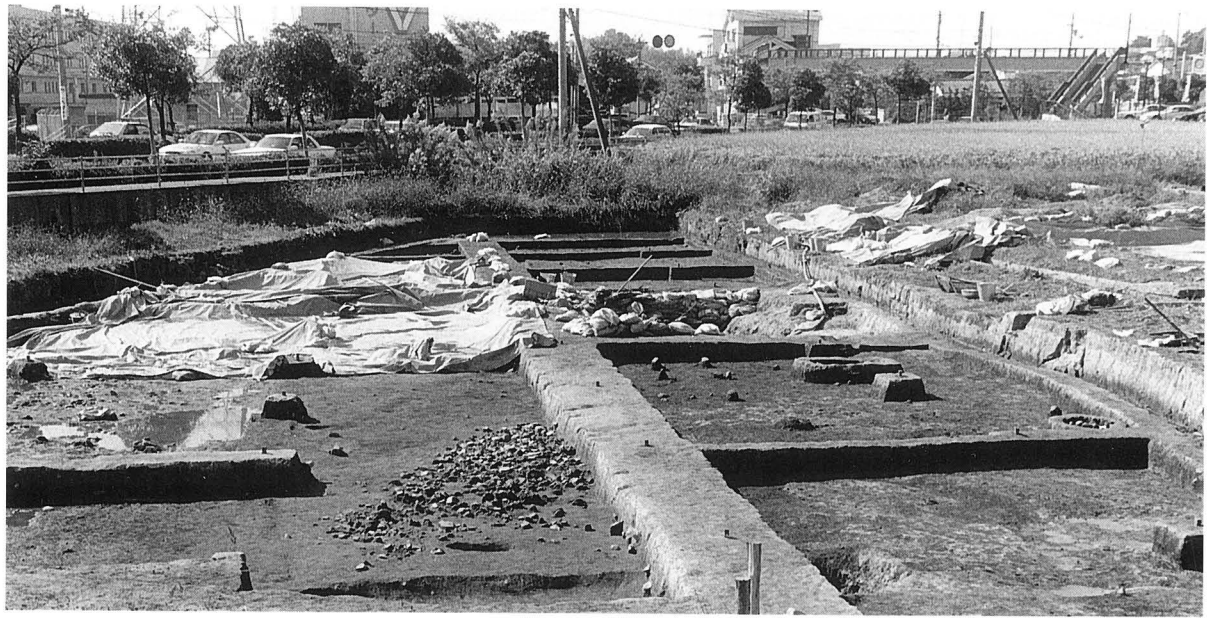
1．完掘状況（南西より）

1．ＳＤ10 検出状況 ①（南より）

2．ＳＤ10 検出状況 ②（北東より）

1．ＳＤ10 遺物出土状況 ①（南より）

2．ＳＤ10 遺物出土状況 ②（南より）



1．ＳＸ５検出状況①（東より）

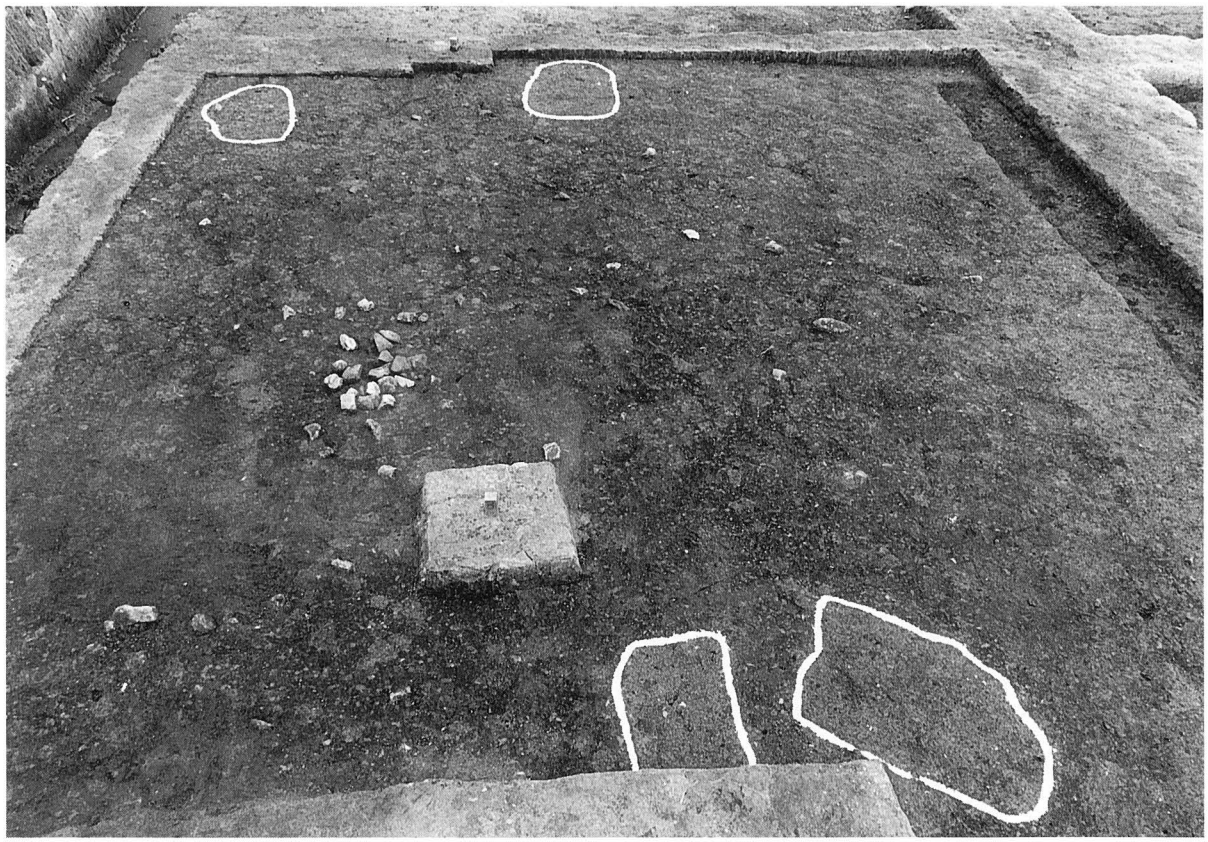
2．ＳＸ５検出状況 ②（南西より）

1．ＳＸ５遺物出土状況（北西より）

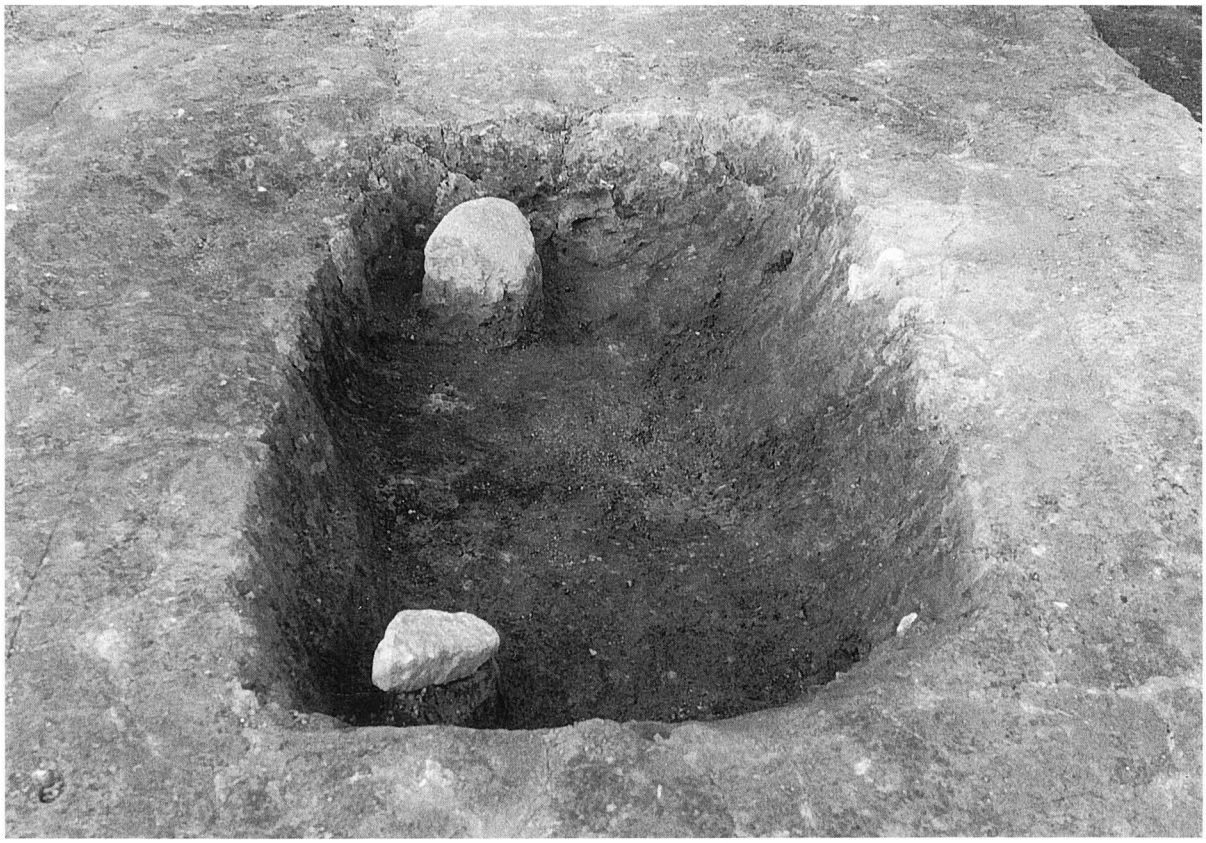
1．第２遺構面検出状況（西より）

2．第２遺構面完掘状況（東より）

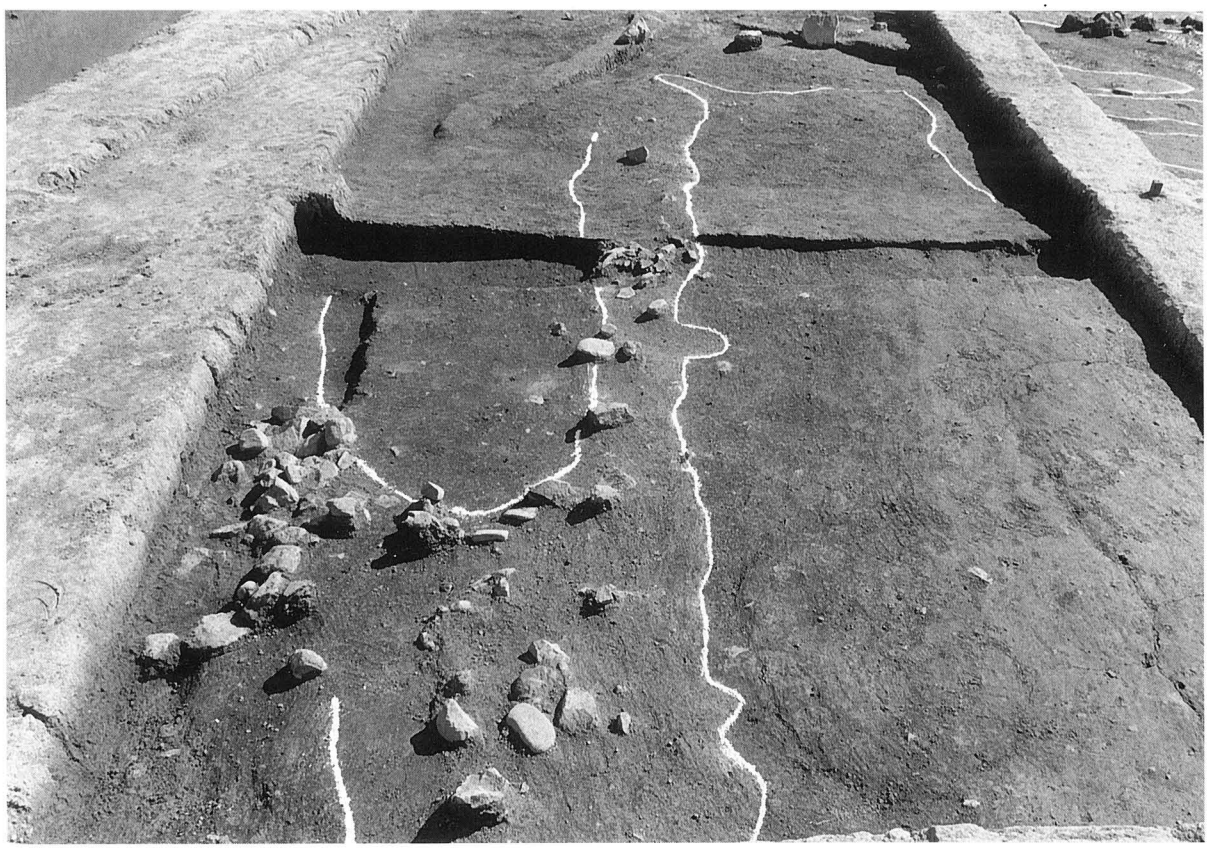
3．ＳＤ11 権状石製品出土状況（東より）



1．ＳＫ３～６検出状況（西より）



2．ＳＫ２完掘状況（南より）

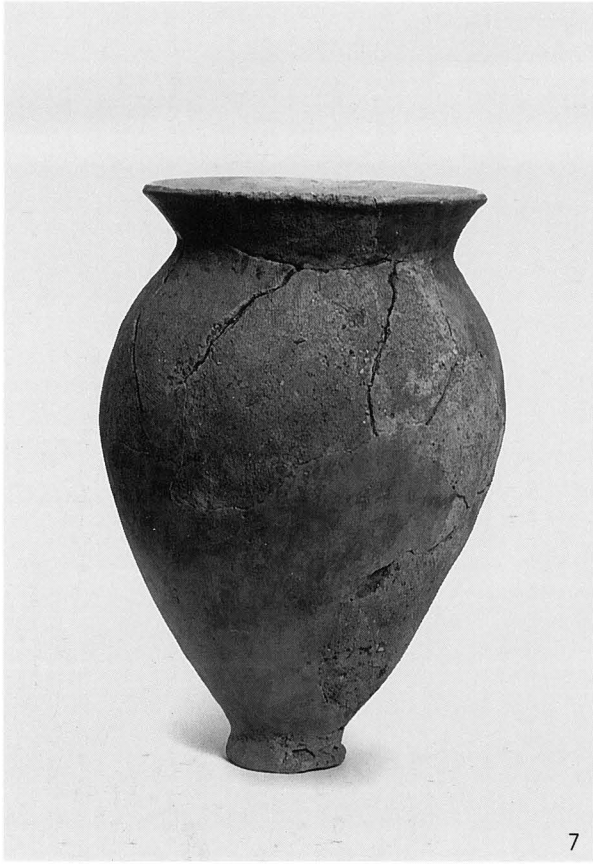


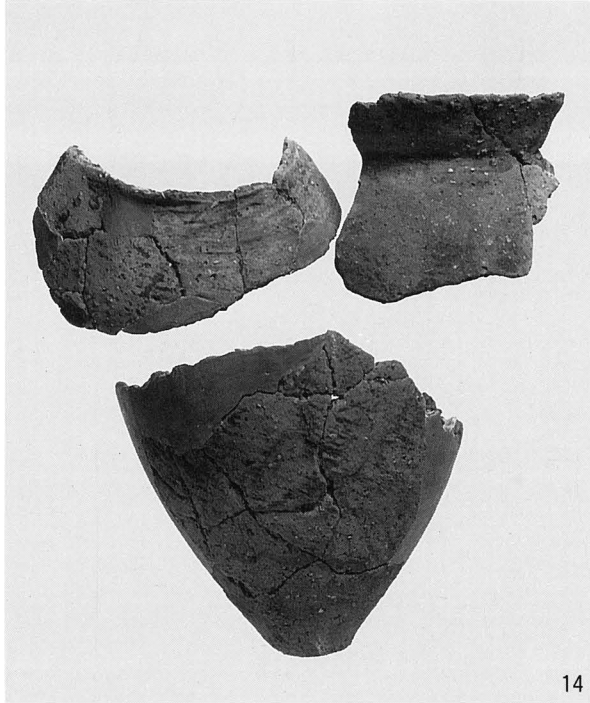
1．ＳＤ３・ＳＤ８検出状況（北より）

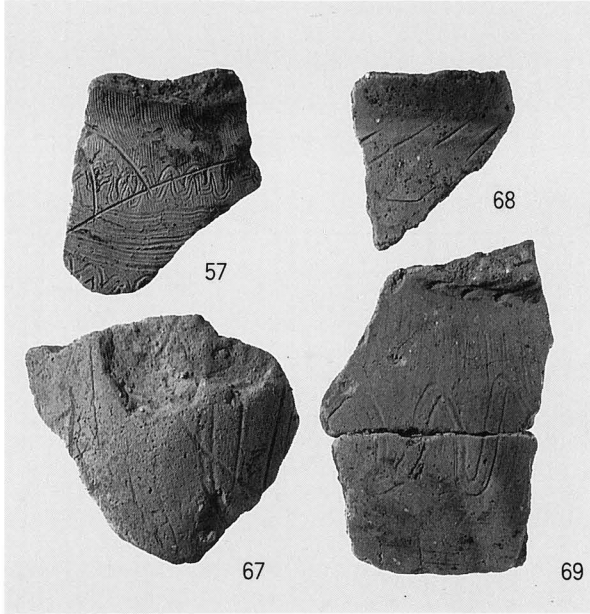
2．ＳＤ３・ＳＤ８完掘状況（北より）

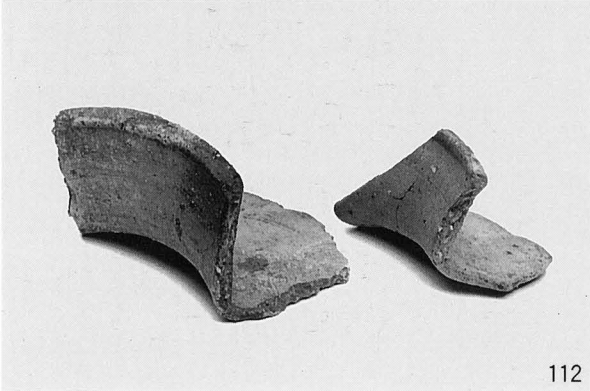
1．ＳＸ１完掘状況（北東より）

2．現地説明会

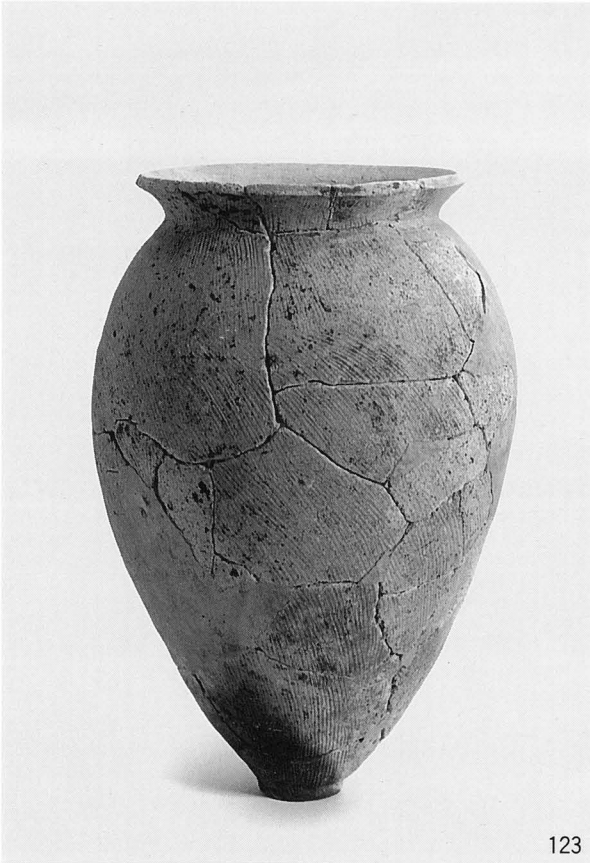








1．ＳＤ10 出土遺物


123

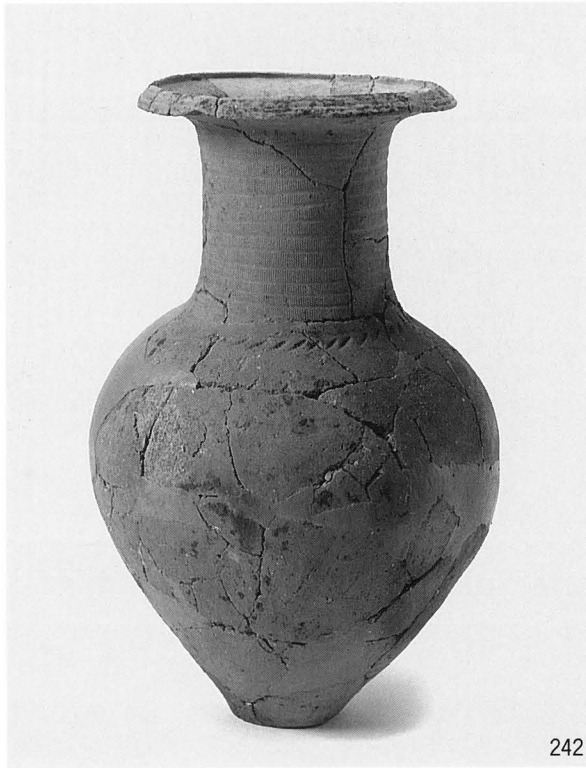
176

180

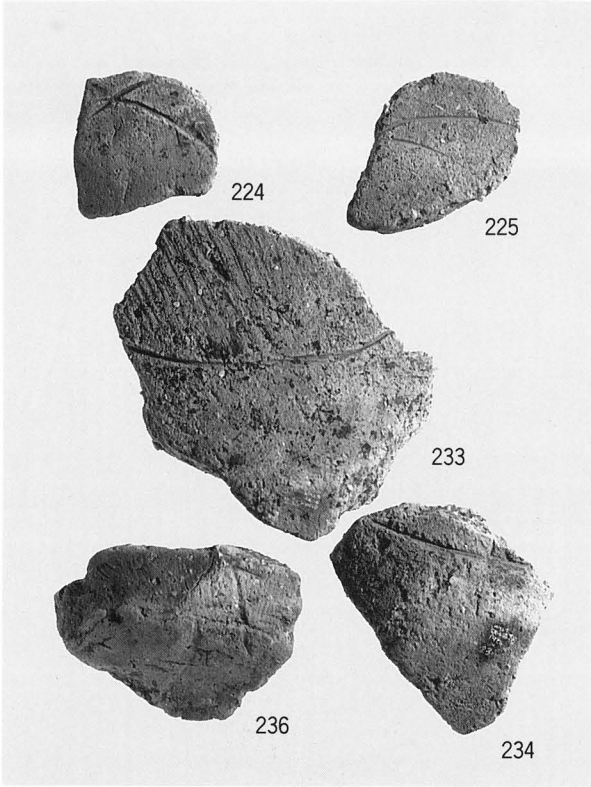
185

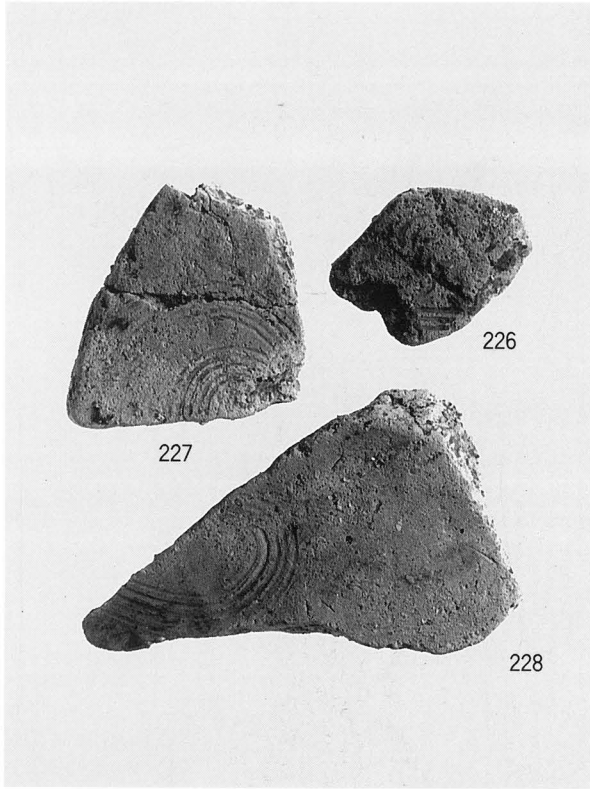
188

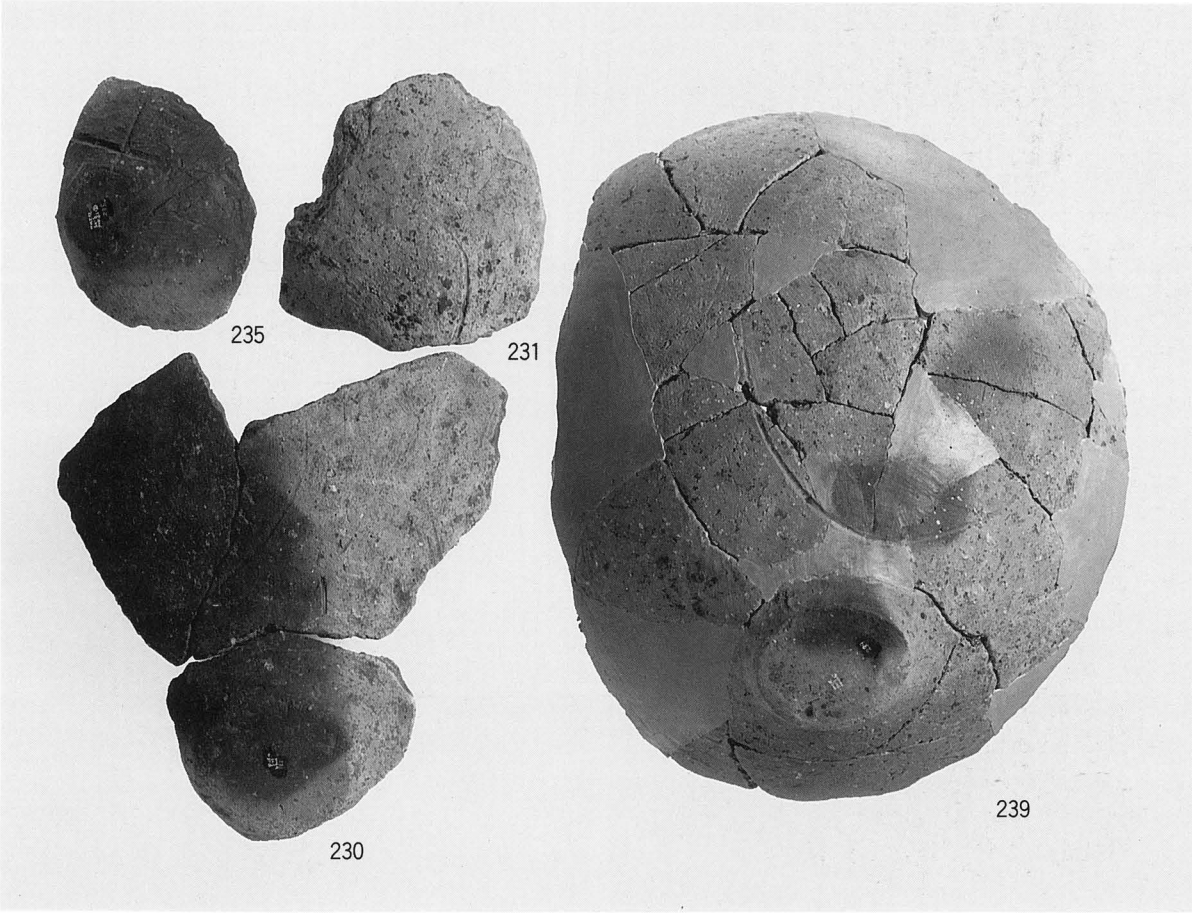
1．ＳＸ５出土遺物①



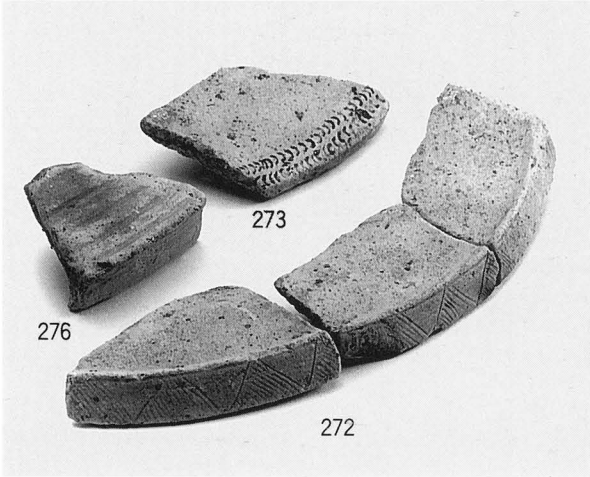
1．ＳＸ５出土遺物②

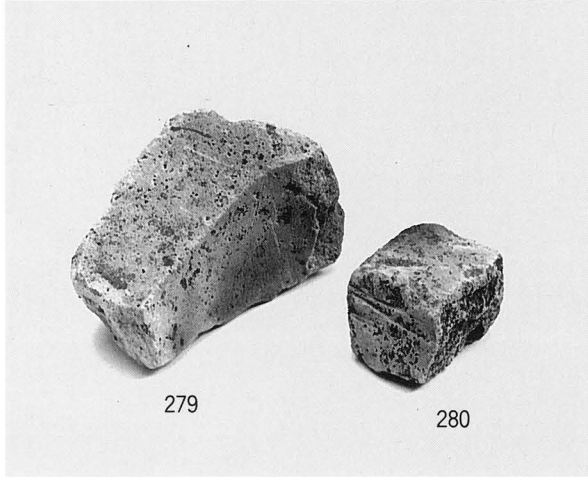




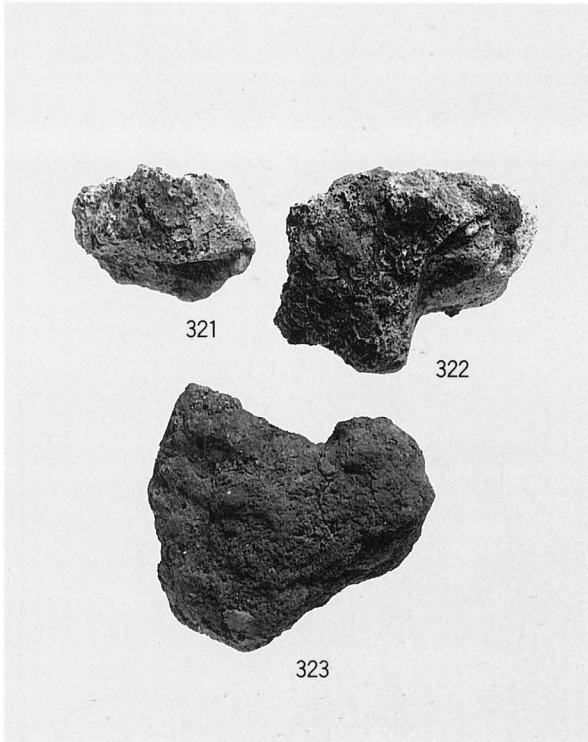


1．ＳＸ５出土遺物③

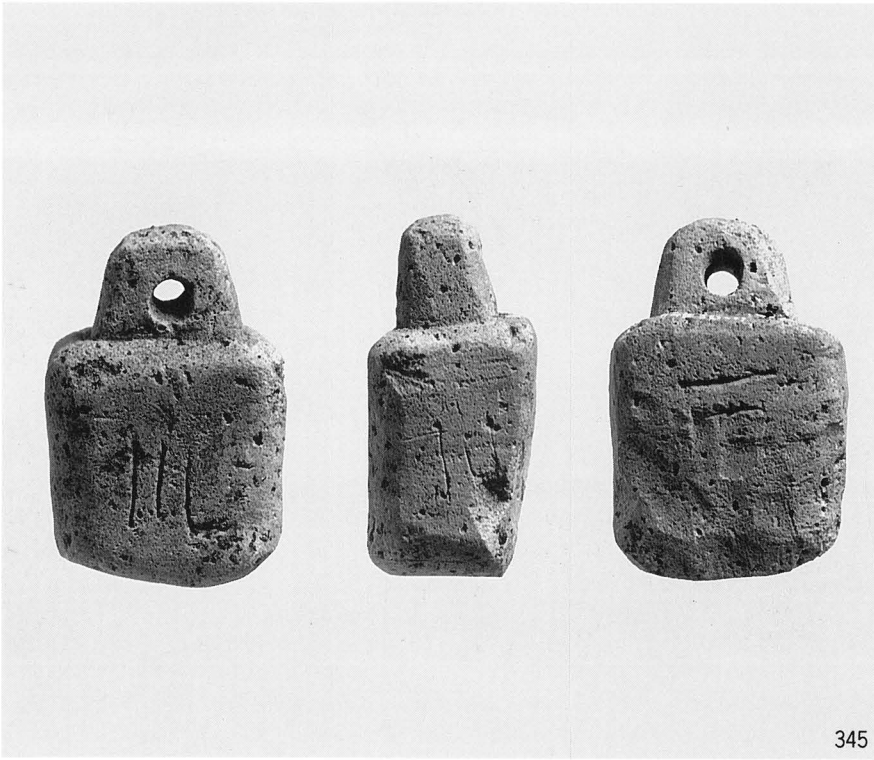


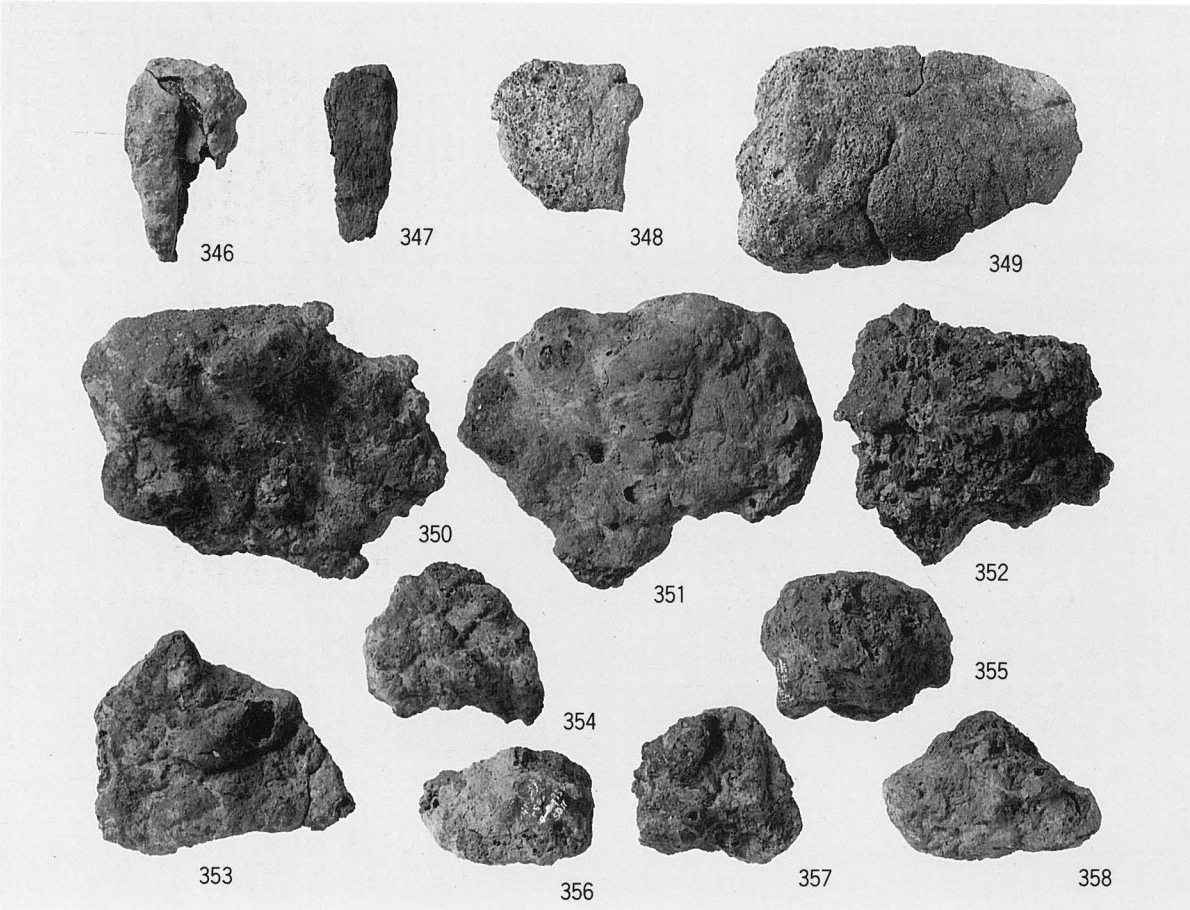


1．ＳＸ５出土遺物④

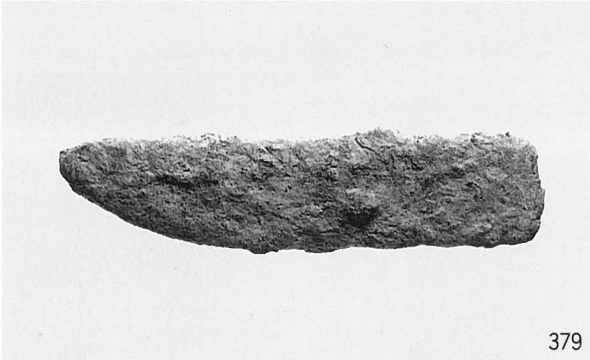


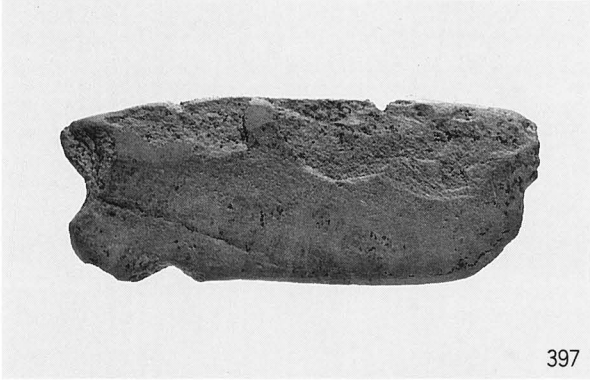
1．ＳＲ１（320～323）・ＳＸ13（325）出土遺物

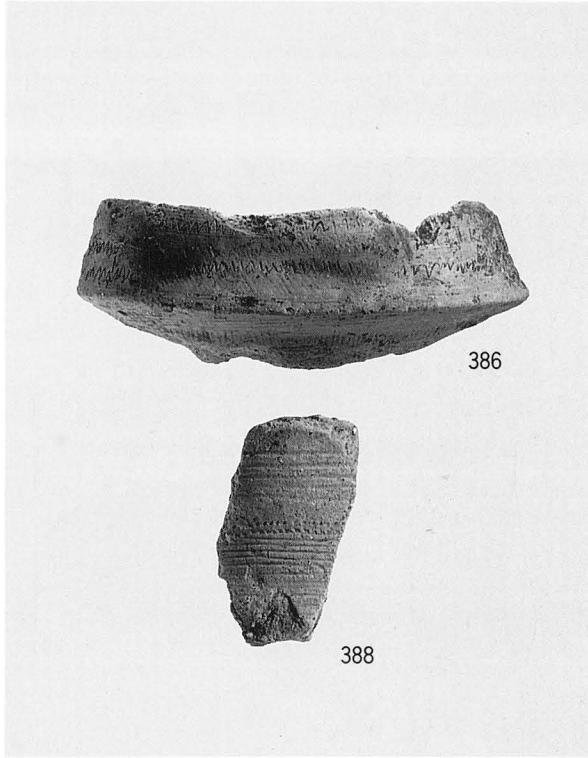


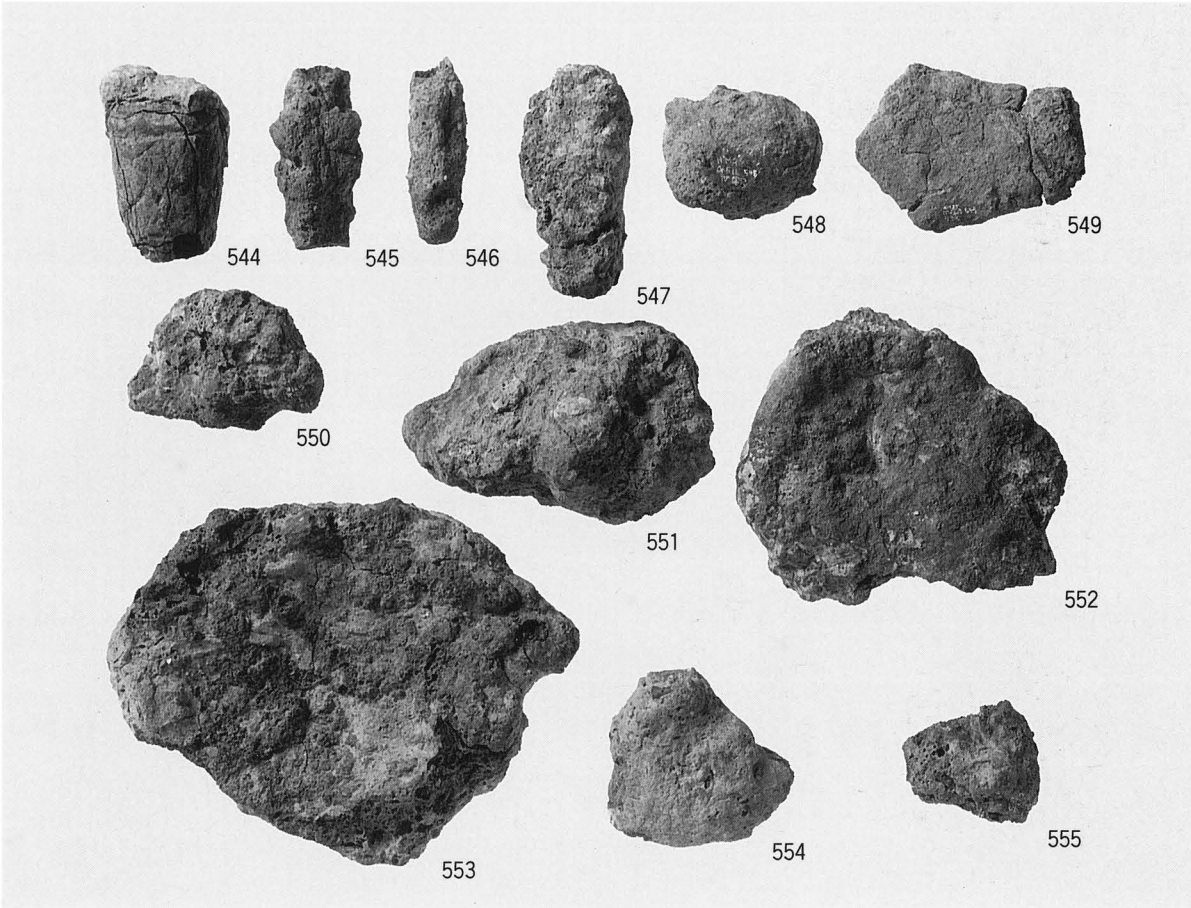


1．ＳＤ11 出土遺物

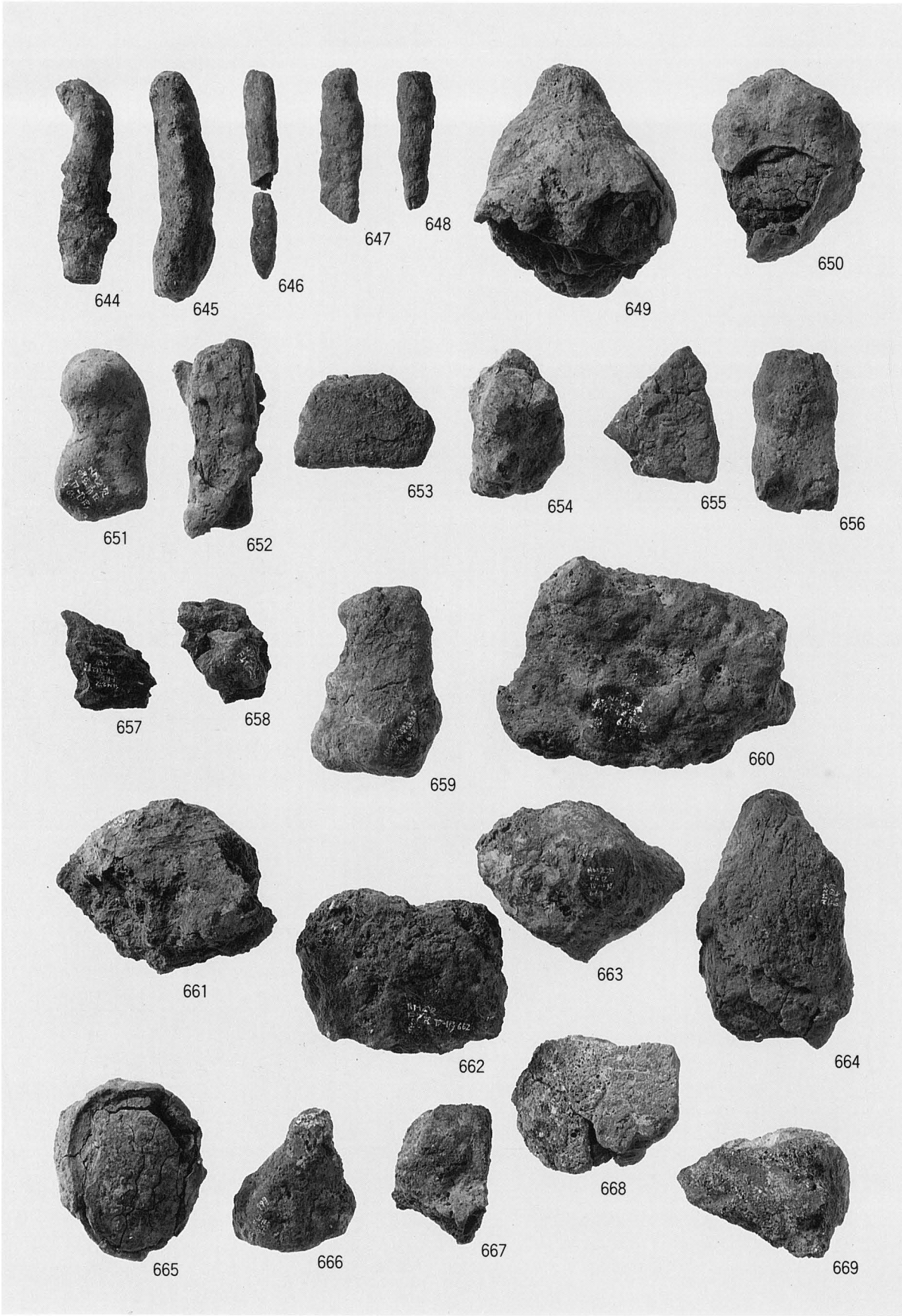








1．ＳＤ８（379）・Ⅴ下層（386・388・397）・Ⅳ下層（544～555）出土遺物


644
645
646
647
648
649
650
651
652
653
654
655
656
657
658
659
660
661
662
663
664
665
666
667
668
669

1．Ⅳ上層出土遺物

報告書抄録

ふりがな	のまのうらいせき
書名	乃万の裏遺跡
副書名	2次調査地
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第72集
編著者名	加島　次郎、小玉亜紀子、大西　朋子
編集機関	財団法人 松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター・松山市教育委員会
所在地	〒791—8032 松山市南斎院町乙67-6 TEL089-923-6363・〒790—0002 松山市二番町4丁目7-2 TEL089-948-6605
発行年月日	西暦1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
乃万の裏（のまのうら）	愛媛県松山市（えひめけんまつやまし） 北久米町（きたくめまち）	38201	288	33° 49′ 00″	132° 47′ 10″	19950717～ 19951124	2,475	宅地開発

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項
乃万の裏	集落	弥生 古墳 古代 中世	溝、土器溜り、土坑、河川、掘立柱建物	弥生土器、土師器、須恵器、石器、鉄器、勾玉、権状石製品	弥生後期の区画溝、土器溜り、河川を検出。土器溜りからは、外来系土器が出土。

松山市文化財調査報告書　第72集

乃 万 の 裏 遺 跡

2 次 調 査 地

平成11年3月31日

編集・発行　松 山 市 教 育 委 員 会
〒790-0003　松山市三番町6丁目6－1
TEL (089) 948－6605

財団法人　松山市生涯学習振興財団
埋 蔵 文 化 財 セ ン タ ー
〒791-8032　松山市南斎院町乙67番6
TEL (089) 923－6363

印刷　岡 田 印 刷 株 式 会 社
〒790-0012　松山市湊町7丁目1－8
TEL (089) 941－9111